
SUMMER WARS 24<TWENTY FOUR>

ダイちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

【Nコード】

N6334Q

【作者名】

ダイちゃん

【あらすじ】

2010年8月――VSラブマシーン……

2010年9月――VSピースメーカー……

2011年2月――VS武藤和夫……

2011年8月――VS本村広志……

そして………2015年7月——新しい戦いがまた、始まろうと
していた———僕は今……国家に敵対する。

プロローグ（前書き）

過去三作品の続編です。既に二次創作ですらないかもしれませんが、そんなん構わない！　と言う方、お暇らな付き合ってください。

タイトル見て分かるとおり、24話で完結です。（プロローグとエピローグ別途有）

よろしくお付き合いのほど……ではあゝb

プロローグ

A・D・2010――

仮想世界OZを占拠したラブマシーンは、その自らのアルゴリズムに従い情報と経験を無尽蔵に吸収していった。憧れの先輩であった篠原夏希と共に長野の陣内家へと訪れた小磯健二は、陣内栄との邂逅を果たす。

ラブマシーンを生み出した陣内侘助との出会いや栄の死去。探査衛星あらわしの落下が迫る中、小磯健二はラブマシーンとの戦いに勝利する事が出来た。

この夏、小磯健二と篠原夏希は、恋人同士となった始まりの夏だった。

A・D・2012――

小磯健二は東京大学へと入学する事になる。夏希と過ごす日常とテロ対策特殊機捜隊との非日常。それでも日々は過ぎてゆき、小磯健二の神経はゆっくりと……だが確実に磨り減って行った。親友であり学友の佐久間敬やかつての同級生達。自分や夏希の両親や陣内家の皆との交わりの中で、健二は自分の存在意義を見出してゆく。

篠原夏希と共に暮らす様になったのはこの年の話。

二人の生活は、まだまだ始まったばかりだった。

A・D・2013――

暮らしの安定は小磯健二と篠原夏希に日常の充足を与える。健二は数学者としての頭角を表してゆく事になるが、その表情は穏やかさを増していった。

佐久間と始めたソフト開発において画期的な経理ソフトの開発に成功した健二と佐久間は、そう少なくない額の金を手にする事が出来たのだった。アルバイトをしながらの慎ましい暮らしに若干のゆとりを持たせる事が出来た健二には、先に広がる未来は波高し、されど晴天なり。と言った感じだった事だろう。

この年の八月一日。陣内栄の霊前には、自分達の結婚を報告する、小磯健二と小磯夏希の姿が在った。

そして――――

――A・D・2015・7・30――10:00:00――

これは、二千十五年七月三十日午前十時から、翌三十一日午前十時の間におきた出来事である。

今、最悪の一日が始まろうとしていた。

10::00::00\11::00::00 (前書き)

これは、午前十時から十一時の間に起きた出来事である。

10:00:00~11:00:00

――10:00:00――

「ごめ〜ん！ 待ったあ？」

「っ！ お前なあ」

名古屋駅の通路で荷物を通路に置いて佇んでいた佳主馬は、思い切り呆れた表情を見せていた。午前九時三十分の約束がこの有様である。そこに待ったか？ と聞かれれば当たり前だと叫びたい心境だ。

「まあまあ。女を待つのは男の役目じゃん」

「勝手な事言うなよな」

「へへ」

少しだけすまなそうに、だけど嬉しそうに笑うのは辻本夏帆。佳主馬とは小学生の頃からの幼馴染だ。明るく活発、陽気で短気。元気はつらつなのはあの頃とちっとも変わりはないが、今では女らしさも年相応に、中々の人気者だった。

佳主馬とは同じ高校へ進学し、相も変わらずの付かず離れずの間柄だったのだが、この高校三年の夏。いい加減、夏帆としては佳主馬との仲をはっきりとさせたいと思っていた。

否、正確には願っていたと言ったところだろう。

彼女が佳主馬に好意を持っている事は誰の目にも明らかだ。明らかにのだが、如何せん当の本人の佳主馬だけがその想いに気が付いていない。そんな現状に終止符を打つべく！ 夏帆は夏休みの始まる前、佳主馬に申し出たのだった。

「ねえ。アンタ今年も行くんでしょ？ 長野」

「ん？ まあ、ウチはそれが決まりだし」

何の意味も無く答えた佳主馬に

「じゃあ、今年は私も行って良いかな？ 前に何回か行った事あるけどさ。好きなんだ、アンタの田舎」

「はあ？」

思わず間の抜けた佳主馬の声が妙に記憶に残るやり取りだった。そんなくだりを経て、今こうして夏帆と佳主馬は共に名古屋駅に立っていると言う訳だった。

池沢佳主馬十八歳。高校三年の夏の小旅行の始まりだった。

――10..04..32――

「いらっしやい」

「……はい」

長野の陣内家。そこで穏やかな笑みを浮かべ来訪を歓迎する陣内万理子。その彼女の前で静かに佇む女性は小さく返事をして陣内家の門をくぐった。

「もう皆来てるわよ」

「みんな？」

自分が一番最後の到着だったのだろうか？ だとしても大した驚きを見せる訳でも無いのだが、それとなく返事を返してみれば

「でも侘助と理一、それに佳主馬はまだだけど。あ、なんか佳主馬はお友達を連れてくるみたいな事、聖美さんが言ってたわね」

「……そう」

万理子としては会話の流れで話してみたのだが、やはりそう長くは続きはしない。今はもう、そっとしておくしか無い様だ。だからこそ、そんな彼女に最も響くであろう言葉で、出迎えのくだりを終えようと決めた。

「さ、母さんにご挨拶してきなさい———夏希」

「……はい」

万理子の言葉でゆっくりと玄関を上がり廊下を進む、小磯夏希の後姿を黙って見詰める万理子だった。あの太陽の様に眩しく温かい笑顔の小磯夏希は、もう何処にも居はしない。今、ここに居るのは、冷たく儚く、されど美しい……月の様な微笑を洩らす……そんな小磯夏希の姿だった。

——10..07..01——

新幹線に乗り込み席に落ち着けば、暫くはのんびりとした列車の旅となる。売店で買い込んだお菓子を頬張りながら、夏帆はバックから一枚のメモ紙を取り出す。

「? なんだよ、それ」

「ん? ああ、予習よ予習。アンタん家^ちって相変わらず冗談みたいに多いじゃない? 予め覚えとかないとこんがらがるから」

「そんなもんかな」

「そんなもんよ」

流石に生まれた時からその環境に居る佳主馬にはピンと来ないが、夏帆の言う通り、陣内家の夏の集いは中々に壮観な光景が繰り広げられるのも事実だ。夏帆のメモ紙にはビッシリと陣内家の相関図が描かれていたのだった。

「えーと……まず偉いのが万理子お婆ちゃんでしょ」

「いや、偉いって」

「良いの！ 私には重要な事なんだから」
「ん？」

高三女子としては、色々と計算高くもなってしまう様だ。序列はきっちり覚えておきたい所だろう。

「で、万理子お婆ちゃんの子供が、漁師の万助爺ちゃんと医者の方作爺ちゃん。それに侘助さん……あ、ねえ佳主馬？」

「何？」

「侘助さんって確かアメリカよね？ こっちには来るの？」

「ああ。多分俺達の少し後に来るんじゃないかな」

「ふーん」

侘助は今でもアメリカに拠点を置いていて、友人と立ち上げたシステム開発会社が軌道に乗っている。今では知る人ぞ知ると言った程度の企業にまで成長していた。

「そんでもって……万理子お婆ちゃんの子供が理一さんと理香さん。つと、理香さんの子供ってなんて名前だっけ」

「北斗と咲だよ」

「北斗君と咲ちゃん。つで理一さんは独身よね。地雷踏まない様になきゃ」

「何の話だよ」

「いいの。こっちの話」

理香は役場の同僚と結婚。三歳長男北斗と一歳長女の咲の二児の母。今では理一に早く結婚しろとせっつく有様だった。曰く、「結婚って良いわよ」と言う事らしい。数年前の自分が聞いたらあごが外れそうな程の変わり様だろう。

「それで万助爺ちゃんの子供があ、太助さんと直美さんと聖美お婆さん……あれ？ アンタの従兄弟の警察官って誰の子供だっけ？」

「翔太兄は太助おじさんの子供。で、美奈と麻奈は直美さんの子供。」

って、直美さんにおばさんって言うなよ。マジギレするから」

「うっ！ 分かったわ」

直美は再婚し双子を授かったのだった。三歳になる双子は騒がしさも二倍のようで、今頃は陣内家で猛威を振るっている事だろう。翔太は？　と言えば相も変わらず現状維持の様子だ。現在二十六歳。まだまだ独身を貫くと豪語していた。新型のランサーを買ったと自慢話を延々と聞かされたのは二週間前だ。きっと向こうでも聞かされるのだろうと、佳主馬は今から覚悟を決めているのだった。

「あ、聖美おばさんは？」

「母さんは佳子と一緒に昨日から行ってるよ」

「ふーん、そっか」

佳子ももう五歳。夏帆には良く懐いている。向こうへ行ったらさっそく遊んでやらねばと夏帆も気を引き締める。なんと言っても本日は、漏れなく他の子悪魔達も群がってくるのだから気合が必要だろう。

「それから、こっからが大変よね。万作爺ちゃんの息子が三人。えゝ……救命士の頼彦さんと消防士の邦彦さん。で、克彦さんがあゝ……」

「レスキュー隊」

「！ ……分かったのに」

「そうかよ」

それでもメモを取る所を見れば覚えては居なかったようだ。

「で、頼彦さんの家は、奥さんの典子さんと真緒ちゃんと真悟くん。あ、真緒ちゃんてもう中学よね？　きっと可愛くなったわよねゝ」

「どうかな？　なんか、やかましくなっただけのような……辻本に似てるかもな」

「それってどう云う意味よ」

じとり。と睨めば「別につ、深い意味は無いよ」焦る佳主馬を見

ればまるで自分がやかましいと言われている様で釈然としない夏帆だ。

「まったく。それで邦彦さんちが、奥さんの奈々さんと加奈ちゃん。それから弥彦君だったよね」

「良く覚えてたな」そこは純粹に驚いたが

「だって生まれて直ぐの時に会ってるもん。アンタんとこ遊びに来てた時にさ。可愛かったよね」

名古屋に遊びに来ていた奈々達に偶然出会った時、腕に抱かせてもらった弥彦を思い出すと、くすぐったい気持ちにもなるほどに、赤ん坊は可愛らしかった。

「今じゃほんつとにうるさいよ」

「ふふ。良いじゃん。子供はそれ位でさ」

「そんなもんな」

今からほんとに覚悟を決めておいた方が良いとだけは佳主馬は自分に言い聞かせていた。あの子悪魔達は、それこそイナゴの大量発生 の如く自分達の平穏と喰らい尽くして去ってゆくのだろう、と。

「そして克彦さんの奥さんは由美さんで子供は三人。了平さんと祐平君・恭平君。あ、ねえ佳主馬」

「なに？」

いきなりバックの中をごそごと探り出したかと思えば、取り出したのは数枚の色紙。

「了平さんも来るよね？ ほら、力也達に頼まれちゃってさ。野球部の連中、了平さんのサイン欲しいって言ってんだけど、お願いしてよね」

「は？ つか、なんで辻本が言うんだよ。直接俺に言えば良いじゃんか」

佳主馬としては力也が自分ではなく夏帆に頼んだのが今一つ面白くない。だが（……あれ？ 別に良いじゃんか……なあ？）と、何

が面白くないのかは、どうにも自分でも分かってはいない様だ。

「力也もアンタには頼み難いんでしょ？ 分かってあげなよ、男心」
「なんだよ？ それ」

佳主馬には全く思い当たらない。共にクイーンを乗っ取ったウィルスを倒すと云う事件を経験し、小学生の時から別に親友とまではいかなくても良い友人ではあると思ってるのだが。

「だってアイツ、私の事好きだもん」

「……………はあ？」

まさに寝耳に水だった。

「誰が？」

「牧野力也が」

「誰を？」

「私。辻本夏帆」

「好きなの？」

「うん」

「マジで？」

「うーん……………普通は気付くと思うけど。結構あからさまだし、アイツ」

「そうなんだ」

「うん。そうなのよ」

「へ」

「うん」

どうやらそういう事になっているらしい。らしい事は分かったのだが、佳主馬にとっての一番の疑問は

「で？ なんでそれで俺に頼み難いの？」

「……………それ、ネタ？」

「いや。普通に疑問なただけだけど」

「……………」

夏帆は何も言わずにメモ紙に向き合ってしまった。どうにも、佳主馬とはモノの見方が根本的に、それも絶望的な迄に食い違っている事だけは分かった。今はこれだけで良しとしよう。するしかない。(おっかしいなあ。私も結構あからさまの筈なんだけども……) 黙りこんだ夏帆を不思議に思うが、佳主馬としては取り合えず「でも了平兄は来ないぞ」

「え?　なんで?」

「だってシーズン中じゃなか。今日から三連戦だろ?　東京ドーム」

「あっ!　そだっけ」

了平は大学卒業後、ドラフト三位でプロ野球選手となっていたのだった。今では新人ながらローテーションにも組まれている立派な投手だ。流石に親戚で集まりがあるから休みを下さい。と言う訳にはいかない。陣内家の方でもそれは止む無しと心得ている所だろう。「そっか。ま、それなら仕方ないね」

夏帆もとくに気にした風もなく、そのまま色紙をバックに戻していた。

再びメモに目をやった夏帆は

「よしっと。後は雪子さんと和雄さん。で娘の夏希さんって。そういえば夏希さんって結婚したんだよね?」

「!　……うん、まあ」

どこか歯切れの悪い佳主馬だったが

「あーん。見たかったなあ、夏希さんの花嫁姿。美人だもんね。きっと凄く綺麗だったろうな。あ!　佳主馬見たんでしょ?　どうだった?　夏希さんの花嫁姿!」

「……うん」

佳主馬が思い出すのは神前結婚での白無垢姿の夏希だ。それはとても綺麗で、本当に幸せそうな微笑を浮かべていた。

「綺麗だったよ……凄く……綺麗だった」

「ふーん……あっ!　じゃあ旦那も来るよね?　いいよね、三国

一の花嫁を娶った色男！ 確か前に話してくれた人でしょ？ アンタも尊敬してるって言ってたあ……れんじさんだっけ？」

「違う、健二さんだよ」

「おお、そうそう。それよそれ、その健二さん！ 私は会うの初めてなんだよね。ふふ、楽しみだな」

嬉しそうに笑いながら、メモの夏希の横には【旦那・健二】と書き添えられた。どこか遠い目をしてその紙を見詰めた佳主馬は、シートに深く身を沈め、ただ静かに目を閉じるのだった。———そつと———

「……うん………そうだな……」と小さく呟いたきり、佳主馬は瞑目して動かなくなったのだった。

——10…20…35——

「」

夏希は仏壇に手を合わせ、一時の帰宅を栄に報告していた。その微動だにしない姿勢は一枚の写真の様に時が止まって見える。

やがて合掌を解き、静かに立ち上がり周囲を見渡す。そこには栄の生前の写真。それに新たに加わった親戚達や、皆で過ごした時の写真などが飾られていた。家族を尊び団らんを愛した栄に、今の自分達を報告する為に常に飾られている写真達。それ等は、今もこうして皆で支え合っていると、天国の栄に告げていたのだった。

ゆつくりと写真を眺める夏希。理香の結婚式、直美の双子の美奈と麻奈。了平のユニホーム姿。子供達が翔太の車に馬鹿でかく落書きをしたものまである。

こんな事もあったかと薄く笑みを浮かべる夏希の視線が、ピタリ

と止まる。そこには――――

自分達の結婚式の写真が在った。

「……………」

そつと左手を伸ばし中指で静かに写真をなぞる。薬指の指輪は静かに存在を主張していたのだった。

そんな夏希の姿を少し離れて見守る奈々は、お茶でも飲まないか？ と誘いに来たのだったが、いまは何も言わずに姿を消す。夏希はただ、その写真に触れていた……いつまでも……

奈々が居間に戻れば「あれ？ 夏希は？」と聞く直美に、無言で首を振る。その場に居る皆もそれだけで何とは無しに無言になる。どうにも雰囲気が悪くなった。こんな空気はどうにも嫌いなものは皆同じであり、大概こんな時はその場に居ない人間に不幸になって貰うしかないだろう。そんな訳で、取り合えず犠牲者は決まっている。

「それにしても、理一の奴も本っ当に休みが無い奴よね！ そんなんだから浮いた話の一つも無いのよ」

と、理香は弟を生贄に差し出したのだった。

「じゃあ理一さんは今回も来れないの？」

「なんか私長い間会ってない気がするんですけど」

由美と奈々の言葉も御尤も。なんせ

「アタシだって今年に入って十日位しか会ってないかも。今頃何をやってんだか」理香ですらこの有様なことから。

それから暫くの間、陣内理一は陣内家女性陣の間で徹底解剖され

た上で魔女裁判に掛けられ、年内中には無理矢理にでも見合いをさせる事を満場一致で可決するに至るまで、存分に話題を提供していたのだった。

――10…32…06――

「ツクション！」

大きいくしゃみを派手にしたのは陣内理一。なにやらどこぞで良からぬ噂話に上がっているとは知る由も無いご本人だ。そんな事など気にも止めず、目の前のドアの前に立てば自動で開く。開けばそこは、もう戦場だ。

「あ、部長。会議どうでした？」

「ご苦労様です」

「部長、これ、例の横浜の式典の警備要項なんですけど」

「ああ、すまん。デスクに置いて貰えるかな」

「わかりました」

理一がテロ特機の部長へと昇格したのはもう四年も前の話だ。あの夏、自らの信念のままに動いた前部長、本村広志がこの席を離れてから、そこは理一の席となった。自分としては現場の方が性に合っていたのだが、信頼していた男の造反には流石に皆の動揺も少なくはなかった。合う合わない以前の問題として、あの時は理一が皆をまとめるしか方法は無かった。

今では仕事にも慣れ、歳も取れば現場も難しくなる。普通の仕事場とは異なる。ここは日本で最も戦場に近い場所だ。現場に立つには自分は少し無理が利かなくなってしまった。今では吉田や吉井が現場をよく見てくれているし、相沢や菊間と云った後に続く者達も

居る、それに続く者達だって居る。もう自分が現場に出る必要は無くなった。

「休暇、残念でしたね。部長」

「ん？」

話しかけて来たのは柴田だった。理一も一応休暇願いを大分前から提出はしていたのだが、どうにも思った様には行かなかったらしい。

「ま、仕方ないさ。どうせ行っても親戚の子供等に苦勞させられるだけだしな」

「ふふ。何処に行っても苦勞するだけですな、部長は」

「ま、そうなるか」

何処で間違ってこんな人生になってしまったのかと苦笑も洩らす
が、そんな自分に満足しているのだから仕方が無いと言うものだろう。親戚に囲まれた長野も捨てがたいが、信賴する仲間が居るこの場所も、中々どうして居心地が良いものだと思えてしまう。

そんな事を考えると、その場に居ない人間がいる。

「桑田」

「はい？　なんですか？」

手近な桑田に

「吉田はどうした？」

彼の不在を尋ねてみた。

「吉田さんでしたら外務省ですよ。一応、警備計画なんかの最終調整です」

「結構いらついてましたよ。吉田さんって官僚嫌いですから」

「ああ、分かる分かる。でもま、厚生省じゃないだけマシでしょ」

「それなら私が行くもん。吉田さんだと喧嘩して帰ってきちゃうし」
桑田の答えに相沢や菊間、それに柴田までもが追隨してきたのは、まあ今はそれほど切迫した事件に関わっていないと言う証だろう。

皆の笑い声が木霊する光景も平和な証なのは歓迎だが

「ま、アイツの官僚嫌いは死んでも治らないから放っておくとしてだ。じきに到着の時刻だ。全員、そろそろ切り替えとけよ」

「「「了解ですっ」」」

締める時は締める。その切り替えが出来る面々だけに、理一は彼等を頼もしく眺め、視線をモニターへと移す。そこでは来訪してくる要人を出迎える為に、空港に到着した外務大臣の姿が映し出されていた。

「さあて。ようこそ日本へ。ハマド大統領」

理一は本部を見渡せる自分の部屋へと足を向けたのだった。

——10..38..49——（アメリカ・ヴァージニア州——20..38..49——）

CIA

アメリカ中央情報局の一室。ジョージ・ワイズナーがドアを開け部屋に入れば数人の男達が机の前に立っていた。自分に向って口火を切ろうとする一人を手で制し、男達を通り過ぎて机の椅子に腰を落ち着ける。受話器を取ると

「Maggie. Hey guys sorry about the coffee. Good to get out from the man we fear——」

（マギー。すまないがコーヒーを頼むよ。恐いおじさん達が出ていってからで良いから——）

「Okay——」

（わかりました——）

満足気に受話器において男達に向き合えばその目は男達に会話を

許す。

「So? ——」

（それで? ——」

促すジョージに男達は姿勢を正すと

「They may also move. Cases of doubt in the matter of whether

——」

（やはり連中に動きがあります。例の件で間違いないかと——」

「I do not aim in Suguria? ——」

（狙いはスグリアかね? ——」

「No doubt ——」

（間違いありません——」

言葉を聞いてジョージは大きく息を吐く。

スグリア共和国。

ほんの二年前迄は一人の独裁者によって統治支配されていた中東の一国家だったが、二年前の反政府組織の大統領暗殺を持って独裁政権が崩壊。今はその反政府組織の指導者だったハマドが大統領となり、新たなる議会を組みなおし、この二年で大きく発展を遂げた国だった。

スグリアは豊富な資源を有し、原油、穀物、レアメタルなどの輸出を効果的に運用する事で国際的にも大きな存在になりつつある国家。アメリカとしてもスグリアとの関係は良好な常態だと言って良い。そこへもってのこの動きには注意が必要だ。

「NSA……I move that the feeling I'm not so good——」

（NSAが動くか……あまり良い予感はないんだがな——」

「The Yea. They made contact with a person——」

（しかりです。連中が接触した人物です――）

一人が机の上に数枚の写真を広げる。そこにはスーツ姿のアメリカ人と共に数人の人間が写り込んでいる。一人、直ぐに見分けがつく人間が含まれているが、それはスグリアの副大統領だった。ジョージは頬杖について面倒くさそうに顔をしかめる。実際、かなり面倒くさい事になっている事がわかる。

中の一枚では数人の男が写っているが

「They are former government soldiers. You probably already have entered the country yet they guide――」

（彼等は元政府軍です。しかも連中の手引きでおそらく既に入国しているでしょう――）

「Maybe superior?――」

（優秀なのかな?――）

「Also includes people from Special Forces――」

（特殊部隊出身者も含まれています――）

「That it――」

（それはそれは――）

ジョージは溜息を一つ洩らし椅子を回す。窓の外の夜景を眺めるが、その意識は何処にも向ってはいない。

「Wow. It seems like they don't like the flower fields greatly Hamad――」

（やれやれ。彼等は余程ハマドの花畑が気に入らない様だね――）

「It must be prearranged. Already in the neighborhood. Because there is only money and personnel. They are――」

（その辺の根回しは済んでるでしょうね。金と人員だけがありますから。連中——」

NSAの狙いは非常に分かりやすかった。彼等はスグリアが国家産業として製造・輸出しているケシの排斥を照準に置いていた。ケシの実には医療用やその他の原材料として普通の流通資源でもあるが、一般的に麻薬の原料としても広く知られている所だ。寧ろ利益の面からはそちらの方が比重が上と言ってもいい。

ハマド大統領も麻薬の原料としての意識は無論持っている。その事に対して思うところが無い訳では無論無い。だが、内戦で疲弊したスグリアに在って、限られた資源を有効に、効率良く国益に還元するには、現状、ケシの実がもたらす恩恵を手放す訳にはいかなかった。いつか止めるにしても、それはまだ先の話だ。そこでNSAは副大統領に白羽の矢を立てたと云う事だろう。尤も——

「They also invested in the U.S. but I'm fine amount——」

（アメリカが彼等に投資したのも、結構な金額なんだがなあ——」
疲れた様に呟きながら振り返れば、そこにはもういつものジョージがいる。

「First thing to collect information. The most important thing is the accuracy and freshness is top priority...I collect good quality information——」

（まずは情報を集める事だ。最も重要な事は確度と鮮度……質の良
い情報を集める事が先決だ——」

ジョージの言葉に男達は姿勢を正す。彼がこの情報戦に真っ向から取り組む事を決めた様だ。後はいつもの様に自分達は動くだけだ。
アメリカ合衆国の利益を優先として。

「They do not know what information Washington Post, Playboy and I have no distinction between the party of the NSA, the information office and tried to tell it what you mean—」
（彼等は情報の何たるかを知らない。ワシントンポストとプレイボイの区別もつかないNSAの連中に、情報局とはどういうものかを教えてやるとしよう——」

ジョージの令を受け、男達は部屋を去っていった。それとすれ違うようにして秘書のマギーがコーヒーを持ってくるが

「Oh, sorry I do not you black in the——」

（ああ、すまないが今日はブラックをにしてくれないか——」
どうやら今夜は眠れない夜が始まりそうだ。そんなジョージに笑みを返し

「So I was wondering, for you have a black——」

（そうだと思ひまして、ブラックをお持ちしました——」

「! You are not the enemy I——」
（! 君には敵わないな——」

笑みを見せ、マギーは自室へとさがる。ジョージはコーヒーを飲み再び窓の外に視線を向ける。さっきは氣にとめなかったが、今日は夜空も綺麗だった。どうやら慌しい時間が始まりそうだが、少なくとも悪天候で気分が滅入る事は避けられそうだ。今はそれだけでも満足の材料としよう。

「Now……the audition was over. C

ur tain curtain ringing the bell
has been raised already. On
top of all the actors on stage
is when you rest the seat...no
we sit, that thing somewhere.
What actor or writer or props
or. It is important—
(さて……オーディションは終わってた。既に開演のベルは鳴り幕
は上がった。おまけに役者は全員壇上ときてる……あとは我々が今
から座る席が、何処かという事だ。脚本か役者か、もしくは大道具
か。それが重要だ——)

——10..47..50——

理一は自分の部屋を出て本部発令所へと姿を現し、パンパン！

と大きく手を叩く。皆がそれに注視を向けると

「全員聞いてくれ。もうすぐスグリア共和国、ハマド・アッザーム
大統領が到着する。我々にも非常警戒態勢で警備に付く様、正式に
辞令がおりてる。知っての通り、スグリアはつい二年前まで内乱の
あった国で、しかも現政権はクーデターの勝ち組だ。まだまだ情勢
不安なのは確かで、何が起こるか分らん。全員、気を引き締めて
取り掛かってくれ」

了解。と一同がそれぞれの仕事に取り掛かろうとする動きに先ん
じて「映像、入りました」と桑田の声が響く。

皆が注目したメインスクリーンには、成田空港に到着した専用機
を出迎えに、外務大臣が歩いていく姿が映し出されていた。やがて
カメラが切り替われば、専用機のハッチから姿を現した、ハマド大
統領の姿が大きく映し出されていたのだった。

赤絨毯に嚴重な警備体制を見て

「随分とVIP待遇ですね」と菊間が疑問を洩らす、それは当然だろう。なにしろ

「スグリアからの輸入量は半端じゃ無いからな。原油に穀物、レアメタル。はつきり言って超が三つはつくお得様だしな。総理自ら出迎えなかっただけでも国としての意地が在るんだろうさ。なにせ向こうは生後二年だ。頭を下げるにはこの国の政治家の体は硬過ぎる」

菊間に答える吉井の表情はつまらなそうだ。こういう政治のセレモニーのおかげで苦労するのは自分達現場の人間なのだから、さつさと用事を済ませてさつさと帰って欲しいと言うのが正直な気持ちだろう。それは他の人間にとってもそうだったが。

「良いんじゃないですか？ 別に私達のする事に、変わりなんて無いんですから」

「ま、そうだな」

柴田のとりなしを今は素直に受ける吉井を眺め、理一は再度ハマドの姿を脳裏に焼きつけ、自分の部屋へと戻っていったのだった。

——10..58..45——

羽田空港の入国受付の列。今、一人の男が中国からの便で羽田空港へと降り立っていた。

係員はパスポートなどの書類を見ながらいつもの仕事を淡々とこなす。そんな彼女の前に立つのは劉^{りゅうこうはく}公博と記載のある男性。

「在日本？ ——」

（なぜ日本に？ ——）

来日目的を聞く彼女に、劉は笑顔を見せ答える。

その為に、彼は日本へとやって来たのだから………ただ………

「要返回借来——」

（借りを返しに——）」

………その為だけに、彼は来日したのだった。

——10…59…59——

11:00:00~12:00:00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

陣内栄の命日に合わせ、長野の陣内家へと集まる陣内の一族。佳主馬もまた幼馴染の夏帆と共に名古屋を出発した。

一足先に到着した夏希は、独り、栄の霊前に手を合わせる。

部長となった理一は特機の面々に向け来日する要人の警備の徹底を指示した。

アメリカではNSAの動きに追随する様にCIAもまた動き出そうとしていた。

不穏な空気の中、スグリア共和国大統領、ハマド・アッザームは成田空港に降り立つ。

そして、劉公博が入国を果たし……………

これは、午前十一時から正午の間に起きた出来事である。

11::00::00\12::00::00

——11..00..00——

「……………」

夏帆は何度か佳主馬に話を振って見たり、その様子を伺っていたのだが、どうも佳主馬の様子がおかしかった。朝、出会った時までには普通だったのだが？　と思う。思い返すが佳主馬が塞ぎ込む理由が見当たらなかった。

「……ねえ」

「」

「……………」

こんな、やり取りにもならない様な事が結構続いている。いつもだったら「暗いなあもう！」と背中でもバシンと叩く夏帆だったが、そんないつもの行動すら押し留める様な雰囲気が今の佳主馬にはあった。

本当は佳主馬と一緒に過ごす時間は楽しい筈だった。そんな予想や願いと裏腹な結果に、どこか夏帆も沈んでしまった。そんな時

「……ごめん」

「っ……私は別に……良いんだけど……」

「……うん」

佳主馬としてもこのままで良いとは思わない。もう自分もそれほど子供ではない。夏帆に落ち度は何も無いし、どっちにしろこれは長野に到着する前に済ませておいた方が良いのは分かっていた。ただ、少しでも自分の中での整理が付かなかっただけ。今は、もう整理が付いた。

「ん、とさ」

「ん？」

「辻本に、やっぱり話しておいた方が良いと思うんだよね……向こうに着いてから、なんか気不味い事あってもあれだろうしさ」

「佳主馬？」

夏帆には何の事か全く分からなかった。だが佳主馬の雰囲気が、重要な事を告げようとしているのがわかった。それが自分にとってなのか、それとも佳主馬にとってなのか、それは分からない。でも、今はそれを聞こうという気にさせる。そんな空気だ。

「なに？ 話しておきたい事って」

「うん」

そして、佳主馬は沈んだ身体を起こし告げた――

「健二さんの、事さ」

今、彼女に伝えておくべき事を――

「健二さん？ って、夏希さんの旦那さんの？」

「……うん」

夏帆としても記憶に新しい名前。ついさっき聞いてメモに書いた人物だ。自分も会えるのが楽しみな人の一人。そんな人の名前を出して

「その人がどうしたの？ あ、なんか言っちゃ不味い単語とかある？ だったら」 予め聞いておけば良い。のだが、そうじゃなかった。

「居ないんだ……もう……」

それはもっと、根本的な問題だった。

「え？ 居ないって？ 仕事とか？ あ、もしかして別れちゃったとか」

「……………違うよ」

「？ じゃ喧嘩？ 別居中で裁判中だったりして」

「そうじゃないよ……………そんなんじゃないくて、さ……………」

今一つ、佳主馬の話は要点が掴めない。いや、要点が出てこない。

「もう！ 一体なんの話よ佳主馬。訳分かんないんだけど」

「うん。だから……………健二さんは、さ」

「うん」

「健二さんは……………」

「？ 佳主馬？」

いつの間にか、佳主馬は苦しそうな顔をして拳を握り締めていた。夏帆の心に言い様の無い不安が押し寄せる中、佳主馬は重い口を開いた。ただ、噛み締めるように……………

「……………死……………んだん、だ……………」

「死……………んだ？」

夏帆にとってもそれは意外だった。

「それって……………病気？」

「ううん。事故」

「そう……………」

人の命なんて分からない。自分達ももう十八であり、親戚や知る範囲でも病気や事故で亡くなった人も居た。誰も特別な存在ではなく、誰しも誰かにとっての特別な存在なのだろう。

そして佳主馬の様子から、小磯健二と云う故人は、佳主馬にとつ

て特別な存在だった事を理解させた。

「ごめん」

「？」

佳主馬は身を起こし、顔を上げる。

自分は夏帆のこんな顔をさせる為に話した訳じゃ無い筈だ。向こうへ行っても笑顔で過ごせる為に予め話しておく事にした筈。

「向こうに行って驚いてもなんだろうしさ。夏希姉ちゃんに会ってから知るのもしんどいだろう？ だから話しておこうと思ったんだ」

「……佳主馬」

呆ける夏帆に笑顔を見せ、佳主馬はゆっくりと、話し出した。

「健二さんと夏希姉ちゃんとはさ……学生結婚だったんだ」

「！　そうか。そうよね、だってまだ若いでしょ？　夏希さん」

「うん。たしか二十三、かな。結婚したのは二十一。健二さんも夏希姉ちゃんも大学生だったな」

健二が二十歳。東京大学二年の時の話になる。

「へ。反対とか無かったの？」

幾らなんでも早いのでは無いかとも思う。社会人ならともかく当時大学生だったのであれば、生活力と云うものも必要だろう。

「ん、特に反対意見は無かったみたいだな。和雄おじさんや雪子お婆さんは健二さんの事すごく気に入ってたし、逆に貰ってくれて積極的だったみたいだよ」

「ふーん。健二さんの両親は？」

「他所様の娘さんに！　って言って責任取れて感じだったかな」

「前時代的ね」

「はは」

そこに至るには、既に二人が一年近く同棲していた事実も合った

し、なにより健二の収入がソフト開発の成功によって生活を支える基盤と成せる様になっていた事。大学での成績や将来性を見て、卒業後の生活にも一定の目処を立てれた事が大きい。結婚ともなれば、道義的・倫理的、だけではやはり済まされない。経済的な問題もクリアしなければ成らないし、その全てをある程度の合格点を持ってクリアしたからこそその二人の結婚だった。

「健二さんは数学を専攻しててさ」

「あ！　そうよね、前に聞いた。なんか、すごい頭良かったんだって？」

「はは。まあ本人は数学しか取り得無いつて言ってたけど……うん。凄かったよ、実際」

「ふうん」

佳主馬から見て、健二と佐久間のコンビは、本当に凄かった。彼等の間に侘助が入り、三人で話し始めると本当にキリが無かった。何時間でも難しい会話が飛び交って、途中で何台ものパソコンを起動して、最後にはいつも難問にぶつかって三人で爆発してた。どうにも解決不可能な事にばかり向っていつていたらしい。いつも夏希は呆れていたものだ。だけど、それはとても楽しそうな笑顔だった。

「健二さんは数学の教授に師事する様になってさ。去年、ハワイで開かれた学会に同行したんだ。本当は別の人が付いて行く筈だったんだけど健二さんがどうしてもお願いしますって……それで、行っただんだ……その帰りだったんだ……」

「？　佳主馬？」

一瞬、何かを噛み締めた。だが、

「覚えてるか？　辻本……去年の、飛行機事故」

「へ、そりゃ、あんだだけ大きい事故だもんだぜっ！　……嘘」

「うん……その飛行機に……乗ってたんだ。健二さんも」

「そんな……」

それは去年の夏の事故だった。

ハワイを飛び立った日本航空の旅客機は沖縄の沖合い一キロの地点に墜落した。乗員乗客三百五十八名のうち、死亡者数は二百九十六名、生存者六十二名の大惨事。原因は機体の一部が破損したとか、何らかの爆発があったとか、様々な説が流れた。本当の所も判明はしたのだろうが、いつの頃からかテレビや新聞での扱いも小さくなり、今では事故そのものの記憶も薄らいでしまった。

一キロと云う距離でもあり発見も早かった。場所が海上のおかげもあってか、あの墜落事故にして六十二名の生存者は不幸中の幸いというか、まさに奇跡の多さだと皆が言った。だが――

「健二さんは……六十二人の中には居なかったんだよ」

「……そう。あの事故に……」

佳主馬が思い浮かべるのは、あの夏希の日の海だった。

沖縄の皆と近くに設置された対策本部。その周囲のでは救出された人々とそれを喜ぶ人々。そして数えるのも馬鹿馬鹿しいくらいのマスコミ。

佳主馬は翔太や万助達と共に港に立ち海を見詰めていた。自分達の前で立ち尽くす夏希と共に。

生存者の名簿の中に健二の名前は無かった。和雄達は次々に救出され海上保安庁の船から下船する生存者達の中に健二を探す。健二の母親と雪子は夏希に寄り添い一緒に海に祈っていた。その時、佐久間は最も辛い事をもってたのだった。

佐久間は、少し離れた遺体安置所の中で、一つ一つの遺体を確認していた。中には損傷の酷い遺体も在った。健二に似ている遺体も在った。体育館の冷たい床に整然と並べられた数百の遺体。そんな地獄の様な光景の中を、佐久間は残さず確認して回った。親友の姿が無い事を信じて。親友の姿がある可能性を否定する為に。

搜索開始から三日後の夜。墜落地点から少し離れた場所でシートベルトを締めたまま海中に沈む遺体を収容したのを最後に、搜索は一時中断される事になった。捜査海域に低気圧が接近。すでに海上は荒れ模様となっていた。

発見されていない人達は多く居た。その人達の帰りを信じ待っていた者達に、悪天候の為に搜索を中断する旨の発表が成されたのを佳主馬は呆然と聞いた。搜索も出来ない様な場所で、低気圧が通り過ぎるまでどうやって生存していると言うのだろうか？

中断とは、あんに救出作業から回収作業へと移行したのだと告げている様だった。

一斉にざわめく人達の中に、夏希の姿も在った。健二もまた、帰って来ては居なかったのだから。

「健二がまだ居るんですっ！ まだ、あそこに居るんですっ！」

「夏希っ！」

「おちついて夏希」

身を乗り出して叫ぶ彼女を雪子や万理子が抑えていたが、佳主馬は体が動かなかったのを覚えている。身が、すくんだ。佳主馬にはその時の夏希が――

恐かった――

「放して！ どうして助けてくれないのっ！ いや――――っ
！」

これ以上の搜索は危険だとの説明も聞えないほどの混乱の中で、夏希はただ必死に叫んでいた。もう自分にはそうする事しか出来ないかの様に、狂乱し、絶叫し、ただ慟哭を響かせていたのだった。

もうあれが一年も前の事だとは思えない。佳主馬にとって、鮮明に思い出せるほどの、恐怖の夜だった。

「だからもう……居ないんだ。あの人はもう……」
「うん。分かったよ、佳主馬……ありがとう」

事故の事を思い浮かべながら、夏帆は夏希を思った。愛する人を突然亡くした。そんな彼女に、これから自分は会う事になるだろう。だからこそ覚悟は決めておこうと思う。その為の時間を、佳主馬は自分にくれたのだから。彼にとっても大切だった人の死を自分に語ってくれた……事を、無駄にしないために――

――111..211..32――

「よっ。相変わらずよく集まんな、この家」
そう言って縁側から顔を出したのは

「おかえり、侘助」

「ただいま、姉さん」

アメリカから、陣内侘助が帰国を果たした。

「あんた仕事大丈夫だったの？」

「ああ。別に俺一人でやってる訳じゃないしな。多少開けたくらいでどうこう成るもんでもねえよ」

「そんなもんかい」

「ああ」

万理子に答えてゆっくりと居間へと上がりこんで座布団に座れば

「はい」と聖美が麦茶を差し出した。

「どうも」

「佳主馬が言ってたけど、会社、調子良いんですって？」

「ええ、まあなんとか」

聖美に答えながら麦茶を流し込む。今日も気温は真夏日を記録した。冷えた麦茶がなんとも美味しいと思えた。本当ならビールといきたいところなのだが、流石に午前中から飲み出すのは不味だろう。そうでなくても独身比率が少なくなり肩身の狭い思いを強いられる昨今なのだから。理香と直美が嫁いでしまった以上、理一だけが侘助の味方と言ったところだろう。

そんな侘助にかつての同志であり裏切り者が寄って来る。

「でもさー、アンタの会社ももうチョット大きくななんなの？」

「はあ？」

侘助としてはそこそこに名は知れてきていると思うのだが

「だってほら？ アンタの業界ってけっこう一攫千金って話聞くじゃない」

「そうよねー。ビルゲイツとまでは言わないけど、ちょっと大金持ちの匂い位は欲しいわよね」

「でしょ？」

もう独りの裏切り者の理香までも加わって凄まじく勝手な事を言い出した。なんだかんだ言って、この二人は気が合っているから不思議だ。だが、些か情報化社会に感化され過ぎている様子。

「そんなに美味い話なんてそうそう有る訳無いだろうが」

「？ そなの？」

「アンタが知らないだけなんじゃないの？」

「あのな」

自分が知らない事を二人が知っているとはとても思えない。ここは敢えて言わせて貰うと

「こう見えてもそこそこは稼いでんだよ。っつか、お前等の一攫千金でどれ位のレベルで言ってるんだよ」

「ん？ そうねえ……」

実際、そこまでは直美も突き詰めて考えた事は無かったが、やは

りそれはキリの良い数字で

「やっぱ、一億円位じゃないの？ パソコンソフトで稼げるのって
ここら辺が業界の成功ラインではないか。理香にしてもウンウン
と頷いている様だが

「その程度で良いならゴロゴロ居るよ。つか、俺だって稼いでるっ
て」

「「ええええええ！」」

十分に凄い。まさに大成功ではないか！ な二人が可笑しくて、
一つ、教えてあげるとしよう。

「そんなんじゃ大成功とは言えねえんだよ。大成功って奴はあ、そ
うだなあ……例えばあれだな」

「ん？」

「何々？」

侘助の次の言葉に興味津々の二人だったが、気が付けば他の連中
も集まっていた。何やら面白そうだ。そんな一族を相変わらずだな、
心中で笑いながら

「OZの新しい検索システムを開発した奴じゃないか？」

侘助は最近で最も成功したであろうシステム開発を例に挙げた。

「検索システム？」

「それって、OZの画面の上にある奴か？」

頼彦と邦彦はOZの画面を見せながら聞いてくると

「ああ、それだよ」と侘助は画面を弄りながら話す。

「こいつはその使ってる人のニーズに合わせた検索を掛けてくれる
んだよ。しかも従来のシステムよりスムーズに、より正確に、な」
自分達はあまり意識した事が無い。だいたい

「……つまりどういう事だ？」

万助には今一つピンと来ない。

「例えば俺が酒のワードで検索すれば……な？ 一覧にはこの近所の酒屋とか俺がいつも飲んでる酒の売ってる店とか、そんな情報の上に来る」

「アンタがよく調べるからじゃないの？」

直美の言う事も尤もなのだが

「今までならそうなんだけどな、これは違う」

「どう違うのよ」

疑問な直美に

「コイツは今、検索を掛けた時に調べた訳だ。今俺は何処に居て、ここは何時で、これから俺はどういう行動を取るか？ こいつはそれを予測した」

「へ？ 今？」

「そう。しかもだ。俺達は買い物や移動、調べ物の際にOZを利用するだろう？ コイツはそれ等のデータも全て混みで考える」

そこで分かる。

「そっか。だからアンタのいつも飲んでる酒に限定出切る訳だ」

「しかも買う事を前提としたって事は、今はまだアンタは酒を飲む事はしないだろうと予想したって事か……なんか凄いわね」

全ての情報を収集し検索のワードからその人が今最も必要としているだろう回答を挙げていく。これはそう云うシステムだった。

「人それぞれだからな。今までは大勢がヒットした順とか、幾つものワードを組み合わせて検索してたけど、コイツは簡単なワードで、しかも個人個人のニーズに合った答えを導き出す。まったく大したものだ」

「へ」

感心する理香だったが

「一番凄いのはな？ こいつの開発をしたのがたった一人だって事」「一人で！」感心は驚きに変わる。

「ついこないだOZに正式採用になったしな。一体幾ら稼いだか想像も付かないけど……」

「付かないけど? ……なに」

直美と共に皆が息を呑む中、散々勿体つけた侘助は楽しそうに会話を締めくくった。

「十億は下らないな。ああ、もちろん、ドルでの話な?」

陣内家に、十億ドルーーーーー! との絶叫が木霊したのは言うまでも無かった。

そんな大騒ぎの居間を通り掛ったのは夏希。

「侘助おじさん?」

「! よっ。久しぶりだな、夏希」

「……………うん」

静かに返事を返し、静かに通り過ぎる。そんな夏希に、皆も少し静かになってしまう。

「ごめんね、侘助君」

近寄り気を使う雪子に苦笑を洩らしながら

「……やっぱ、まだ、ですか」

「ええ……それでも前よりはだいぶ……」

「時間が必要な事も、ありますから」

「そうねえ」

夏希の後姿を眺める二人の背後でpiririririと電話が鳴る。振り返れば理香が携帯を取り出しており

「ん? 理一? アンタ一体いつこっち はあ? 来れない

ってまたあ? 分かるけど うん。分かった。母さんには

言っとくから うん。そんじゃ」

piと切れば、自分を注視している皆を見て「また仕事だってさ」

と理一が来ない事を告げたのだった。

そんな様子を振り返ってみていた夏希。ああして電話が鳴る……あの日も、電話が鳴った。

自分の携帯に電話が鳴れば健二の名前が出ていた。ハワイからの電話に笑みで出てみれば

『今、空港。これから搭乗手続きなんだけど教授が食事するってきかなくてさ。時間空いたから』

そう言って電話を掛けてきた。そんな事で一々とも思ったが、それでも暇を見つけては自分に電話を入れてくれる彼の心が嬉しかった。

「それで？ どうだったの？ 学会は」

『うん。凄く参考に成ったよ。海外の尊敬してる数学者にも逢えたし』

「そう。良かったね」

『ああ！ 夏希も一緒に来れたら良かったんだけどね』

「ふふ。まあ仕方ないよね。遊びじゃないんだし」

健二としては遊びも兼ねたかったらしい。夏希も行きたいのは山々だったが、ここは自制を効かせたと云ったところだ。そうは言っても彼は遊びに行くのでは無いのだから。

『あ、そうそう。帰ったら夏希に話が有るんだ』

「え？ なに？」

『はは。内緒だよ。帰ってからののお楽しみだからさ』

「ぶー。ケチ」

『ははは』

楽しそうな健二の声に思わず笑顔が漏れてしまう。夏希の手元には東大から資料が送られてきている。どうやら来月、健二の論文に

ついでに発表の場が与えられたらしい。健二としては隠していたのだろうが、自分の留守中に書類が届くとも思っていなかったらしい。今ここで言い当ててやろうか？ との悪戯心も持ち上がるが、電話の向こうで自分に告げる時を楽しみにしている健二の顔を思い浮かべて、それは止める事にした。嬉しそうに笑う、そんな健二の笑顔が自分は最も好きなのだから。

「それじゃあ早く帰って来てよね。楽しみにしてるんだから」

『うん……あっ！ もう時間だ。じゃあ搭乗時間だから』

「うん」

『あっ、夏希』

「ん？」

そして

『ん、と……愛してる』

「……私も」

それが、健二と交わした最後の電話だった。

次に掛けた時、そこには『 けに成った電話番号は電波の届かない所に居るか電源が入っていない為、掛かりません。暫く経ってからお掛け直し下さい。こちらはNTドコモです。お掛けに』

『 そんなガイドランスが延々と流されるだけだった。』

呆然と立ち尽くす夏希の前で、ハワイ発の日航機が沖縄沖に墜落したニュース特番が延々と流されていた。

どれ位経ったかわからない。おそらく何度もベルを鳴らし、さつきから聞える電話の音は、もしかしたら自分の家のFAX電話かも知れない。漠然と考えるも、だからどうしたのか？ と漫然と思考を巡らせる。そんな夏希の部屋のドアがガチャリと開き

「ありがとうございます」

そう、管理人に礼を言っている相沢の横をすり抜け、夏希に駆け寄ったのは柴田だった。

「小磯夏希さんね？」

「……………誰ですか？」

ぼんやりと答える夏希に一瞬気後れするが、そこは特機の人間としての切り替えを持つ柴田。

「私は柴田、あっちが相沢。陣内理一さんの部下です」

「？ 理一おじさん？」

視点は、なにか定まらない。

「沖縄に向う手配を整えてあります。支度を手伝いますから、直ぐに向かいましょう」

「でも」

「部屋の事や学校へは相沢が。今は急いで……………健二君の所に、急ぎましょう」

「！ はいっ」

理一の配慮で夏希を沖縄へ。その為に部屋へ押し入った柴田と共に、夏希は取る物も取り合えず、彼等の用意した車に乗り込んだのだった。その先に、きつと健二が、待っていると信じて。

ぼんやりとこちらを眺める夏希に「夏希ちゃん？ どうかした？」

と声を掛ける由美の言葉が、夏希を現実へと引き戻す。あれ以来、夏希の心は外ではなく内に向う事が多くなった。確かに在った、幸せだった時に、捕らわれてしまう事が……………

「ううん。別に」

言って、夏希は再び背を向け、廊下を静かに歩いていったのだった。

理一は個人的な会話を終え、自室から皆の居る発令所へと降りてくる。

「あ、部長」

「ん？」

桑田が何やら端末を操作しながら話しかけてくると

「公安から情報が上がってきました。うちのデータと併せて、警戒対象者のリストが」

「見せてくれ」

「はい……出ます」

言ってメインスクリーンに映し出されたのは、スグリアの情勢下にあつて反政府的な活動をしているであろう者達のプロフィールだった。だが、その数たるや

「おいおい。多すぎだろ、これ」

「ってか、これ全部日本に居るのかよ」

そこには百人を越える人物がリストアップされていた。

吉井と菊間も呆れるが

「はい。しかし皆正規のルートで入国していますし、実質、何もテロ活動に従事していた事実は無いと思われます」

「だったら」

警戒する必要は無いだろう。そうも思う。だがこの国の現状とスグリアの現状には大きな隔たりがあつた。

「スグリアはつい二年前まで内乱状態だった国だ。この人物達は何れなく、当時の政府側の人間と云う事だろう」

それは理一の予測であり

「はい。その通りです」それを桑田は肯定した。

「しかも彼等は皆兵士でもありましたから、当然銃器の取り扱いにも慣れています。でも」

「今となつては一般市民って事か」

「はい」

内乱は終わり政権は変わった。だからと言って旧体制に従事した者達を全て処罰してしまつては、スグリアは再び血で血を洗う戦いの地へと変貌してしまつた事だろう。ハマドはそれを嫌い否定して、旧体制の指導者達のみ処罰し、他の者達は一切の処罰を与える事はしなかった。

それによってスグリアは国民の団結を得、今日に至る急速な復興と成長を遂げるに至つたのだ。だが

「だからこそ、我々に彼等を拘束する権利も、入国を拒む理由も存在しない。彼等は彼等の国ですら犯罪者では無い。おまけに現在、スグリアと日本は良好な貿易相手国だ。人の出入りは頻繁で……大量だ」

「ですね」

理一の言葉に相槌を打ち、吉井は今回の警備の難しさを痛感する。怪しい。と思つても、それを受け入れなければならない。そんな不条理な状況が、まさに現在の自分達だった。

「既に、各県警に通達は完了しています。警戒対象者には完全にマークが付けられます」

「状況は逐一？」

「はい。本部はこちらであると、認識の共有は出来ています。官僚の声が聞こえないだけ、現場は歓迎と云つた感じです」

「そうか」

報告を済ませ、桑田は再び仕事に戻る。

そんな桑田の労を労おうとした矢先、「部長」と自分を呼ぶ声が。「なんだ？」

聞けば、その分析官は告げたのだつた。

「部長に来客だと。一階のロビーで」

「？ 来客？ こんな時にか」

「はい。どうしましょうか？」

帰らせるなら直ぐに手配できる。そんな中、「分かった」と理一

は発令所を後にした。そして理一は再会する。久しぶりの、再会だった。

「君か」

一階のロビーのソファーに座る人物に声を掛け、思わず右手を差し出せば、その手はがっしりを握り返され

「お久しぶりです。理一さん」

佐久間敬は、笑顔を見せた。

佐久間に座るように促し、自分も座る。佐久間とは健二の事故以来になるだろうか。

「それにしても久しぶりだね。仕事の方は順調かい？ たしか、システム関係、だったかな」

「はい。まあ僕なんかは新入社員ですからボチボチですね。今日からは三連休の夏休みですし」

「それはそれは。羨ましい限りだね」

「ははは。なんか、すいません」

大学を卒業後、佐久間はシステム開発関係の企業に就職。そろそろ職場にも馴染んで来たと言ったところだろう。この就職難の時節にあって、多くの企業から誘いがあったのは佐久間の実力在っての事だろう。その中で、彼は彼に合った会社を選び出したと言う事だ。ただ、なにか面白くないという感否めない。そう、慌しくも穏やかに過ぎる毎日は、実に退屈だと言えた。

だが、今日はその退屈からは離れた事で、ここに来たのだ。

「突然で申し訳ないんですけど、理一さんの耳に入れておきたい事があります」

「ん？ と言うと？」

理一も聞く姿勢になる。佐久間の事はよく知っている。健二と共に、彼には多く、助けてもらったのだから。

「別に確証があつて言う訳じゃないんですけど……ちょっと最近、OZの動きが妙なんです」

「OZの？」

今関わっているハマド大統領絡みかとも思ったが、どうやら全くの別件らしい。

「はい。妙、と言うより慌しいって感じですね。定例の保守点検は前倒しで、しかもいつもの倍の時間を掛けてますし、ヴァージョンのアップロードなんてこの三日間毎日ですよ？ アバターの行きかう量もハンパ無いし……中央管理塔の慌しさはもう異常ですよ」

「つまり……なにか起きてる、と？」

「それも発表してない事が。もしくは、出来ない事」

「……ふむ」

少し考える理一。確かに、OZのトラブルが引き起こす問題の恐ろしさは自分達が一番よく知っている。過去何度、OZに関わり事件を経験してきた事か。あの何でもに繋がる仮想現実の空間は、それ一つが既にもう一つの世界ですらある。鏡合わせの様に広がるあの世界の異常は、そのままこちらの世界の脅威でもあると言えた。

「分かった。こちらでも少し当たってみるよ」

「よろしく願います」

理一に一応の承諾を得た事で佐久間の目的は達したのだが、ならば、と佐久間は情報を一つ提供する。

「それで、これは関係があるかどうかまだ分からないんですけど」

「ん？ 何かあるのかい？」

「はい」

そう言って佐久間はバックから一枚のプリントを出すと。

「最近、あるアバターがOMCで大暴れしてるんですよ。ああ、暴れると言っても滅茶苦茶になって意味じゃなくて、色々な場所で戦って連戦連勝してるって意味の暴れるなんですけど」

「だったら何の問題も無いんじゃないのかい」

確かに、それだけなら問題も無い。

「でも、OZの動きが慌しくなったのって、そのアバターが現れだした時期と重なるんですよ」

「つまり……無関係ではないと？」

「多分。しかもそのアバターってのが……コイツです」

佐久間はプリントをテーブルに置き、理一に見せると、理一も目を見開いて見入ってしまう。

「……コイツが」

「ね？ 気になりませんか」

「ああ」

このアバターが何にどう関わっているのか、それはまだ分からない。分からないが……なぜか良い予感がしない。そんな不安を感じる二人の前には倒した相手を前に悠然と佇むアバターの姿がある。

そのアバターは皆がよく知っているアバターに似ていた。いや、その体中に塗られた真っ黒な黒色を抜かせば全くの同じアバター。そこには漆黒のアバターが立っている。その姿は、ラブマシーンと全く同じ姿をしていたのだった。

そのアバターのIDは————

————【シャドウ】

——11..51..10——

劉はあるレンタカーショップから自動ドアを開け出てきた。隣に居る女性は店員なのだろう。劉に鍵を渡している。

「？、幸免于？、但在那里？可以？中文——」

（いやあ、中国語が話せる人が居て助かりました——」

「我的祖父是出生在北京，所以——」

（祖父が北京の生まれで、それで——」

「它是否——」

（そうでしたか——」

笑顔で女性と会話をかわし、劉は用意されたレンタカーに乗り込む。店員に

「??——」

（ありがとう——」

と笑みを見せ、レンタカーショップを後に走り去ったのだった。

——11..59..20——

佐久間を見送り発令所へ戻り、誰かにOZの事を調べさせようかと考える最中、柴田が理一を見つけ声を張る。

「部長！ 外務省に行ってる吉田さんから、緊急です」

「！ 吉田から？」

「四番です」

言われすぐさま手近な電話の受話器を取り

「陣内」と電話に出る。

『部長！ 吉田です』

「何があった？」

細かいやり取りは省く。今はそれで構わない。有無を言わせず先を促す理一に、同様に吉田も先を急ぐ。この辺りは阿吽の呼吸といった所だ。

『はい。それが……不味いですよ』

「何がだ」

そして吉田は、自分の周囲に声が漏れない様に少し落とした口調で、理一に告げたのは————

『日本に化学兵器が持ち込まれた可能性があります』

———最悪な事態の通告だった。

——11..59..59——

12::00::00\13::00::00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

長野への旅路、夏帆は佳主馬に小磯健二が一年前に死去していた事実を知らされる。

アメリカから帰国した侘助は陣内家へと帰郷した。アメリカで起こした会社は順調の様子。

過去の思い出に浸かり、夏希は静かに時を過ごす。

理一の下を訪れた佐久間は理一にOZでの異変への不安を示し、シヤドウと名付けられた漆黒のラブマシンを見せる。

劉はレンタカーを借り、東京の街を走り出す。

外務省に居る吉田からの緊急連絡が入り……………

これは、正午から午後一時の間に起きた出来事である。

1 2 :: 0 0 :: 0 0 \ 1 3 :: 0 0 :: 0 0

——1 2 :: 0 0 :: 0 0——

慌しく人が行き交い怒声があちこちで聞える外務省の一室に、吉田の姿があった。電話越しに理一の緊張感が伝わってくる。尤も、こちらはもっとと激しい緊張感の中に居るのだが

『化学兵器だと?』

「はい」

『どう言う事だ』

理一に先を促され、少しでも受話器に対し小声になる。何処でどう誤った解釈を入れられるか分からない。周囲に居るのは自分の仲間ではないのだから。

「ロンドンの日本大使館を通してこちらに問い合わせが来ました」

『イギリスで?』

「はい。向こうのある研究所で——」

それが、事件の始まりだった。

「VXガスが盗まれ様です」

『なっ!』

それは化学物質の中でも、最も毒性が高いとされる部類の神経剤だ。大量破壊兵器の一つとして数えられる悪夢の毒ガス兵器。

『確度は?』

「こっちに持ち込まれたかどうかはまだなんとも……でも研究所から消えたって所までは確定ですね」

『おいおい』

「外務省は蜂の巣を突付いた騒ぎです。ロンドン警視庁はパニックでましたよ」

『そいつはそうだろうが――』

それは確かに緊急事態だ。それだけで、何十万人が殺せるのか見当が付かない。だが理一が最も気になるのは

『なぜそれがこっちに繋がる？』

この一点に尽きる。確かに一大事では有るが、イギリスと日本を結ぶ線が見えてこない。

そんな理一に吉田は

「研究所の入室データや監視カメラなどの情報から容疑者を特定。それがどうも……日本人なんですよ」

『何？』

「しかも紛失騒ぎの中で犯人の一味と思われる男が判明。拘束寸前で男は自害しましたが」

『そいつは？』

「アルサリ・スジード。スグリアの元特殊部隊隊員だった男です」

『……元、なんだな？』

それは確認だ。だとしたら

「はい。旧体制下の部隊員って奴です。部長、この線は……」

『ああ』

それは理一にも分かっている。あちらに元軍人と盗んだ日本人が居る。そして現大統領は日本に居る。その結果は――

『こっちに繋がる可能性は低くは無いな』――容易に想像出来る。

『お前は引き続き情報収集を頼む』

「了解です。盗んだと思われる日本人の情報、そちらに送ります。じゃ」

受話器を置き、容疑者と思われる人物の資料を手取る。

その書類には、名前の欄に江崎徹と書かれた人物のプロフィール、

館内カメラが捉えた入室映像や入館記録等が書かれていた。

「さて、物騒なロンドン土産は勘弁してくれよう」

吉田は、データの特機に送る為に、慌しく人が行き交う部屋を後にしたのだった。

――12…12…16――

キッ。と車を止めると、運転席の劉は鞆の中から小さめのノートパソコンを取り出した。

慣れた手付きでOSを立ち上げ、OZへとログインを開始する。英数十桁のIDとパスワード。それだけがその仮想現実への鍵であり、それをくぐればもう一人の自分が、むこうの世界へと現れる。劉はログインし、現れた自分の分身をOZの世界へと解き放つ。

彼のIDは【シャドウ】と名乗った。

黒い、暗い、濃い…………闇であり影であり黒である、漆黒のラブマシーン。それが彼のアバター、シャドウ。

佐久間が理一に懸念を表した、そのアバターこそ、劉公博のアバターだった

――12…15…23――

夏帆は新幹線の中で何気に携帯を取り出しOZへの画面を開く。佳主馬は横で静かに寝息を立てている。どうやら昨日は遅くまで参考書と格闘していたらしい。自分達もう高三、流石に追い込みと言ったところだろう。夏帆としては今更な感じも有るのだが、まあ

佳主馬には精々頑張って貰わないといけない。

「どうせなら一緒に大学行きたいし、ね」

ちよつとだけ、余裕のある自分からは、精々エールを送るとしよう。と微笑む。そして、眠る佳主馬の横で、夏帆はOZへの扉を開いたのだった。

＊ l o g i n ∴ ＊

カホはいつも行くコミュニティーに顔を出す、いつもの友人達は今日は居なかった。まあ、皆休日を満喫しているのだろう。自分としても折角の休みに、しかもこんな昼時になぜ？ とも思わない訳では無いが、暇な物は仕方が無い。

「あゝ、やっぱ誰も居ないか」

さて、如何しようかとも思うが、こんな時はやっぱり

「O M Cでもするか」

夏帆の腕前も可也のものであり、小学生時代にはカズマと激しく戦った事もある。中々に強い戦士だ。O M Cのランキングこそ大したものはないが、それはカホがランキング戦に関わろうとしないだけで、佳主馬が言うには「カホは二十位以内には入る実力だと思うよ」と言う事らしい。ちなみに今でもカズマは一位を保持している。尤も、最近は勉強を優先しなければいけない為、中々頻繁に顔を見せる訳にはいかないが、それでもスポンサーとの契約はこなす為にある程度の大会には出場しているし、その全てで優勝を飾っていた。

「さゝて、誰か居ないかな」

カホはO M Cのバトルフィールド内をふらふらと飛んでいる。誰か手頃な相手でも見つけてフリーバトルでも申し込もうと思うのだが、そんなカホの視線に、ちよつとした人ばかりを見つける。

「？ なんだろ？ 何かのイベント？」

言ってそちらに飛んでみれば

「！ 何よ、これ」

そこには十数体のアバターを倒し悠然と佇む、シャドウと名乗る黒いアバターが居た。その姿は

「ラブマシーン？ でも……黒なんて有ったっけ？」

あの五年前の事件でラブマシンの姿は皆の知る物となっていたが、三年程前からはある一定の条件をクリアすれば手に入るアイテムとして【ラブマシーン】の姿があった。珍しくはあるが、実は結構見られているし人気もあるアイテムだ。だがその中には【黒】なんてカラーは存在しない筈。

始めて見るその黒いラブマシーンに呆然と魅入っていると

―― プレイヤーから挑戦を受けました。対戦しますか？ Y／N

――

シャドウから、カホは対戦を促された。

「……面白いじゃない。上等よ！」

カホはシャドウからの挑戦を受け、多くのアバターが見守る中、二人の戦いが幕を開けた。

観衆が一斉にどよめくほど、カホの動きは早く、その攻撃は凄まじかった。無論、中には過去にカホの戦いを見た事がある者も居て、カホの実力がランキングのそれとは異なる事はすぐに知れる。だが、そのカホをもってして

「ちょ！ こいつ何なの！」

シャドウは強かった。

カホは拳法を使う武道家のアバターだ。そのカホに、シャドウは真っ向から打ち合ってきた。そしてその打ち合いにおいて

「うそ！ こんな」

シャドウはカホを圧倒した。

「っ、のおおお！」

カホは得意とするケリでシャドウの横面と蹴り飛ばした。周囲からも「やった」や「スゲ」「モロとかw」と歓声が上がり、カホも手応えを感じた、次の瞬間

「え？」

カホの直ぐ横に背を向け立つシャドウが居た。

正確には背を向けていたのではなく、その場で回転していた。その遠心力を持って繰り出されたシャドウの裏拳がカホを吹き飛ばした。

「どうしてっ！」

戦いは、シャドウの勝利を告げる画面をもって終了したのだった。

* l o g o u t : *

携帯の画面を呆然と見詰める夏帆の目に【GAME OVER】の文字が大きく映る。

自分が最強だとは思っていない。でも今の負けは、どこか納得がいかなかった。相手は確かに強かった。自分の力で勝てる相手では無い様な気もした。でも何か訳の分からない負け方をしたのは事実だった。

「なによ、あれ」

確かに自分の攻撃は当たったはずだ。吹き飛ばしたはずだ。だが、実際は敵は自分のすぐ隣に居て、ノーガードで攻撃を喰らってしまった。いくらゲームには向かない携帯からの操作とは言っても不自然すぎる。そんな夏帆の疑問に

「変だよ、あれ」

「！ 佳主馬」

何時の間にか目を覚ました佳主馬は、徐に携帯を取り出してOZへと入る。

「アンタ」

「うん。俺も気になるよ、あれ。だから……」

佳主馬は一度夏帆に視線を向ければ

「ちょっと、戦^やってみる」

――プレイヤーに挑戦状を送ります。対戦申し込みますか？ Y

／N ―――

そしてキングカズマは、シャドウに挑戦状を叩きつけたのだった。

――12..28..49――

車の中でPCの画面を見る劉に、ポンと新たな窓が開けば

――プレイヤーから挑戦を受けました。対戦しますか？ Y／N

――

そこにはメッセージと共に、多くの「キターーーーー」の噴出しの中、仁王立ちするキングカズマの姿が映し出されている。

キングからシャドウへの挑戦に、劉は、くすりと笑みを漏らす、
ふと別の窓に目を向けると

HAGU48AH4K
SBEHS554SI
SHSUMSOA45
JSPNW254ez
SSNAQUI4f0
OSH48fgNF
DOJEN48354
jdn5FSMPjp
ijdpw41874
8HEDMIKAAH
1456846A41
3GA36G86ZA
G41A531G56
A4G35A1G3A
HSN51B68AS

.....

画面にはどんどんと数列が流れ増えていく。そんな英数列の真ん
中で【8HEDMIKAAH】の数列が赤く点滅していた。それを
見た劉は再び笑みを漏らせば、PCのキーボードのNを押し、OZ
の空間からログアウトしてしまう。

ノートパソコンのを閉じ助手席へと置いた劉は、再び車のキーを
回し車を走らせたのだった。

——12..30..41——

「ご馳走様」

「あんた、もういいのかい？」

「うん」

言って自分の食べた食器を持ち、台所へと向う夏希。おそらく子供達よりもずっと少ない量しか食べては居ないだろう。子供達は一斉に夏希の前にあったおかずに手を出し始めては、母親に手を叩かれていた。

僅かな昼食を終えて縁側に腰掛け、庭の朝顔をぼんやりと眺める。そんな夏希が「ん？」と気付けば、自分をじーっと見詰める美奈と麻奈が居た。二人とも、父親よりは直美に似た様だ。そんな事をぼーっと考えてると、二人の視線が自分の指に注がれているのが分かった。

「ん？」

と左手を見せてみれば

「「これなーに？」」

と小さな指が指したのは薬指にはめられたリング。

「これ？」

「「（こくん）」」

同時に頷き、興味津々とばかりに見詰める双子に薄く微笑み

「これはね……お姉ちゃんが一番大事な人がお姉ちゃんにくれたの」「くれたの？」「どうして？」

おお！ という驚きと興味を全身で表現する。きっとこの子達には色々な事が、世界の全ての事が、新鮮な驚きと輝きに満ちているのだろう。

「お姉ちゃんとずっと一緒に居られる様になって……その約束に、これをくれたの」

「「お～～」」

一層目をキラキラさせ指輪に魅入る二人に笑みを浮かべる。きっと………自分も、初めてこの指輪を見た時は、こんな目をしてい

たのかも知れない、と――

それは二年前の桜の季節だった。

佐久間と共に開発した会計ソフトが、大手企業にシステムソフトとして採用されるという話を持ち上がり、何度もの検証と変更、試験運用の結果、正式に採用の運びとなったのがつい一ヶ月前の話。ささやかながら成功を祝おうと待ち合わせていた。

少しだけ遅れてきた健二に軽い文句を言ったのを覚えている。されてはいないのだが「ナンパが来て大変だった」と言った時の健二の慌てぶりが可笑しかった。

バイトの給料日の後に二人でよく行く居酒屋へ足を向ければ、健二が「今日は違う店にしようよ。ってか、実は予約して有るんだよね」と言っただけの腕を掴んで街中へと向った。一瞬、懐の心配をした夏希だったが、まあ「偶にはいいかな」と腕を絡ませる。もちろん、美味しくなかったら文句を言う事だけは宣言しておいた。「大丈夫だよ……たぶんだけど」実に頼りない、だが彼らしい反応に笑みも零れる。

「うそ」と呆然となるほど、それはとあるビルの最上階にある、高級感たっぷりのレストランだった。流石に「ちょっと。ここって高いんじゃないの?」と心配する夏希だったが「大丈夫だよ」と健二が入ると、すんなりと席にエスコートされた。

「大丈夫? 健二」

流石に彼女が心配でくつろげないのでは意味が無いので、健二は「実は例のソフトの入金が今日だったんだ。これ位はどうって事ないから、心配しないで」笑みを浮かべる健二に「だったらいいけどでも入金って言ってもどれ位? 私も今日はそんなに手持ちは」と夏希はこっそり財布を確認しようとしたが

「うーん……これ位?」と健二が携帯で打ち込んだ金額は

「……嘘」「ほんと」

と、夏希が呆然とする金額だった。自分が思っていたより遙かに高値が付いていた事に夏希は驚きを隠せないが「本当はもっと高くも言えたんだけど、別にそんなにお金欲しい訳じゃないしさ」とこれでも貰い過ぎだよ、と笑っていた健二に自分の気持ちも静かになっていく。もっと欲を持っても良いとも思うのだが、それも健二の良いところであり、自分が好きなどころだと改めて認識する。

そんな、初めての豪勢な食事をしめるデザートを食べ終わった頃に、健二は「それで、その……夏希、に……受け取って欲しい物があるんだけど」と姿勢を正した。

「ん？ なに？」

思えば、もっと他に返しも有ったろうと、かつての自分に言うてやりたい。

「うん……これ。俺……君に、受け取って欲しい」

「ん？」

小さな箱だった。

綺麗な箱だった。

開けるとそこには、素敵が、幸せが、幸福が、詰まった箱だった。

「これ……」

ゆっくりとじっくりと、目を逸らせば消えてしまうかの様に思えたその箱の中の小さなリングは、自分の指が摘み上げるまでどうにか消えないで存在してくれた。見れば、自分を真っ直ぐに見詰める男性が居て

「結婚しよう……夏希」

「」

「その……たいした金持ちじゃないけど、ってか、どっちかってと貧乏なだけだよ。今回の件で少しは今後の目処も立ったし」

「」

「えっと、俺浮気は絶対しないし夏希の事も信じてるし。あれ？」

いや、これはわざわざ言う事じゃないんだけどさ。いや、今更なんだけどケジメって言うか、やっぱ夏希とずっと一緒に居たいし」

「だから、その……あの、夏希？」

「あ……夏希、さん？」

色々言いたい事は在った筈だった。嬉しいとか、遅いとか、もしくは早いとか……でも、結局出て来た言葉は

「……………うん」だけだった。

ただそのリングを大切な宝物の様に両手で包み胸元に抱いて、自分でも、自分が泣いている理由が、よく分からなかった。嬉しい時はいつも笑ってきた筈だったのに。

ゆっくりと、自分の薬指にリングが通っていく。健二の指と表情が、今でもはつきりと思い出せた。

「……嬉しい」

少しだけ重くなった左手をもう一度胸に添えれば、周囲から拍手聞えてきた。何時の間にか、他の客がこちらを見詰めていたのには思わず赤面したものだ。

祝福の拍手と声の中、グラスとシャンパンが運ばれたが「あの、俺は頼んでな」との健二の言葉を遮って

「こちらは当店からのサーヴィスで御座います。よろしければ……」見れば、全ての卓へグラスは行き渡っており「私共にも、祝福をさせてはいただけませんか？」

皆が、自分達の未来を祝い、乾杯をしてくれた。そんな……………二年前の桜の季節だった。

想いをはせる夏希を現実に戻したのは

「「それで？ その人は？」」

そんな双子の言葉。

「うん。居ないの」

「「なんで？ 一番だいじなんでしょ？」」

そんな子供の、悪意の無い、鋭利な言葉。だからそこ現実、引き戻されてしまう。

「お姉ちゃんの大事な人はね……遠い所に行っちゃったの」

「「遠いの？」」

「うん……すごく遠いところ」

「「ふーん。お姉ちゃんが行かないの？」」

ちよつと驚く。が、夏希は静かに双子の頭を撫で、遠い目で再び朝顔に目を移す。ただ……

「お姉ちゃんも行こうかと思ったんだけど……その人はきつと悲しむから……だからお姉ちゃんは行けないの……」

「「ふーん」」

もう興味は別のものに移ったのだろう。美奈と麻奈はきやいきやいと駆け出したが、ふ、と振り向き

「「でもまた会えるといいね」」

と笑って走り去った。夏希はただ、ぼんやりと花畑を見詰め続けるだけだった

――12..41..18――

特機では吉田から送られて来たデータの分析が進めれていた。それによれば、江崎の存在は随所に確認出来た。

研究所の玄関モニターにはIDカードを通し入館する姿が映し出されていたが

「「こいつのIDが？」」

「はい。研究所職員に登録されていましたが……江崎なんて人間は

研究所には居ません」

理一の言葉に桑田が答える。

他にも空港での出発情報で江崎がインドへ渡った所までは掴んでいるが、そこから先の足取りが不明だ。最新の識別システムで他所の変装でも人物を認識するシステムが各空港に備え付けられているが、いまだ江崎の所在が掴めない。

そんな中「江崎の情報、ヒットしました」と柴田が声を上げ、モニターに写真を出した。皆が注目する中

「江崎徹二十八歳。二年前に日本を出国」

「目的は？」

問う理一に柴田は

「平和維持活動ですね。いわゆるNGO活動家です。この時はボスニアに」

「おいおい。NGOがどっから毒ガス強奪に変わったんだよ」
今度は吉井が疑問を口にするが、これに返る柴田の答えは意外なものだった。

「それが、変わるどころか……おかしいですよね」

「？ なにが？」

「死んでるんです。江崎は同じ二年前に、サラエボで活動中に流れ弾に当たって」

「は？」

画面が切り替われば、確かにその情報がある。だが

「そんなニュース、あったか？」

それは皆の疑問だ。みなそれぞれ記憶を手繰ってみるが、そんなニュースは聞いた覚えが無かった。普通、日本人活動家が銃撃で死ねば、大なり小なりニュースになる筈だ。しかもNGO活動の中で死はニュースとしては大きい筈。それが無いのは妙だと言えた。

そんな空気の中で声を上げた相沢は

「あれ？ ちょっとすいません」

急に端末を操作し始めるが「……やっぱり。見てください」とメインモニターに映せば、ヒースロー空港で撮られた江崎の映像と柴田の持ち込んだ写真が並ぶが、その画面には大きく【不一致】の文字が浮かぶ。

「どういう事だ？」

「つまり……ガスを盗んだ男は江崎じゃ無いって事か？」

理一と吉井の疑問はそれがそのまま事実だ。だが

「でも……なんでわざわざ死んだ人間を騙るんでしょうか？ どうせなら、そのまま職員になりすませば良いのに」

桑田の疑問に、答える者は誰も居ない。そんな中、

「！ 出ました！ ヒットです」

大きく響いた菊間の声に皆が注目すれば、画面には空港らしい場所に立つ男との二枚の映像に【一致】の文字。

「どこだ！」

「羽田です。空港の認識システム」

「おいおい。それじゃあ」

「はい。既に入国してます。劉公博と名乗って中国から……約二時間前です」

一斉に、メインモニターに注視する。

今、イギリスと日本を結ぶ線が……

「繋がったな、これで」

理一の弦きを機に、特機は一斉に、動き出したのだった。

とあるホテルの納入口で

「ご苦労さん」

「お疲れさん」

馴染んだ守衛に軽く挨拶し、納入口から食料品を運び込む数人。納入をチェックしている横にスーツ姿の男が居るのが目に止まる。

「? 誰」

「ん? ああ。なんか偉いさんがウチに宿泊になるらしい。ホテル中にあんな連中がいるよ」

「物騒な話だな」

「全くだ」

納入者と担当者は軽口をたたき合い、いつも通りに食料を運び込んでいくのだった。

調理場まで運び込み、それぞれの物を運び込む中で、一人の男は調理場の一人に近付けば

「?????? ???? ????」

（首尾は? ——」

「???? ???? ?????? ——」

（予定通り——」

小さく話し、調理場の奥へと男を連れ込み、冷蔵庫の隅に置かれたスチロールを示す。男が箱の蓋を開ければ、そこには沢山の銃器が収められていたのだった。

——12..51..50——

人気の少ない倉庫街に止めた車の中で、劉はPCの画面を進み、

ある画面でアクセスキーを求められる。認証の場所へ先程赤く点滅したIDの情報を入力すると、家永智樹のIDでアクセスが許可された。

入ればそこは日本外務省のメインコンピュータだった。

笑みを浮かべ画面を次々に切り替え進み、ある場所でピタリと止まる。そこにはハマド大統領のスケジュールと手配した宿泊ホテル。警備体制の情報などが映し出されていた。

暫く操作を続け、パタリとPCを閉じればバックに戻し、代わりに小さめのアタッチケースを取り出し、運転席と助手席の間に残り、バックを持って車を出る。

一人、バックを持ち歩きながら、徐に携帯電話を取り出しダイヤルをプッシュする。

一コール。それだけを鳴らし電話を切る。と、車内に残されたアタッチケースから、Piと小さく音が鳴った。

携帯をポケットにしまい、何事も無かったかの様に歩く劉の背後で、乗ってきたレンタカーが爆発を起こす。激しい爆音と共に、炎と煙を噴出し炎上する車を尻目に、劉はその場を後にしたのだった。

——12..59..59——

13::00::00<14::00::00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

ロンドンにあるとある研究所からVXガスが盗まれる事件が発生。
OZの中で劉のアバターであるシャドウに夏帆がOMCで勝負をするが、不自然とも思われる敗戦を喫した。

夏希は陣内家の中で思い出の中で健二との幸せに浸る。

特機ではVXガスを盗んだと思われる日本人を追うが、劉と名乗る中国人へと繋がりその足取りは日本へと。

あるホテルの中でアラビア語で語る男達の下には大量の銃器があった。

外務省の情報を入手した劉は、レンタカーを爆破し姿を消し……………

これは、午後一時から午後二時の間に起きた出来事である。

――13..00..00――

慌しく動く特機の中で柴田が急ぎ入室してくると

「資料、出ました」

デスクに向う柴田の声に一同はメインモニターに向う。映し出されたのは劉公博の経歴だった。

「劉公博。中国の黄王公社所属。どうやら主に中東地方の油田開発関係を担当している様ですが」

「ちょっと待て」

柴田を遮った理一は少し考える仕草を見せたが

「黄王公社と言ったな……」

その名前には聞き覚えがあった。それは特機に居る者の大半に当て嵌まるのだが

「はい。例の……黄王公社です」

それは中国にある大きくは無いがそれなりの商社。言ってしまうと中堅所と言った商社だったのだが、それはあくまでも表の顔ではない。商社の裏の顔を覗けば、それは中国の黒社会で大きな影響力を持った組織だった。その上層部には中国共産党の幹部も名を連ねていた。

「黄王公社の人間が、なぜVXガスを……」

「不明です。現在外務省を通して公社に劉の行方を問い合わせています」

「相手が相手だからな」

「……はい」

政府公認と言っても言い闇の組織だ。事件に絡んでいるから協力してくれと言ったところで、「はいそうですか」と協力してくれる訳は無い。そんな中

「劉の足取り、出ました」

菊間が声を上げると

「レンタカーを借りてます。今、レンタカー会社から劉の借りた車の現在位置をGPSで」

割り出していると言う前に、それが不完全な物だと知れる。

「？ あれ？」

「どうした」

「それが……反応、ありません」

全ての車に備え付けられている筈の機能は現在は作動していない。余程の事をしない限り、それを切る事は出来ない仕組みになっているのだが

「最後に記録された場所は分かるか？」

「はい。それでしたら十分前に送信されたデータが」

画面に地図が映し出されて一点に赤くマークが点くと

「ここから追うしかあるまい。吉井と一緒に追ってくれ」

「はい」

「いくぞ菊間！」

既に吉井は走り出し、慌てて菊間も本部発令所を後にするのだった。

——13…16…29——

「ふう。やっと着いた」

「はあ、相変わらず凄いよね、佳主馬んち」

佳主馬と夏帆は陣内家へと到着したのだった。夏帆にとっては小生の時に訪れて以来の訪問になる。相も変わらない門構えに懐かしい気後れを感じてしまう。

門をくぐり玄関に向えば、万理子が笑みで出迎えてくれる。

「遠い所をようこそ。お久しぶりね、辻本さん」

「はい。お久しぶりです。お世話になります。あ、これ、つまらない物ですけど」

言って土産を渡し一通りの定番な挨拶を終えて陣内家へ。靴を脱ぎ、一歩足を踏み入れてしまえば、そこはもういつもの陣内家だった。

「あー！ 佳主兄が彼女連れてきたー」

「「つれてきたー」」

おおー！ と子供達が一斉に群がってくる。子供達にとって佳主馬はゲームの上手なお兄ちゃんであり、新しい客人はそのまま珍しい客人となる。テンションもいつもより高めの状態だ。それに拍車を掛けるように

「おいおい。やるじゃないか佳主馬」

「へー、佳主馬がね」

克彦と邦彦は佳主馬の肩を掴み「「で？ どこまでいったんだ」」とこっさり聞いてくる。無論

「そんなんじゃないってば！」と振り切る佳主馬の顔は非常に赤い。そんな賑やかな空気だが、流石に誰も知って居る人間がいないのでは、外交的な夏帆であっても若干の気後れが有る。だが「あっ！ 夏帆ちゃん」と聞きなれた声に目を向けると、真緒に手を引かれてこちらにくる佳子の笑顔が。佳主馬の妹だけあって佳子とはよく顔をあわせているし、夏帆にも随分懐いている。

嬉しそうに自分に纏わりつく佳子の頭を撫でながら、今ではそう

身長も変わらない真緒に笑顔を見せれば

「久しぶり、真緒ちゃん。って、覚えてないか」

「そんな事無いですよ辻本さん。ほんと、お久しぶりです」

笑顔で答える真緒だった。昔、一緒に散々かくれんぼをした記憶が（夏帆達にとってはさせられた）あり、真緒や祐平あたりの記憶にはしっかりと夏帆の事は残っている。他の子達は流石に幼かったのだろう、今一つ記憶には残ってはいないらしい。

自分の事を知っている人間に会えた事で幾分普段の自分を取り戻せた夏帆は、その後、聖美に会い、奈々達と再会し、いつもの笑顔で皆に話し掛ける事が出来るようになっていった。

そんな夏帆に佳主馬が「ちよっといいか？ 辻本」と声を掛け「？」と首を傾げる夏帆に

「これから大婆ちゃんのとこ行くけど、どうする？」

佳主馬にとってはまずやらなければいけない事であり、無論、それは夏帆にとっても

「もちろん、私も行くよ」

それは聞くまでも無い事だろう。夏帆にとっても、昔、とても短い間ではあったが、お世話になった栄だ。その霊前に手を合わせる事は、むしろ当然と受け止めていた。そして――

「……………」

「……………」

仏壇の前で手を合わせる佳主馬と夏帆は栄に一時の帰郷と来訪を霊前に報告したのだった。

夏帆が合掌を解き目を開けば、横ではいまだ佳主馬が瞑目し、合掌していた。そんな、いつもは見ない佳主馬の横顔に少しだけ見と

れながら、周囲に置かれた写真達に目を向ける。

佳主馬や了平、子供達やおじさんおばさん。そんな皆の多くの写真の中で、一枚の写真が視線に留まる。

そこには、一組の男女が幸せそうに並んで写っていた。

当然、一人は夏帆にも覚えがある。記憶の中の彼女はもう何年も前の姿だが、それは一目で自分の知る篠原夏希であると分かった。だとすれば隣の人物はやはり

「夏希姉ちゃんと健二さんだよ」

いつ隣に居たのだろう。気付けば佳主馬は夏帆の後ろに立っていた。

「っ！ ……そうなんだ」

「うん」

「そう……この人が……」

別に色男と云う訳では無いだろう。背も、まあ普通。特に際立って目立つ物は無い。強いて言えば隣の美人が目立っているだけ、そんな人物。だが、その彼の視線や表情は……

「なんか、優しそうな人だね」

「うん。優しかったよ。そして強かった。とても……強い人だったよ」

「そうなんだ」

なぜか佳主馬の言葉を受け入れる事が出来た。夏帆の中の女の勘、と言うものなのだろうか。この写真を見て思う――

美しい篠原夏希の横に小磯健二が立っているのではない……この小磯健二の横に立つ事で、篠原夏希は美しい女性に成っていったのだろう、と。

仏間を出、廊下を歩けば、前を歩いていた佳主馬が不意に止まる。

遅れて「？」と夏帆が止まり佳主馬の視線の先を追えば、そこには庭の花畑を望む縁側に腰掛け庭を眺めている夏希が居た。

「？」

視線に気付いたのだろう。夏希が振り向けば「あら？ 佳主馬。

久しぶりね」と静かに笑顔を見せた。

「うん。久しぶり、夏希姉ちゃん」

「？ その人は」

自分と視線がぶつかり思わず焦るも

「お、お久しぶりです！ あの、私池沢君の同級生で辻本と言いまして、昔こちらに遊びに来た事とかあって、あ、夏希さんは覚えていないでしょうけど、昔一緒に、ですね」

一気に捲くし立てる夏帆に笑顔を見せながら

「ふふ。覚えてるわよ、辻本さん。お久しぶりね」

「は、はい！ お久しぶりです！」

夏希が自分の事を覚えていたのが嬉しくて、つつい元気に返事をしてしまう夏帆だった

「いや、辻本、テンション合っていないだろ」

「！ う、うっさい佳主馬っ、って！ っちが、池沢君です、はい」

「ふふふ」

佳主馬と夏帆のやり取りを微笑ましく眺め、再び夏希は庭を眺める。特に何があるわけではない。ただぼんやりと景色を眺めている、それだけの事……

そんな夏希を残し、佳主馬と夏帆は彼女を通り過ぎる。廊下を曲がり視界から夏希が消えると

「なんか、凄い美人になってるよね、夏希さんって」

「……うん、そうだな」

「でも、さ……」

「……」

ふ、と立ち止まり、もう見えない夏希の姿に振り向き

「なんか……透明って気がした……あんなのはきつと……違うよ」
なぜか、その美しい女性の姿を思い起こせば起こすほど、胸が押し潰されそうになる。そんな儚く薄い、夏希の姿が、夏帆の脳裏に焼きついて離れなかった。

――13..38..51――

暗がりで集まる数人の男。そこは今は使われていない経営破たんした病院の廃施設だ。本来、立ち入り禁止の筈の場所に入り込んだ男達は、自家発電機を使い数台のモニターやパソコンを起動し数人がキーボードを叩いている。

別の部屋では他の男達が銃器の手入れをしている。その男達は皆、中東系と見られる。そんな中から一人が部屋から出、パソコンの画面を覗き込むを、操作している男の肩を一度だけ叩き、懷から携帯電話を取り出した男は携帯をコールすると。

数度のコールで向こうが出た。

「?? ? ?――

(俺だ――)」

電話を握り少し皆と距離を置き

「???????? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?
……………????????????????????????????????????
????????
?
? ?

(ロンドンのアクシデントは問題無い……………ああ、予備のプラン

はある……心配ない。こっちは予定通りだ。奴等が気が付いた時はもう手遅れさ——」

電話を切り、男はもう一度モニターを見詰めてから、再び別の部屋へと戻っていったのだった。

——13..41..32——

吉井と菊間が管轄署のパトカーと共にレンタカーの反応消失ポイントに到着した時、既にそこには炎をくすぶらせて無残な姿をさらけ出している残骸が残されていただけだった。

「やられましたね」

「ああ。どうりでGPSも反応無い訳だ」

反応が消えた瞬間が爆発の瞬間と言う事なのだろう。

鑑識が車を調べてはいるが、ここまで破壊、炎上してしまった車から劉に繋がる痕跡を見つけるのは絶望的だと分かる。それにしても——

「こいつは徹底してやがるな」

思わず、車だった物体を見て洩らす吉井に菊間は近付き

「やっぱり痕跡を隠す為ですか」

「だろうな。ちまちま拭き取るよりは手っ取り早い」

「そりや分かりますけど……」

菊間もそれは理解出来る。だがだとするならこの劉と言う男は「思い切りが良過ぎますよ。こんな極端な真似をするなんて」

「ああ。恐いぞ、こういう奴は」

「はい」

自分達が追っている人物に、少なくとも恐怖を感じる二人だった。

「分かった。お前達はそのまま付近を当たれ。何処にどんな手掛かりが転がってるかも分からんからな」

『了解』

吉井からの連絡を終えた理一は劉の資料に今一度目を通す。

見た限りではただの優秀な営業マンの経歴でしかない。だが、それはあくまでも表の資料であり実際の彼とは異なるのだろう。冷静に、整然と、そして大胆に。いまだ見えない相手の全貌に、不安を覚える理一だったが、その思考を「部長！」と、桑田の言葉が遮った。

「なんだ？」

いやに慌てた風の桑田に先を促せば、彼女は慌しく端末を操作しながら

「問い合わせてみたら劉の情報がインターポールICPOに有りました」

「よし。劉の写真とかがあれば直ぐに吉井達に送ってやれ」

こちらの資料には写真が無い。あれば探す大きな手がかりになる。空港や研究所のカメラ映像では不鮮明でありあきらかに変装をしている。犯人の情報は多い方が良い。だが、そんな理一の言葉を否定するかのように告げる桑田の言葉は

「それが、違うんです」

「何がだ？」

意味が分からない。なにが違うのだろう。そんな理一に

「劉は捕まってるんです。昨日の朝」

「何？」

既に理一だけでは無い。他の者も桑田の言葉に耳を傾けていた。
「メキシコで拘留されています。不法な兵器売買の現行犯、併せて
八つの国際法違反で……これが資料です」

言って映し出した画面には劉の写真と現在の状況、罪状などが記載されていた。

「どうなってるんだ。入国時のパスポートは確かに劉の物だったんだろう」

「はい。ですが……どう？」

桑田に促された柴田は端末を操作していたが「やっぱり……劉じゃありません」と言って画面を切り替える。

そこには【不一致】と表示された劉の写真と、空港のカメラ映像が映し出されていた。

呆然と眺める一同の中で、相沢は自分の髪をくしゃりと握り思考を巡らせる。どうにも頭が混乱してきた。一体――

「それじゃあ……こいつは誰なんだよ」

答える者の居ない空間で、ただメインスクリーンには劉とは一致しない男の映像が映し出されていた。

――13…59…06――

劉……では無い男は、倉庫街の中の一つにあるレンタル倉庫の扉の前にたった。ポケットから鍵を取り出し中へと。正面のシャッターを開け光が差し込むと、その中央にはシートを掛けられた乗用車が一台止まっていた。

男はシートを手早くはぎとり、後部座席にバックを置き、そのま

ま運転席へと座りキーを回しエンジンを掛ける。

黒い乗用車に乗った正体不明の男は、再び東京の街中へ向けて走り出したのだった。

――13…59…59――

14::00::00<15::00::00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

特機は劉の身元を割り出し、彼が借りたレンタカーを下に足取りを追った。

陣内家へと到着した佳主馬と夏帆は、久しぶりの陣内の面々との再会。そんな中で会った夏希の姿に夏帆は儚さを感じてしまう。

薄暗い廃病院の中では不穏な男達が。

GPSを頼りに車を追った吉井と菊間は爆破され残骸と化した車を前に佇む。

特機では劉の情報を追っていたが、劉は一日前にメキシコでICPOに拘束されていた。

身元不明と成った男は、新たな車を駆り……………

これは、午後二時から午後三時の間に起きた出来事である。

——14:00:00——

佳主馬は露天風呂を見下ろす草原に座っていた。あの「あらわし」が落下し、そしてその一年後に爆弾が爆発した場所には、再び浴場が設けられていた。侘助からの資金もあり、なかなか豪勢な造りになっていたのだが、いささか豪勢に過ぎると言った感も否めない。ここに座り思い出すのは健二の事。ここが好きな佳主馬が座っていると、大抵健二が声を掛けたものだ。

いつも背後から——「温泉は見るものじゃなく入るものだよ？」
佳主馬君

そう笑って自然と自分の隣に腰掛けた。

「あんまり好きじゃないんだよね。皆で風呂って」

「そう？　なんか楽しいじゃん。ま、真悟君が泳ぐのには参るけどね」

楽しそうに笑う健二が、実際に参っている訳では無い事は見て分かる。そんな彼に、だけど聞いてみたいことが有った。

「ねえ、健二さん」

「ん？」

「夏希姉ちゃんと同棲始めたってホント？」

「っが！」

真っ赤になった健二が全てを物語っていた。そんな健二の姿に含み笑いを見せつつも、今更なのになく、などと思ってしまう。

「別にそんなに赤くなる事も無いじゃない」

「で、でも、その……なんか改めて言われると照れるって言うか」

「ふーん。でも夏希姉ちゃんは嬉しそうだったよ」

「そ、そうかな」

「うん」

確かに、夏希はまさに我が世の春を満喫していた。今も万理子や雪子と共になにやらわいわい騒いでいるようだ。どうやら二人の部屋の内装についての談義らしい。続々と親類が会話に加わっている所を見ると、健二の意見の入る隙間は無さそうだ。

「今まで……余裕無かったからね、俺。夏希にも心配掛けたと思う」

「健二さんは、さ……背負い込み過ぎるんだと思うよ。俺が言うのも生意気なだけどさ」

「そんな事無いよ。うん……きつと、そうなんだろうなあ」

そう言って空を眺めた健二の表情は、どこかに苦さを滲ませていた。実際、佳主馬は自分の意見が間違っていたとは思わない。

東京証券株式所を襲ったサイバーテロ――

関西国際空港ジャック事件――

東海道新幹線暴走事件――

佳主馬が記憶しているだけでもこれだけの大きな事件に健二は何かの関与をしていた。自分ももう子供では無いし、それらの事件に健二と、どうやら理一が絡んでいるのだろうとは思う。だがそれまでであり、知らずに過ごす程に子供では無いが、立ち入る程に大人ではない。自分はそういう存在だと言う分析も出来る。

だが、大きな事件の中で被害者が出る度に、再会した健二の笑顔は力を無くしていった。いつもどこか緊張し、それを悟らせない様に笑顔を作る。

健二の精神が危険な状態にまで迫っていた事を知ったのはつい先日だ。悪夢にうなされ、明と暗の差が激しく、時折ヒステリックに

なつては怯えてうずくまる……出来る事と出来なかった事、守りたい人と守れなかった人。いつしか、その全てが彼を蝕んだ。

そんな健二を懸命に支えたのが夏希であり、おかげで健二はようやく立ち直ることが出来たのだった。

小磯健二は優しすぎる。そして出来る事が多過ぎて、それを背負うに強過ぎた。人間は、本当はそんなに強い生き物では無い筈なのに、それでもそうあろうとして押し潰されてしまった。だが、それでも彼は言うのだ

「でもね……そこに悲しい出来事が有って、それを少しでも背負えるんだったら、やっぱり僕は背負うよ。何度でも、さ」

貧乏性で困る。そう言って笑った彼を佳主馬は忘れない。

「……いつか」

「ん？」

「いつか俺がここに好きな女でも連れてきたら、さ」

「あ！ 連れて来るの？ そういう子」

「だからいつかだよ、いつか！ 過程の話」

「ふーん」

どこか含みを持たせてにやける健二が忌々しい。だけど

「だからそんな事がこれから先にあったらだけどさ……紹介するから、会ってよね」

「へ？ 僕？」

「そ。夏希姉ちゃんと、その……健二兄ちゃんだって、さ。ちゃんと紹介するから」

「佳主馬君……あはは、楽しみにしてるよ！」

考えてみれば、これが健二を兄ちゃんと呼んだ、最初で最後の瞬間だったのかもしれない。

あの時の笑顔を……ここで見たあの笑顔を、今はただ思い出すだけの佳主馬だった。

「温泉は見るものじゃなく入るものよ？ 佳主馬」
「えっ！」

慌てて振り返ればそこには夏帆がにこやかに立っていた。一瞬、記憶と現実が重なり合ったかの様な錯覚を覚えたが、視界の中の夏帆の表情があまりに驚いたものに変わったから、自分が涙を流していた事を知った。

慌てて再び視線を景色に移す佳主馬に「ごめん！ 私、その」と夏帆も流石にバツが悪そうなのだが

「いいよ、別に」

佳主馬は手早く涙を拭って夏帆に笑顔を見せた。

夏帆は一瞬、場を去ろうか？ とも思ったが、なぜかここに居ても良いと言われた気がした。だから静かに佳主馬に並んで座ってみる。同じ景色をただ眺めていた。

「よく、さ」

「ん？」

不意に話し出す佳主馬に、余裕を持って応えてみる。

「俺がここにいと、よく健二さんが話し掛けて来てたんだ。ほら？ 何て言うか、思い出の場所ってやつ？」

「ここが？」

「そうだよ。温泉が出た時も、最初の小屋が吹き飛んだ時も、いつも健二さんは現場にいたからさ」

「ふーん」

縁、と言うのは意外にそういう事なのかも知れないと夏帆はぼんやりと考えながら

「なんかさ……やっぱり会ってみたかったな。その健二さんっ

て人に。私も」

「うん。そうだな……」

ぼんやりと思い出に浸りながら、佳主馬は静かに洩らしたのだった。

「俺も……会わせたかったのかも知れないなあ……辻本の事、健二兄ちゃんに、さ……」

どこまで意識して言っているのか、それは本人にも分からない。もしかしたら健二が言わせたのだろうか……そう、ぼんやりと思う佳主馬だった。

——14…20…49——

人の動きが目まぐるしい特機本部の中、一人の部下に連れられて三人のスーツ姿の男が入室してきた。

「？」

一目見て違和感を感じたのは理一だ。彼等が特機の者で無いと予想する。関わる人間が多い中で全ての職員を覚えていた訳ではない。だが彼等の纏う違和感自分達とは異なると感じ、三人を残して自分の下へ来た部下は、理一の予想を肯定する結果と成った。

「部長。すいません、ちょっと」

「彼等か？」

「はい。責任者をと」

三人に背を向けながら話を聞けば「分かった」と彼等の所へと向おうとする。そんな理一にすれ違いざま「連中、公安です」と部下はこっそりと告げるのだった。

三人の前へと進んだ理一は

「どうも。部長の陣内ですが、貴方達は？」

取り合えず、彼等の出方を伺った。

「お忙しい所を失礼致します。警視庁公安部、棚橋と申します」

「ほう……公安部が、何故？ え、棚橋警視」

差し出された名刺を見詰めながら先を促してみれば

「こちらの吉井捜査官に少し聞きたい事がありまして、彼は今何処に？」

「吉井に？」

意外な名前が意外な人から飛び出した。周囲の部下達も聞き耳は立てている。一瞬、皆の手が止まるが

「吉井は捜査の為に外ですが」

「そうですか。それでは呼び戻して下さい」

「は、ちょっと待っ」つてくれ。そう言う理一の言葉を遮るのは相沢だ。

「状況見て言ってるのか？ そのスーツ」

その言葉には明らかな敵意があった。公安と言えば警察に対する警察の様なものだ。その矛先に自分達の仲間が立たされては穏やかでは居られないだろう。

「どう言う意味です？」

棚橋の言葉にも棘が生まれる。本部には緊張感が漂う中

「今の状況見えてんのか？ って言ってるんだよ。この非常時にお前等のスパイごっこに付き合っつて捜査官を呼び戻せっか？ 頭沸いてるとしか思えないな」

「私は私の職務を執行しているだけだ。君達の捜査とこちらの捜査は協調性を持たせなければ成らないものでは無い。君に文句を言わせる筋合いは無い」

「捜査だ？ ふざけんなよてめえ。吉井さんはお前等に用なんかねえよ」

「彼には無くとも私達にはあるんだ」

「こいつ」

詰め寄る相沢に対し柵橋の両脇に控える二人は彼の前に身を乗り出すが、先んじて相沢の前に理一の背中が姿を見せた。

「落ちて相沢。皆も！今は自分の仕事に集中しろ！良いな」

理一の言葉に皆が返事を返し各々の仕事へと戻っていくが、相沢は依然として鋭い視線を柵橋に向けていた。こいつはもう決着が付くまで仕方ないな。と思い、理一は相沢を背にしたまま、柵橋に視線を向け

「部下が失礼しました」

「いえ。それで、宜しいでしょうか」

柵橋が了承の確認を促すが、理一からは答えの前に質問が飛んだ。

「要請を無視する気はありません」

「それでは」

「だが理由は聞かせて貰います」

それは理一の引けない一線だった。

「我々の捜査は、その性質上、対象に近い人間には明かせないのはご存知でしょう」

「柵橋警視」

「はい」

「スグリアの大統領が来日。ロンドンでは危険な兵器が盗まれた。

犯人は日本人の疑いがあり現場の内通者はスグリアの元兵士、しかも犯人と思われる男は国内に潜伏中と思われる。足掛かりの車は爆破されてた……これが今の現状です。それは貴方も分かっている筈です」

「車の爆破の件は知りませんでした」

「だったら私の立場も分かる筈です。申し訳無いが、話しが有るか呼んでくれハイ分かりましたと言う訳には行かない。貴方の職務も分かれますが私の職務は今の状況を打破し解決する事にあります。その為に必要な人材には必要な事をして貰わなければ成らないし、それをさせるのが私の仕事です。納得のいく理由を話す事が出来な

いのならどうぞお引取りを」

棚橋の視線と理一の視線が激しくぶつかる。どちらにも引けない職務がある。

「正式な手続きを踏んで強制的に、でも構いませんが」

「ご存知とは思いますが、我々には意味を成しませんよ」

「……………」

「どうしますか？」

特機はその性質上、警察組織とは別系統の命令系統を持って任務に当たっている。テロ犯罪をその対象に定める以上、管轄越えや省庁越えの捜査も珍しくは無い。皆、自衛隊や警察などからの出向ではあるが、特機の捜査員であり、その捜査中であれば警察の権限を上回るのが実情だ。

理由を話せ。それが言外に理一が提示した妥協案であり、それは棚橋へも正確に伝わる。一度だけ溜息をつけば

「三日前、公安部のコンピューターにアクセスし機密情報を閲覧した者が居ます」

「それと吉井が？」

なんの関係があるのだろう。それが分からない一同に

「アクセスしたのは吉井捜査官です」

棚橋は断罪する様に良い放つ。

「吉井が？ 馬鹿な」

「確かです。コードとパスでは無い。彼のIDを認識させてのログインでした」

「考えられません」

割ってはいるのは相沢ではなく柴田だった。

「IDを使って入れば直ぐに痕跡が見付ります。機密情報にアクセスしたい人間が使う手法とは思えません」

コードをパスを使えば誰の仕業かを特定するのは難しいだろう。どこで盗まれるかも分からないのが情報を言うものだ。だがIDでログインは自分の持つIDカードの磁気情報でログインする方法

だ。カードが盗まれない限り自分のログインは確定だ。特機の上級職員には広範囲の権限が与えられているが、それだけに動きも目立つだろう。

「だが事実、彼のIDでログインした者が機密情報にアクセスした。彼の仕業では無いのならそれを証明する責任が彼にはある」

「一体、吉井さんがお前等の何の機密情報が必要としたってんだ。関係無いだろう」

相沢の声も次第に語尾が強くなっていくが

「その点はさした疑問は無いがね」

「どう言う意味だよ」

「その人物が見た情報が、君達、テロ特別機捜隊の内部調査資料だからだ」

「な」

「吉井捜査官に疑いを掛けるに充分だろう」

棚橋の言葉に発令所内が静まり返る。吉井が疑われている事もそうだが、公安の内部調査に自分達が上がっている事への驚きもある。国の為にと戦っている自分達を、その国の機関が疑っている。それは言い難い屈辱だ。だが

「誤解しないで下さい。我々は貴方達に疑念を抱いているのでは無い。与えられた権限に対し相応の対価が必要なだと理解して下さい。実際、我々の調査結果でも、こちらの不利となる情報は一切上がっていません」

「だったら」

吉井が危険を犯してまで調べる必要は無い。無いのだが

「だがからこそ、吉井捜査官が何故侵入したのかを調べる必要があります」

痛くない腹は探られても平気な筈なのだから。

流石に黙る相沢に目配せをしたあと、理一は棚橋を見詰め

「お話は分かりました。吉井には連絡を」

「ご理解恐縮です。陣内部長」

どこか室内を気落ちした空気が流れた。

「……っ！ ……………最後に一つ」

「はい？」

何かに思い当たった理一は再び視線を強めると

「三日前と言いましたが、それは何時の話ですか？」

「？ 履歴によれば十四時二十三分です。ログの記録があります」

「十四時……だがどうやって……」

考え込んだ理一を一同が不審に思えば、「あっ！」と柴田が声を上げる。？ と一同が視線を柴田に移せば

「違います！ 吉井さんじゃありません！」

「君、何を言ってる」

呆れた感じの棚橋は、いまさら何を、と言う感じなのだが

「アリバイがあります」

「アリバイ？」

「はい」

要するに、その時間、吉井がコンピューター情報にアクセスして
いないと云う証拠なのだが

「だが彼はその時間は成田に移動中と成っている」吉井の動向は既に
掴んでいた筈だ。だが、その言葉で相沢はようやくハッキリと思
い出した。

「違うんだよ」

「何がだ」

「成田には俺が行ったんだ」

「何？」

それは突然の交代だった。相沢は出先から成田に向った。そして
吉井の向った先を知る理一は

「彼には緊急の連絡会議に出て貰ったんです。私が陸自の方へ用事
が出来ましてね」

「会議と言うと？」

「ハマド大統領の警備についてです。一部に急な変更がありました

ね、それで急遽に。十四時から始まって約一時間は会議室に詰めて居た筈ですから、その時間のアクセスは不可能でしょう」

「それを証明出来ますか？ 申し訳ありませんが貴方達以外で、ですよ？」

自分達の記録では浮かんでいない。仲間の証言では信憑性に問題がある。だが相沢は自信の笑みを浮かべながら

「だったら聞いてみるよ」

「誰にかね？」

「お前達の親玉だよ」

「何？」

そして理一が最後に告げる。

「会議は警察庁警備局の声掛けです。元重警備局長の下で開かれたものです。当然、警備局長は終始その場に居ましたよ」

「！ 元重局長が」

「どうぞ、ご確認を」

慌てて携帯を取り出し電話を掛ける棚橋だった。警視庁公安部は警察庁警備局の組織に属する公安警察だ。その長には警備局の局長があたるだろう。その局長本人が吉井のアリバイを保障するのであれば、それはもう公安である棚橋には揺るがしようにも無い事実であり、電話はそれを肯定する結果を導き出した。

吉井の疑いが晴れるのは問題ない。だが、やはり理一は考えてしまふ。

「……どうやって……」

犯人は吉井のIDを使用出来たのだろうか。そして、特機の内部調査を見て、何を知りたかったのだろうか、と……

黒いクラウンが路上のパーキングエリアに停まる。

中には男が一人。彼はシートベルトを外すとおもむろにバックの中からノートパソコンを取り出し、携帯に接続しOZへとログインを開始した。

ログインした男のアバター――シャドウは、OZへと再び姿を現したのだった。

男は手馴れた手付きでキーを叩き、自らの分身と化したアバターをOZの空間へと解き放つ。いつもは真っ先に向うOMCへの入り口を今は開かず、わき目も振らずに画面を進めた。先に存在する、最も重要なOZ管理塔を目指して。

――14…39…22――

公安の三人が自分達の本部と情報をやりとりしている間にも、特機の面々は車を処分し姿を消した男の行方を捜す。現場では吉井と菊間が文字通り足を使って捜査しているだろう。既に後発で他の捜査官も出ている。

今は様々な施設の監視カメラの映像と男の映像を総合している。何らかの足取りが掴めれば捜査の進展へと繋がるだけに、これも重要な作業と言える。

そんな慌しい中

「桑田先輩」

「何？ 佐橋さん」

桑田も今では先輩と呼ばれるようになっていた。月日の経つのは早いものだ。

「東京駅からの情報、反応悪いんですけど」

「ああ。確か先週にシステム更新してる筈だから……情報を更新しないともたつくかな」

「じゃあ電算室に」

行って向おうとする佐橋を制し

「ああ、良いわよ。私のコードの方が早いから、やって来てあげる」

「え、良いんですか？」

「良いよ。佐橋さんは先にNシステムの担当区域の方を済ませちゃって」

「分かりました」

席に戻る佐橋を見送り、桑田は一人、電算室へと足を向けた。

特機のコンピューターを管理している電算室へ着くと、慣れた手付きで佐橋のシステム更新を行う。無人の電算室にコンピューターの稼動音だけが鳴り響く。

更新のインジケーターが完了までのパーセンテージを表示しているが、不意に桑田は懷から携帯電話を取り出すと

「桑田です……………はい。計画は順調です……………ホテルへは既に……………はい。襲撃は予定通り……………はい。失礼します」

電話を切と画面が更新の完了を表示する。桑田は何事も無かった様に、再び発令所へと戻っていくのだった。

——14..44..05——

車の中でパソコンのキーを叩く男は次々と画面を進めていった。ある認証画面でキーを打てば*****とパスワードを認証し、OZの管理塔へと入る。何枚ものウィンドウを重ねて表示するが、中央に小さなウィンドウが開きアクセスキーを求め

られる所で画面が落ち着く。

再びキーを叩き、ログインすると荒木宗司と言う名前の人物がどこかの管理コンピューターへアクセスした形となって画面に表示される。

画面を進め、何枚ものウィンドウを処理していくと、最後に

【 Y o r N 】

それは実行への最後の確認。何度も何度も押し続けた【Y】のキーが少しだけ大きく見えた。だが――

――タン――とキーを押す。

一斉に、小さなウィンドウが画面中に重なり合わせて広がる様を、男は黙って見詰めていたのだった。

――14..50..19――

「さて、と。それじゃあ、誰かと対戦でもしようかな」

佳主馬がパソコンを立ち上げ、侘助から受け取ったディスクをセツトする。

「反応速度を見たいからな。出来れば合戦とかに参加してくれないか」

「うーん。それだとあと二時間は無いんだよなあ。フリー参加の合戦場がメンテ中でさ」

「そうか」

佳主馬がセットしたディスクは侘助の会社で開発した新型のOSだった。

まだ開発段階の域を出ないのだが、かなり完成へと近付いている。それを佳主馬に使って貰い、処理速度のデータを取らせてくれないかと侘助が頼んだのだった。

処理速度の性能も大きく作用するOMCであればデータを取るに申し分無い。出来れば乱戦状態の中で全体の処理をスムーズかつハイスピードでこなす事が出来れば言う事無かったのだが

「仕方ないな。それは後でまた頼むとして、まずはちょっと試して貰えるか？」

キングカズマの動きをどれだけ精密に行えるか。それだけでも重要なデータだ。

「いいよ。それじゃあ、対戦相手でも募集して」

キングからの対戦募集は滅多に無い。特に最近ではOMCに参加する事も稀なのだから、それこそ相手は殺到するだろう。

そしてOZに入ったキングがOMCの門を開く——————直前に、それは起きた。

プツン。と侘助の見ていたデスクトップが落ちた。

「あれ？」

急なダウンに侘助が首を傾げれば「あれ？」と隣で佳主馬も声を上げた。

「どうした？」

「いや、それが」

侘助が覗けば、佳主馬のノートパソコンの画面で【アクセスが確立出来ません】と表示が出ている。思わず机の下を覗けば

「あ、モデム落ちてる」

「電源か？」

コンセントでも外れたのだろうか？

佳主馬のノートパソコンは自動でバッテリー動作に切り替わるが、

流石にモデムに電源が通らなければネットには繋がらない。そう思ったが

「でも、コンセントささってるけど」

「は？ それじゃあ」

思わず顔を見合わせると、子供達が大騒ぎでキャイキャイと家中を走り回っているのが聞える。大声で

「てーでんだてーでんだー！ てーでーん」

と。そこで二人は理解した。パソコンが動かない理由もネットに繋がらない理由も

「「停電？」」

陣内家から、機械の音が消えた……

――14・56・50――

「システム問題ありません！」

特機の中では一層の慌しさだった。

急な停電は一瞬で、直ぐに自家発電に切り替わる。今はシステムに異常が無いかの確認だったが問題は無い。

「直ぐに情報収集。どの範囲の停電か確認しろ」

東京のココが落ちると言う事は、可也の範囲で停電は起きてると予想出来た。重要な施設には無論自家発電は有るが、それはあくまでも補助的な物でしかない。自分達の案件とは重なるとは思えないが、いつでも最悪を想定して事を進めなければ成らない。それがこの常識だった。最悪の事態とは、いつだって人の想像を少しだけ

超えた所に存在するものなのだから。

そして……やはり、それは想像を超えた所に存在したのだった。

「停電の範囲は……ちょ、あれ」

「どうした？」

桑田の声に同様が見え理一はそちらに向おうとするが、それは次々に上がる言葉で制される。

「全域です。東京管内全て停電です！」

「東京電力からです！ 各発電所はオールグリーン！ ですが全ての送電システムがダウンしてます。東京は完全に」

それだけでも異常事態。だが

「違います！」

「柴田？」

「大阪、神戸……京都に札幌に、よこっ！ 全部ですっ！ 日本中が全部停電ですっ！」

「馬鹿な！」

事態は異常を通り越え、最悪へと変貌を遂げ、遂に……

t u r u r u r u r u r u r u と特機の電話が鳴れば

「はいっ、あ、吉田さんっ！ 今大変な………そんな」

受話器を持った佐橋は、呆然と立ち尽くしてしまう。そんな彼女に「どうした！ 吉田なのかつ」

叫ぶ理一に、彼女は告げる事になる。

その瞳は驚愕に見開き、必死に言葉を搾り出す様に……だが、しっかりと告げるのだった。

「世……界中な……んです……」

「なにがだ」

「吉田さんが……外務省から……」

「佐橋！ だから吉田は何を」

理一らしからぬ大きな声に、皆が緊迫の度合いを増したその中で
「だからっ、世界中で起きてるんですっ！ 主要各国全てが停電して
るんです！」

「そんな……事が……」

事態は最悪をも飛び越えて、今、悪夢へと姿を変えた。

そして世界は沈黙した。決して起きる筈の無い、世界同時大停電
によって……

——14…59…59——

15::00::00<16::00::00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

佳主馬と夏帆は陣内家でゆったりとした夏の休日を過ごしていた。

特機の下に訪れた公安警察は吉井が機密情報を盗み見たと告げるが、その犯行時刻には吉井にはアリバイが。

そんな慌しい特機の中で、桑田は不審な動きを見せる。

特機の面々が探し続ける男は、車の中からOZへと入り、管理塔へ侵入した。

佗助の開発したOSを試そうと、カズマがOZへと入った時、陣内家への電気の供給が止められる。

非常用電源にて復活した特機。理一は事態の掌握に懸命になるが、その停電は世界を覆いつくし……………

これは、午後三時から午後四時の間に起きた出来事である。

――15:00:00――

「一体どうなってるんだ！ 原因は？」

「分かりません！」

「調べるんだっ、最優先！」

「はいっ！」

理一の声に数名の部下は走る。

今、世界中で停電が起こっている。まずこの信じられない事態を現実として受け止める事が第一義だ。信じられないからと言って思考を止めるのは愚かな事ではない。それはこの特機の面々であれば皆が理解している事だ。だからこそその動きでもあった。

「政府関係者、主要拠点の状況を再確認。各都市からの現状報告を」

「了解！」

「警察庁、消防庁と連携。各省庁への連絡は厳にしろ」

「はい！」

「佐橋、吉田には戻ってくるように伝えろ」

「こっちにですか？」

「向こうに居ても仕事は無いさ」

「分かりました」

「柴田、ハマド大統領の護衛を二チーム増やせ。人選は任せろ」

「はい」

次々に指示を飛ばせばそれに呼応する部下達を頼もしく思いながら、理一は最後に大きく声を上げた。

「いいかっ！ この停電が何を意味するのか誰が意図したものなのか、それは分からん。だが我々の仕事は明確だ」

皆が手を止めて注視するなか

「原因を突き止める。犯人を突き止める。犯行を食い止める、ただそれだけだ。これが事故や故障だと言う安穩な考えは捨てろ！ 常に最悪の事態を想定して動け、分かったな！」

理一の言葉にそれぞれが、はいっ！ と応えるのを笑みで見詰めて「な〜に。そう思っとけばホツとする事はあっても驚く事はないさ。面倒臭い事件を相手にする時の秘訣だ。簡単だろ？」

にやり。と笑みを見せる理一に、皆、どこか安心出来るから不思議だった。

どんな事があっても最後には上手く行く。実は最後の切り札は理一が持つてる。そんな、有りもしない想像を掻き立てる、言ってみれば余裕の笑みの様なものを見せられた。だがたったそれだけの事で、特機の面々は心強さを感じるのだった。

自分の言葉を受け、一斉に動き出した仲間を見ると、ふ、と自分の携帯が振動している事に気が付いた。そのディスプレイを見るや通話を押し

「佐久間君か？」

『あ、すいませんっ！ きっと今大変だとは思ったんですが』

「構わないよ」

その相手は佐久間だった。午前中に会ったばかりの彼からの電話。本来なら出ている場合では無いのだが、理一は知っている。

彼は、あの小磯健二の相棒だった男だと。

「この停電の事かい？」

このタイミングで掛けてくるとしたら、用件はそれ位だろうと踏み、そしてそれは正鵠だった。

『はい。世界中で同時多発的に起きているこいつですが』

「何か分かったのかい？」

『おそらく……方法も手段も分かりませんが、発生源は分かりません』

「それはどこだっ！」

佐久間が示した言葉はまさに理一が求めていた言葉だったが、返された言葉は――

『OZですよ』

「OZ？」

――至極、単純な言葉だった。そこまでは理一も予想の範疇ではあったが、最後に……

『はい。でも多分正確には……闇です』

「闇、だって？」

……佐久間の言葉は予想を超えたのだった。

――15…09…43――

男は車の中でOZのメインコンピュータにアクセスをしていた。目まぐるしく開き増え続けるウィンドウを素早く操作する。一心不乱にノートパソコンに向う男は、車の外で上がる騒ぎの声など耳に入らないようである。信号機の突然の消灯により、周囲は大混乱だ。

そんな喧騒の絶えない外界から完全に隔たり、男は黙々と画面を動かし、自分の探すデータを必死で追う。

そしてとうとう……その数ある画面のウィンドウの中で、自分が

探し求めたデータを見つける。

その瞬間、男の表情に変化が現れる。その口元を僅かに緩ませ、うっすらと笑みを浮かべたのだった。

――15..16..49――

居間から騒々しい音が聞こえてくれば、頼彦が侘助と佳主馬の前に姿を見せた。

「ここに居たか」

「あん？」

侘助を探していたのだろう。不意に近付けば

「俺はこれから署に行く。邦と克も其々戻る」

「この停電か？」

非番の彼等が緊急に呼び出される事是不思議ではないし、このタイミングであればそれが原因だと予想する。が、事態は少しだけそれを上回る。

「ああ。どうやらこの停電、思った以上にやばいらしい」

「？ ま、確かに時間が掛かってるが」

「問題は範囲だ」

「ん？ 県全域か？」

侘助の予想はそこまでだが

「いや。どうやら世界中で一斉につて事らしい」

「んな馬鹿な」

「時期にニュースも流れるだろうが……いや、復旧まではそれも無い
いか」

「おい……マジかよ」

「ああ。大マジだ」

侘助の表情が凍る。だとするならば、これはもう事故では無い。

事件だ。それも、とても大きな事件の始まりだった。

「とにかく俺達は署に行くから、お前、こっちの事頼むぞ」

それは家族を置いていく事への苦渋と、そんな中でも頼りに出来る親類への要請だ。無論、侘助もそれに異を唱える積りも無い。

「心配するな。こっちは大丈夫だ。お前は自分の仕事をしろよ」

「ああ、助かる。じゃ」

「ああ」

慌しく去る頼彦と入れ違いに夏帆と真緒が姿を見せるが、その空気はどこか不安気味だ。思わず夏帆の袖を握り「お父さん、怖い顔してた」と真緒も異常事態である事悟る。

夏帆はそっと真緒の手に自分の手を重ね合わせて笑顔を見せる。

それだけでも、真緒の表情からは少しだけ緊張が解けていった。

笑顔を見せ、振り返れば

「佳主馬、一体なんなの？」

「分かんないよ。でも……」

何かが起こっている。それはどうやら確かだと分かる。

頼彦達の車が陣内家を走り去った音が聞こえてくる中、侘助は振り向き事態を告げる。告げるかどうか迷ったが、もう高校生や中学生でもある彼等だし、第一、復旧次第ニュースでも流れるだろう。それに、自分が動くに皆に内緒でとなると可也の制限を受けてしまう。それではいささか動き難い。

「どうやらこの停電はここだけじゃないらしい」

「？　　と言うと？」

「どういう事？　侘助おじさん」

聞き入る体勢になった事を確認して、その口を開けば

「世界中で、停電が起きてるらしい」

「嘘」

「尤も、何処まで深刻なレベルなのかはまだ分かんねえからな。取り合えずは落ち着いて様子を見よう」

夏帆に答えて皆を居間へと誘導しようとした侘助の目に入ったの

は、佳主馬が携帯電話を掛けている姿だった。

「佳主馬？」

電話など繋がるのだろうか？ そんな疑問も夏帆には浮かんだが、それは「っ！ 渡か？ 良かった、繋がった」佳主馬の親友の竹橋渡だ。

彼とは小学生の頃からの親友であり、コンピューターに非常に強い。佳主馬が真っ先に電話したのも――

「渡！ お前今OZでバイト中だよな？ この停電の情報、なにか有るか？」――それが理由だった。

彼ならば何かを掴んでいるかもしれないと期待し推測する。言ってしまえば、佳主馬にとっての渡とは、健二にとっての佐久間の様な存在と言っても良いだろう。そしてそれは案の定

『つと、いきなりだよね。ってか長野もそうなんだ』

「ああ、こっちも停電。名古屋もか？」

『うん。つか、結構やばい感じだよ、これ』

「なんだよ」

渡の声色にただならぬものを感じて先を促せば、

『この世界同時大停電、OZを通して誰かが送電を止めたみたいなんだけど』

「そりゃ、こんな事そうでもしないと無理だろ？」

それだけ広く深く世界に浸透しているシステムはOZにおいて他には無い筈だ。

『でも妙なんだよ』

「妙？」

意味が分からない。

『ほら？ 佳主馬ってば俺に電話してきたじゃん』

「？ いや、電話局にだって非常用電源くらいあるだろう」

『電源は有るだろうけどさ……世界中を停電させる事も出来るんなら、他も全部掌握出来そうなものじゃないか』

「それは……」そう思う。

『ただ送電を止めただけなんだよ、こいつ。電力さえあれば、こうして普通に機能を維持出来る。銀行も通信も、空港なんか普通に業務も出来るさ。尤も、いつまでも非常用電源が使えるものでも無いし、時間の問題って言えばそれまでだけど……中途半端なんだよ、管理塔にあんな真似までしといてさ』

「あんな真似？」

意味が分からない佳主馬に

『携帯使ってOZに入れない？』

「あ、ちよっと待って。今ちょうどノーパソ使ってたから……よし」と

* l o g i n : *

携帯をパソコンに繋がれば回線を維持できた。渡も同じなのだろう。彼のアバターであるモニター頭の白衣のワタルがカズマの横に現れた。

「じゃあ、見てみろよ、管理塔」

「管理塔？」

「ああ。多分、あれが原因だよ」

ワタルが指し示した方向を見れば

「ちょ！　なんだよあれっ！」

カズマは目を疑った。

「管理塔だよ。あぁなって直ぐに停電が起きた。今、エンジニアが総出で解析してるけど……正直訳がわかんないらしい」

「そんな……」

そこにはいつもの管理塔の姿が有った。否、いつもと同じなのは

塔の八割程の話だろう。二割程の……塔の頭頂部を覆い隠す様に、真っ黒な雲が管理塔に掛かっていた。何も透けない。本当に真っ黒な漆黒の雲だった……

＊ log out… ＊

「一体、何が起こってるんだよ……」

呆然と立ち尽くす佳主馬の周囲で、侘助や夏帆、真緒は、無数のアバターが雲の周囲を動き回る様を見詰めるのだった。

——15…22…40——

車の中でパソコンを操作する男は、一枚のディスクをセットする。機械音を僅かに響かせながらディスクが読み込みを始めると、一つのプログラムが起動した。OZの管理塔の中で見つけた画面にそれを落とし込めばインジケーターが表示され、徐々にパーセンテージを刻み出していく。

「！」

ある警告表示が出るとウィンドウが開く。見れば、雲に取り付いたエンジニアのアバターが少しづつ自分が構築したセキュリティを侵食し始めたのが分かった。インジケーターに目を移せば未だに九パーセントに辿り着いたばかり。

一瞬唇を噛むが、直ぐにキーを叩き、ある画面を導きだす。そこには

——【Battle mode Limited Area】——

とある。それを

——【Battle mode All Area】——と変更した。

笑みを漏らしてEnterのキーを押せば、更に何枚かのウインドウが展開し【Complete Set】の文字を映し出した。

——15..30..16——

* l o g i n : *

管理塔を覆う闇にとりつく無数のアバターは皆OZのエンジニアだ。送電システムを狂わせたのはこの闇が原因で有る事は既に判明している。方法は分からないが、犯人はOZのシステムに侵入し世界中の電力供給システムに干渉し、自分達からの干渉を防ぐ為に防壁を構築していた。この闇はそれを視覚化したに過ぎない。

犯人が優秀な人間である事はプログラムを見るだけで容易に判断がつく。だが、こちらもOZのエンジニアであり、それこそ世界屈指のプログラマーの集団だ。

「ったく。厄介なものを作りやがって」

「言うなって。もうちょいで……っし！ こっちは抜けた。後はそっちと併せりゃ」

「目処がつく、か」

その解説は目前に迫っていた。

アバターが行き交い、もう少しで防壁を突破出来る。そうすれば後は犯人を特定し、OZでもリアルでも確保すれば良い。そう、事件の収束が近付いた時——「え？ っ！ ぐはっ」解析に関わって

いたアバターが弾けとんだ。

「なっ！」

「嘘だろ」

驚く皆の目の前には、動かなくなったエンジニアのアバターの上に、シャドウは悠然と立っていたのだった。

「なんだよこいつ！」

「どうなって……嘘、バトルモードが全域に設定されてるっ！これじゃまるで」

OMCの限定エリアに限られた設定がOZ全域で解禁されてしまった。これでは一定以上のダメージを受けるとそのアバターは動きが取れなくなる。それはまるで

「ラブマシーンじゃないか」

その姿と同じあの夏の悪夢の再来だった。

一気に襲い掛かってくるシャドウに、エンジニア達は一斉に逃げ惑う。

「不味いぞ！ やられたらモード解除まで動けねえ！ 全域設定なら復活しようが無い」

「逃げろ！」

「ば、防壁はどうすっ！ しまっ」

逃げ出す者、混乱の中で防壁に向う者。OMCの上級者でも無い彼らの中に飛び込んだシャドウは、ウサギの群れに放たれた狼の如く、次々にアバターを無力化して行った。

かなり進んだ防壁の解除も既に振り出しに戻ってしまっている。そんな混乱に有っても何とか闇へとり付き、再び突破を試みるアバターが居たが

「なんとか防壁だけでもっ！」

振り向けば、直ぐ背後にシャドウが迫っていた。

「くっ！」

逃げるでは無い。彼はそのまま作業を続ける事を選んだ。停止寸前まで作業を進める事を優先し、後の者に続きを託す。そんな彼が……

「……あれ？」

いつまでも来ない攻撃に疑問を感じれば、見える空間一面に「キターーーーーー」の文字が乱れ飛んでいた。

「何が」

振り返った先に見たものは、自分の背後でシャドウの右拳を左手で受け止めている――

「邪魔はさせないよ」

「あんた」

――キングカズマの後姿がそこには在った。

「この前は断られたけど……今度は付き合ってもらおうよ！」

一気に攻撃に移ったカズマの攻撃をかわし距離をとったシャドウに、しかしカズマも距離をつめる。

多くのアバターが見守る中で、カズマとシャドウの戦いはその火蓋を切って落とした。

「今のうちに！」

「ああ！」

隙を見て再びエンジニア達が闇にとり付き作業を開始する。それを見てシャドウも彼等の元へ向うが

「だからっ！」

バキィン！ とカズマの蹴りがヒットしシャドウを弾き飛ばす。

「邪魔はさせないって言ってるじゃん」

悠然と構えるカズマを見て、彼を倒さなければエンジニアにも届かない事を悟ったシャドウは、真っ直ぐにカズマへと突進するが、それはなんなくかわされてしまう。

ここへきて、シャドウもまたゆっくりと構えを取り、カズマに對峙する選択を選んだ。

OMCに不慣れなエンジニアであれば考えも無く攻撃を加えても用は足りる。だがカズマは無敵の王者であり、文字通りのキングだ。安易に襲い掛かってはあっさりと返り討ちに遭うのは必然と思えた。二人は慎重に、だが激しく攻防を交えるが、ともに戦いは拮抗した。だが、カズマには氣に成る事があった。それは

（なんだろう……こいつ、無表情だ）

OZのコミュニケーションツールは各国言語の瞬時翻訳もさる事ながら、そのアバターの表情や仕草にも操作している人物の影響を受けるといったものだ。焦った声色、怒った声色、笑った、泣いた、時に戸惑う。そんな使用者の特徴を視覚的に表現する。キーの押す力加減や速度なども影響を与える一つ。

だが、このシャドウにはそれが見られない。

ツールの機能を切る事も可能だ。だがそうする事の利点がカズマには思い当たらない。脅すでも交渉するでも通告するでも、機能としてあった方がシャドウにとっても使えるに越した事は無い機能だと思うのに。

「さつきから一言も喋らないけど……無口なのかい！」

一気に蹴りを浴びせるもやはり無言で受けるだけだ。思いの他、良い感じに出せた蹴りを防がれた事で、カズマのスイッチも切り替わる。もう、これ以上は何も必要ないだろう。

それはOMCの上級者であれば分かる範囲の変化。

カズマは、本気の構えを取った。

「いいよ、もう……ここらで、終わらせようよ」

それはまさに一瞬。

間合いを詰めたカズマを迎え撃ったシャドウの拳は空を切り、気が付けばカズマの拳に吹き飛ばされた。管理塔の衝突して止まりカズマを確認する間も無く、起き上がり間際のシャドウをまたカズマの回し蹴りが吹き飛ばす。

周囲のボルテージも一気に上がり、まさにこれがキングカズマだと言わんばかりの中、悠然と姿勢を起こしたカズマの――

――すぐ背後に、シャドウは立っていた。

「なっ！」

驚いた瞬間にはカズマは吹き飛ばされていた。

「このっ！」

なんとか体勢を立て直し、追撃してくるシャドウの拳に自分の拳をあわせてカウンターを狙えば、共に打ち合った二人の内、シャドウの姿が掻き消えた。

「え？ ……っなんで！」

拳を振り抜いた体勢のカズマの、まさに正面に、再び拳を振りかぶったシャドウが姿を現した。

拳を戻す間も無くモロに喰らったカズマは弾き飛ばされる。踏み止まってシャドウを睨めば、そこには何も無く。自分の背後から蹴りを喰らい再び飛ばされる。

「馬鹿な！ こんなのって」

ギリギリで体力を残したカズマが再びシャドウを探せば、シャドウは再び、闇にとり付いたアバターを蹴散らしていた。

＊ log out… ＊

「一体どうなってるんだよ、あいつのアバター」

「私の時と同じね。あの時だって、私の蹴りでぶっ飛んだ筈なのに、次の瞬間にはすぐ隣に居た……なんか変だよ。こいつ」

「ああ」

ノートパソコンの前で呆然とする佳主馬は、言い様の無い恐れを感じて。だがそれでも

「だからって……引けないさっ」

佳主馬は再びキーを連打し、シャドウへ向け飛び立ったのだった。

——15..41..46——

廃病院の暗がりの中。男達の一人がパソコンを操作している男の肩を掴んで怒声を上げていた。

「????? ???? ????! ——」

（どうなってる! ——」

「???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ?

（入れません。やっぱりセキュリティが変更されているとしか——」

「????? ——」

（くそっ ——」

怒鳴った男は携帯を取り出すとメモリの中の一つにコールすると

『????? ——」

（はい ——」

「????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ——」

（俺だ。そっちは順調か? ——」

『????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ?

（問題ありません。すべて予定通りに——」

「????? ——」

「分かった――」

電話を切ってポケットへねじ込めば、再び恐い形相で振り向き

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840.

「早くなんとかするんだっ——」

さう叫び、再び部屋の外へと姿を消していったのだった。

$$\begin{array}{c} | \\ | \\ 1 \\ 5 \\ \dots \\ 4 \\ 8 \\ \dots \\ 1 \\ 0 \\ | \\ | \end{array}$$

佳主馬のモニターでは相も変わらない攻防が続いていた。

カズマが追い、シャドウがあしらい、カズマやエンジニアを蹴散らしていた。佳主馬はなんとか攻撃を凌げる様にはなっていた。

確かに不意に現れる事のからくりは判明していない。だが、近くに現れる事が分かっているならばそれなりに備える事も出来る。別にシヤドウもノーダメージと言う訳でも無いのだ。それなりに備えておけば充分に戦えるし、実際、少しづつシヤドウにダメージを刻み込んでいける。

「このまま押し切ってやる」

キーを叩くスピードが一層激しさを増し、画面の中のシャドウに迫っていく。

皆が見詰める中、エンジンアを襲っているシャドウを背後から蹴り剥がし、振り向き様に跳んでくる、吹き飛んだ筈のシャドウの蹴りをブロックする。

「よし！」

「その調子よ佳主馬」

「がんばれ佳主兄！」

侘助や夏帆、真緒が佳主馬を応援する。そんな背後に、夏希はぼんやりと立っていた。どこか呆けた様に、夏希は食い入る様に画面を見詰めていた。

蹴りを防がれたシャドウは一度距離を取る。

ちらりと辺りを見渡せば、また新たなアバターが闇に取り付いていた。いくら払い除けても次から次へと押し寄せてくる。世界中からのアクセスなのだから当たり前と言えども当たり間の話だ。

もう一度、一氣に間合いを詰める。瞬間にカズマの背後に姿を現すが

「そこっ！」

ガキーン！ と逆にカズマの拳を出会い頭に叩き込まれた。

パターンを読まれてる訳では無い。だが、戦闘において最も効率の良い出現ポイントをカズマは感覚で知っているだけだ。特に深い計算は無い。それはカズマの勘でしか無い代物だが、それは時に計算を凌駕する。

また一つのエンジニアが防壁の深いところへ喰い込んだのが分かる。一瞬、そちらに向おうとしたシャドウを「余裕だね」とカズマの声が制する。

自分を前にして、他を気にする余裕があるのか？ と言った所だろう。

今、どこか主導権はカズマが握っている空気が流れた――が

【Complete】と言う文字と100%を示すインジケーターが表示されたウインドウがシャドウの傍に開いた。瞬間、シャドウの動きが止まった。

「隙ありっ！」

一氣に間合いを詰めたカズマが、その右拳をシャドウにヒットさせる寸前で、シャドウの姿は掻き消えた。

「ちっ！」

再び自分の死角となる場所への警戒を示したカズマだったが、どこからもシャドウの攻撃は来ない。

「あれ？」

不思議な感覚を覚えていると上方から歓声が上がリ出した。何事か？　と思えば、それは電力供給システムへのアクセスが回復した事への歓声に他ならなかった。

「どう言う事？」

頭を傾げるカズマの下に「終わったよカズマ」とワタルが現れた。「何がさ。まだ奴との決着は」付いていない。そう言おうとするカズマを制したワタルの言葉は

「あのシャドウとか言う奴はログアウトしたみたいだよ」

「ログアウト？」

それは意外だった。まだ、シャドウは負けてはいなかったのだから。

「うん。そんで、それと同時に防壁は消えてシステムは奪還された。もう時期、停電も復旧するさ」

「でも……」

「？　……ああ。あれな」

カズマとしては勝負を付けたかったという思いはあるが、それは事態回復に優先するべき事じゃ無い。それは分かっているのだが、どうしても素直に喜べないと感じてしまう。何故なら

「あれは残ったままなんだな」

「うん。とくに悪さをする訳じゃ無いみたいなんだけど……なんだけど、さ……」

「不気味、だよな」

「うん」

二人が見上げる先では依然として、管理塔にかかる闇の雲は存在し続けていたのだった。

――15..56..59――

ログアウトを完了しノートパソコンをパタリと閉じた男。車の助手席にパソコンを置き車を降りた。

パーキングエリアに止められた車を降り、後部座席からボストンバックを取り出してドアを閉める。鍵を閉め振り返ると、その目前にそびえるビルを一度だけ見上げ、笑みを漏らしてビルに向けて歩を進める。

そのビルは何の変哲も無い高層ビル。

各省庁の外郭団体や特殊法人がそのビルには名前を連ねている。東京ではよく在るビルの一つに過ぎない。

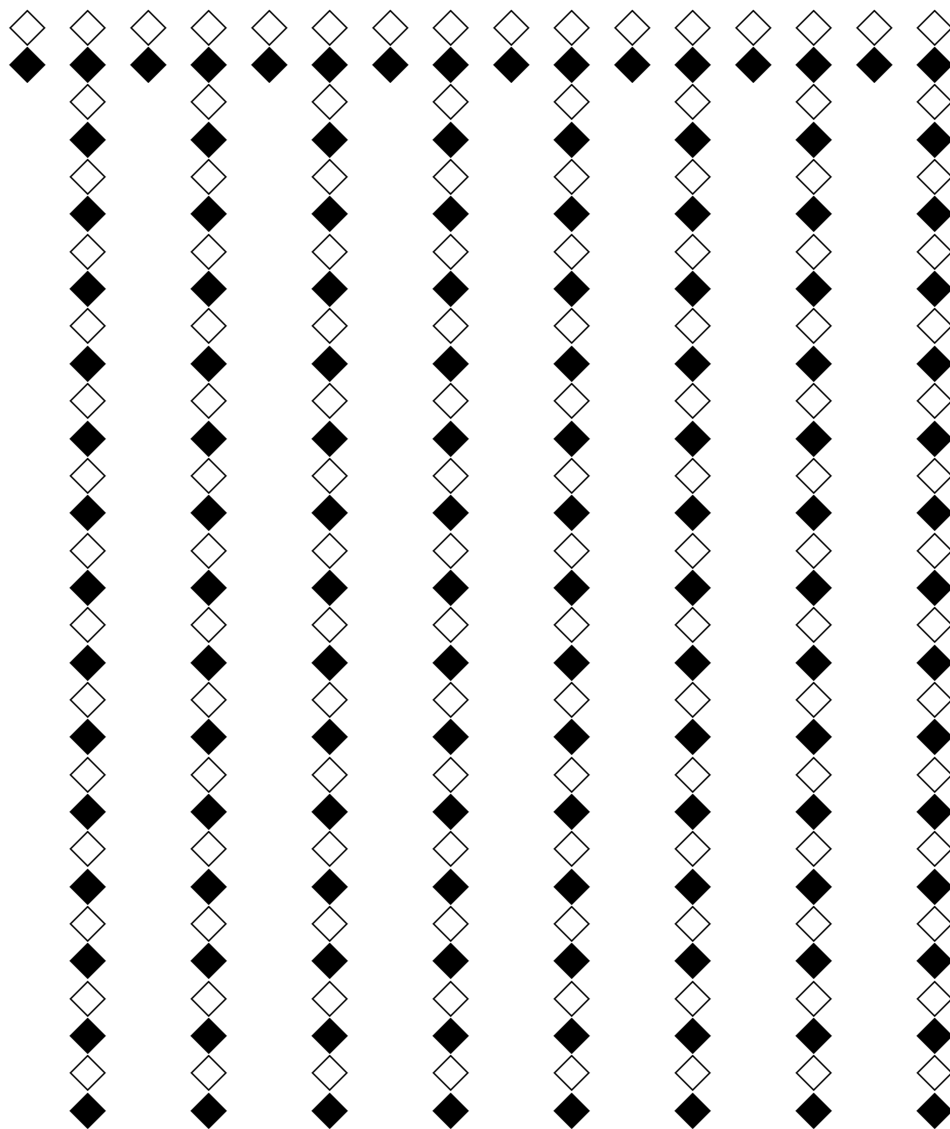
だがたった一つの大きな違いがある。

その何処にも名前の載っていない組織……テロ対策特殊機捜隊の本部施設が地下フロア全てを使用している点がそう。

今まさに自分達が追っている男が自分達の喉下に静かに喰い込んできた事に、気付いている者は誰も居ないのだった。

――15..59..59――

◇幕◇間◇



16::00::00<17::00::00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

世界同時停電で騒然となる特機。理一に連絡を入れた佐久間はOZの異変が原因と告げる。

それぞれの職場に呼び戻される頼彦達は陣内家を飛び出した。

残された侘助や佳主馬達は、佳主馬の親友の渡の導きでOZ管理塔へと向う。

OZに侵入したシャドウを操る男は謎のプログラムをインストールし始め、システム奪還に訪れたエンジニアのアバターを攻撃する。

バッテリーの制限の中、カズマはシャドウと戦うが、プログラムの完了を持って戦いは幕を引く。

廃病院に集う男達は不穏な動きを加速させていく。

OZをログアウトした男が車を出ると、そこは特機のビルの目の前であり……………

これは、午後四時から午後五時の間に起きた出来事である。

16::00::00\17::00::00

――16::00::00――

「あつ、もう」

シャドウを逃し管理塔にかかる黒雲を映していた佳主馬のノートパソコンもバッテリー残量が尽きかけていた。やがて【バッテリー残量がゼロになりました】と小さなウインドウが中央に浮かび、モニターは全ての色を無くした。

「……ふう」

一つ、息を吐く。自分に出来る事はもう無い。佳主馬が身体の手を抜いた時、横に置いたデジタル時計が正午を示した。

「あ、戻った」

「やったね！ 佳主馬」

「やっぱり凄いよね、佳主兄は」

夏帆と真緒の笑顔に顔を背ける佳主馬は、ダンッ！ と思い切りキーボードを叩く。

「ちょ！ 佳主馬？」

「佳主兄？」

突然の佳主馬の動きに戸惑いを見せれば

「……勝てなかった」

ただ、佳主馬は湧き上がる悔しさを、抑えきれないでいた。

結果じゃない。

過程じゃない。

ただ純粹に、戦いの勝敗に拘ってしまふ。それは佳主馬の変わらない部分だ。

かつて、健二との決闘の時も、自分は結果も過程も飛ばしてただ勝負に拘ってしまった。あの時はそれでも構わないと笑ってくれた健二が居た。でも今は――

「情け無いよな……俺は」何も変わってはいないのだと自嘲する。

「別に負けた訳じゃ無いじゃない」

「そうだよ、佳主兄」

情け無いのは勝敗じゃない。自分自身なだけどな、と苦笑しながらも

「そうだね、うん」

そんな二人の労わりに感謝する事が出来る位には成長したらしい、と思わず笑みが漏れてしまふ。

「じゃ、侘助おじさんのOSでも試してみ」ようか。そう続けようとして、止まる。

そんな佳主馬を不審に思い、夏帆と真緒は視線を追う。同じく侘助がその視線を追えば

「夏希？」

そこには立ち尽くす夏希の姿がそこには在った。

だが、思わず皆、しんと静まり返ってしまう。それほどまでに夏希の表情は異様なものだ。

その目は大きく見開き、何も移らないモニターを彼女はただ凝視し続けていた。ただ――――「嘘……」と呟き……糸の切れた人形の様に……

「夏希っ！」

「夏希姉ちゃんっ！」

「夏希さん？」

「夏希姉！」

気を失い倒れた夏希に駆け寄る佳主馬達だった。

――16..06..38――

「状況確認、急げよ」

理一の言葉に了解と告げ、一斉に皆が動き出した。

大規模で規格外の停電がもたらした混乱は想像を超えたものと成っているだろう。大統領の警備やガス事件を抱え、更にこの事態である。特機の中も混乱を極めるが、それをして正常に機能さしめるだけの優秀さがこの人材にはあった。

次々と上がる報告と被害に顔をしかめる理一だったが、まだそれは絶望的な報告とはなっていない。

「どうだ？」

情報が集中している柴田のデスクを覗きこむ理一に

「取り敢えずは持ち堪えましたね。今のところ大きな被害は上がってませんね。交通事故が何件か、と……まあ多少の混乱は避けられませんけど」

「この規模にしては、か」

「はい」

まったく人的被害が出なかったわけでは無いだろう。だが、世界中で一斉に発生したこの事態にして、この被害状況は奇跡と言って良い程の幸運だった。

「やっぱり……なんか裏、有りそうですね」

「……ああ」

近づく相沢に相槌を返し、理一達はメインスクリーンに視線を移

した。

今もまだ残る暗雲に包まれたOZの映像。おそらくは――

「コイツがどこにどう繋がるのか……か」

「ですね」

そこにはきつと、犯人の明確な意思が有るはずだ。そう確信する特機の面々だった。

――16..11..30――

「ったく。一体何だっただこいつはよ」

佐久間は職場の自分の端末を使ってOZの闇にアプローチを試みていた。

停電を起こし、騒ぎを起こし、全てが収束して尚この闇の雲が残った。他の大多数の人間と同じ様に、佐久間もまた犯人の狙いや意図はこの闇に有るのだろう推測していた。それ故に闇の解析に挑んでいるのだが。

「……くそっ！」

ガチャン！ とキーボードを叩く。

視覚的な構成プログラムに意味は無い。おそらくは自分の干渉地帯の線引き程度の意味合いしか成してはいないだろう。問題はこの雲の中に何が有るのか？ と言う事なのだが

「佐久間さん？ どうしたんですか？」

「ん？」

モニターを前に頭を抱える佐久間に後輩が声を掛けるが

「ああ、これってOZの雲ですか」

「ああ」

当然、それは社内でも大きな話題にはなっている。

「さっきシステム課の連中も興味持ったみたいですけど、なんかバラせなかったって言ってましたよ」

「だろうな」

「佐久間さん？」

バラそうにもココには何も無いのだ。ただ黒い雲がそこに有るだけで他には何も無い。特に悪さはしていない……筈である。だがあの世界同時停電とこの雲になんらかの関係がある以上、ただのいたずらでは有り得ないのも事実だった。今、こうしている間にもOZの技術部もアクションを起こしている筈だ。それでも尚この雲が消えないと言う事実も、この雲が決して通常のものでは無い事を裏付ける。それなのに

「怪しいとこは無いんだよなあ、こいつ」

それがこの雲の最も頭を悩ませる所だ。そんな苦悩な佐久間を劳いながら

「へー……でも怪しい所が無いって事は元々が怪しいもんじゃないって事じゃないすか？」

「馬鹿言ってる。こいつの何処が怪しくないって………怪しく……ない？」

「先輩？」

ほうけた様に自分を見つめる佐久間に怪訝な声を掛けた瞬間

「それだっ！」

「へ？ って……どれ？」

答えずに佐久間はキーボードをけたたましく叩き出すと、次々と画面が切り替わり

「俺達は皆この雲の不審な点を探してる」

「そりゃそうでしょうけど」

「でも不審じゃなかったら？」

「は？ いや、だからあからさまに」

怪しく無い訳は無いのだ。それは佐久間も認識している筈なのだが「正規のルートで正規の手段で何らかのアクションを起こしていたとしたら……そいつは俺達の目に付かない」

「で、でも、だとしても。そんなんじゃ見付けられないじゃ無いですか」

「いやあ、それでも無いさ」

「先輩？」

佐久間の顔には笑みが漏れていた。

「逆算だよ」

「逆……算？」

「ああ」

昔、なんでも数学に結びつける親友が居たと思い起こす。

「何かが有るのは雲の中だ」

「はい」

「雲が出たのは停電の時だ」

「そうですね」

「じゃ、停電が起きる前には？」

「？ ですから、世は事も無し、と」

「そうさ。だから」

「！ そうかつ、つまり何かが増えた」

「ああ。そいつが………これだ」

タン！ とキーを押せば、雲からたった一本のラインが見えた。

電脳世界を縦横に飛び交う電子の線の中、この一本のラインだけが

「停電の前には無くて、今有るライン」

「オフィシャルの、な」

「先輩。一体、これは」

「待ってろ、今………」

佐久間がそのラインを辿っていけば、それはある施設へと繋がる。その先は

「……………此処だっただけか？」

「でも……一体、何を」

「分かんねえよ。一体……」

OZ管理棟を基点とするGPSリンクシステムから伸びたラインの先は、つくば宇宙センターのシステム中枢へと繋がっていたのだった。

「何が狙いだってんだ……」

——16…16…50——

ビルのゲートにあるセキュリティのスリットにカードを差し通せば、自分の前方を塞いでいたバーはすんなりと道を開けた。

守衛はモニターを確認するが画面に映るデータはレベルSと表示されている。それはテロ特機の人間に与えられているセキュリティレベルであり、その部署の存在も公にされていないならば、働く人間への干渉も認められてはいない。

仮りにこのモニターに吉井と表示されている男が拳銃を所持していようが爆弾を持っていようが、それは妨げられる事無くビルの内部へと歩を進める事が出来る。それがこのビルに守衛として務める者の仕事でも有る。

「ご苦労さま」

「いえ。ご苦労様です」

笑顔で挨拶して自分の前を通り過ぎる男を横目に、守衛は再び意識をロビーへと戻していく。自分が警戒しなければ成らないのはセキュリティレベルを持たない者であり、彼では無いのだから。

ポストンバックを持った男は地下フロアへと違和感無く歩を進め、見える手近かなトイレへと入っていく。誰も不審に思わないその中で、わずかにドアが開きその取っ手に【清掃中】の札が掛けられ、再びドアは閉じたのだった。

――16..20..49――

「つまり犯人の狙いは最初からつくば宇宙センターへのハッキングだ？」

『だと思えます。ただ、それが目的なのか、あるいはただの通過地点なのかは分かりません。ですけど、犯人の成果としてはそれで間違いないと』

「うむ」

モニターに映る佐久間が理一に告げたのは先程導き出した闇の足取りだった。理一もまた佐久間の言葉に耳を傾け思考を巡らしているが、それに割り込む形になったのは公安の棚橋だった。

「だが君。君の推論は分かるが、やはりそれは無理だろう」

『何故です？』

「センターのセキュリティは万全だ。国家中枢機関と同レベルのセキュリティだぞ？　そう簡単に侵入出来るとは思えない」

無論、棚橋に言われるまでもない。どちらかと言うと佐久間の方がより専門家だろう。だからこそその佐久間の意見だ。

『ハッキングや侵入と言っても、皆さんの考えてるような方法だけではありません。いくらでもやりようは有るんです。現に犯人は世界同時大停電なんてウルトラCをやったのけたんですよ』

「しかし、ではどうやって」

『あくまでも予想を挙げるなら……侵入の為に停電を起こしたとす

るなら、おそらくウイルスを侵入させて入口を開いた』

「そんなに簡単にウイルスなんて送れるのかい？　その為のセキュリティなんだろう」

理一の言葉も頷けるが

『直接送り込むなら厳しいでしょう。確かに強度は高いですから』
「だったら」

『だからもっと強度の低い所をまず墮とします』

「？　低い所？」

周囲の者達の注意も引かれてしまう。

『これは他でもよくみられている話ですが、本来、停電等のアクシデントでコンピュータが強制的に停止した場合、そのプログラムや情報、データは一時的に保護されています。無論、消えてしまうものも有りますが、重要なものは常に自動でバックアップが取られています』

「それが？　だからと言って侵入できませんければ」

『殆どはそのコンピュータに保存されますが、政府の重要機関や金融・情報関連など、重要部署においては外部にバックアップを取るケースも多い。これは施設や設備の物理的な破損や消失に対する一つのセキュリティでもあります』

「だが所詮はいざと云う時のバックアップに過ぎんだろう」

『今回の様な大規模停電は、そのいざってケースに相当するとは思えませんか？』

「まさか」

ようやく、佐久間の意図が見えてきた。

『大規模な障害が発生しそれが復旧した際には、そのコンピュータはデータの損失や破壊を検証復旧する為に、バックアップデータとの照合を行うんですよ。自分に内蔵しているデータだけじゃなく、外に保管しているデータとも』

「それじゃあ」

『はい。おそらく犯人は既にバックアップのデータにウイルスを仕

込んでいたんです。そして停電を起こした。犯人が停電だけおこしてそれ以上の混乱を演出しなかったのは何故です？ 多分OZ経由の多くのシステムに犯人は干渉出来た筈です。でもしなかったのは宇宙センターの非常用電源、双方向システム、そしてデータの復旧システムを正常に機能させる為ですよ。停電を起こし、非常用電源が動く。それはそのまま非常時のシステムを機能させる』

全ては

「ウイルスを仕込んだバックアップデータを、センターのシステム自身が取り込む為に、か」

闇と宇宙センターを結ぶ為に。

「だが何をする。確認したがつくばで問題は発生していない。あのラインについては調査中だが」

センターでも把握していないラインが繋がっているのは事実として確認された。今はそれだけが痕跡だ。

『それは分かりませんね。何かを覗いたのか調べたのか……あるいは何らかの干渉をしてるのかも知れませんが』

「現状、問題は出ていない」

『はい……もっと宇宙センターのシステム情報を洗い直せば、何か手掛かりも見つかると思いますけど、僕の分かる範囲ではこれが精一杯、ですかね』

どこか申し訳無さそうに話す佐久間の表情に理一は笑みを浮かべながら

「別に君がそれを気にやむ必要は無いさ。我々は、これだけで十分に感謝している」

『理一さん……すいません』

「いいさ」

もし、彼が生きていたら、彼はどこまで踏み込んでいただろう？ あの時の彼より、知識や技術は豊富になったと佐久間は思う。だ

がきつと、彼と自分の違いはそういう所では無いのでは無いかと最近思う。

小磯健二は、どこか踏み込んでいた。

それはもしかしたら踏み越えていたと言っても良いかも知れないだろう。それは時に危険な線や超えては成らない線をも含む。自分や理一、他の多くの者達が立ち止まる絶対的な一線を、彼は時折踏み出して、踏み越えてしまう。

健二が居たら。

そんな言葉を、もう何度思い起こしては飲み込んできたのだろう。そして今回もまた、自分たちは飲み込んで進んで行くしかないのだ。

「とにかく、闇の目的が一つ分かっただけでもこちらとしては有難い。助かったよ、佐久間君」

『いいえ。あまりお役には』

立てなかった。そう続け様とする佐久間の声を遮って、館内にヴィー——！ ヴィー——！ と大きく警報が鳴り出した。

「っ！ これは」

『？ 理一さん』

「すまんっ！ 今は切るっ」

『ちょ、理』

佐久間との回線を無理矢理切った直後に、館内スピーカーからは無機質な音声流れ出し、事態は———

Emergency Emergency Biohazard
Code X
Emergency Emergency Biohazard
Code X
Emergency Emergency Biohazard
Code X

「ばっ！ 馬鹿なっ！」

——最悪を告げ出した。

すぐさま理一は手近なマイクを取り回線を館内全域に繋げ

「これは訓練じゃないっ、全員隔離室に緊急避難！ 繰り返すっ！

これは訓練じゃないっ！」

その言葉が合図の様に、一斉に皆が走り出す。棚橋ら、公安の者

達は訳も分からずに立ち尽くすが

「貴方達も私のオフィスへ！」

走り出す理一に

「陣内さん。これは一体これはどう言う」

「いいから早くっ！ 死にたいのかっ！」

「くっ！ 行くぞ」

気迫に吞まれ一斉に走り出す。

最後の一人が飛び込んだのとギリギリに扉を閉める。ドアや窓の
周囲から何かの音がし、オフィスは完全な隔離室へと姿を変えた。

「柴田、館内の様子は」

「はい……」

理一の端末を使い館内を調べ

「間に合いました。全職員、皆隔離室に退避完了」

「よし。桑田」

別の端末を見ている桑田は

「感染はほぼ全域に。濃度九十パーセントを越えました」

「上階へは？」

「隔壁は間に合っています。取り合えず封じ込めは成功です。我々も出られませんけど」

「浄化システムは？」

「動いていません。おそらくは犯人の仕業かと」

「そうか」

「おいっ！ いい加減に事情を説明してはどうだ」

流石に柵橋にも緊張は伝わる。だが訳が分からないのでは不安ばかりがつのる。

「館内に有毒ガスが撒かれました。あれはその緊急警報です」

「有毒ガス？ この施設にですか」

「はい」

理一の言葉でようやく自分を取り戻せた柵橋は

「それで、一体これは何なのです？」

「コードX。これは」

改めて、特機が最前線なのだと実感するのだった。

「VXガスを現すコードです」

発令所を見渡せるオフィスの窓壁に立ち、今は無人の室内を眺めては

「例の、イギリスで盗まれた物だ？」

「おそらくはそうでしょうね。尤も、確証は無いですが」

「妥当な線、ですな」

奪われた物と使用に足る施設を結びつけるのはそう難しい話じゃ

ない。

「上階へは？」

「非常時には火災発生として上階フロアには通達されます。ガスの封じ込めには成功しましたから問題は無いでしょう」

「では後はココだけ、ですな」

「ええ」

棚橋に並び室内を眺める理一だが、その表情は幾分和らいでいる。ここで自分が慌てふためいても自分にも周囲にも良い事は一つもない。その事は誰よりも理解できている。

「この浄化システムは止められましたが、こちらの警報は警察庁や官邸とも繋がっています。時機に外から応援も来るでしょう。二時間位の生存が保障できますから安心してください」

「ま、他に術も有りませんからね。我々としては一刻も早く救援が来るのを待つばかり！」 会話を遮ったのは室内のドアだった。

「誰だっ！」

「救援？ にしては早すぎる」

「あれは？」

「うちのじゃありません」

理一のオフィスに居るのは理一と柴田、桑田、相沢、それに棚橋達公安の三人。以上の七人なのだが、その誰にも心当たりの無い人物が、今まさに猛毒のVXガスに汚染された本部発令所に侵入して来たのだった。

理一はすかさずマイクを取りスピーカーを通じて声を出す。

「その者！ 所属を明確に提示して貰いたい」

「」

「貴様、か？ 貴様がVXを撒いた犯人かっ！」

「」

黄色い防護服に身を包んだ人物は何の意思表示も見せずに手近な
机の端末へと向い、黙って端末を操作しだした。

「何をやっている？」

棚橋の疑問に答えるかの様に柴田は理一の端末に目をやり

「何かの情報を……ダウンロードしています」

「なんだってっ！」

驚く理一に

「部長！」

「っ！」

吉井の言葉に振り返れば、防護服の者は小さなメモリースティッ
クを端末に挿し込み、再び歩き出す。

「何処へ行く！」

「情報は？」

「依然ダウンロード中です」

「こちらから阻止できないのかっ」

「無理ですっ！ システムがロックされてます。多分、あの人が向
こうから回線を閉じてるんです」

「奴は何処に」

理一のデスクからだと思える操作範囲は限られるが

「ちよっと失礼」

「え、何を」

棚橋は柴田を押し退け、情報端末を操作していく。

「うちの設備を勝手に触るなんて」

「柴田」

「でも部長」

「良いから」

棚橋が何をしようとしているのか、理一には心当たりがある様子で

「よし。モニターを」

促されて視線を移せば

「嘘」

「これって」

「おいおい」

柴田や桑田、吉井にとって、これは反則だった。

「……四月に大幅なシステムのアップロードがありました……その時に？」

「監視システムだけです。それ以上の干渉はしていませんし、これは正式に付与された権限に寄るものです」

「分かってはいるつもりです。あまり気持ちの良いものではありませんがね」

「恐縮です」

そのモニターには特機館内の映像が映し出されていた。だがそれは今現在操作する事は出来ない筈だった。理一にその権限は無いだろうし、それを持つものは今はこの場には居ない。おそらく其々の身の安全を隔離室で確保しているだろう。

だが、棚橋はその権限を有していた。それはそのまま特機館内の警備カメラ映像を公安警察がいつでも見れると言う事実に他ならない。

自分達に監視が付けられていると知った様なものだ。決して気持ちの良いものではない。が

「さっきにも言った筈です。これは貴方達に与えられた権限に対する代償と思って下さい。それ以上に我々の含むものはありませんよ」

返事を返さず見渡す画面の中で

「居ました」

防護服を見つける。

「何処だ」

「備品管理室です……あ、あれは」

「ちっ！ 目聡いな」

防護服の人物は迷う事無く備品管理室へと入り、ある棚に並べら

れた大きなパイロットケースを手にとった。

「うちのB装備ですね。なんで知ってるの？」

「考えたくねえな」

桑田の疑問への回答は安易に予想できる。それだけに相沢には考えたくも無い。防護服の人物は、この特機の何処に何があるのかを知っている。その事実だけで充分だった。

防護服はそのまま部屋を出て

「こちらに來ます」

言ったのが先かドアが開いたのが先か、再び発令所内へと戻り端末からメモリースティックを抜き出した。

「桑田？」

「やられました。何を抜き出したかは追えません」

「そうか」

ここから出る事の出来ない自分達は、ただ事の推移を指をくわえて見ている事しか出来ない。

一度だけ、防護服に身を包んだ人物はオフィスに居る自分達へ振り返り、そのままドアの向こうへ姿を消した。

——16..38..10——（アメリカ・ヴァージニア州——02..38..10——）

「Do not surprisingly thick bone——」

（意外に骨が太いじゃないか——）

ジョージは報告書を机に投げ出し、椅子を回して窓に視線を移した。

CIAではOZ奪取の犯人の割り出しを急いでいる。高度なプログラムを必要とする以上、それを割り出す事は容易だと思っていた

が、どうやらその認識は改めなければならないらしい。

自分達はハマドを中心としたNSAとの情報戦に乗り出している。その最中に、まさにその現場である日本を巻き込んだの今回の大停電。時間と場所、そして人物。三つの要素が全て巻き込まれたのであれば、それが全くの無関係であるとは言いにくい。

「NSA is the problem? ——」

（問題はNSAか——）」

ため息を付きながら景色を眺める。正体不明の人物よりも、自国の、それも共通の主仕える部署をうとましく思ってしまうのにはため息もでる。

「How to know where the guys really……」

（連中がはたしてどこまで理解しているのか……）」

椅子を立ち、かつては旧交の有ったNSA長官を思い出す。

「That cannot be dominated by the personality of the actor himself cannot grasp even the screenplay. Noticing that the Pearl River, Kevin——」

（役者の個性を掌握しきれない者は自らの脚本すらも掌握出来はしない。その事に気が付きたまえ、ケビン——）」

——16..43..50——

「???——」

（来ました——）」

通訳に言われ与えられた席から腰を浮かせ立ち上がるハマド。
首相官邸に通されてから五分後、彼の前に姿を現した海馬総理大臣だった。

「ようこそ日本へ、ハマド大統領」

「????? ?????. ?????? ???? ????」

（お会いできて光栄です。総理——）」

ここ首相官邸の一室で、ハマド大統領と海馬総理大臣の会談が始まりを迎えていた。

——16..46..19——

「くそ。まだ外との連絡は付かないのか」

「はい。きつとさっきの侵入者が」

「我々は孤立無援と言う事か」

既に数分、この状態が続いているのだ。そろそろ皆の緊張もピークに達しようとしている。なんと言っても一步外に出てしまえば、触れただけで命にかかわるVXガスの世界なのだ。まさに死を間近に感じている状況が続いている。

そんな中

「えっ！」

「桑田？」

端末の画面を見て声を上げた桑田に皆の注意が引かれたとき、「あれ？ 皆、どうしたんだ？」と何処からか声が聞こえてきた。慌てて振り返れば、そこには不思議な顔を見せ発令所に立つ、吉

田の姿があった。

「よっ！ 吉田さんっ！」

「吉田さんっ！ なんて事をっ！」

柴田と相沢が思わず窓に張り付くが、最も驚いているのは吉田だった。

外務省から呼び戻されて見れば館内には誰も居なく、ここに至っては皆で理一のオフィスで集まっている。

「いや、戻って来るように部長が」

「警報が聞こえてないのかっ！」

マイク越しに叫ぶ理一に

「はぁ？ 別に警報なんて鳴ってませんけど」

「鳴ってないってっ！ それじゃあこの上階はどうなってるんだ！」

「いや、別にどうも。いつも通りでしたけど……何があったんです？」

流星に怪訝な表情を隠さない吉田に理一達も思考を巡らせ、ある可能性にたどり着く。

「柴田っ」

「はいっ！ 美也子、ちよつとごめん」

桑田を押しのけて端末を操作する柴田は、一度全てのデータをクリアにする。その間にも

「吉田、お前今、体調に違和感を感じるか？」

「へ？ いえ、別に」

「おい……なんてこった、それじゃあ」

思わず息を飲んだ理一の耳に、一際大きく声を上げた柴田の言葉が飛び込んできた。

「部長っ！ 濃度クリアですっ！ いえ、それどころかアラート感知の記録が消えましたっ！」

「なんて事だ」

「くそつたれがっ！」

拳を握りしめる理一の前を相沢は走りぬけ、その密閉されたドアを蹴破り発令所内へと飛び出した。

「な、なんてことをっ！」

流星に驚く棚橋に「大丈夫です」と声がかかる。

「！ 陣内さん？ それはどういう」

「はめられたんですよ、我々は」

「は？」

理一の目には、怒りと悔しさが満ちていた。そう、自分達ははめられた。

「始めから、VXガスなんて使われていなかたんですよ」

盗まれた事実と持ち込まれた情報、その二つが有ればあの警報は真実の意味を持つことが出来る。仮に警報がただの偽りであったとしても、目に見えないそれを、人は否定出来ない。

目の前で悠然と、犯人は自分の目的を達し去っていったのだ。これは、誰にとっても耐え難い、屈辱だった。

特機のフロアを抜け一階に出てみれば、相沢の視界にはいつもと変わらない日常がそこに在った。

警報音も避難する人々も、そこには日常を越えたものは存在しない。

「おちよくってんじゃねえぞ畜生が！」

ゲートを飛び越え駆け込む相沢に周囲の視線も集まる。そんな周囲を相沢もまた見渡す。

まだそんなに時間は経ってはいない。

あの格好のまま外に出ると思えない。それ相応の時間が必要だったのは間違いない筈だ。きつとまだ近くにいる、あの防護服の人

物を探す相沢ではあったが、顔も服装も、男女の区別すらも付かない防護服の中身を、自分が分かる筈は無い。自分でも無駄とは分かっている。探さずにはいられなかった。

やがてビルロビーを飛び出せば、やはりそこは多くの人が行き交う日常。

見渡しても、見渡しても、相沢の視線が自分の目的を捕えることはなかった。

「くそ……くっ……そつたれが——っ！」

歩道に立ち、行き交う人の視線を集めながらも自らの憤りを吐き出す相沢の前を、信号機に従い数台の車が通り過ぎていく。その車列の五台目に有る、トランクルームに特機B装備一式が入ったパイロットケースを積んだ黒い乗用車は——

——何事も無かったかの様に相沢の目の前を走り去っていったのだ。——

——16..59..59——

17:00:00~18:00:00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

停電が回復した直後、夏希は佳主馬達の前で突然倒れた。
理一達特機は事態の究明に奔走することになる。

佐久間は独自にOZ管理棟にかかる闇の雲の解析に挑み、それがつくば宇宙センターへ繋げるための物だと突き止めた。

佐久間からの報告を受けている最中、特機にバイオハザード警報が鳴りVXガスが撒かれたとの警告が発せられる。

全ての者が隔離室に避難する中、防護服に身を包んだ人物は特機のデータと装備を持ち出し姿を消した。

警報が意図された誤報だと知った特機はすぐさま犯人を追うが、犯人は悠然とその目前を通り過ぎ……………

これは、午後五時から午後六時の間に起きた出来事である。

――17:00:00――

「へー、うん……良いんじゃない？」

「そうか？ まあデータ上でも……こんな感じか」

佳主馬は侘助達の開発したOSのテストをOMCで繰り返していた。高速飛行のレース物や大勢の敵を出しての乱戦など様々なゲームモードを試し、その反応速度や処理速度を侘助がデータ取りしている。

感じとしては上々の仕上がりと云ったところだろう。そんな事を繰り返しながら、ふ、と手を止めると

「……夏希姉ちゃん、大丈夫かな」

「まあ雪子さん達が居るしな。心配する必要は無いさ」

「うん……でもどうして」

「……さあな」

突然に意識を失った夏希は部屋へと運ばれ、今は雪子や聖美達はその側に付き添っている。万作の診察では特に問題は無いらしい。おそらくは何か精神的なものではないかとの話ではあったが、今は取り敢えず意識の回復を待とうと言う状態だ。

「俺達に出来ることは無いさ」

「それは分かるけどっ」

言ってる後ろから気配がし

「どうだった？」

「うん、まだ眠ってる」

「そっか」

様子を見に行った夏帆が戻ってきたが、その表情から事態の膠着を予想できた。

「そっちは？」

「ん、順調」

「ふーん」

何気に佳主馬の隣に腰を下ろすと

「良かったら佳主馬と対戦してくれないか？ 結構上手いんだろ？」

OMC

「へ？ いや、私は」

「良いんじゃないね？ 夏帆手強いからおじさんのデータ取りには良いかも。頼むよ、夏帆」

「うーん……まあいいけど」

「助かるよ」

「あ、別に良いですから、はい」

少しは親戚相手にも点数を稼いでおこうという下心も無いではない。夏帆がOZにログインしてカズマの居る空間へと入ると

『俺も混ぜてくれよ』

「ん？ 渡？」

佳主馬の親友のワタルが画面に現れたのだった。

「お前、今日はOZでバイトじゃなかったっけ？」

画面に話しかける佳主馬にワタルの横にマスが出現し、カメラ越しの竹橋渡が映し出された。

『その予定だったんだけどさ』

「ん？」

『いきなりバイトが中止さ。ってか、どうにもそれどころじゃないらしいよ、上の方は』

「それはさっきの停電？ あの雲？ どっちよ」

『さ？ どっちもじゃないか』

渡によれば自分だけじゃない。OZの正規の者以外のアクセスを一斉に遮断する様だ。その為に、管理棟への有る程度の権限を持つ者を残し、皆アクセス権を一時制限しているという。

「非常事態なのはわかるけど、大丈夫なのか？ それ」

OZクラスの管理となると単純に必要なマンパワーと言うものも有ると思うが

『それがどうも……今回の騒動な』

「うん」

『OZのセキュリティは一切破られてないんだよ。それは今も変わらない。全く異常無しってやつ』

「まさか。だって現にあの雲は消えてないじゃないか」

それで異常が無いという話はない

『だからさ。あの雲とあのシャドウとかいうアバターが関係有るとしてもさ、それは正規のルートでの行動って事』

「はあ？ んな訳無いだろう！ どう見たってあいつは変だよ」

『分かっているけどそうなんだってば。だから可能性として、あの停電やら雲やらを引き起こしたのがあのシャドウって奴だとしたら、そいつはOZの関係者、それともかなりのアクセス権限を持った奴って事になると』

「それで関係無い奴から締め出しているって事か」

『ま、フィルターに掛けてるって事なんだろうな』

「そいつはどうだろうな……」

『貴方は？』

「おじさん」

渡と佳主馬の会話を聞いていた侘助はどこか考えながら口を挟んだ。簡単に侘助の事を涉に話し

「でもさ、アクセス権限を持った奴のアバターを奪っちゃえばそれまでじゃね？ ラブマシーンみたく」

実際、ラブマシーンはそうしてOZを占拠した。

『それはそうなんだけど……』

「渡？」

少しだけ考え込むと

『取り敢えずアバターを奪われた人は居ないみたいなんだよ。シャドウの姿が姿なんで、やっぱりOZの方でもそれは考えたみたいなんだけど』

「問題は無かったのか」

『ま、今のところはな』

あとはもう自分達の想像の上に行く話なのだろう。そう思い会話を終わらせようとする

「……あの、シャドウとか言うアバター」

「？ おじさん？」

『なんですか？』

侘助は徐ろに口を開いた。

「戦ってる間、姿が消えたりしてたろ」

「へ？ うん、まあ」

「ああ、それ私の時です」

実際に体験した佳主馬と夏帆が肯定すると

「だがあれは消失と言うよりは出現だったよな」

「「は？」」

思わずキョトンとしてしまう。画面の中の渡も不思議そうな顔をしていた。それを見る事で侘助は自分の意図が伝わっていないことを悟ることが出来た。

一つ、呼吸を置いて。

「これはカズマとの戦闘を見て思ったんだけどな」

「俺との？」

「ああ。あいつは消える場所は不規則なくせに現れる場所には法則性が在った」

「うそ」

それは佳主馬には気が付かなかったことだった。シャドウは突然消え、そして突然現れる。そこに法則は無い筈だった。だが

「あいつは必ず、誰かのアバターに重なり合うように現れるんだよ」

侘助は確信を持って言い放ったのだった。

「重なる？」

「ああ。戦いの時は消えたと思ったらカズマに肉薄して現れたろ？」

「うん」

「あ、私の時もそうだった」

夏帆も自分との対戦を思い出す。吹き飛ばした……筈のシャドウが自分のすぐ側に居た。

「それから雲に取り付いているエンジニアを吹き飛ばした時も、あいつはまるでエンジニアからにじみ出たみたいに接近した状態で現れた」

『それは……たしかに』

渡にも思い当たる節はある。

「これは俺の勘、だけどな……権限を奪ってもしなければ内通者でも無い場合、ひょっとしたら」

「おじさん？」

佳主馬の声に視線を合わせると

「あのアバターは、他人のアバターの権限を複製できるんじゃないかと思うんだ」

侘助は、シャドウの特性を見極めようとしていた。

「複製？」

「ああ。コピーでもダウンロードでも呼び方はなんでも良いさ。だが、そう考えれば合点が行く。セキュリティを破らずに管理権限を行使しても悟らせない。そのアバターの位置情報を元に出現ポイントを指定出来る。停電も、足跡を消すことだって簡単だ」

言葉にしながら侘助は自分の考えを纏めていく。

「でも、そんな事って」

『出来るんですか？ 気付かれないようになんて』

自分たちの知識では無理だと判断する。だが

「ようは条件付けさえ組み込んでしまえばいいのさ」

「条件？」

「ああ。ラブマシーンは戦い勝利する事で相手の権限を奪っていった」

「それは、分かるけど」

答える佳主馬の表情も曇る。自分もまた、戦い、負けて吸収されたのだから。

「そこにも条件付けはあるんだよ。まず【戦い】そして勝利者に権限が【譲渡される】って言うな。その条件が有るからこそ急速に増えたし、夏希もアバターを開放出来た。大事なはその条件付けをどう強いるかって事。ラブマシーンはフィールド情報を書き換えて全てをバトルフィールドにした。それで戦いの際は出来上がりだ。同じ土俵に上がってしまえば、残りの条件付はし易い。相手は半分同意したも同じだからな」

「そんなものかな」

「もちろんそんな訳は無いさ。だが所詮はプログラムなんてものは条件付けの塊だからな。糸口だけで充分なんだよ」

『じゃあ佐助さんは今回のシャドウも』

会話を今現在の危機に合わせると

「おそらくは何らかの条件付けがシャドウからなされて居るはずだ。アバターの持つ権限をコピーして、誰かの影に成るための……………条件付けがな」

――17..11..16――

特機のあらゆる防犯カメラの映像は消されていた。各所に設置された映像記録を消しさって消えた犯人だったが、犯人も知らないところで映像は残されている。

公安の棚橋の協力を得、消された筈の監視情報は復活を果たす。

そうして時間を追えば

「っ！ 有りましたっ！」

「映せ」

「はい」

理一の言葉に柴田が返せば、映像がメインモニターに映し出された。それは防護服に身を包んだ人物が特機の廊下を歩いている映像だ。

「時間的に……ココに入る前ですね」

「少し戻せ」

「はい」

再び時間を遡り検索すると

「出ました。ここは……地下一階のトイレです」

「鑑識をまわせ。何か掴めるかも知れん」

「了解」

「続ける」

慌ただしく動く者たちを尻目に、映像は侵入者を追い掛け続ける。そして幾つかの事は判明していった。

犯人は男性と見られる。

彼は吉井のID情報を持って館内に入った。

ビルの目の前のパーキングエリアに黒い車を停めていた。

吉井の名前が出た時には一時騒然となったが、彼は現在捜査中であり、その存在はすぐに確認されていた。そして

「部長！ 当たりです」

「桑田？」

「見てください」

画面が切り替われれば、そこには空港で劉を名乗り入国した人物と入館時のカメラ映像が表れ

「適合率九十九パーセント。間違いありません」

「ああ。らしいな」

ガスを盗んだ犯人に、今、明確に繋がったのだった。

「相沢、そっちは？」

理一が促すも、相沢は両手を広げ

「お手上げですね。やっこさん、思いつ切り痕跡消して이었습니다。こいつはプロですね、少なくともそこのパソコンオタクどこの話じゃないですね」

「なあに、こっちだってプロは要るさ。チームに解析させろ。奴が何を抜いていったのかを知りたい」

「了解」

相沢もまた部屋を後にする。

「さあて……尻尾は掴んだぞ？」

我々も鬼ごっこは苦手じゃないん

でね。精々覚悟してくれよ、ここからが……正念場だ」

理一は静かに、犯人に宣戦を布告したのだった。

――17..19..06――

「どう？ 雪子さん」

「聖美さん……まだ」

「そう」

介護士の聖美は雪子の隣に腰を下ろし、横たわる夏希の様子を観る。

「特に身体には異常は無いから、そう心配しないで下さいね」

「……悪いわね、心配かけて」

「いいえ」

突然倒れた夏希はそのまま自室に運ばれ、今はただこんこんと眠り続けている。

万作の診立てでは身体に異常はなし、何らかの精神的なストレスではないかとの事だったが……

「結局、溜まりに溜まった……って事なのかしらね……」

「雪子さん……」

悲しそうに見つめる雪子に対し、思わず言葉もつまってしまふ。言われるまでもなく分かってしまふ。

幸せな筈だった。幸せの中に居た筈だった。

それが一瞬で消えてしまふ。

一体、何を持ってストレスとするのだろうか。夏希にとって、何気ない風景、行動、記憶、言動……その全てがストレスへと向かっ

てしまうのではないか。出口の見えない長いトンネルの中に居る、そんな夏希に対し、掛ける言葉を見つけれないでいた。そんな二人が見つめる中

「……………」

「っ……夏希？」

「夏希ちゃん？」

「……ここは……」

夏希がその目をうつすらと開きつぶやいた。思わず、ほっ、と息を付けば

「佳主馬君や侘助さんの前で倒れたのよ。覚えてる？」

「倒れた？ ……私……」

どこかぼんやりと記憶を手繰る夏希を見て

「私、万作おじさん呼んできますね」

「あ、ありがとう、聖美さん」

聖美が腰を浮かせたその時、バツ！ と布団から飛び起きたのは夏希だった。

「っ！ 夏希？」

「まだ無理しちゃ駄目よ夏希ちゃ」

そんな二人の言葉を全く聞かずに

「佳主馬っ！」

夏希はそのまま部屋を飛び出したのだった。

◇
◇
◇

「ねえどうする？」

「そうだなあ……障害物有りで戦ってみるか」

『じゃあ、俺と辻本組対佳主馬って事で』

「そうね」

どうやら夏帆と渡も参加してのOS実験と成ったようだが、そのゲームを始める直前、背後のふすまがバンッ！と開かれた。

思わず皆で驚き振り返れば

「びっ！ 夏希！」

「夏希姉ちゃん、もう大丈」だろうか。そう問おうとした佳主馬に向けた夏希の瞳は

「……ぶ……って……夏希姉ちゃ……」

「……………佳主馬っ！」

狂喜をはらみ輝いていた。

言うや夏希は佳主馬の両腕をしっかりと握り締め、その顔を眼前に張り付け肉薄すると

「健二は何処っ！ 貴方知ってるんでしょっ！」

その狂喜を佳主馬に叩き付けていた。

「ちよっ！ 待ってよ夏希姉ちゃん。一体何を」

「夏希、落ち着け！」

「夏希お姉ちゃんどうしたのっ！」

侘助や真緒の静止も全く耳には入らない。

「佳主馬言いなさい！ 健二は何処っ。あ、貴方健二とどうやって」

「意味分かんないよ！ どうしたってのさ」

「さっき戦ってたでしょっ！ 貴方、健二とっ！」

「何を」

夏希の剣幕に家中の者が何があつたのかと駆け寄ってきた、その時を待っていたかの様に、夏希は叫ぶ。それは確信を持って

「黒いラブマシーンと戦ってたじゃないっ！ あれは健二よっ！
あれは健二じゃないっ！」

「……え？」

佳主馬だけじゃない。それは皆の動きを止めるに充分な言葉だった。

夏希に中の何かが、決定的に壊れた。

誰もが、そう思う。健二はもう居ないのだから。そんな中であつて、現実に戻す声は

「痛っ！ 夏希姉ちゃっ！ 痛いっって」

「っ！ 佳主馬！」

叫ぶ夏帆の視線の先で、夏希は佳主馬の両方の二の腕を握りしめていた。夏希の細い指先が、佳主馬の腕に食い込みその皮をえぐり血を流させている。

「止めなさい夏希っ！」

「夏希っ！ 佳主馬を離せ」

和雄と侘助が夏希を佳主馬から引き剥がそうとし、万助や翔太も二人の間に割って入ろうとするが、夏希は他には目もくれずに佳主

馬を凝視し続け

「教えなさい佳主馬。貴方健二をどうしたの？ 彼は今何処に居るのっ！」

「痛っ！ 知らないよ。俺は何も知らな」

「私の健二なのっ！ 佳主馬っ！ アレはっ！」

「もう止せっ！」

ようやく、万助の手で夏希の手は佳主馬から剥がされ、瞬く間に佳主馬から引き離される。そのまま奥へと連れられていく夏希を見送る佳主馬や夏帆、真緒の耳には、見えなくなった家の奥から聞こえる夏希の叫び声だけが

「いやー！ー！ーっ！ 健二ー！ー！ーっ！」

深く耳に残っていった。

――17..25..43――

「出ましたっ！ 部長っ」

佐橋が発令所に飛び込んでくるやデスクへと向かう。ここに居る者たちはそれだけで意図を掴める。

「どこからだ」

「トイレです。それらしい指紋が一つ」

「データベースに？」

「犯罪者のには有りませんでしたけどウチの関係者の中に」

「コッチの線とはな」

理一の表情にも苦味が浮かぶ。B型装備を持ち出した辺りから特機の事情に詳しい者であるとの予想は付いていたが、実際に浮かび

上がるのはいいい気分では無い。柵橋の目もある今の状況は、あまり歓迎出来る状況でも無いのだが、それはそれとして捜査は進めねばなるまい。

「それで？」

「はい……こちらです」

柵橋に促されて画像をメインモニターに切り替えれば

「おい………」

「冗談、でしょ？」

誰からともなく、そんな声が漏れる。

だが配属されたばかりの佐橋にはそんな声も耳には入らず、自分が突き止めた真相を声高に柵橋に説明する事になる。

「こいつが？」

「はい。小磯健二。ウチには分析分野のアドバイザーとして数年出入りしていました」

「今は？」

「記録では去年の飛行事故で死亡したとありますが………見てください」

そう言って映し出されたのは彼の身分証明証の写真と、イギリスや羽田で取られた犯人の映像。そして特機のビルに入る際に写っていた防犯カメラの映像であり

「適合率九十五パーセント。変装や撮影からの年月を考慮すれば、ほぼ百パーセントと言っているんです」

「なるほど。つまりは死んではいなかったと言う訳か」

「おそらくは」

そんな会話でお互いの考えをまとめている二人が、ふ、と見れば、

「陣内さん？」

「部長？」

モニターによろよろと近づく理一の背中に気が付いた。

見れば理一だけじゃない。他の先輩達も、どこか呆然とモニターを見つめてる。それほどに………それほどまでに………

「こ……んな………馬鹿な」

信じられない

「こんな………馬鹿なっ！」

現実だった。

——17..33..01——

「大統領。今日はとても有意義な時間を過ごせました」

「?????? ???? ——

（こちらこそ——」

海馬総理とハマド大統領の会談は終わりを告げていた。

「私はこれからアメリカへと旅立ちますが、どうか時間の許す限り、我が国を堪能してってください」

$$\begin{array}{ccccccc} \left[\begin{array}{cccccccc} \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array} \right. & \begin{array}{cccccccc} \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array} & \begin{array}{cccccccc} \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array} & \begin{array}{cccccccc} \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array} & \begin{array}{cccccccc} \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array} \\ \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array}$$

（ありがとう、総理。是非そうさせて貰います——」
二人は握手を交わし、互いに歩み出したのだった。

会談の部屋を出れば

「時間とは？」

「このまま成田へ。向こうでは副大統領が出迎えに」

「まったく、時間が無いにも程があるな」

いつもの議会や内閣運営の他に外交まで加われれば、まさに寝る間も惜しいと言った感じだろう。流石に若くも無い自分にはいささか手加減もして欲しいと思うが

「お土産は用意してあります。向こうからもそれなりに期待はさせて貰えるようですし」

「ああ。その為に寝るなど言われれば従いもするが……もう見えるぞ」

「はい」

静かに秘書が一步引けば曲がり角が現れ、一斉に記者の声とシャッターの音が混じり出す。そんな何時もの光景に若干の嫌気を感じながらも笑顔で応え、海馬総理は一路、アメリカへと旅立つ為、成田へと車を向かわせるのだった。

$$\begin{array}{c} | \\ 1 \\ 7 \\ \dots \\ 3 \\ 9 \\ \dots \\ 1 \\ 8 \\ | \\ | \end{array}$$

「夏希は？」

「叔父さんの鎮静剤で今はまた眠ってるわ」

「そうか」

和雄に応える雪子も、どこか疲れを見せていた。

「少し、下で休んだらどうだ？」

「でも」

「いいから。顔色も悪い。夏希も寝てるんだし、お前も少しは休め」
「……そうね」

和雄に促され部屋を出ていく二人は、気が付く事は無い。そのふすまが閉まる直前に、夏希の瞳が凜と見開いたことに――

[illegible]

「夏希先輩？」

佐久間の携帯の液晶が小磯夏希の名前を映し出すのはいつ振りだろうか？ 少なくともここ半年は連絡は取っていないかった。

Pi 「はい。佐久間です。お久しぶりですね、夏希先輩」

『お久しぶり、佐久間君』

電話越しの声を聞けば夏希であることは疑いようもない。だがどこか

(なんだ?)

電話の声に不審なものを覚えた。

「先輩？
なにかあったんですか？」

そう、受け取れた。

「あ……先輩、どうし？」

『黒いラブマシン……知ってる？』

「は？」

夏希の口から、その言葉が出るとは予想していなかった。

確かに自分は少しばかりシャドウと呼ばれたあのアバターには興味を持っているが、それがどうして夏希から出るのだろうか。

「まあ、仕事柄少しは知っていますけど」

『だったら調べてくれないっ。あのアバターの事』

「へ？ いや、調べるって……でも先輩。あんなアバター調べたって先輩には」

なんの関係も無いだろう。否、関係などあつてはならないのだと今では確信出来る。停電にも闇にも、そして他の案件にも、間違いなくあのシャドウは絡んでいるのだ。そんな物に夏希は関わるべきではないと判断できた。

だが

『あれは健二なの。あれは絶対に健二なの』

「……………は？ いや、あの……先輩？」

本当に、どうかしたのだろうかと声を上げたが

『変な事を言ってるのは分かってるの。でも間違いないのよ！ アレは健二なの私には分かる。だれも信じてくれなくても、絶対に健二なの。健二しかないのっ！』

「ちょ！ 落ち着いてください先輩。健二に生きていて欲しいって気持ちは分かりますけど、いくらなんでも」

『そうじゃないのよっ！ あの動き、癖だって……私にOZを教えにくれたのは健二と佐久間君でしょう。私は誰よりもケンジを知ってるわ。その私が言うんだから間違い無いの……あれは健二の動きだった』

「先輩……」

電話越しに、夏希の張り詰めた緊張感が伝わってくる。

『誰も信じてくれないかも知れないけど、私は嘘なんかついてないの……信じてよ佐久間君、あれは……絶対……に……うっ』

どこか感極まったのだろう。電話の向こうから静かな嗚咽が聞こ

えてくれば

「……………分かりました」

佐久間としては取る行動は一つに思えた。

『佐久間君?』

「あのアバターと健二については僕の方で調べておきます」

『それじゃあ』

「こう見えても昔よりは腕も上がってますからね。まあ、任せてください」

『……………ありがとう』

少し、夏希の声が自分の知る声に戻った気がした。

「何か分かったらすぐに知らせますから。先輩はあまり深く考え込まないで良い報せでも待っててください」

『うん。わかった……………ありがとうね、佐久間君……………それじゃ』

「はい」

p1と電話を切るが、自分でも信じられない。まさか――

「シャドウが? ………………まさか、な」

無いはずの現実を探るために、佐久間はキーを叩き出したのだった。

――17..42..19――

特機では吉井や菊間も戻り、全員が今の現状を認識する作業に没

頭していた。それほどに、受け入れるのが困難な状況でもある。

「吉田」

「！ お疲れさん」

吉井は吉田の下に駆け寄るも、まずは確認したい。

「健二って、マジか？」

「まあな。どうやらアイツが生きてて、イギリスの研究所から羽田を経由してココでお茶目をやらかしたってとこ迄は決まりらしい」

吉田自身、どこか信じられない。

「だけどアイツがなんで。だいたい生きてたなら俺達に連絡のひとつも」

「俺に聞くなよ。どっちにしろ捕まえにやらんさ。ウチから情報持ち出してB装備一式だぜ？ サプライズにしちゃ辛すぎる」

飲み干した紙コップを握りつぶして乱暴に放る。吉田としても、混乱する自分を完全には御しきれてはいない現れだろう。そんな彼の姿に少しの冷静さを取り戻せば

「で？ 部長は？」

「今は会議だよ。さっき公安の連中が引き上げたが、突き上げは厳しいだろうな」

「まあな。関係者で、確か親戚になってるだろ？」

「ああ。だからと言ってどうって！ 来たな」

「ああ」

二人は雑談を終え姿勢を正せば、ちょうど理一が上層部との会議を終えてフロアに姿を現した。

「全員聞けっ！」

フロアより高い位置にある通路の手すりに手を掛け、理一はフロア全体を見渡して声を上げた。

見下ろす部下の中には明らかに動揺している者も少なくはない。

かつて何度か経験した同僚の造反ではあったが、健二をしてまさかと思わせる人物だったのは確かだ。誰の心の中でも、小磯健二はそういう人間だった。

「容疑者は小磯健二、二十二歳。我々から何らかの情報と銃器を含めた装備一式を強奪していった犯人だ。警察庁と連携を密にしてこれを必ず拘束する。尚、容疑者はイギリスでVXガスが奪われた事件にも関与していると見られるし、それはそのままハマド大統領に繋がるおそれも充分考えられる。各員、その事を十分に認識して事に当たって貰いたい」

「部長！」

「柴田？」

手を上げ理一に割って入る柴田は

「健二君の線で決まりですかっ！　まだ、他にも疑うべき線だって有るはずです！」

その言葉に、どこか同意する空気を階下から感じるが

「……………その必要はない」

「でもっ」

「聞けっ」

言葉を遮る。それはきつと、自分自身を止めないために――

「確かに健二君に思うところも有る。無論、有る……だが今は全ての感情は沈めるべきだ。我々が今得ている中で、最も真相へと繋がっていると思われる線は小磯健二へと繋がっているものだ。今はこれを逃す訳には行かない」

たとえば、彼を信頼し信じていようとも、彼が行なった行為もまた現実なのだから。

「現時刻を持って特機全捜査員の拳銃に対する限定を解除。彼を自分達の知っている小磯健二とは思わな。そうでなければ……………やられると思え」

全員から、了解の声が掛ければ、一斉にそれぞれの仕事へと散る。
そんな中

「相沢」

「はい」

理一は彼を呼び寄せては

「一人連れて長野へ向かえ」

「長野、ですか？」

今ひとつ要点が掴めないでいれば

「彼の妻は今長野だ。もし健二君が生きているとすれば、妻の下へ
連絡が有るかも知れん」

「了解です」

「頼む」

理一に敬礼をし

「熊谷」

「なんすか？ 先輩」

相沢も、今では立派な先輩だ。

「行くぞ」

「へ？ 行くって？」

「お出掛け。ぼやぼやしてっと置いてくぞ」

「あ、ちょっ！ 待ってくださいよ先輩っ！」

先に消えた相沢を慌てて追う熊谷を、理一は静かに見送った。

「……………健二君……………本当に君なのか？ ……だとしたら、君
は一体……………」

小磯健二は、車の中でノートパソコンを起動させていた。

それは先程特機から持ち出したデータに他ならない。

幾つかの操作をし、データを次々に展開していく。この情報を得るために随分と肝を冷やす思いをしたが、どうやら

「っ！」

目的の情報は手に入った様だ。

ぎりっ——歯を強く噛み締める。ココには答えがあると踏んでいたはずなのに、実際に目にしてしまうとやはり感じてしまう感情も有る。

「……………ふう……………」

その感情を、ゆっくりと押し流す。

今は、それに身を任せている時ではない。

健二はもう一度モニターに目を戻し、次々に操作を進めていくが

「……………ちっ！」

指を止めた先の画面には数人の顔。

「アシズ・シャラビー……無茶だよ。彼を使える訳は無いのに……」

その画面に写っている数人は警察や公安からの警戒対象者からは外されていた。彼らは普通の貿易商であり特に反体制の思想は持ち合わせてはいない。

そういう情報になっていた。

それは健二の知る彼とは全く異なる。

アシズは私兵団を持つ思想家であり運動家だ。無論、スグリア旧体制にあっても王宮との仲は深く、現体制に好意的とはお世辞にも言えない。そして、彼は過激な行動を好むテロリストでも有った。

それがアシズ・シャラビーという男で有る事は周知の事実である筈なのに、彼はこの国において全くのノーマークを言い渡されてし

まっている。

健二は一度、ブラウザを切り替え入国管理局へとアクセスを始める。

IDを求められればコードを入力し【川澄徹】の名前でログインを果たす。

幾つかのデータを遡れば——ガンッ！と思わずキーを叩く。

既に、アシズ・シャラビー達は日本へと入国を済ませていたのだった。

「くそっ！ やってくれるなあ、もうっ！」

健二は乱暴に車を走らせ、東京の都心へと車を向かわせるのだった。そこに待つであろう——

——戦場へ向けて——

——17..59..59——

18::00::00<19::00::00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

死んだとされていた筈の小磯健二が生きていた。

特機侵入への捜査線上に健二の存在が浮かび上がり困惑を隠せない特機の面々に、理一は健二の追跡を命じる。

一人、シャドウの中に健二の存在を感じた夏希は佳主馬に問い詰めるも周囲からの妨げに遭う。

ハマドとの会談を終えた総理は、一路アメリカへと向かうことになる。

健二は特機から持ち出したデータを分析し、ある情報を下に車を走らせ……………

これは、午後六時から午後七時の間に起きた出来事である。

――18..00..00――

小磯健二は目的地へ向け車を走らせていた。

ある程度の事態は予測してはいたが、今、自分が知った限りではいささか出遅れてしまった様にも思う。

「……なりふり構ってられないって事かな」

自分の持っていた認識の甘さを噛み締めていれば

「っ！」

自分の携帯にpipipiとアラームが鳴る。これも、また予想の範疇の外にあった。思わず、ドンッ！ とハンドルを叩いてしまう。

「早いってば！ 優秀過ぎるなあもう！」

今のアラームは自分の車が各方面に手配された時に鳴る様に仕込んでおいたものだった。どうやら各方面の警察や捜査機関に自分の存在と、おそらくはパーキングエリアの映像が届けられたのだろう。記録は全て消した筈であり、自分が特機に入っている間の記録映像は残ってはいない筈だったのだが――

「別系統があったのか……っなっと！」

健二は近くに見えた洗車場へと車を入れたのだった。

素早くスペースへと車を放り込み下車。彼はバックの中から部品を取り出し、洗車場のホースの先端へと取り付けければ、そのまま料

金を入れ停めた車に水を吹き掛ける。

激しい音を響かせて水を掛けられていく車だったが、すぐに変化が現れた。

ノズルに付けられた部品を通して掛けられた水を浴び、さっきまで黒だった車体の色は、どんどんと白くなっていった。

白に成ると言うよりは黒が落ちると言う感じだろう。

健二が取り付けた装置は特殊な塗料の除去液であり、それはあらかじめ塗られた黒を排水溝へと押し流していく。

やがて水が切れ、その場に残る白い乗用車に、バックから取り出した別のナンバープレートを取り付けると

「っし！ 行こうか」

健二は再び、街へと車を走らせるのだった。

――18..16..49――

特機では健二の乗っていた車輛の手配や家族・友人・親戚など、健二と関係のあった人物や場所など、彼の痕跡を求めての捜査が着々と進められていた。その中には無論、夏希や陣内家、なにより理一の名前も浮かんでいることは認識しているが、今はそれら全てを良しとしなければならない。そんな状況だ。

そんな中で桑田は

「部長。管内のNシステムからの情報は空振りです」

「そうか。OZへの情報提供は？」

「それはなんとか。でも、やっぱりあの事故以来は……」

「痕跡は無しか」

「はい」

普段であればOZが顧客の情報を特機に渡す事は余程の事でもなければ難しいのだが、今回はその部類に入ると判断されたのだろう。かつての健二のOZの情報はあっさりと手には入ったが、やはり彼はOZの中では何の動きも見せてはいない。死人であるのだから当然と言えば当然だったのだが

「現状でOZ無しでの潜伏は考えにくい。怪しい点、何とか見つけてくれ」

「はい。わかりま……あの」

「ん？」

話の途中で意識が移る桑田を怪訝に思い視線を追えば

「なんだ？」

「さあ？」

十人程の男達が、発令所へと踏み入ってきた。

周囲のざわめきを他所に

「陣内部長は？」

「私はここだが？」

一人の声に理一が返せば、言った男を押し退けて男が一人歩み寄る。男達の態度からその者が彼等の責任者だとは分かるが

「内閣調査室の辻です」

「陣内ですが、これは一体どうした事です」

二人の対峙は、そのまま事態の変動へと移行する。

「現時点よりココの指揮を取るよう言われてきました」

「ば、いきなり何を」

言っている意味がわからない。だが辻は止まることなく

「テロ対策特別機捜隊は、本案件が片付くまで、我々内閣調査室の管理下に入っていたいただきます。混乱の無いよう、陣内さんには協力をお願いしたい」

「この非常時に突然押しいられて無茶を言わないでくれ」

「これは正式な命令ですので」

「辻さん！」

辻と理一の視線は真っ直ぐにぶつかり合う。

この非常時に、事前の連絡も無しにいきなり人員が派遣されるなど考えられない事態だ。すでに周囲では

「これが現時点での操作資料ですね。失礼します」

言って一人が柴田のデスクのデータを閲覧しようとするが

「ちょ！ やめてください」

「おいっ！ 勝手な真似を」

「パスワードは一度変更させてもらいます」

柴田と吉井が止めるのも聞かずに操作を始めようとする内調に対し「端末から離れろっ！」

吉田は銃を抜き男を牽制する。

「貴様っ！」

それを見た内調の者達も一斉に銃を抜けば

「おいっ！」

菊間もまた銃を抜き、続くように抜くものが現れ……………特機発令所内は、大勢の者達が互いに銃を突き付け合う緊迫した状況へと突入してしまった。

「自分達が何をしているの分かってるのか」

「ウチの捜査情報を何だと思ってる？ 回覧板とは訳が違うんだがな」

「命令が下りてる」

「なら示せよ」

端末の前の男と吉田は譲らない。そして

「やろうってんなら止めとけよ？ 田代お」

「菊間さん。自分に撃たせないでください」

「止まってる的にも満足に当てられないで言うねえ」

「五年前とは違います」

二人だけでは無い。もう、あちこちで一触即発の状態だ。そんな中で

「いい加減んにしないかつ！」

「全員銃を下ろせっ！ これは命令だっ！」

辻と理一は声を張り、全ての者の意識を自分達に向けさせる。皆がこちらに注意を向けたのを認識した辻は

「ウチの者はその場を動くな！ ここの物に一切手を触れるな」

「しかし」

「私は動くな触るなど言ったんだ、聞こえないのかっ」

「りよ、了解です」

渋々に内調の者達は警戒を解く。それを見届けてから理一へと向き合い

「ちょっと良いですか」

「では私のオフィスへ」

二人は皆の視線を浴びながら理一のオフィスへと入っていった。

外からは自分達の事を見つめている部下達を見て、辻はオフィスから発令所を望む窓のブラインドを全て下げた。そとでは一瞬ざわめきが起こったが、今はそれに構っている場合ではない。

全てのブラインドを下ろす辻を静かに見つめている理一に、外からの視線を全て防いだ辻が振り向けば――

「久しぶりだな、陣内」

「元氣そうだな、辻」

二人は笑顔で握手を交わす。辻と理一は、共に防衛大学の同期として、かつて同じ釜の飯を喰った仲だった。

――18..21..16――

「つと……………これは？」

侘助は独りで部屋に戻り、OZの闇の解析を試みていた。

とくに正義感に燃えている訳でもなければそれで報償が出る訳でも無いが、そこに興味の沸くプログラムが存在すれば放ってはおけない。それが侘助の行動原理でもある。

しばらくすると闇の中にあるアバターの情報が存在している事に気付き、今はそれがシャドウへと繋がっていると分かった所だ。だが「別にココまではなく」

どこかつまらなさそう。

闇とシャドウに繋がりが有る。確かに確証は無かったのだから進歩ではあるのだが、それはたんに証拠が無かったと言うだけで、誰の目にもこの二つに繋がりが有ることは明白だ。

「今更って感じか……こっからもう少し切り込みたいんだけど……ど？」

一つ、引っかった。

「……………」

勘に……………思考に……………視界に……………そして

「……………ビンゴっ！」

コツン、とモニターを叩いた表情には、いつものニヤケた笑顔があった。

「シシシ……さうて。影は闇に何を仕掛けたのかなっ！」

侘助の指は一層の速さを増して、モニターを目まぐるしく動かして解析を始めた。自分が見つけた闇に潜んだウイルスを解読する為に――

――18..23..33――

理一と辻は向き合い視線を強めていた。

「それで？ 一体どういう事だ？」

「それはこっちが聞きたい」

「なに？」

理一の問いに辻は問いを返してきた。踏み込んで来たのはそちらで有る筈なのにと、理一はいささか思考が追いつかないが

「陣内。俺達が特捜の解体に動いているのは知っているな」

「？ ああ。こっちにも話は通っている。確か今週中には」

「明日には決行の運びだった」

「そうか……だった？」

その話なら聞いている。度重なる不祥事の為、世間から叩かれている地検の特捜部を完全に解体しようと言う話であり、既に関係省庁にも閣僚にも話は通っていた。

無論、それは政府が決めた世間の風当たりに対する打開策であり、改革案と銘を打っただけの三文芝居でしかない。もともと、理一からすれば畑違いであり向う岸の話でしかない。だが、それを過去形で話されるのは驚きを感じる。それ程に無関係では無かった筈なのだが。

「だがもう根回しは」

「済んでいたさ。特捜は解体、関係者は揃って栄転。新しく立ち上がる組織のトップは大阪から一本釣り。政官あわせて万々歳ってところまでな」

「それがどうして中止になる？ プランの変更を余儀なくされる事態でも？」

「わからん。だが」

そう、それが辻の不審。

「プランは変更にはならん」

「辻？」

彼の視線が鋭さを増すのを見れば――

「どうやらお偉いさん方に演目を変える気は無い。だが演者を替える事にした」

「……………おい、それじゃあ」

——言わんとしている事が見えてくる。

「解体されるのはココだ。テロ対策特別機捜隊に白羽の矢が立ったんだよ」

「冗談だろ」

不祥事に対するケジメ。その筈の話が、これではまるで筋が通らない。

「このタイミングでウチを壊す必要性が何処にある」

「無いな。大義も正義も、理屈も利益も何一つ無いさ」

それは辻にも充分に分かっている。

「だったら」

「だからこそだっ！」

辻の声が強みを増す。

「お前達は何をしたんだ？」

「何を？」

今ひとつ理解出来ないが

「この状況下にあってなぜココに役が回ってくる？ 全ての段取りをすっ飛ばして特機の解体ありきで動いてやがる。それも関係官庁から一切の疑問の声も聞こえずにだ。まるで国ぐるみで潰そうとしてる感じだ。お前達は一体何をやらかしたんだ」

「我々が……」

辻の言葉を咀嚼し、理一はしばらく考え込むが上げた顔には迷いは消えていた。

「今はハマドの警備とイギリスで盗まれたVXガスを追ってる」

「ここへの侵入は」

「おそらく関係あるだろう」

「抜かれた情報は？」

「見当もつかん。ウチの情報なら使えるモノも多いだろうが……この事態に繋がる情報には見当が付かない」

「……そうか」

二人は考える。自分達が知らない事があるのだと痛感する。

「この話は何処からだ？」

理一の問いに

「分からん。だが我々が動いている以上、少なくとも官邸は噛んでると見た方が良い」

「だとするとハマドの線も消えない訳だが」

「現状、解体に至るミスは無い」

「ああ。それが分からん」

何かを承け事は起き、そして結末まではつきりと用意されている。事がここまで来ているのに、どうしても全ての起こりが見えてこない。理一も辻も、起承転結の起の部分が無い事の不安を感じずにはいられない。あるいは――

「もしかしたら我々は………引いては成らない引き金を、知らず知らずの内に引いてしまったと言うことか……」

何処かに、特機をして国の敵とする何かがあった。その事を、自分達が見落とした。

「だが問題はその銃口の先に誰が居たのかと言う事だが、それだつてっ！　ちっ！　もうかつ」

「ん？」

辻の視線を追えば、そこには誰かが自分の部屋へと近付いてくる。

「三輪長官？」

「くそっ！」

「っ！ なっ」

理一の視線の先で、まさに三輪警察庁長官が理一のオフィスの扉を開こうとした刹那、急激に自分の体がブラインドに押し付けられた。

「いい加減にしろっ！ これ以上逆らうなら拘束するっ！」

「っ！ 何の権利でっ！」

「許可は出てるっ！」

咄嗟の呼吸に合わせる事が出来たのはやはり旧知と言った所だろう。そんな二人に

「やめんかっ！」

「っ！ 長官っ」

「何故ココに」

「今すぐ離れたまえっ」

「しかし」

「今すぐにだっ！」

「……はい」

理一を離し、辻は少し距離を置く。

理一はすぐに三輪に詰め寄ると

「長官。これは一体どういう事です」

「辻君から聞いたとおりだ。今後、こここの指揮は辻君に一任と成る」
「しかし」

「これは決定事項だ。私は君と議論をしにきた訳ではない」
「っ！ ……………失礼します」

理一は三輪の横をすり抜け部屋を出るが

「どこへ行く」

「私は防衛庁の出向です。申し訳ないが貴方の部下じゃない」

「君の上も承知の話だ」

「それは自分で確かめます。失礼」

言って立ち去る背中に「待てっ、貴様長官に」と辻が声を張り上げれば

「構わん。何処に行っても答えは一緒だ。それより」

「はい」

三輪に答え、辻は自分達を見つめるフロアの全員に告げる。

「現時刻を持って全ての捜査官は私の管理下に入る。これは警察庁、防衛庁及び日本政府の正式決定だ。異論の有る者は居るか？」

警察庁長官である三輪を横にしての辻の発言に異議を唱える者は居ない。納得は出来ないが、三輪長官がそこに在り、辻の言葉を黙認しているのであればそれは事実なのだろう。

三輪に反抗しこの場を後にした理一に向ける思いもあるが、自分達も私情に流されないだけのプロではあると自負もしている。なればこそ

ハッ！

と一斉に敬礼し

「では、各々仕事に取り掛かってもらいたい。上級職員は三分後にブリーフィングを行うのでそのつもりで……かかれっ！」

ハッ！

一斉に、捜査は再び開始された。

「やれそうだな」

「最善を尽くします」

「そうしてくれ」

「ハッ！」

満足気味な三輪に相槌を打ち、辻は慌ただしく動き回る捜査官を眺める。部屋から出ていった、理一を思いながら――



理一は独り、特機の廊下を歩いている。が……ふ、と胸のポケットに手を入れれば一枚のメモ書きを取り出す。そこには（ココに）と囁かれて渡されたメモ。見ればに市民公園のベンチの場所が記されていた。

何事も無かった様にメモをしまい、理一は一階のフロアへと出――

「あ、今日はお早いお帰りですね」

「いやあ、野暮用で外へね」

「へー、どちらへ？」

ガードマンと軽い話をしながら――

「ちょっと言えないトコ」

――理一はビルを後にしたのだった。

相沢と熊谷は長野へ向けた車の中にいたが

「しっかし、先輩」

「あん？」

「その小磯健二っての。そんなにヤバ目の奴なんすかねえ。なんか大した事なさそうな気がするんすけど」

経歴を見る限り大した事は無い。そう印象を受けた。東大に在籍しているのだから頭は良いのだろうが

「どんな奴なんですか？ その小磯健二ってのは」

配属されて一年も経たない彼は健二の事を知るよしも無い。だからこそその発言でも有る。有るのだが、それでも助手席の相沢には溜め息も出てしまう。

彼の人柄も能力も経歴も、教えるには大した労力も無い。相沢は、彼と共に過ごした時間が有る。

だが、この状況下で熊谷に認識してもらわなければ成らない事は、それとは別の話だ。

「なあ、熊谷」

「なんすか？」

だからこそその会話だ。

「お前の中でさ、一番遭いたくない犯罪者って、天才と化物と怪物の内の……どれ？」

「はあ？ なんすかいきなり」

「いいから。どれよ」

「そつすね」

少し考えて――

「やっぱ怪物っすかね。なんかイメージ凄えし。先輩は？」

「ん？ 俺は天才かなあ」

「そんなもんすかね……って、それが小磯健二と何の関係があるんですかっ！」

熊谷にしてはその通りなのだが、相沢にしてもそれは自然な成り行きで

「お前の質問の答えだよ、それが」

それが真実だった。

「は？」

「だから小磯健二。アイツはな……犯罪者のアイツは、お前にとっての怪物で、俺にとっての天才だ」

「ちよっ！ いくらなんでも……」

それは無いと思う。

「熊谷が今までの人生で最も凄だと思う知能犯を思い浮かべろ」
「は？」

「健二はその犯人を……足し算引き算で過去の犯罪から次の犯行、おまけに犯人の居所まで割り出しちまう奴なのさ」

「そんな事出来るわけ」

「出来るのさ。だから……着いたら起こしてくれ」

「はあ？ ちょ、先輩」

今は眠ったふりをする。

次にまみえる時、健二に向ける銃口が鈍らない様に、心を鎮めて行かなければ成らないのだから……

「おじさん、母さんが何か喰いたいモノでもあるか聞いてこいって
言ってるいんだけど……？ おじさん？」

佳主馬が侘助の背中に話し掛けるが返る言葉はなく、ただ剣呑な
表情で目の前のモニターを凝視していた。

「……おじさん」

「……………」

「侘助おじさんってばっ」

「っ！ 佳主馬か。どした？」

ようやく自分に気が付いた様だ。

「だから晩飯の希望！ っつか、俺の話聞いて無かったの？」

聞こえない筈は無い距離だけに少し憤慨を見せたが

「悪い悪い。ちよつとばかり不味いモン、見付けちまったからな」

「？ 何？ それ」

「ああ……シャドウだよ」

「！」

一気に、佳主馬の注意もそこに引かれる。自分との戦いもそうだが、さっきの夏希の言葉も一役買っている。気にならない訳が無い。

「何か分かったの？」

乗り出し聞いてくる佳主馬に頷きながら、

「コイツの謎が少し解けた」

「嘘」

「マジだ。だが……………」

「おじさん？」

侘助の表情は重いものになっていた。

「こいつはトンデモない代物だったよ」

「それは……どういう事？」

意味が分からない佳主馬に、侘助は何処から話したのかと思案するが――

「シャドウは特定の条件を満たしたアバターの複製を創ることが出来る」

「複製？」

「いや、ここは影って言っても良いのか？ 俺にも上手い言葉が思いつかないんだが」

「要するに？」

「そうだな……他人になりすます事が出来るのさ。それも完全に、な」

「そんな……」

【なりすまし】はOZにおいて最も危険な犯罪行為と言っても過言では無い。

公共・金融・公的私的。情報化社会としての機能の殆どに介入しているOZの個人情報はその中でもう一人の自分を生み出す事と同義と言っても良い。OZ内の買い物をした者が現実の本人であると誰が確認をするのか。それもまたOZの役割だ。その情報を覗くために必要な認証は？ 自分の病歴は？ 銀行間の金融情報は高度に発達したシステムを使う。高度に発達したOZのシステムを。

それだけに決して破れないセキュリティで守られているのだ。それが破られた時の危険性はラブマシンの騒動を思い返せば一目瞭然だった。

仮に同じ事が出来たとしても、アルゴリズムに従って行動するAIと、確固とした目的を持った人間とでは危険の度合いがまるで違う。だがしかし――

「そんな事、簡単に出来る別けないじゃない」

「ああ。だからコイツは乗っ取るんじゃないくて、ウイルスに感染させて影を創る事にしたのさ。本人もOZも、気が付かないうちにな」
「感染て、そんな簡単に」

ウイルス対策のソフトやシステムなど腐るほど施されている。そんな危険なウイルスがそうそう感染するものでもない。だが

「ウイルスの感染条件は二つ」

「二つ？ 二つのウイルスって事？」

佳主馬はあまり得意では無い分野に思考を悩ませるが

「違うさ、コイツは二つで一つなんだ。どっちか片方だけ仕込まれても平気。だが二つとも仕込まれて初めて仕事をする奴だ」

「二つで……」

「ああ」

そうして侘助は佳主馬に教える事になる。

ウイルスの感染経路は二つ。その一つは単純なもので、それはシャドウの姿をアバター情報が認識することだった。要するに、OZの世界で話をするなら【シャドウの姿を見た者は全て感染する】と云うものだった。

「ちょっと待ってよ、それじゃあ」

「そうさ」

侘助にも佳主馬の言わんとしていることは分かる。つまり

「俺達は皆、この条件は満たしちゃってるって事さ。俺達だけじゃない。シャドウと戦った事の有る者、戦いの観戦者、全てがこれに該当するな」

「そんな」

「あいつがOMCで戦いまくっていたのも、より多くの感染者を出

す為だったんだろうさ」

「そこに俺達はみすみす……」

分かっているれば良い。だが何の知識も情報も無いでは、いくらなんでも備えようがない。無論、若干の後悔はあるが、問題は

「だがむしろもう一つのルートの方が問題だな」

「もう一つ？」

確かに感染は二つだ。一つの条件を満たした者の内、一体何割が二つ目の条件を満たしたかと思えば――

「こっちのルートは、OZに関わる全ての者が感染済みだろう」

「……………は？」

――二つ目には選択の余地すらなかった。

「例の検索システムだよ」

「？ あの更新されたメインの？ それが一体」

なんの関係があるのだろうか。そう思う佳主馬に、返る言葉は至極簡潔で

「検索システムそのものがウイルスなんだ」

「……………え？」

「つまり、OZのシステム更新したものの全てが感染者って事になる」

「ばっ！ そんな馬鹿な事って」

有る訳がない。それが常識と言ってよかったが、侘助にしてみればようやく喉に刺さった刺が抜けた思いだ。

「どうりで最近のOZのドタバタ振りに合点が行った。多分OZも気が付かなかったんだろう。だから今になって慌てた」

「ウイルスの存在に？」

「ああ。なにしろ公式採用だからな。気付かせなかった犯人が一枚上だったって事だろうが……」

「おじさん？」

どこか、楽しそうな笑みを浮かべる侘助に、佳主馬はどこかで感じた感触を感じるが

「ここまできても改善されてないって所を見ると、コイツあとんでも無え喰わせものなんだろうなあ」

「……………ああ、そうか」

どこか納得した佳主馬は腰を浮かせ部屋をでる。

侘助のこの笑みに感じた感触は、健二の時に感じたものだ。事態が切迫して危険度が増していく最中であって、何故か嬉しそうに笑みを漏らした小磯健二を……今の侘助に重なる佳主馬だった。



夏希は夕食の用意の手伝いをしていた。

「あんた、寝ててもいいんだよ」と言う理香に「もう平気だから」と笑みを返して台所に向かう。

女性陣もどこか心配そうに見守るが、取り敢えず今は何かしていた方が気も晴れるだろうと夏希を受け入れる事になっていた。

ドタバタと足音がけたたましく近付いてくれば案の定

「ねえねえ佳主馬兄ちゃんは一？」

子供達が手に手にゲームを持って台所を覗いていた。それだけで要件も分かると言うものだ。

「佳主馬君なら侘助さんのところよ」

「お仕事中かもしれないから侘助さんの邪魔しちゃ駄目よ」

由美と奈々の言葉を、一体何処まで聞いていたかは疑問だが「兄ちゃんOMCやろー!」と騒がしい台風達は二階へと進路をとった様だ。やれやれと溜め息を漏らしながら数人は自分の管轄の台風を捕獲する為に台所から姿を消した。

そんな慌ただしい数人が居なくなり

「そういえばさあ」

真緒はまるで、今ふっと思っただけど!　というわざとらしい態度を見せれば

「佳主兄いとはどこまでいってるの?　夏帆さん」

「はえ?」

思わず真っ赤になった夏帆に

「あらゝ、夏帆ちゃんとそうだったのゝ」

「良いんじゃない、佳主馬。良い男になりそうだしね」

雪子と典子は面白そうに顔を近付けるが

「ちょ!　別に私達まだ付き合ってるとかそういうんじゃない」

「でも夏帆さん。まだって事は、今はまだって意味だよねゝ」

「「あらあらゝゝ」」

流石に三方向から同時に詰め寄られては逃げ場も無い訳だが

「あた、でもその、私、っていうか」

「「「うんうん」」」

「だから、その、好きとかその好きかって聞かれれば、確かに嫌いじゃないってか、どっちかと言うと」

「「「うんうんうん!」」」

さあ来いっ!　と緊張が高まれば……………

「でも佳主馬は私の事、なんとも思っていないっていうか……それとなくは話は持ってくんだけど……その、今一つ……」

「「「……………」」」

空気が、寒くくなってきた様で

「気付いてないって言うか……なんか……………ちょっと……………」

「「「……………」」」

そんな空気を知ってか知らずか。いや、無論知る筈は無いのだが「ごめんごめん、遅くなっちゃって」と呑気な野郎の声が聞こえてきた。

「あつ。侘助おじさん、ご飯のおかずは何でも言いつてさ。俺は肉があれば」

「「「お前に食わせる肉なんて無いっ！」」」

「……………へ？」

雪子・典子・真緒に問答無用で遮られ断罪された佳主馬はというと、まさに呆然。思わず夏帆に向かい

「なんで？」と聞いてはみたが

「知らないっ！」とどっかに消えてしまった。

「ちょ！ 辻本？」

慌てて追いかけたのは山々だが「ちょっとココに座りなさい佳主馬っ！」と典子に捕まり、なにやら、女心を理解しない男代表として弾劾裁判被告席へと連行されてしまったのだった。

佳主馬が延々と三人からの批難やら理想やら愚痴やらを聞かされ続ける横で黙々と夏希が料理を作っているという、中々にカオスな陣内家の台所風景の完成だった。

——18..53..19——（アメリカ・ワシントンDC——04..53..19——）

ホワイトハウスの廊下の中で開け放たれたドアを二度ほどノックする。その人物が首席補佐官のマックス・ウィラーである事を認識して、入室を許可する旨の目配せをすれば

「Good morning President——」

（おはようございます。大統領——）

「It's nap. So? I can sleep I don't know? Max——」

（仮眠だよ。それで？ 私が安眠できるニュースかね？ マックス

——」

「Elements and will——」

（要素にはなるかと——）

「Listen——」

（聞こう——）

うながされてウィラーは数枚の書類を差し出し

「Reports from the CIA. The inf

ormation of the person seems to be involved in both the darkness and power outage——

(CIAから報告が。停電と闇の双方に関与していると思われる人物の情報です——)

数枚の書類に目を通しながら

「Programmer or free……Japanese and that same person should be dead? ——

(フリープログラマーか……この死んだ筈の日本人と同一人物だと? ——)

「The report is I do. The investigation is ongoing——

(報告ではそうなってます。捜査は継続中です——)

「Would be nice——

(いいだろう——)

書類を机に置き立ち上がり、彼はウィラーに強い視線を叩きつけながら

「Even if what you are looking for. Yare I sold it to fight the world that the United States to purchase without discount——

(何をしても捜しだせ。世界に売った喧嘩は合衆国が値引き無しで買い取る事を教えてやれ——)

「I understand, Mr. President——
(了解しました、大統領——)

立ち去るウィラーの背を見送りながら、アメリカ合衆国大統領ジュレミー・レグランは今一度机の上の書類に目を向ける。そこには、数枚の書類と共に、小磯健二の在りし日の写真が添えられていたのだった。

――18..56..48――

理一は車を降り、ある市民公園を歩いていた。

辻から渡されたメモの通りに歩けば、指示に有ったベンチを見付けた。が、特に慌てた風は見せない。缶コーヒーを買いベンチに腰掛口を付ける。

自分に尾行が付けられているのは認識している。振り切ればそれだけで疑いを裏付けてしまうのは充分に分かっている。今、彼等と事を荒立てる気は無い。

ゆっくりとコーヒーを飲みながら、慎重にベンチを調べていけば

「……………つさてと」

理一はコーヒーを飲み干しゴミ箱へ入れ、ゆっくりと車へと戻っていく。

車に戻ればキーを差し込み回し――

「……………何が起きるのかな」

――ポケットから一つの携帯を取り出した。

あのベンチの裏の隅に貼り付けられていた携帯だった。こっそりと取り出してきた携帯の電源を入れ、その液晶を見つめていけば――

pururururu! と非通知からの着信を報せてくれる。理一は事態が動き始めた事を予感しながら、その着信音を通話ボタンを押す事で止め、自分の声をどこか大きく感じながら問う。

「……もしもし」

——18..59..59——

19:00:00~20:00:00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

健二は各捜査機関の目をかいくぐり都会の道を走り続ける。

健二を追う特機に内閣調査室の面々が現れ指揮権を剥奪し、理一は特機ビルを後にする事に。

OZでプログラムの解析を進める侘助は闇とシャドウの関連と、シヤドウに仕込まれたウィルスが存在へと辿り着く。

一方、アメリカでは捜査の目は健二にまで辿り着き、レグラン大統領は一層の捜査を命令する。

理一は辻からのメモに従い一つの携帯を手に入れば、そこへコールが鳴り響き……

これは、午後七時から午後八時の間に起きた出来事である。

19:00:00~20:00:00

——19:00:00——

『久しぶりだね……陣内君』

「っ！ 貴方は——」

手にした謎の携帯に掛かってきた着信に出てみれば、そこからは何度か聞いた事のある——

「飯富警視總監」

——亡き祖母の友人であり、かつての上司の父でもある。飯富の声だった。

『はは。元だよ。今では年金暮らしのただのジジイだよ』

「そんな事は……しかし、何故？」

この電話に掛けてくるにはそれなりに踏み込まなければならないだろう。彼の言う通り、既に現役を退いて久しい飯富が、この事件に絡んでくる理由が理一には分からなかった。

『辻君が君と旧知だと聞いてね。悪い様にはしないとこんな事を頼んだのだよ』

「辻と？」

『三年前にはもう彼は内調だったからね。面識はあるよ』

「そうですか……元氣そうで何よりです。飯富さん」

『あんまり早々に会いに行けば榮さんにどやされそうだからな。もうしばらくは生きてみるさ』

「ははは……確かに、祖母なら言いそうです」
『だろう?』

久しぶりに栄の旧知と話し、彼女の事を思い出しながら心を鎮めるが

「それで、今日は?」

今は、目の前にある問題が先だと切り替える。

『今回の特機と内調の件だよ。いや、もっと根本的な問題になるか……』

「知っている事があるなら教えて下さい」

『無論、そのつもりで電話を取っておるよ』

事件が、ようやく見えてきそうな気配に理一が神経を研ぎ澄ませば、飯富は心得たかの様に話を始めた。彼の知る――核心を。

『今回のテロ特機に対する一連の動きは、全て小磯健二君が原因だよ』

「健二君が?」

確かに理一もそれは考えなかった訳では無い。だが
「いくら健二君がウチの関係者だったからといって、ここまでするでしょうか?」

そう。ここまでは無いと思った。無論、それは正しい見方なのだが
『違うよ陣内君。彼が君達の関係者だから問題になった訳じゃない』
「? だったら」

『彼が生きていた事が問題とされているのだよ』

「……え?」

理一には、飯富の言葉が理解出来無いでいた。

あるいは理一の反応は飯富の予想の範疇だったのだろう。彼は静かに、そして順を追って理一に話を進めて行った。

『今現在、日本国をして排除の対象と定めているのは、テロリストでもなければ君達でも無い。ただ一人、小磯健二と云う個人をして、我が国は敵と定めて動いているのだよ』

「馬鹿な。そんな馬鹿な事が……信じられません」
彼をして、何故そうなるのだろう。

『事実だよ。まずは信じたまえ。まず、それが前提となるのだからね』

「何故ですつ。何故彼がっ」

思わず、声が大きくなってしまふ。だが飯富は気にもせずに続ける。

『D D R、知ってるかね？』

「は？ 無論です」

D D Rとは国際平和活動の一種で、世界各地の紛争地帯において、武装解除・動員解除・社会復帰の三つのプロセスから成る活動の略称である。一般にP K O活動の一つとして知られている。理一が知らぬ筈は無いのだが

『そのD D Rの活動の中で回収された武器が、処分されずに第三国へ供給されているとしたら？』

「そんな馬鹿な」

国家や国連も噛むプロジェクトである。そうそう思い通りに事が運ぶ筈は無い。だが

『そう。そんな馬鹿な話が現実存在した』

「まさか」

『小磯君は、それを突き止めたんだよ』

「健二君が……」

あの夏。本村が起こした事件を機に、確かに健二は兵器産業やブ

ラックマーケケットといったものに否定的だったのを覚えている。それはどこか執念すら感じさせるほどに。

確かに、あの頃の健二であるならば、その不正を嗅ぎとれば、それを解明しようと動くかも知れない。そして彼ならば、もしかしたら突き止める事も……だが、と思う。

「だとしても、こんな事態に繋がるとは」思えない。だが、それは飯富からしてみれば当然の事であり、何故なら

『それを行なっていたが、日本政府そのものなんだよ』

「っ！ そんな」

それが、飯富の持つ真実。

『私の下に連絡が来て私は彼と会った』

「飯富さんが？」

『彼は証拠を手に入れると言っていたよ。いや、正確には手に入れた、かな』

「健二君が」

『もつとも、手に入れたと聞いたのは彼と会った数日後の事だ。電話で、彼は証拠を手に入れたと言っていたよ』

「それじゃあ、今は」

証拠があるのに、未だに何の問題にもなっていないのはどういう話かと思えば

『電話はハワイからだった』

「なっ！ ちょっと待ってください、まさか」

『私はあの墜落に疑念を持っている、陣内君』

「飯富さん」

愕然とする理一に、飯富は務めて冷静に話を進める。

墜落当初から全ての案件は内閣の危機管理センターが主導した。ブラックボックスにはエンジン部で爆発があった旨の声も録音されており、事件は燃料漏れによる爆発事故として終結を見た。

「フライトレコーダーにも不振な点は見受けられませんでした」
理一とて捜査には絡んだ。健二が乗っていたと云う事もあり、多少の無茶もした記憶もある。だが

『だからこそその確信だよ。あまりにも話に筋が通り過ぎているだろう』

「しかし」

『第一、何故墜落後すぐに事故調が出るのかね。先ずは我々の出番が先では無いのかね？』

「私達も捜査はしました」

そう。それは確かだ。

『だが、肝心の所へはたどり着けない。ブラックボックスの回収も生存者への聴き取りも、機体の調査さえもだ。我々に出来たのはテロの可能性の有無と犯罪性の有無の確認、それだけだ』

「しかしだからと言って……数百人の命と引き換えに」

『そうまでしてもだっ！』

「！ 飯富さん」

初めて、飯富は声を張った。彼の中でも、納得など出来てはいない。

『彼を殺さなければならぬ事情があったんだ。私や、もしくは君に……彼の持つ証拠とやらが渡る事は避けなければならなかった。たとえ数百人を道連れにしようとも、彼を止めなければならなかったとすれば』

「……もしかしたら、単純な兵器の横流しなどではない何かを、健二君は掴んだ」

『そして彼の生存がこの国を動かした。分かるかね、陣内君』

「……飯富さん」

そう。小磯健二は帰ってきた。

VXガス。停電。友好国大統領訪問。特機侵入。闇と影。全ての

事が集約したこの日本で、それは始まりを告げた。

『彼は……たった独りでこの国と戦争を始めたんだよ』

――19..18..55――

ホテルの自動ドアを通りフロントへと足に向ける男に

「いらっしやいませ」

彼を出迎え荷物を預かろうとサービスマンは笑顔を見せた。

「ありがとうございます」

「ようこそおいでくださいました」

和かに札を交わし、健二はフロントへと向かう。

「いらっしやいませ」

「どうも。不動義光ですが」

OZのカードを差し出し笑顔を見せる。

「不動様でいらっしやいますね？ 少々お待ち下さい」

名乗りとカードを受けて端末を操作し

「はい、ご予約承っております。お部屋までご案内致します」

「ありがとうございます」

「こちらです」

促されて歩き出す健二を

「ごゆっくりお寛ぎください」

フロントは恭しく送り出し、再び何時もの業務へと動き出したのだった。

エレベーターを待つ間、付近に立つ警官と黒服の男を見とがめ
「何かあったんですか？」

何気に話をする不動と名乗った健二に

「ご心配おかけして申し訳御座いません。本日は国賓の方が当ホテルに宿泊なさって御出ででした、ホテル内の警備も何時もより厳重となっております」

説明する間にエレベーターの扉が開き中へ

「ああ、それで。僕が予約したフロアより階下だったもので不思議だったんですが」

「失礼致しました。警備上の理由で上下三フロアを貸し切りとなっておりますので」

「構いませんよ。バーの方は？」

「二十一時には開放になりますので、直通エレベーターにてご利用頂けます」

「だったら問題ありませんね。ココのバーのカクテル、実はお気に入りなんですよ」

「それは何よりです。……どうぞ、こちらです」

「はい」

こうして、小磯健二はホテルの一室へと通された。

スグリア共和国、ハマド・アッザーム大統領の宿泊するホテルの、その五階下の一室に――

――19..22..01――

pipipipipiと携帯が着信を知らせてくる。理一が出ると
「陣内」

『部長、菊間です』

「どうした？」

既に自身から指揮権が剥奪されているこの状況で、ここに電話が鳴る理由は見えない。

『それが……』

「？ 菊間？」

声をひそめる菊間に理一も姿勢を正せば

『部長の端末にメッセージが残されました』

「メッセージ？」

『はい。迷惑メールに偽装されていますがおそらくは……健二君です』

「！ 健二君が」

菊間自身、その判断を推奨するかどうか。また、理一に上げるべきか辻に上げるべきなのか、それは頭を悩ませる事態ではあった。現状で言えばそれらの報告は辻に上げるのが筋であり職務だとは分かる。だが、菊間としては未だ今回の騒動に対して納得がいつていないのも事実だ。

逆に言えば、向こうだってこれ位の造反は覚悟していて当然なのだ！ と開き直ってすら居ると言っている。それ故の理一への電話へと成る。

「それで、メッセージにはなんと」

『分かりません』

「？ それは」 一体どういう事だろうか？ そんな疑問は――

『只の数列なんです。全部で六十四桁、意味が分かりません』

「数列、か」

――謎で返されたのだった。

『取りあえずそちらに送ります』

「ああ、助かる」

p1と電話を切れば、ほどなくしてメールを報せる着信が鳴り

「……………これが」

そこには、一見して無作意に並べられた六十四個の数字が映し出されていたのだった。

――19..27..42――

いったただきまーすっ！ という大合唱と共に、陣内家での夕食の宴は始まりを告げた。

頼彦達も帰宅し、大人数での賑やか過ぎる夕食は、まさに宴と表すのにぴったりの風景だった。

酒も入ったのだろう。と、いうよりは大人達にとっては当然であり、過去の歴史をなぞらえるかの様に

「それで？ 佳主馬。夏帆ちゃんとはもうシちゃったの？」

万作は今夜も絶好調の酔っぱらいだった。

「ちょ！ おじさん！」

「わわわわ私と佳主っ、池沢君はそんなんじゃ」

慌てて否定する二人も面白いとは思っている一同だが

「そうなの？ でも高校生でしょ？ 一つ屋根の下に泊まって何も無しってんじゃさ」

「もう！ いい加減にきなさいな」

「エロジジい」

万理子と典子の言葉も、あいも変わらずと言ったところか。

「でもなあ、佳主馬も彼女くらい欲しい頃だろ？」

「夏帆ちゃん、だったっけ？　どう？　うちの佳主馬」

「稼ぐぞ、うちの佳主馬」

頼彦達ものりのりの様子だ。

「へ？　いえ、その私は」

「もう！　やめてよおじさん達まで」

「そうよお父さん！　夏帆さんにだって選ぶ権利有るんだからね」

「ちょ、真緒ちゃん？」

援護？　なのかどうなのか分からない真緒に夏帆も戸惑うが

「彼氏にするならやっぱりビシ！　と守ってくんなきゃね。鈍い男はね」

「あら？　意味深なお言葉ね」

雪子の言葉に

「だって私彼氏居るもん」

満面と爆弾を投下した。

「なんだってー！　どこのどいつだ！」

流石に頼彦は父として黙ってはいられないらしいが

「あら？　もしかして和人君？」

「へへ、分かる？」

「あんた、メン喰いね」

「ま、優しいしね」

「って！　俺は聞いてないぞー」

「「まあまあ」」 邦彦と克彦に宥められ、それでも騒ぎは広がる一方の様で

「ごちそうさま」

夏希は静かに席を立つ。

「もういいの？ 夏希」

「うん」

雪子に小さく頷き、夏希はそのまま自分の部屋へと戻っていった。背後に聞こえる、団欒の声から逃げるように……

――19..35..11――

「そうか。いや、悪かったな」

『力になれなくてすまん』

「いいさ、じゃあ」

電話を切る理一は助手席に携帯を放り投げ、車の天井を仰ぐ。

「どうしたものか」

個人的な繋がりで数列を解読出来そうな人材には全て当たった。

だが、今最後の一人にねを上げられた所だ。本当だったら専門家にも見せるのだろうが、表立って動けば自分の動きを監視者に伝えるだけだ。健二が秘密裏にコンタクトを取ろうと模索している以上、それは避けたい。

考えうる限りの解読は試みた。筈だ。だが

「まだ解けない……どこだ……誰だ……」

可能性を考える。

何処でなら。誰ならば。今、自分に出来る事は。

解ける可能性。秘密と機密。限定される状況の中で望む結果を出すには……そして

「っ！ その手が……あるかつ」

キーを回し再び車を走らせる。今、頭に思い浮かんだ案ならば、自分への監視をすり抜ける事も、数列の解読も可能だろう。もしかしたら――

「コレも君の狙い通りなのかもな、健二君」

――19..40..05――

特機では慌ただしさを増していた。健二の消息が、依然として掴めない事への焦りもどこかにある。

小磯健二の出来る事。

彼ならば出来るかも知れない事。

自分達の想像は最悪を想定している。だからこそその動きでもあるが、もしその想定を超えられたら？ そんな考えも浮かんでしまう。それ程に、彼との時間は驚きが多く、彼の仕業は自分達の知識の外に在ったのだから。

そんな慌ただしい発令所を見つめる辻の下に

「すいません。辻さん」

「なんです？」

自分の下に来た佐橋に視線を向けるが

「ハマド大統領の警備体制の変更に付いてなんですが」

新たな変更を示唆されたが、佐橋にとってその調整には自分ではどうにも出来ない部分も有る。故に指示を、と思うが

「変更？ 私は聞いて無いが」

「え？ でもこれが」

回ってきたプランを辻に見せるが

「人員を移動？」

「はい」

それは初耳だった。

「警備の方からも小磯健二捜査に、と。でも急に言われても警備の変更なんて」

「ただ人員を減らすだけじゃないか。この命令は？」

「警備部からです。十分前に」

「すぐに確認を取ってくれ。現場は？」

「それは」

まだ確認は取ってはいない。配属されたばかりの彼女にとって、今は与えられた命令を淡々とこなすだけでも一杯一杯と云う事なのだが

「取って無いのか？ 無用の混乱を避けたいならまず現場とコンタクトを取らんでどうするんだっ」

「っ、すいません。でも」

「捜査と警備は同時進行だが同じじゃない。それくらいは判断を」

「辻さん。今はそこまでに」

桑田が視線を強めて割って入る。

「彼女は配属されて間もない。でも出来る限りの事はしています。それ以上の事は仲間がフォローするべきです」

「先輩」

「だからと言って」

「ミスではありません。違いますか」

「……では後は頼めるか」

桑田の言葉に納得も出来ないが、自分はココの人間では無い。ここにはこのルールが有るし、それを尊重しないでは仕事の効率に関わる。今は、桑田に任せる。

「命令が上がっている以上現場は動いているでしょう。取り急ぎ命令の確認と警備の見直しを」

「よろしく頼むよ」

「はい」

理一のオフィスに戻る辻を見送り

「すいません、先輩」

「いいのよ。それより貴女は各所の検問の状況と所轄の情報共有、お願いね」

「はい」

笑顔で仕事に戻る佐橋を見送り、桑田は自分の席へと戻る。いつも通りの仕事に……

――19..48..46――

上下三フロアを貸し切った真ん中のフロア。その中央で、両脇にSPの立つ部屋がある。そこがハマドが宿泊している部屋だった。

部屋の中でも数人のSP。そして自分の国から来ている護衛に囲まれ、いささか辟易とした溜め息を漏らし、ハマドは自分で持ち込んだ本に目を移す。バーでも行きたい気分でもあったが、これだけ物々しい警備のなかにあっては、流石にくつろぐことも出来ない諦めたところだ。

一度、窓の外の夜景に目を移し、もう一度溜め息を漏らして本を開き、ページの世界へと旅立った。



ハマドの居るフロアの片隅で、食器搬送用のエレベーターが開き、中から武装した男達が姿を現す。周りの非常ドアからも男達は現れ、皆、各々の銃を掲げエレベーターの男を囲む。

男は隅に置かれている三体の死体を満足気に見下ろし、視線を強

めて一同を見詰め

「?????? ????」

（状況を開始する――）

男の言葉で、皆は一斉に安全装置を解除したのだった。

◇ ◇ ◇

自分の部屋を出た健二は普通に歩を進め、気負いもなく非常ドアの扉を開けた。変に開けてしまえば逆に疑われる。明らかに間違いました、と云う風に開けてみたのだが、そこには誰も居ない。

「……ちよーっと待ってよー」

一度、ドアから離れ隣の壁に背を預ける。絶対に居る、筈の警備が居ない。特機と警視庁のデータではココには警備が居るはずだ。それが居ないと云う事は

「分かったよ分かったよ……今夜の僕は……」

ベルトに差し込んでいた特機の装備品の銃を取り出しスライドを引けば――

「っ！」

――ビルの照明が一瞬で落ちた。

「ついてないっ！」

非常灯の明かりだけが薄く照らすホテルの中で、健二の姿は非常階段の闇に溶けていったのだった。

——19..59..59——

20::00::00\21::00::00

――20..00..00――

健二は暗い階段を上がり

「っ……思ったより」

階下から気配が上がってくる。おそらく警備の者達だろうが、健二が思っていたよりも行動が早い。だが

（動きが……こっちの専門じゃない、のかな？）

荒事に強い訳ではない自分にすら気配を悟られる。それはこの道のプロでは無いのだろうと予測出来た。自分の中の最悪に、現実が近づいてきたと確信する。それに従うとすれば――

（……こっちか）

健二はハマドの部屋の二階下の廊下へ出る事を選択した。用心しながらも素早く動き、廊下に躍り出ると扉を閉める。

その向こうで数人の気配が階段を登っていくが、それをやり過ぐす。

非常用ホースの収納ボックスを開け伺い、中から非常用の斧を取り出し無人のフロアの廊下を進む。

（中央の……ここか）

ハマドの部屋の真下の部屋の前に立ち、そのドアノブの施錠を確認し、徐ろに斧を振り上げたとき

「！」

ドンッ！ と大きな振音がビルを襲った。

「素直過ぎ！」

思わず漏らす。

健二を追い越してハマドのフロアへ着いた部隊は非常口に仕込まれたトラップにはまってしまった。警戒はしていた。だがハマドを襲った部隊は祖国の内戦を戦い抜いた部隊であり、一線級を欠いた警備隊には荷が勝ち過ぎた。

「くそっ！」

健二は斧を施錠部に振り下ろし鍵を無理矢理に砕いて開けた。

「っし！」

部屋に入れば真っ直ぐにベランダへと駆け寄り

「っ！ すくむなあ……でも」

上と下を眺め眩くが――

「行くしか無いんだけどね」

健二はベランダの冊に足を掛け、上階を目指して身を乗り出すのだった。

壁をよじ登り、二階上のハマドの部屋までたどり着いた時、健二の目に映ったのは彼の横で応戦していた護衛が撃たれる所だった。
「くそっ！」

◇ ◇ ◇

護衛が撃たれ、遂に室内に居るのは自分だけとなった。既にハマドの思考は内線を戦った当時の自分へと立ち戻っていた。

兵士として銃を持ち、旧体制との戦いに明け暮れた。その兵士としての自分が判断するに

（これは……駄目だな）

敵の技量とこちらの状況を客観的に判断して、自分の命運を把握してしまう。何とか倒れている護衛の元から銃を取りたいが、廊下から室内へと入ってくる敵の気配を感じる。

そんな終わりを覚悟した時——ドンッ！　ドンッ！　と室外からの発泡音と共に室内の敵が倒れた。

「っ！」

驚くハマドの背後でベランダの窓が開けられ男が一人転がり込み、自分が隠れる机とは違うテーブルの影に滑り込んできた。
そんな影に

「?????　?????　——」

（何者だ？　——」

ハマドが問えば、暗がりの部屋の影から——

「?????　?????　?????　——」

（ハバシユの友です——」

健二はそう答えたのだった。

「佳主馬君」

「？ はい」

恭平と祐平の二人を同時に相手にOMCをしていた佳主馬に、雪子は

「お風呂、入っちゃいなさいね」

「ん、分かりました……っよと！」

「「げっ！」」

雪子に視線を送りながら返事をしていた筈なのに、恭平と祐平を一蹴して勝負を終わらせるあたり、キングカズマの面目躍如と言ったところだろう。

「まだまだ練習」

「んがー！」

「良い線いってると思ったのにー！」

「ははは」

二人の頭に手を置いて、佳主馬は一人その場を後にしたのだった。

「あいつ等も強くなったのな」

こうして会う度にゲームの相手をさせられるが、会う度に彼等の腕が上がっているのが感じられるのは佳主馬にとっても楽しみの一つだ。どこか弟子を持っているかの様な気分になる。思えば健二も、佳主馬にとっての弟子と言えなくもなかったが

「……………まさか、ね」

一瞬、夏希の言葉が脳裏に浮かぶ。

シャドウの影にケンジを……でも、そんな筈は無いのだ。自分の思考を奥へと埋没させ、佳主馬が脱衣所に入れば

「……………」

「……………」

「……………あ」

そこには子供達と……夏帆と真緒が居た。

どうやら風呂から上がったばかりの絶妙過ぎるタイミングでの遭遇であり、タオルで体を拭いている段階の二人は当然――

「きゃー……………」

――黄色い悲鳴を上げるのでした。

「エッチ痴漢変態信じらんない！」

「佳主兄のヘンター……イっ！」

タオルで身を前を隠しへたり込む二人からの罵詈雑言を一身に受ける佳主馬は

「ちちちち違っ！ 誤解だ！ 雪子おばさんが風呂につて」

「こっち見ないでーっ！」

「だ！ ゴメ」

夏帆の叫びに視線を必死に反らせば「っ！ 嘘？ ちょっ！ 駄

目」廊下の角から頼彦達が雪崩込み

「どうしたーっ！」

絹を裂くよな女の悲鳴に、何事かつ！　と男性陣が駆け付ければ

「きゃーーーーー！ーーーーー！」

――再び黄色い悲鳴が木霊した。

「いやーっ」

「お父さん最低！　皆死んじゃえー！」

凄まじい勢いで雪崩込んできた男性陣は、それ以上の速度でその場を退避しようと廊下を掛けるが、曲がり角を曲がれば――

きゃーーーーー！ーーーーー！　とは男性陣の悲鳴。

「貴方達……覚悟は出来ていますね」

そこには薙刀を携えた万理子を先頭に、般若の形相でお出迎えになられている陣内家女性陣の方々が。

陣内家の夜はまだまだ終わらない様だ。

――20..22..32――

「????????　????――

（大統領、これを――

健二は倒れているSPの手から銃を取りハマドへと投げる。

「????????　????　????　????????――

（助かる——」

ハマドはその銃を受け取り、二人は襲撃者へと応戦を始めた。

ハマドは銃を撃ちながら健二の姿を伺う。

SPにも警官にも見えない。彼等に敵対している所を見ると敵の仲間でも無いと思う。だが彼は奇妙に思う。

ハマドの目から見て、健二は銃の扱いには慣れている。だが射撃の腕が良いわけでは決してない。戦いに慣れているとは思えないが、こういった銃撃戦そのものに対する戸惑いは見受けられない。そこには違和感が付き纏った。それに彼の発したあの言葉は——

「???? ???? ???? ???? ——

（ハバシュの友だと? ——」

「???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ?

? ——

（そうです。尤も、短い間でしたが——」

本当に短い間。それは友とは呼べないくらいの接点であるのかもしれない。だが、確かに過去あの時、健二と彼との間には信頼が在った。共に一つの事を成し遂げるための、命懸けの信頼が。

そして実際に、それは支払われてしまった。

「???? ???? ——

（だが彼は死んだ——」

「???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ?

? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ——

（一年前にハワイで……だから僕はここに居るんです——」

「???? ???? ???? ???? ???? ???? ——

（どういう意味だ? ——」

ハマドにとっても彼は友人だった。共に内戦を戦った同志であり、自分の背中を預けあった戦友であり親友でもあった。その彼の名前

を出す人物は、ハマドにとって注目を向けない訳にはいかない。

「?????——」

（それは——」

取り敢えずはこの場を切り抜けてからと言う矢先、健二の視線は自分が撃った男の顔に向けられ

「！ あれは」

自分の記憶を検索する。

「? ? ? ? ?——」

（? 君? ——」

突然、手を停めた健二を不思議に思えば

「?????——」

（大統領——」

「? ? ?——」

（なんだ——」

「?????——」

（援護を——」

「????? ? ? ? ?——」

（何? 無茶を——」

健二はハマドの返事も聞かずにほく前進で倒れている敵へと進み出してしまう。慌ててハマドが援護射撃をして敵を牽制する。その間に、健二は男を物影に引きずり込む事に成功したのだった。

「やっぱり、ムシャリだ」

思った通り、それは敵の幹部だった。

「! ? ? ? ? ? ? ? ? ?——」

（! 何をしてる——」

ハマドの声の先で、健二はムシャリの身体を調べていた。ポケット

それが決して小さくない事を意味していた。それはハマドも認識しているところだ。

今、ここを襲撃しているのは誰か？

ここが襲撃される事を望んだのは誰か？

そして、この襲撃の結末を望んでいるのは？

それぞれの思惑の中で起きたこの状況で、自分の生還を望んでいる者達は、恐ろしく少ないのだろうと言う事も分かってしまった。その中で、今はどう生き残るかと言う事だ。

「???? ? ? ? ? ! ——

（取り敢えず！ ——」

「！」

ハマドの視線の先で、健二はムシャリの装備の中から小さな物体を取り出し、ピンを抜いてみせた。そして

「????? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ——

（ここを脱出します。良いですね——」

「????——

（ああ——」

答えるハマドに笑顔を見せ、健二は催涙弾を廊下へと投擲し、ハマドを連れてベランダへと躍り出た。

「?????? ? ? ? ? ——

（私は行きます。貴方は？ ——」

ここに残り援軍を待つと言う選択肢も在る。だが

「??????——

（私も行こう——」

「?????? ? ? ? ? ——

（援護します。大統領——」

「?????—」

（頼む——」

ハマドと健二は、ベランダから階下へと姿を消したのだった。

——20..35..11——

特機は騒然としていた。

「状況は！」

「S A T到着！ 交戦状態に入りました」

「機動隊、大統領のフロアに到着した模様です」

辻の言葉に次々と状況が帰ってくる。だが

「大統領は」

「まだ確保出来ていません」

「くそっ！」

警備が薄くなった、その間隙をまさに突かれたと言って良い。もっとも重大な事が後手に回ってしまったのは痛恨だ。

「これだけの周到な襲撃を、なんで察知出来なかったんだ！」

隙を突かれた。にしては、あまりにも手際が良すぎた。まるで示し合わせたかのように……

「先輩！ 警視庁から検問の配置補正の要請が、先輩？」

「分かったわ」

答えながら柴田は携帯の呼び出しを切る。いくら鳴らしても出ない電話を

「こんな時に……部長に繋がらないなんて」

理一へ連絡がつかないまま、柴田は自分のデスクへと駆けていく

のだった。

――20..38..20――

理一の姿は、とある刑務所の中に在った。
囚人用の食堂で一人待つ理一の下へ――

「お久しぶりですね、陣内さん」

「元氣そうだね、武藤君」

理一は武藤和夫と再会したのだった。

自分に尾行が付いていることは承知している。それを踏まえた上で健二からの暗号を知られずに解かなければならない。

暗号を解けるであろう人物。

尾行ができない場所。

その二つの条件に一致し、理一が選択したのが、現在服役中のかつての仲間。そして健二の数学の師でもあった武藤だった。

理一がここに来る。それはそれほど意外でも無かったが、この時間に急を要するとなると話は別だ。

武藤には理一の話に見当も付かないが、只事では無いであろう予想は付けていた。

「それで？」

「？」

「僕に、何をして欲しいんですか？ 陣内さん」

「……話が早くて助かるよ」

事情の説明から、とも考えていた理一だったが、どこからどこまでを話して良いものか考えてしまった。そこへの助け舟は正直有難い。

それならば、と理一は要件のみを切り出すことにした。

「この数列の解説を頼みたい」

言って携帯の画面を見せる。そこには意味不明の数字の羅列があり

「これは？」

「これは……」

武藤の視線を正面から受け

「健二君からのメッセージだよ」

「健二君からの？　しかし彼は」　死んだ筈だ。その報せはここに居る自分にも届けられたのだから。

「生きていたんだよ……いや、今はまだ生きていたらしいってところか」

「一体どういう事です」

武藤の視線が強まるのを感じる。だが、だからこそ

「その答えがこの数字に隠されているらしい。だから今は……頼めるかい？」

「……………」

理一と視線をぶつけ合いながらも、武藤は聞くまでも無いだろう

？　と口をほころばせ

「ノートと鉛筆、貰えますか？」

「武藤君」

武藤は、健二の残した数列に挑むのだった。

――20..41..58――

「――聞いてますか？ 大体貴方達には大人としての自覚が足りないんです。いつも母さんが言っていた様に、そもそも陣内家の男子と云うものは――」

陣内家の座敷に正座する九人。

万助・万作・和雄・太助・翔太・頼彦・邦彦・克彦・佳主馬には、万理子の説教が延々と続いたのだった。

そろそろ、色々と限界が近づいている、陣内家男性陣である。

――20..43..19――

ポン！ と地下駐車場のエレベーターが開けば、ダダダッ！ と銃撃を浴びせる覆面が二人。そんな刹那、脇の非常口のドアが開きハマドが走り込んでくる。

すかさずハマドへの銃撃に切り替える二人から、手近な車の影に身を滑らせ身を隠す。

覆面の二人が手で合図を送りながら回り込んで挟撃をしようと示し合わせているとき――

コトン。とエレベーターの中で音がした。

「？」

返事がない助手席を見て……気がつく。

「っ！ 撃たれたんですかっ！」

車内灯を付けばハマドの脇腹が赤く染まっていた。

「くそっ！ ドアぬかれたっ？ なんでこんな」

思わずハンドルを叩くが、すぐに切り替え

「ナビゲーション！」

声を上げれば

『OZナビゲーションシステムによるこそ。目的地迄の音声案内を開始致します』

車のナビを稼働させ

「救急病院」

『現在地から十キロメートル以内に救急病院は五箇所あります』

「二番近く、最短ルート！」

『音声案内を開始致します。この先、三百メートル先、交差点を左折です』

健二は再びアクセルを踏み込み、救急病院へと車を疾走させる。

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840.

— — — — — ! — — — — —

（頑張ってください大統領！　もう少しの辛抱です！――」

額に汗を浮かべるハマド大統領を乗せて。

長野、陣内家。その家屋を双眼鏡で見張っている人影がある。
停めた車によし掛かり見つめている男。その背格好から男性であるとは認識出来る。車の中にも人影が一つ。どうやら二人の人間が、陣内家を見つめている。
そして――

「どうやら外国人、ですかね」

――その様子を、相沢と熊谷もまた、双眼鏡で覗いていたのだった。
ボンネットの上に腰掛けている熊谷は自分が覗いていた双眼鏡を相沢に渡す。

車にもたれ掛かったまま双眼鏡を覗いた相沢は
「向こうの襲撃と関係あるかどうか……っと、物騒な話になってきやがったな」

「？ 先輩？」

「ほれ」

渡された双眼鏡をもう一度覗けば

「！ あららく？ 不味いんじゃないすか？ あれ」

「ああ」

車内からもう一人の外国人が出てきたのだが、そのワイシャツの上にはしっかりとホルスターを装着し、銃の携帯を確認した。

特機の騒動・ハマドの襲撃・理一の失踪。

不穏を増す情勢にあって、さらに銃を携帯している外国人が陣内家を監視している。

今、自分達がどこにどう絡んでいるのか、それが分からない不安が思考を鈍らせる。そんな相沢に

「どうします？ 本部に連絡、入れますか？」

「……………」

熊谷の言葉は正論だ。だが

「まず、抑えてみるか」

「仕掛けますか」

熊谷は自分の銃を抜き笑みを浮かべる。荒事も、まあ嫌いでは無い。
い。

「身柄を抑える。それから確認、でいってみようか」
「了解」

二人は銃の安全装置を外し、

「じゃ、特機のマottoを忘れないように」
「了解です」

互いに笑みを浮かべ、銃を持つ手を軽く上げ――

「撃ちません」

「殺しません」

――互いの銃の台尻をカチンと合わせ言い放つ。

「可能な限り」

笑顔を見せ、彼等は長野の闇へと身を躍らせたのだった。

|
2
0
..
5
9
..
5
9
|

21:00:00~22:00:00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

テロの襲撃に遭ったハマドの窮地を救ったのは健二だった。

特機では警備布陣変更の隙を突かれた襲撃に騒然となる。

陣内家では賑やかに、騒々しく、それでいて平和な時が流れ。

理一は健二からのメッセージを解く為に、服役中のかつての仲間であり健二の師、武藤に面会を図る。

逃亡の中で銃弾を浴びたハマドを乗せ、健二は病院へと車を走らせるのだった。

相沢が陣内家を監視する外国人を見付け……

これは、午後九時から午後十時の間に起きた出来事である。

21::00::00\22::00::00

――21..00..00――

「はあ、やつとだなあ」

延々と続いた万理子のお説教からようやく開放された佳主馬が通路を曲がると

「っと！」

「あ……」

夏帆と鉢合わせしてしまった。

流石にあんな状況を終えた後では、互いに

「「え……っと」

思わず、言葉につまってしまふ。出来るだけ気不味い雰囲気を作らないように――

「あー……その」

「う、うん」

「さっきは、ごめんな」

「いひゃ、うん、気にしてないから、うん」

「ほんと、ごめん」

「うん、そう、気にしてない。うん」

「……………そう」

「……………うん」

――上手く会話を……するにはまだ早い様子だ。

「じゃ、じゃあ」

「うん」

そそくさと自分の横をすり抜けて去る夏帆の後姿を見つめながら、

佳主馬もまた自分の部屋に向かい通路を曲がれば

「佳主兄い！」

「っ！ な、なんだよ真緒」

「……………はぁ」

「真緒？」

思い切り落胆した雰囲気の真緒に怪訝な声を上げる佳主馬だったが、その顔を睨みながら通り過ぎる夏帆は

「鈍感」

「へ？ っ痛っ！」

通りすがりに足を思い切り踏んで去っていった。

「……………なんで？」

佳主馬には、どうにも理不尽な仕打ちに思えたが、「やっぱ、女の子だよな、夏帆も」と、残念な自己完結をして部屋へと向かうのだった。

――21..06..02――

都内の救急指定病院の正面玄関に一台の車がブレーキ音を響かせて急停止する。

何事かと集まる人々を無視して、運転席から降りた健二は、すぐさま助手席からハマドを担ぎ出し院内へと

「誰か処置をっ！ 銃で撃たれていますっ！」

駆け付ける看護師達にそう叫び、運ばれてきたストレッチャーにハマドを乗せる。処置室へと運ばれる最中も健二は彼に声を掛け続

けるがハマドの意識は朦朧としていた。

ダンっ！ とドアを開けば既に数人が居、医師も駆け付ける。

「三！ 二！ 一！」と掛け声と共にベッドに移され、そのまま処置が始まるが

「大統領だって？」

「ホテルで襲撃に遭いました」

医師は処置をしながら健二とやりとりを交わす中で「今ニュースでやってます」「世間は大騒ぎです」と数人の看護師も入ってくる。

「オペ室の確保！ 緊急オペだ」

医師の言葉に看護師達が慌ただしく動く中、そこに「待って下さいっ」

「！ 何するんですっ」

健二は内線を取った看護師を制止し待ったを掛けた。

「私に少し時間を下さい」

医師に食い入る健二に

「君は？」

「SPです」

「だったら彼の容態も分かるだろう。今は一刻を争う、悪いが聞けない。オペの準備をっ！」

「は、はいっ！」

別のドアから処置室を出ていく看護師を苦く見つめ、健二は医師ににじり寄る。

「手術に入れば麻酔がかかる。彼と話が出来なくなる」

「無論だ。そんな状況じゃないだろう」

「五、いや二分でも良い。彼と話をさせてください」

「出来る訳」

「意識を回復させてください、今すぐにつ」

「何を」

健二の言葉に一瞬止まり

「身分証を見せたまえ」

医師は健二の目をまっすぐ見返す。

「先生。無理は承知です。でも今すぐ大統領に聞きたい事が有るんです」

「持っていないんだな」

「私は彼の敵じゃない、信じてください」

「警備に連絡を。ここに不審者が居ると」

「はいっ」

指示を受け受話器を取ろうとした看護師に健二は

「動くなっ！」

「ひっ」

「全員だっ！」

銃を抜き突き付けたのだった。

「君が撃ったのか？」

暗に、大統領の事を指す。

「違います。私が救いました」

「だが今、君は彼を危険に晒している」

「私が欲しいのは彼の命じゃない、彼との時間だ」

「銃を出して語る話じゃない」

「……………」

ゆっくり、健二は銃を医師の前に置き、ただその目を見つめる。

「これはお渡ししても良い」

「……………」

健二の背後から「そろそろだぞ」と医師の声が掛かる。時間はない。

「……………」

（コピーは観ました。でもハバシュと共に失われた——）

「……………」

（君がやらせたのか——）

「……………」

（彼の意味です。私はそれを受け継いだに過ぎない——）

受け継いだ。その願いと志を、今は亡き友と呼べる男から。だからここここまで来れたと確信する。折れず、挫けず、諦めずに。

「……………」

（必要な事だった——）

「……………」

……………

……………

……………

（貴方を責める材料では無い。でも状況は変わってしまったんです。貴方なら、この襲撃が誰の意図したものなのかはお分かりでしょう——）

「……………」

（だが、それでも私は——）

「……………」

（大統領——）

健二は、ハマドの手を強く握ると

―に警官の姿を見た。

「ふう」

チラリと覗いて、健二は病院の奥へと足早に移動を始めたのだった。

――21..20..44――

「侘助君、お客さん」

そう聖美に言われ侘助が玄関に足を運んでみれば

「やあ、お久しぶりですね。陣内さん」

「あゝ、確か……磯貝さん」

「はい。三年振りですか」

OZ・JAPANのセキュリティ責任者として、何度か面識はあった。だがここまで訪ねてくる程の事は無い筈だ。

「なんでここに？」

「一連の騒動、既にご存知かと思いますが」

「まあ、あんた等が慌ててる理由位かな……今のところは」

「今のところ、ですか」

興味深気味に肯けば、磯貝が笑顔を見せ

「我々に協力していただけませんか？ 陣内侘助さん」

「協力？ あんた達に俺が」

「はい。ラブマシーンを独力でお作りに成られた貴方でしたら、我々の大きな助けになっていただけるかと……思っただけですがね」

そう話す磯貝ではあったが、その実もうすでに了承を得なければならぬという雰囲気では無い。

「？」

「その必要も有りませんでしたね」

そう言って、失礼しましたと言って背を向ける。そんな磯貝に「どういう意味だ？」

「ん？」

問う侘助に振り返えり笑顔で答えた。

「お願いしなくても貴方は関わってくるのでしようしね。まったく、つくづく尊敬に値しますよ……貴方達は」

「含みのある言い方だな……何がある」

「別に他意はありません」

そのまま、車へ向かう磯貝だったが「っ？」自分と車の間に立ち
はだかる人影があり

「お聞きしたいことがあります」

夏希は磯貝の目を真っ直ぐに見据えて立つ。

「ああ、お久しぶりです小磯さん。お葬式以来ですか……お元気そうでなによりです」

「教えて下さい。今起こっていることを」

「さて困りますね。そう漠然と言われましても」

「教えて下さい」

一瞬止めた歩みを再び進める磯貝の背後からは「夏希っ！」と侘助がサンダルをつっかけ家を出てきた。近付く磯貝とこちらに来る侘助の姿に、思わず戸惑う夏希の横を磯貝はすり抜け車へ向かう。

瞬間――

「彼、生きてますよ」

「っ！」

「夏希？」

車に乗り込み走り去る磯貝に振り向くことなく立ち尽くす夏希の下に侘助がたどり着けば、愕然と目を見開く夏希が立ち尽くしているだけだった。

――21..29..05――

「――Yes. Now, left home――I understand――」

（――はい。今、家を出ました――了解しました――）

陣内家を見張っていた男は携帯を切りポケットにしまえば――

「Freeze――」

（動くな――）

すぐ横に現れた相沢は撃鉄を上げる音で意思を明確に示す。見れば相棒の背後にも一人の男が現れていた。

「I feel a freeze?――」

（凍死させる気かな?――）

「I Damn it all I still――」

（それでも俺は構わんね――）

ゆっくりと近付き

「Put a gun on the car. Slowly but――」

（銃を車の上に置け。ゆっくりとだ――）

「Please do not feel weird happen. This gun, I'll light trigger――」

（妙な気は起こさないで下さい。この銃、引き金軽いんですよ――）

相沢と熊谷の言葉に顔を見合わせ、意に従う風を見せ、ゆつくりと銃を車の上に置く。

「Over here――」

（こっちに――）

「OK――」

（分かったよ――）

二人を車から離しポケットをまさぐる。

「In? It reaches who you? Why amazing that house?――」

（で？ お前達何者だ？ どうしてあの家を見張る？――）

「There is no need to answer――」

（答える必要は無い――）

「What manner of man I dangle hang and gun――」

（拳銃ぶら下げる男の態度かね――）

「I took permission――」

（許可は取ってる――）

「I took to?――」

（誰に取ってる？――）

「……………」

とくに所持品からめぼしい物が無いと思った時

「先輩」

「ん？」

車の中から手帳の様な物を熊谷が見せるが

「……領事館？」

「本物ですかね」

それはアメリカ領事館の職員である身分証明証だった。

「確認取れ」

「はい」

熊谷が本部に連絡を取っている最中に

「Once the gun attributable――」

（分かったら銃を返せ――）

「What you say maybe melted?――」

（溶けて良いつて言ったか?――）

もう一度、制す。

「Have diplomatic privileges――」

（外交官特権がある――）

「Once you have confirmed that――」

（確認が取れたらな――）

溜め息を漏らしながら再び相棒と並び無抵抗を示す。どのみち、直ぐに確認は取れると確信を持っている故の余裕だろう。二人には特に焦る雰囲気は無かった。

そんな態度を見れば、相沢にも確信が生まれる。おそらくは領事館職員である事は確かなのだろうと推測出来たのだった。

――21..33..01――

「――これで……っし!」

「出来たかい」

「ええ」

刑務所で理一の前でノートに数字を殴り書いていた武藤は、十桁の数列にたどり着いた。その数列を渡されて

「さて。健二君は何を僕に……武藤君にはこの暗号の意味、わかるかい?」

もう一度、ノートを武藤に差し戻す。

「……これは暗号なんかじゃありませんよ」

「? 違う?」

「ええ。これは只の電話番号ですよ」

「！」

もう一度紙を手に取り

「……そうか」

合点がいったと立ち上がる。

「助かったよ、武藤君」

「どういたしまして」

それじゃ、と言って立ち去る理一に

「それにしても……」

「？」

背後から武藤の声がかかる。

「健二君の生存が発覚してから特機に内調が押し寄せるまで……随分とスピーディーだったと思いませんか、陣内さん」

「……武藤君まさか」

振り返る理一に――

「多分居ますよ……裏切り者が、ね」

――21..40..18――

「はい。了解です。じゃ」

電話を切った熊谷は相沢により

「確認、取れました」

「……だろうな」

相沢と熊谷の会話を待っていたかの様に振り返った二人は

「I know that seems like――」

（どうやら分かった様だな――）

「I'll let you return the gun――」

（銃を返して貰おうか――）

悠然と振り返った。

「日本語でも分かんのかよ」荒々しく車の上の拳銃を手取るが

「Hey――」

（おいっ――）

声を見無視して相沢は拳銃から弾を抜き、そのまま銃を投げつけた。銃を受け取った男に相沢は近付き、その視線を叩きつける。

「Jane I'll put it in front of my face now?――」

（今後俺の前にその顔出すじゃねえぞ?――）

「I put out to do? We have diplomatic privileges――」

（出したらどうするんだ? 我々には外交官特権がある――）

「I know I――」

（知るかよ――）

互いに譲る気配はなく

「Whether the president would involve deaf king. If I get in the way of the investigation and arrest whoever... And found (王様だろうが大統領がろうが関係あるか。俺の捜査の邪魔をするなら...誰であろうと逮捕する。分かったな――）」

相沢と睨み合う男をもう一人が制し、二人が乗った車はそのままその場を後にした。その車を見送りながら

「しかし、何ですかね」

「ああ」

視線を目的の家屋に移す。

「アメリカさんがなんだったってあの家を見張るんだ?」

「ええ」

自分達の見えない所で、事態は進んでいるのだと感じる二人だった。

――21…43…55――

健二は独り、廃屋で食事を取っていた。

病院から抜け出した健二はコンビニで購入したパンを、灯りもない廃屋で食べ終わり、壁に寄りかかって座り込む。精神的にも肉体的にも、自分は限界に来てると感じる。

意識がゆっくりとまどろむ。

暗い意識から……甦る……記憶……



衝撃が有った。

激しい衝撃と恐怖、焦り、困惑……気が付けば多くの悲鳴や悲痛の声の中で意識が戻った。自分の乗った旅客機が墜落したと認識するまでに数秒を必要とした。

やがて、意識と認識が一致してくる。

「……生きてる……」

それが最初の認識。まず、そこから始めた。

見る限りの周囲は……酷い有様だった。まさに惨状。隣を見れば「君っ！」

隣の席には親子三人で旅行に来ていた高校生の男の子。その彼は「……駄目か」

既に、こと切れていた。

生き残った数人と共に機外に這い出れば、海上保安庁の船がこちらへと向かってくるのが見えた。

巡視船の甲板で他の救助された者達と共に毛布にくるまる健二だったが、甲板の上にはそぐわない人物数名を見る。スーツ姿で保安庁の者とも思えなければ無論被害者でも無い。

真っ先に到着した筈の巡視船に部外者が乗る。それは考えられない。

そんな漠然とした不審を持って密かに注視していれば、彼等と巡視乗組員の会話が聞こえると

「十四のK近辺の救助者でしたら……あの辺に」

「そうですか」

（なんでっ！）

確かにそう言った。だがそれは自分の席だ。

思わず背を向けるが男達がこちらに向かってくる気配を感じる。

混乱はしているが思考を停止してはならない。健二は咄嗟にポケットから鍵を取り出し

（痛っ）

「あんたっ！ 血が出てるよ」

「すいません。機内での傷が開いたみたいで」

「すいませんっ！ この人怪我してます」

健二は額の横から血を流していた。

毛布で傷を抑えているが血で染まり出し、それを抑えながら船員に医務室へと案内されていった。

「一応、えっと貴方」

「あ、……岩井俊治です。十四のJです」

「岩井さん岩井さん……あ、はい。確認しました。ご両親は……」

「ええ……分かってます」

「そうですか……さ！　こちらへ」

「はい」

やり取りを横目で見ていたスーツ姿の男達の横を通り抜け、健二と船員と共に船内へと姿を消した。

「さっ、これで出血は止まりますから」

「ありがとうございますっクシヨン！　すいません、濡れたままだったもんで」

「はは。そうだ、着替え、作業着でよければありますよ」

「あ、すいません」

「気にしないで、な」

「……はい」

着替えを取りに席を外す船員に頭を下げながら、健二は自分の手荷物に目を移す。

「………まさか」

中の物は今朝ハバシユから手渡された物が入っている。

確かにコレを不都合に思う者達に取って、それは致命傷となる物だろう。あるいはココまでする必要も有るのかも知れない。だが幾ら何でも早過ぎる。だとすれば

「嘘だろ……」

自分の考えを、否定する材料を必死で模索した。

下船時、自分の名を呼びながら自分を捜す――夏希の姿が飛び込んでくる。

今すぐに駆け寄りたい衝動にかられる。だが
「っ！」

少し離れた場所で、他の者達と違い夏希を見つめている数人の姿を見付けた。それは船で見たスーツ姿達と同じ雰囲気を持っている。健二は、自分の名を叫び続ける夏希に――

「……」

――背を向けた。

ここまでする相手に自分の生存を報せる訳にはいかない。そう、なにがあっても。

船を降り騒然とする混雑を抜け出し一人――

「健二――っ！」

――聞こえる夏希の声に最後に振り向き、その愛する妻の姿を目に焼き付ける。そして振り解く様に振り返った健二の瞳には、明らかに憎悪の炎は宿っていた。



廃屋で健二が目を開ける。その瞳には――

「……」

——あの日となんら変わる事の無い、憎悪の炎が宿っていた。
健二は立ち上がり廃屋を出ると、右手を上げタクシーを止め乗り込んだのだった。

——21..55..13——

理一が刑務所に預けていた所持品を返却してもらい携帯の電源を入れると、直ぐに電話が鳴る。p1と出れば

「陣の」

『部長ですかっ!』

「っと、柴田? どうした」

『良かった繋がった』

「何があった」

理一は直ぐに切り替えるが

『ハマド大統領が襲撃されました』

「何っ! それで、大統領は」

『銃弾を受けて救急病院で緊急手術を受けてます』

「襲撃犯は?」

現状を、把握する事に務める。

『こちらの突入部隊と交戦、全員死亡です』

「そうか」

『それで部長...健二君なんですが』

「っ! 足取りがつかめたか?」

それはこの局面の重大な鍵だ。

『ハマドを病院にかつぎ込んだのは健二君みたいなんです』

「何だって? 彼が居たのか? その襲撃の場に」

『そのようです。襲撃の中、突入部隊より早く駆け付けて入れ違いにホテルを飛び出した』

敵か、味方か……健二の立ち位置が微妙になる。

『ハマドを病院に残してまた姿を消しました』

「……そうか。また進展が有ったら連絡頼む。大統領の病院へ向かう」

『了解です』

電話を切って車に乗り込んだ理一はキーを差し込み回す前に、武藤の書いた数列を見る。

「今日がつくづく……電話に縁が有る日だな」

理一はその番号をコールする。すると

『OZメッセージサービスです。保存されたメッセージが一件あります。保存されたメッセージを再生する場合には一を。次のメッセージを再生する場合には二を。消去する場合には三を。もう一度ガイダンスを聞きたい場合には四を押してください』

理一はp1と一をプッシュする。

そして理一の耳に……

『理一さん……健二です』

——21..59..59——

22:00:00~23:00:00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

ハマド大統領を病院に運び込み、彼から質問の答えを引き出し健二は病院を後にした。

陣内家にOZの機員が姿を現し、意味深な言葉を残してその場を去る。

相沢達が確保した者達はアメリカ領事館の人間だった。

武藤に暗号を解読してもらった理一は刑務所を後にするが、彼から裏切者の可能性を示唆される。

特機からの連絡を受けハマド襲撃の報を知らされた理一が、暗号の解である番号に電話を掛けると……

これは、午後十時から午後十一時の間に起きた出来事である。

——22:00:00——

理一の耳に届いた声は、久しぶりであろうとも聞き間違ふ事のない、小磯健二の声そのものだった。

『理一さんがこのメッセージを聞いている時、僕は特機の皆さんに多大な迷惑を掛けた後だと思います。本当にすいませんでした』

「……健二君」

只のメッセージの向こうで、申し訳無さそうに肩を落とす彼の姿が見える様だった。どこまで行っても、どれほど変わっても、健二は健二なのだと思ってしまう。

『詳しい話をしている時間は有りません。おそらくこれを理一さんが聞いている時、僕を取り巻く状況は厳しいものに成っているでしょう。最悪、僕はもう生きては居ないかも知れません。色々な事態は想定していますが……何処まで噛み合うかは正直……分かりません』

「想定、か」

毒ガス強奪。複数の身分詐称と不法な入国。特機侵入とデータと装備の強奪。大統領襲撃事件と救出。そしてOZのシャドウと闇。

一体、何処までが想定内でどこからが想定外なのか、今の健二の事を推し量る術は理一には無い。

『もし……僕が死んだ場合、これが最後の鍵になります』

「健二君？」

一瞬、身を正す理一に、メッセージは告げた。

『吉祥寺郵便局の私書箱五十四……僕が届かなければ理一さん……後の事はお願いします……それじゃ』

プツリと切れれば『お預かりしたメッセージは以上です。もう一度再生する場』流れるガイドダンスを無造作に切り、理一はキーを回す。

「ここに来て俺に役を回すとはね、健二君っ」

思い切りアクセルを踏み込み、理一は刑務所を後に走り出したのだった。

――22…08…19――

「健二、か……夏希先輩の中ではお前、まーだ生きてんのな」

夏希から頼まれてシャドウを調べている佐久間は、どこか疲れた様にモニターの文字記号の羅列に呟く。

別段、健二が生きてると夏希に言われたところで、彼女がどうかしてしてしまったのではないかと疑うつもりはない。ただ、彼女がああの時のあの場所で、止まったままなのだろうと痛感するだけだ。

それが良い事だとは思わないが、悪い事だと言い放った所で、何一つ事態が好転するものではないと理解はしている。

今やっている解析だって、出来る限りの解析の結果、それが夢で有ったのだと伝える為の作業に過ぎない。過ぎない――筈の工程の中で

「……………おい」

佐久間の視線が一点に止まる。

「なんだよこれ」

何の気なしの解析の中、佐久間の目に止まったソースコード。
それを調べ、広げ、追う。やがて漠然とした羅列が形を成せば。

「っ！ ……ガチで？」

佐久間は、一つの情報にたどり着いた。

それは健二生存の情報では無い。無論、シャドウが健二であるという確証でも無い。ただ

「……なんで今更」

それはシャドウのアバターの構成情報だ。ただ、それは今の形を取る前の情報。元々のソース。

そのソースを元に組み編み出されるアバターの姿は――

――ケンジだった。

だがそれは特機やOZが裏付けを取り、彼の死後にはアクセスされていないアバターでは無い。その鳥人間のアバターでは無く、もっと前。

あの夏の朝焼けの中。世界で只一人解答に辿り着き、そして彼の手を離れ世界と戦争を始めたもの。

最初に奪われ……最後まで取り戻せなかった――

「……ケンジ」

――あの夏の小磯健二のアバターが、モニターに映し出されていたのだった。

陣内家の縁側に、呆然と座り込んでいる夏希の背後から

「夏希」

「……」

語りかける侘助に、返る返事はない。

あの後、磯貝が帰った後に、夏希は侘助に食い下がった。何故――

「なんで健二はここに居ないの？」

「あいつがそう言ったのか？」

「やっぱり生きてるんでしょ！ 叔父さんだってあの人から」

「落ち着け夏希っ、俺は何も聞いてない。夏希、磯貝がお前にそう言ったのかっ！ 健二が生きて」

「――きてる」

「夏希？ ……おい、夏希っ！」

侘助の腕をすり抜け、夏希はふらふらと歩み始めた。その足取りは臍気で不確かで……ただ小さく――

「……てる……生きてる……生きてる……生き――――」

「夏希……」

――呟きながら庭を歩きだした夏希を、侘助は見送るしかなかった。

縁側に座ったまま時を止めてしまった夏希を、皆が不安そうに見つめていた。その中で理香は携帯を開き【理一】のアドレスに指がかかるが、ふ、と見るテレビの画面ではハマド大統領の襲撃事件が大きく報道され続けていた。

まるで映画を思わせる様な銃撃戦の跡や燃えるホテル上階の光景

は、それだけで事態の大きさを自分に伝える。おそらく、理一は今
とんでもなく慌ただしい中で奔走している事だろう。

身内の事とは言え、プライベートの問題を持ち込んでいい状況で
は無い。そう判断し携帯を閉じる。今はただ返らぬ答えに、それで
も聞かずにはいられない。そんな理香であった。

「一体……何が起こってるのよ……」

——22…17…49——

piriri! piriri!

もうこれで六度目のコールだ。

一度目は拒否し、二度目は怒鳴った。それから先は出ようともし
ない。

「……いいんすか、先輩」

「構わねえよ。ほっとけ」

「でも」

熊谷の言葉を軽く無視して、相沢は車によし掛かり陣内家を眺め
る。

二人には特機に帰還の命令が届いていた。無論、状況の説明を聞
いてみれば捜査方針の転換としか答えがこない。現場の指揮権が内
調に移った為の仕切り直しと言った所だろう。大統領襲撃の現場に
健二が居た以上、彼が長野に姿を現す可能性は無いに等しい。今は
人員は貴重であり、二人にも東京で任務に当たれとの事だったが

「俺は陣内部長の部下であってあんたら内調の手足じゃない。命令
の変更なら部長を通してくれ。だったら東京でも北海道でも行って
やるよ」

と、相沢は内調の指令を敢然と拒否していたのだった。

「これは明らかなサボタージュだ。貴様、覚悟は出来てるんだろうな」

「脅しは相手を見て言えよミスターキャリア。査問や懲罰の覚悟なんざハナからしてねえよ。死ぬ覚悟ならとっくにしてるけどな」

「だったら今から覚悟しておくことだ」

「そいつはご親切にどうもっ！」

そう言っただけで無線を切つて以来、特機からの通信には出ようともしない相沢だった。

「いーんすかねー。つか、なんで内調なんですかね？」

どうにも板挟みで困ってしまう熊谷ではあったが、それでも納得出来ない点では相沢と同じだったので、その行動を共にしようとは決めた。だが気にはなる。

「大統領も襲われたし小磯健二にVXガス。停電とOZ、それにアメリカ。はっきり言って滅茶苦茶なタイミングですよ」

「俺にもさっぱりだ。だいたい考えるのは俺の性に合わんしな。だからこんな時は……」

「？　こんな時は？」

伺う熊谷に笑顔を見せながら言い放つ。

「上司の命令を聞いとくのさ」

「上の命令は無視してますけどね」

「内調になった覚えはねえよ」

「ま、わかりますけどね」

相沢と並んで車に身を預け、熊谷もまた陣内家に視線を戻す。

「気が付いたら事件は終わっていた、って事に成んなきゃ良いんですけどっ！」

「どうやら」

piriri! piriri!

「勤勉だな」

七度目のコールが、また鳴り出したようだ。

——22..23..29——（ロンドン——13..23..09——）

ジェフリー・ミリガンは開けられたドアをくぐり、リムジンの後部座席のシートに身を沈ませる。まるで見計らったかの様に車内の電話が鳴り、ジェフリーもまた、それが当然の様に受話器を取る。

『Surgery is to succeed President Ahmed. The planned infailure——』

（ハマド大統領の手術は成功した様です。計画は失敗に終わりました——』

『Found——』

（わかった——』

失敗を聞かされた所で、彼に気落ちする素振りなど毛ほども見受けられない。

それは、その必要も無いからに他ならない。

ジェフリーはそのまま電話を切り、携帯を取り出してコールする
と——

『Willy McGregor——』

（ウィリー・マクレガー——』

「It's me――」

（私だ――）

その相手はウィリー・マクレガーだった。OZの極東マネージャーであり、今では軍産企業レッドフォードの幹部にまで成った男である。

「First plan is failing. White migration to the second plan――（ファーストプランは失敗だ。セカンドプランに移行しろ――）」
『I understand――』
（分かりました――）

そのまま電話を切り、ジェフリーは車の後部座席でタバコに火を付けるのだった。

――22..29..54――

特機のデスクに鳴る電話の一つ。そのコールに佐橋が出れば

「外線？ ……部長に、ですか？」

「どうしたの？」

不思議そうな声を出す佐橋に桑田が聞けば

「それが、部長に外線なんですけど」

「こんな時に？ 今は繋げないと言いなさい」

「はい。受付でもそう言ってるみたいなんですけど」

「？」

桑田の言葉に佐橋も同意するが、それでも言い淀む佐橋に疑問を持たず

「それがどうも、今までにも何回か部長に直接繋げていたみたいで、部長からはこの外線を通していいと許可も出てるみたいなんです」

「交換に？」

「はい。それで……どうします？」

少し考え込むが

「相手は？」

「はい、佐久間と名乗っていると」

「佐久間君？ それを先に言ってよ」

「え？」

「私が出るわ。デスクに回して」

「あ、はい……繋ぎました」

「ありがとう」

席に座り自分の前の受話器を取り、桑田は懐かしい声に耳を傾けた。

「佐久間君？ 久しぶりね」

『っ、桑田さんですか？』

「そうよ、元気だった？」

『はい。桑田さんもお変わりなく。ご無沙汰しています』

「そうね……あの時以来、かな」

『……ですね』

健二の葬式で顔を合せ、以来、佐久間は特機とは距離を置いていた。

「それで今日は？ 悪いんだけど部長は席を外してて」

感慨にふけっている場合ではないと、桑田は話を切り出す。

『みたいですね。さっき携帯にかけたんですけど繋がらなくて。スクランブルが掛かっているみたいなんで』

「ま、事件が事件だし、上へ下への大騒ぎよ」

『分かります。こんな時にとも思っただんですけど、もしかしたら今

の件に関わる事になるかとも思いまして連絡を』

「それは？」

『え、と』

一瞬、話あぐねる佐久間だったが

「部長には伝えるわよ。こっちからは連絡も取れるしね。一応、信用してくれると嬉しいんだけど」

『ははは。信用はしていますよ。ただちょっと馬鹿げた話でもあったもんで』

「聞くわよ。君の話だもん」

健二の相棒として、佐久間の存在も特機では鳴り響いていた。彼等二人は、いつも自分達の世界観を揺るがせていたと思い起こす。そしてまた、佐久間は桑田の世界を揺さぶった。

『実はOZを騒がさてるシャドウってアバターの事なんですけど』
「！ それならコッチでも追ってるわ。何か分かったことでも有るの？ あるなら教えて」

『はい。それが……あのアバターを解析していて、ちょっと妙な事になりました』

「妙な事？」

どこか歯に物が挟まった様な物言いだ

『……アバターを解析していったら、ケンジに行き着いたんです』
それは、桑田の声を落とすに充分だった。

「ケンジって……健二君の事？」

『はい。と言うか、あのアバターは健二のアバターなんですよ』

「健二君の？」

『あ、って言うってもあいつが最後まで使ってた奴じゃなくて、奪われて消えた筈の奴です』

「？ それってどういう」

今一つ分からない桑田だったが、それは佐久間の説明で納得する

事になる。

『ラブマシーンですよ』

「ラブマシーン？」

『はい。ラブマに最初に奪われたのは健二のAvatarでした。あいつがOZのパスを解いちゃって、それを切欠に奪われて混乱が始まった』

「そうだったわね」

『あの時、最後まで取り戻せなかったのは健二のアカウントです。結局そのままラブマシーンと一緒にOZに消えた筈でしたが』

「それがシャドウになって現れた」

『はい』

シャドウと小磯健二が、確かに繋がった。

『まさかとは思いますが……健二が生きてたなんて話は……無いとは分かってるんですけど。一応、理一さんの耳には入れておこうと思って』

「そう……」

桑田は考えた。他の相手なら考えるまでも無いが、相手が佐久間である以上、ここは自分にとっても分岐点だ。そして

「……ねえ、佐久間君」

『なんです？』

「もし……それが健二君の仕業だとしたら？ 貴方……どうする？」

桑田は、勝負に出る。

『は？ 何言ってるんですか桑田さん。そんな訳』

「それが有るのよ」

『まさか』

「OZから始まって今の大統領襲撃事件に至るまでの過程で、健二君の指紋が検出されたの」

『そんな馬鹿な！』

無論、佐久間には信じられない。

「本当よ。今は重要参考人として追われてるわ。部長もその件で飛び回ってる。彼がどういう位置取りでどう絡んでくるのか、それすらも彼に聞かなければ分からない状況なのよ」

『健二が……生きて……』

どこか呆然とした声が聞こえる。そこに、桑田は入り込む。

「佐久間君。例えば貴方なら、健二君の行方を追う方法、思い付かないかしら？」

『健二を、ですか？』

「状況は切迫してるの。私達だったらまだ安全に確保出来るけど、場合によっては彼にたいして強行な手段を取られる事も有るの」

『なんでそんな』

「今はそんな非常時なのっ。ねえ佐久間君……貴方なら、どうする？」

『……………』

電話の向こうで黙り込む佐久間の気配。桑田に取っては賭けでしかない。自分は機密情報を一般人に漏らしているに等しい。これを誰かに咎められればそれで全ては終わりだろう。だが、上手くいけば――

『……OZの……ログを調べれば、次に健二がOZにアクセスした時に追えると思います』

「え？ でも、そんな情報は一度も」

上がってはいない。誰もシャドウの痕跡は追えなかった。だが佐久間は追えると判断した。

『二十四時間、いえ、十二時間でも十分でしょう。OZにアクセスして全く動いていないアカウントを張るんです』

「アクセスして動いていない？ だったら意味無いじゃない。シャドウはアクセスしてるんだし」

『そうです。シャドウにはアクセスしています。でもそのアカウント

トは昔の健二の物です』

「あっ」

——桑田は賭けに勝ったと気付いた。

『OZはその性質上、使用されなくなったアカウントに付いても厳重に保護します。って言うか手付かずのまま放置ですね。だからアカウント情報が消えることはない』

「だからシャドウが存在している」

『ですね。誰にも破れないセキュリティであるからこそですが、本人が生きているとなれば話は別です。でも死人がアクセスする訳にはいかない』

「すぐに存在がバレるもの」

『だったらアクセスは通常回線を使うんです。IDだけ取得してアクセスするアカウントは別物です。様はアクセスポイントの設置場所の問題だけです。認証して入るんじゃない、入ってから認証を取り直す。そうすれば』

「そんな事出来るの？」

『なりすましてのはそんな感じです。自分で入って誰かになります。今回はその逆、偽名で入って本人に戻る。現状、OZの関与無しに十二時間の生活は難しいですよ。誰だって、知らず知らずの内にOZを利用している。本人の意思に関係なくです』

「入ったは良いけど動かさないって事は」

『入った人物の動かしてるアバターは別物って事です』

「それを追えば」

『OZに協力してもらえば判明は容易でしょう。次に健二がアクセスした時、何処からアクセスしているかの特定は可能な筈です』

「そう……そうすれば健二君の位置を特定出来る、か」

桑田にとって、それは十二分な成果といえた。

『桑田さん?』

「! なんでもないわ。ありがとう佐久間君。こっちでもその線、

考慮してみるわね」

『でも健二に限って犯罪を犯すって事は』

「私もそれは同じ意見よ。でもだからこそ、今は一刻も早く健二君を確保しないと……部長にも伝えておくから、電話、切るわね」

『はい、よろしく願います』

「いいのよ。また何か進展したら連絡するから、それじゃ」

『はい』

カチャと受話器を置いた桑田は一呼吸入れ――

「あ、河合さん。こっちの解析頼めます？」

「襲撃犯の所持品？　良いけど何か有った？」

通りかかった先輩に声を掛けると立ち上がり

「ちよつと外務省に提出した資料ミスちゃって。スグリア関連なんだから向こうさん敏感で」

少しへこんだ風を装う。

「ご愁傷さま。こっちはいいから行ってきなさい」

「すみません」

席を明け渡し足早に発令所を出た桑田は、そのまま横の備品室へと身を滑らせ

「……桑田です」

携帯電話を取り出し掛けた。

「はい、刑務所から部長が姿を消したのはこちらでも確認しています。おそらくは武藤受刑者と……その件ですが」

桑田は、一層声を忍ばせ

「彼が次にOZにアクセスすれば追えるかも知れませんが……ええ。おそらくは……はい。手順は――」

健二はタクシーを降りると、そのまま目の前の郵便局へと歩を進めた。

吉祥寺郵便居の私書箱コーナーへ向かい、そのまま自分の契約している五十四を目指す。

辺りには特に人影もなく、健二は慣れた手付きで扉を開き、中から小さめのジュラルミンケースを取り出した。

「……さて、と」

郵便局を出てすぐ脇に有る、バス停のベンチに腰を下ろし、ケースを開けると、中には小型のPCと数本のコード。そして古びたハードディスク。

健二はポケットから部品を取り出しPCに取り付けOZへとログインすると、PCとハードディスクをコードで繋ぐ。

「頼みますよ、大統領」

カタカタと目まぐるしく画面を操作し、ある認証画面で手を止めれば――

《The devil came from the sky》

――と打ち込んだ。あの時、ハマドが言った言葉。

悪魔は空から来た、と。そして

「っし！」

画面は次々と展開し、やがてそれは一つのフォルダを表示する。

そのフォルダの中にある一つの動画ファイルをクリックして

「……ああ……取り戻したよ、ハバシュ」

健二は一人、亡き友へと奪還成功の報告をしたのだった。

廃病院の中でモニターと格闘している男に、アシズ・シャラビーは静かに歩み寄り

「???? ? ? ? ? ? ? ? ? —

（どうだ? —

その声には急かすものは感じさせない。だが、ここに居る者は彼を知っている。

「???? ?

???? ?

???? —

（どうしても解除出来ないんです。これじゃあ侵入出来ない——」

「???? ?

???? ?

（コントロールを奪えなければ計画がどうなるか分かっているんだろうな? ——」

「???? ?

? ?

???? ?

（分かってます。でも話が違うっ。俺は言われた手順で侵入しているんだ! 誰かが邪魔してる——」

「???? ?

（そうか——」

アシズは穏やかに笑みをたたえ、男の肩を小さく叩いて

「???? ?

???? ?

（お前はよくやってるし信頼してる。まずは落ち着け、な? ——」

[.....]

「はい。なんとかしてみます——」

$\left[\begin{array}{ccccccc} \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \\ \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \\ \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \\ \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim & \sim \end{array} \right]$

「ああ、頼むよ――」

もう一度、ポン、と肩を叩き数歩通り過ぎたアシズは徐ろに振り返り、その手に持った銃を男に向け――

バンツ！
と銃声を響かせた。

呆然とする数人の中で、モニターの前に崩れ落ちる男を無表情に見下し、アシズは残った男に視線を向ける。

「.....」

（続けろ――）

$$\lceil n.n.n.n.n. \text{---} \rceil$$

「わ、わかりました——」

さつきまでより必死にキ―を叩く男を見て、アシズは部屋を出て別室へと赴く。そこには既に武装を済ませた数人が待機しており

[.....]

~~~~~

（友は失敗した。諸君……覚悟は充分か？——」

アシズの言葉に皆は一斉に気合を現し、それを満足気に見渡したアシズは高らかに言い放つ。

[.....]

~~~~~

「全員車に乗れ。すぐに出発する――」

その号令の下、数人の武装集団は二台のバンに乗り込み、廃病院の敷地を走り出していくのだった。

――22..57..20――

PCの電源を落としてケースを閉じた健二の前に、キィッ！と一台の車が停まる。

「っ！」

一瞬、見紛える健二だったが、直ぐに開いた運転席のドアから顔を出した人物を見て、その緊張感を解くことになる。そこには

「久しぶり、で良いのかな？ 健二君」

「理一さん！」

陣内理一と小磯健二の再会の時だった。

話したい事は山のように有ったが、取り敢えずは今すべきことは互いに理解していた。

「話の中で聞こう。早く乗ってっ！」言っ、理一は一足先に運転席に戻ろうとした――時。

「はい、っい？」

応える健二に人影がドスンッ！ とぶつかって来たかと思えば――

「っの、はうぐっ！」

ズルリ、と崩れ落ちる健二。

「健二君？」

再び立ち上がった理一の視界の先で――紅に染まったナイフを健二の腹から引き抜いた男は冷たい視線を健二に浴びせ呟くだけ。

「不要以？是坏？――」

（悪く思うなよな？――）

腹を押さえ僅かに倒れる事を拒絶した健二は、抵抗虚しく自ら流したの血の上に膝をついたのだった――

「健二君っ！」

――22..59..59――

23::00::00<24::00::00(前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

佐久間はシャドウの解析を進め、その先に健二のかつてのアバターを見付け出すが、その情報は桑田へと渡る。

陣内家では磯貝から健二生存を聞かされた夏希が呆然と時を過ごしていた。

特機からの呼び出しを無視し、相沢達は夏希を見張る。

ロンドンで電話を取る男の掛けた先で、ウィリー・マクレガーが指示を受けた。

理一が健二のメッセージを受け車を走らせ、健二との邂逅を果たしたとき、彼の目の前で健二は凶刃に膝を付き……

これは、午後十一時から午前零時の間に起きた出来事である。

――23..00..00――

悪く思うな、と健二を刺した男は崩れ落ちる健二が手にするケースに手を伸ばすが、取り上げようとしたケースから健二の手が離れていない。

「什麼？――」

（なに？――）

一瞬の驚きと視線の先で――

「對不起――」

（ごめんね――）

――血に染まった右手に銃を持つ健二の姿が。

タンッ！ と響く銃声と共に、男は眉間から血を流し人生の幕を下ろしたのだった。

「不心疼……我請――」

（悪く思わないで……下さいね――）

銃を手放しながらその場に倒れ込む健二を「健二君っ！」間に合った理一が抱き留める。

「しっかりしろっ！」

「はあ はあ」

「くそっ！」

息が荒い健二からの返事はない。止血を、と動こうとした時、気配を感じれば

「っ！」

慌てて助手席のドアを開け放てば、そこにガン！ ガン！ と銃

弾が撃ち込まれた。

「早いな」（健二君か俺か……もしかしたら）敵の動きに舌を打ちながら、理一は後部座席に健二を放り込み、そのまま助手席から運転席に滑り込んだ。

「まったく――」

理一はそのまま車を後進させると、ターンを決めて謎の追手集団を振り切る。後部座席に横たわる健二を見やりながら

「――君と居ると驚きが絶えないね、健二君」

「ど……どうも」

「当ては有る。頑張れよ」

「は、い」

理一はアクセルを一杯に踏み込むのだった。

――23..03..59――

「じゃ、私寝るね」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

夏帆と言葉を交わし自分もあてがわれた部屋へと向かう。

佳子は母と共に別の部屋だ。他の子供達と一緒に既に夢の中だろう。部屋には父と自分の分の布団が敷いてあった。父は他の親戚と一緒にまだ宴の最中だった。酔い加減から見て、そう長く無いうちに戻ってくるだろう。

「ふう……なんか、疲れたな」

布団に入るでは無しにそのまま掛布団の上に寝転がる。高い天井をぼんやりと眺めるが、ふ、と記憶が甦るのは

「っ！」

一瞬、風呂上がりの夏帆の姿が脳裏に映る。誰も居ないのに何故か顔に熱が灯るのを感じるし、それを誰にも見られない様にうつ伏せに転がる。

好きとか嫌いとか。実際の所、夏帆に対して特別な感情を抱いた事は無かったし、考え込む必要も考えなかった。なんとかく昔から一緒に居て、これから先も一緒に居るのだと漠然と思っていた。

「……そんな訳、無いんだよな」

力也が夏帆を好きだったなんて初めて知った。改めて、彼女は女で自分は男だとあの衝撃の光景は自分に解らせた。そんな中、自分は……

「……恋愛、か」

まだ、彼女に対する自分の気持ちは分からない。ふ、と二の腕に撒かれた包帯に指を走らせる。

愛する者を失った女性に、愛する者を想って付けられた傷。健二はどこだ？ と自分に向けられた、夏希の狂眼を思い出す。そして言葉

「まさか……ね」

小磯健二が生きている。

確かに自分だってそう思いたい。そう願いたい。でもそれはあまりに無茶な話だ。なんと言っても一年前には彼は死んだのだから。死体を発見することは出来なかった。だがだからと言って生存の可能性はもっと発見出来ない。第一、もし彼が生きているのなら一年もの間、自分達に、なにより夏希に連絡を入れない訳はない。

「……俺だって……そう思いたいけど……」

シャドウとの戦いを思い出し、ぼんやりと思う。

（似てる、か）

シャドウの動きとケンジの動きは、確かに似てる。あれを見た夏希がケンジだと言い出しても、それはそれ程的外れな意見でも無いだろう。

だが――

「……馬鹿だな、俺」

――身を起こしてズボンを脱ぐ。我ながら有りもしない可能性に乗りうかと思ってしまった自分に溜め息をついた。

「寝よ」

部屋の灯りを消し、佳主馬は慌ただしかった一日に幕を下ろしたのだった。

――23..11..26――

キィッ！ と車を停め運転席を飛び出した理一は、すぐさま健二を担ぎ出し目の前のドアを足で開け放ち入り込む。

「先生っ！」

理一が健二を運び込んだのは裏路地にある小さなビル。その中のひとつのドアだ。

「先生っ！ 倉光さんっ」

待合室らしいベンチに健二を寝かせ大声を上げていれば

「んだよ。誰かと思えばお前か陣内」

「倉光さん」

「何だよ。今日は誰の手掛かりを探してるんだ？ って、ん？」
灯りをつければ血にまみれた健二の姿に真剣さを取り戻す。

「こいつは？」

言うやすぐに健二に駆け寄り健二を観る。

「親戚です。ナイフで刺されました」

「見りゃ分かる。で？　こんなゴミ溜めに連れ込んだって事は訳有りなんだな？」

「はい。今はまだ」

「つたくメンドクせえ」

ここは無認可の闇医者診療所だった。

暴力団や不法滞在者などを診る違法な無免許医。だがその腕の確かさは表の世界の医師界においても定説となっている男だ。倉光の医療行為が黙認されているのも、倉光の患者の中には政財界の大物も多数含まれているからだとの評判だったが、実際のところは定かではない。

理一はかつて捜査の一環で倉光との出会いを果たしたが、法に触れても患者を助けることを優先する倉光には意気を感じる部分もある。上からの方針での摘発命令でも無い限り理一が手を出すことは無いし、手の届く範囲の事で有るならば擁護もしてやりたいと思っ
てもいる。

現実問題、彼のおかげで命を拾う者が後を絶たないのは事実なのだから。

現状、今の健二を普通の病院に連れていくのは得策ではない。誰が誰の意図でどう動いているのか。実際のところ、事件の事を把握しきれていない自分にとって、健二はより直接的な事態の解明に繋がると確信している。今はまだ、自分の手から彼を手放すべきではない。

「なんとしても助けたい。頼めますか」

「誰に言ってる。良いから手を貸せ、手術室に運ぶ」

「え？」

手を貸すのは問題ない。だが、手術室になると

「こんな時間に看護師なんて居る訳ないだろが」

「でも、翔子ちゃんは？」

「もう帰ったに決まってるだろ。お前が手伝え」

「ちょ」

確かに時間も人手も理解できるが、自分は全くの素人だ。無免許医に言う言葉ではないが

「資格も知識も無いぞ俺は！」

全くもって、出来る理由がない。

「別に医者だって俺から見たら足手まといには変わんねえよ。言葉が通じるだけ猫よりやましだ」

「でも」

「つべこべ言ってる時間はねえぞ？ こいつを死なせたいなら話は別だが」

「っ！ どうなっても知りませんよ」

諦めたのか開き直ったのか、理一はスーツの上着を脱いで倉光と共に健二を手術室に運び出した。そんな理一に笑顔を見せながら「だからさっきからお前は」倉光は手術室の扉を締めて振り向き

「誰に言ってるんだよ？」

倉光と理一の手により、健二の手術が始められたのだった。

——23..20..00——

夏希は天井も凝視したまま布団に横たわっていた。天井に映し出されるのは過去の記憶……

何度も見た。何度でも見た。何時までも見続けた。

救われた名簿の中に、病院に運ばれた名簿の中に、発見された遺体の中に、小磯健二の名前は見つかる事が出来なかった。

名前が無いと言う事は、まだ見付かっていないだけだと自分に強く暗示をかけ続けた。そうして過ごした数ヶ月に、夏希は多くのものを失った気がした。

友人とは疎遠に成った。

大学は辞めた。

決まっていた筈の就職は自ら辞した。

そして半年後……彼の死を認め、彼を失った。

それからの自分は、もうどこか自分では無いと思えた。全ての事が遠い場所で語られる話のようで、現実感希薄で感情は心の表面を滑り落ちる。

時間が解決してくれると言った者に、夏希はキョトン？ と問うた事がある。

それはいつ？ と。

そんな記憶をぼんやりと思い起こす夏希に、耳元で大きくハッキリと、声が聞こえる。

——彼、生きていますよ——

「……生きてる……」

そう、彼は言った。確かOZの関係者だった、記憶が有る。だとするのなら、もしかしたらと考えた。シャドウをケンジを言い切った

のは、確かに自分だけであり今思えば自分の願望に過ぎないのかも知れない。だがOZの関係者がそれを示すなら、それはもしかしたら自分の考えを裏付けるものになるのでは無いか。

「生きてる……OZ……OZ? ……」

ゆっくりと、自分の荷物に視線を送る。

「あそこに……健二が」

身を起こし荷物をまさぐり取り出した古びたバックから、夏希はノートパソコンを取り出した。

それは健二から貰ったパソコン。あの日より使われる事の無い、健二の形見のパソコン。

「……健二」

そつと指でなぞれば、夏希の目に力が宿る。

夏希はそのままコンセントを差し、一年振りに起動のスイッチを押した。

「待っててね、健二」

映し出された画面にIDとパスワード。

切り替わったOZの世界に、金色の翼が再び舞う。

吉祥ナツキ、一年振りのOZへの出現。その輝く翼を羽ばたかせ、ナツキはOZの世界に飛び出したのだった。

――23..29..49――

「なんでなんだよっ!」

「任務です」

「こっちもだよ」

「だったら許可をとってください」

ハマドが担ぎ込まれた病院で、菊間はSPと押し問答を続けていた。

ハマドの手術が終わり詳しい事情を聴き取りに出向いたのだが、あの襲撃事件のすぐ後でもありSP達はその姿勢を硬化させていた。いかに特機と言えども外交問題も絡んでいる事件では押し通る訳にもいかない。今は許可が出るのを待つの一手だが。

「誰が大統領をここに運んだ。いや、それは分かってる。俺は聞きたいのはその後だ」

「面会の許可を取ってから聞けば良いでしょう」
通り一辺倒の解答には流石に声も荒くなる。

「事件は今も動いてんだっ！ 呑気な事言ってる場合じゃないんだよ」

「これが我々の職務です。これ以上職務を妨害するなら強制的に排除しますよ」

「テメエ等」

「ちょ！ 止めてください菊間さんっ！」

殴りかかりそうな菊間を後輩が必死で抑えて下がらせた。
少し下がったベンチに座らせ

「無茶しないで下さいよ。本気で外交問題になります」

「わかってるよっ！」

不貞腐れる菊間に思わずため息も出るが、彼にも気になる事がある。

「それにしても……」

「あん？」

「看護師の話、あれ何ですかね」

「さあな」

二人はハマドが居る筈の廊下の向こうに目を向けた。

手術室にハマドを運び入れる前に、健二はハマドになにやらアラビア語らしき言葉で会話をしていたと。

「何かを聞き出そうとしてたみたいだって話でしたけど」

「カメラの映像は？」

「それがここ、音声無いんですよ」

「チッ！ 使えねえな」

「いや、ウチも半分位は同じですけど」

「うっせ」

気を取り直し、菊間は立ち上がると

「取り敢えずは本部に報告。それから部長に」

「それが」

「？ まだ、か」

「はい」

何度、理一へ連絡を試みても繋がらない。ハマド襲撃の一報を入れて以来、彼は特機との連絡を断っていたのだった。

「ったく——」

菊間はもう一度視線を廊下に向け呟く。

「——何が起こってんだよ、一体。なあ、健二」

——23..38..18——

piriririと鳴る電話を、そのままハンズフリーで通話状態にする。スピーカーから流れているラジオが通話音へと切り替わり

「こちら、時間外労働中の機員です」

おどけて話す機員だったが

『いやいや、耳がイタイ。貴方の上司にハきつく言っておきますヨ』

「つと、すいません」

電話の声はウィリー・マクレガーだった。

『構いませんヨ。トウキョウには？』

「今向かっています。状況に変化が？」

『Yes』

磯貝の表情が真剣味を増す。

『Boss is angry. Transition to the second plan——』

（ボスはおかんむりだ。プランはセカンドに移行——』

『What is second? ——』

（セカンドですか？ ——』

『Oh, so——』

（ああ、そうだ——』

はあ、と一つ溜め息をつく。中々に計画通りには進まないというものだろう。どうやら忙しくなりそうだ。

『まったく、宮仕エは辛いという事だネ』

「給料分は働けと言う事でしよう。働き過ぎは我々日本人の美德の一つですから」

『ハハハ、ボーナスはハズむよ』

「それはお願いします」

『では』

「はい」

ガチャリと電話を切った磯貝は、再びラジオのスイッチを入れ直して車を走らせたのだった。

特機の中は騒然としていた。既に大統領の無事は確保出来たが、この日本の首都においてハリウッドさながらの銃撃戦が展開されたのだから無理もない。今は上へ下への大騒ぎだ。

「吉井君と吉田君から連絡は」

「数人の身元を従業員で確認。数か月前から厨房で働いていた様子です。あとは搬入業者ですね」

「相沢君は？」

「音信不通」

「まったく」

辻は柴田の答えに溜め息混じりに項垂れるが、頭は直ぐに切り替える。

「もう呼び出しは良い。君も分析に回ってくれ。他にも仲間が居ないかどうかを知りたい」

「了解です」

自分の席に戻る柴田を見送り、辻はもう一度発令所内を見渡す。「陣内、お前一体何処にいるんだ。この事態を、お前は予測できたのか？」

周囲を見渡す辻の視界の端で、発令所を出ていく桑田の姿はとくに咎められることは無かった。

通路を歩き女性用トイレに入れば室内に人が居ないのを確認。そのまま五つ並んだ個室の全てのドアを開けて無人を確認すれば、一番奥の個室に入る。

ポケットから携帯を取り出して電話を掛けると――

「っ！ 私です」

――通話はスクランブル状態で繋がった。

「――分かってます。でも緊急でしたから連絡を……はい」

一度、仕切りの上から周囲を見渡し、再び身を沈め

「……問題発生です……」

その声を強ばらせた。

「襲撃グループの中にアシズが居ません………いえ、何度も確認取りました。……はい。おそらく指揮はムシヤリが………でも居ないんですっ！ 向こうの捜査官から何か………ちょ！ 連絡が取れないってそんな………いえ待ってください。今更そんな………アシズを入国させたのは我々ですっ！ それがなんで所在を掴めないなんて………でも部ちょっ………問題になりますっ！」

思わず声を張り上げた時、人の気配がトイレの前に現れ――

「だから仕事で帰れないって言ってるでしょっ！ 浮気なんて、もういい分かったわっ！」

――桑田は荒々しく電話を切って個室を出ると、トイレに入ってきた同僚達と鉢合わせた。

「あらあら？ 喧嘩？」

「また？」

二人とは仲が良い。年も近いのが距離感を縮めるのに役立っていてもいた。

「ねえ………」

「なに？」

「私ってそんなに信用無いのかな？」

「「は？」」

笑顔の桑田に二人も笑顔を見せ

「彼氏持ちの贅沢な悩みに興味ないの」

「別れたら飲みにつき合ってたげるから」

「ふふ、ありがと」

桑田は笑顔で手を振りトイレを後にした。

数歩、進んで思わず壁にもたれかかり――

「……どうしろって言うの……」

――その場で天を仰ぐのだった。

――23..56..40――

「……う……………」

微かなうめき声に側によれば、その瞼が僅かに動いているのが分かった。

手術を終え、病室のベッドの上に横たわる健二の傍で、見守っていた理一は遠慮がちに「健二君？」と声を掛ければ――

「……………こ………こは？」

小さく、言葉が返ってきた。

まだ少しぼやける視界の先で、確かに邂逅を果たした理一の輪郭がはっきりとしてくる。

「ここは病院だ。もっとも、正規のでは無いけどね」

「……僕は……………っ！ ケースっ！」

慌てて起き上がろうとするが

「痛っ！」

「無理をするな」

腹部の痛みに再び横になってしまふ。成功したとはいえ、まだ動き回れるわけではない。

「君のカバンならそこに。開けたけどいじってないよ」

「そうですか」

所在を目で確認して、少しの平静を取り戻し、一度ゆっくり目を閉じて、今度はしっかりと理一を見つめる。

「お久しぶりですね、理一さん」

「ああ。ほんとにな、健二君」

ゆっくりと差し出された手を握り握手を交わし、一瞬互いに笑顔を見せる。だがそれは一瞬で良い。今、自分達の置かれている状況は、誰よりも自分達自身が把握している。

そんな空気をしっかりと認識していると示す様に、健二は理一に一度頷き、天井を見つめながら静かにその口を開いたのだった。

「さて……………どこから話しましょうか」

——23…59…59——

00::00::00<01::00::00(前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

理一は刺され意識を失った健二を闇医者の元にかつぎ込んだ。

陣内家では佳主馬達が眠りに付く中、夏希がOZへとログインし健二を探し始める。

特機では術後のハマドにも会えず理一との連絡も付かない状況で混乱の収束が見えずにいた。

その中で、桑田はイレギュラーの事態に困惑を隠せない。

病院で目覚めた健二は理一との邂逅を果たし……

これは、午前零時から午前一時の間に起きた出来事である。

00::00::00~01::00::00

——00..00..00——

* l o g i n : *

「あれは？」

「っ！ おお、マジ？」

ざわつくOZの世界。皆が見上げるその空間を、金色の翼を羽ばたかせて一体のアバターが飛び回っていた。

吉祥ナツキ現る。

そのニュースはOZを瞬く間に駆け巡った。

去年のある時期を境にOZに姿を現さなくなったナツキが、突然姿を現したというのだ。皆その姿を一目見ようとOZへと入りその姿を目指す。

ナツキの姿を見たものは歓声を上げ、皆ナツキに言葉を投げ掛けるが、ナツキはその全てに無言を通した。彼女はただ、何かを探すように周囲を見渡し、ひたすらOZの空を飛んでいた。

ただ——

「……ケンジ………ケンジ………」

——そこに愛する者の姿が有ると信じて。

＊ l o g o u t ∴ ＊

——00..08..22——

「どこからも何も、多分僕は全く知らないところから始める気がするね。我々は、多分何も分かっていない。違うかい？」

理一の言葉に苦笑を漏らしながらも、健二は

「理一さんは、何処まで？」と聞き返す。

「飯富さんから話を聞いたDDRの件、それに彼がああの墜落事故に疑念を持っている事。あとは、たぶん今日の君の行動とイギリスの一件。それくらいかな」

自分としては他の特機の者よりは真相の近くに居るとは思っている。

「……そうですか……飯富さんが」

あの日の自分との接触が、飯富をこの件に関わらせてしまっている事に罪を感じる。

「だが健二君、僕には理解できないんだが」

「何がですか？」

「本当に……あれは事故じゃ無かったのか？」

そこには事故を肯定して欲しい願望も含まれている。故意であつてはならない、そんな事故であつて欲しいと。だが健二は静かに理一を見つめ返し

「事故なんかじゃありませんよ」

「健二君しかし」

「あれは……故意に墮とされたんです。僕が乗っている、ただそれだけの理由で」

その視線には怒りと憎しみが宿っているのが分かる。そんな瞳。だが理一にはどうしても納得がいかない。

「しかし旅客機だぞっ！ 幾ら何でも……確かに違法な兵器売買かも知れないがそこまでする必要は無いだろう」

DDR活動により廃棄される筈の物を横流しした。確かにそれ自体にも問題は抱えるが、だからと言ってそこまでする必要は無いのである。精々が何人かの関係者と関係した団体なり企業なりが多少のペナルティを負えば良い話だ。それで済ませてしまう事も悪いのだが、実際問題、そうしてこの国は回ってきている。

それは無論、健二にも理解は出来ている。だが

「……取っ掛かりは確かにDDRでした。僕は、あの手の話が嫌いでしたから」

「覚えてるよ、それは」

兵器産業と市場に、確かに健二は拒絶を示していた。

「でも僕は事件を追っていくうちに違う切り込みをしてみしました」

「違う？」

「はい。後悔はしていません。でも……僕は不用意に近付きすぎました。知ってしまったと思った時はもう手遅れなほどに」

目を瞑った健二に若干の苦みを感じられた。理一は自分と飯富の考えが正解だった事を確信する。

小磯健二が国家の敵になるには、別の理由が必要だったと。

「他に、何か有るんだね？」

それこそが、今起きている全ての起因となる筈だ。

「売っていた者じゃない……買っていた相手を、僕は追ってしまっ

たんです」

「相手？」

当然、それは売買なのだから相手はいるだろう。しかも兵器を欲しがる者など、それこそ星の数ほど居ると言っても良い。それが問題になるとも思えない理一に、健二は目を開いて告げた。

「日本政府が兵器を、しかも格安で売り捌いていた相手は……スグリア共和国」

「スグリア？ だったら」

確かに予想はしていなかった。だが言われてみれば、このタイミングでこれだけの事件が乱発しているのだ。兵器売買が絡んでいる以上、スグリアの登場も意外とまでは言えない。だが、理一をして言葉を詰まらせたのは健二の次の言葉――

「その反政府組織でした」

「っ！ ばっ！」

――意外過ぎる相手の存在だった。

「馬鹿な事を言うな健二君っ！」

「何か不思議ですか？」

身を乗り出す理一に対して健二は至極平静に聞き返す。だが、反応としては理一の方が自然であるはずなのだ。なぜなら

「君は何を言っているのか分かっているのか？ スグリアと日本が何年友好国として付き合っていると思ってるんだっ！ 君の生まれるよりずっと前から」

「友好国でしたよ。資源の乏しい日本としては大事に大切に、そして良好に付き合っていた親交国です」

「だったら」

「だからこそ、これは絶対にあってはならない事なんですよ、理一さん」

「……健二君……だがそんな……それでは、まるで」
思わずすぐむ理一を真っ直ぐ見詰め、健二は言い放った。

「前政権と良好な関係を維持していた日本政府は、笑顔で彼らと握手を交わし、その同じ笑顔で反政府組織に武器を破格で提供していたんですよ」

二枚舌、玉虫色。日本の政治家や政治判断を現す言葉はいろいろあるが、流石にこれでは露骨に過ぎる。どう考えても

「頭が悪すぎるだろう」

損得勘定が不味すぎる。損失のリスクばかりが大きく思う。

世界情勢の中で、そこまであからさまに立ち回るのは信用の失墜どころの騒ぎでは無いだろう。だが、それ以上に見合うリターンでも有れば。

「それじゃあ何か？ 日本政府はスグリアのクーデターに関わっていたと言う事か？ 兵器提供と云う形で」

しかもただのクーデターじゃない。友好国の友好国政府転覆を狙う、だ。問題無い訳がない。

「兵器提供だけじゃないですよ」

「と言うと？」

「スグリアのクーデター成功の要因は二つ。大量の武器弾薬とそれを支える潤沢な資金。それを持って武力革命は成りました」

「おい……ちょっと待ってくれよ、それじゃ」

まさかそこまで、と思うが、それは本当にそこまで行っていた。

「資金は日本から提供されていました」

「……そんな」

理一はベットの横の椅子に腰を落とす。立って聞くには、少しばかり身体に良くない話に成ってきた。

そんな理一をちらりと見て、健二は静かに話を続ける。

「官房機密費や外交機密費、他にも色々なプール金から資金は捻出されました」

「要するに、日本の金、か」

「それには思いやり予算も含まれます」

「っ！ しかしそれではアメリカ……それじゃあこの件は」
それは確認に過ぎない。

「勿論、アメリカもこの件には絡んでいます。と言うか、そもそもこのプランはCIAラングレから出ていますから」

「別にアメリカがこだわる国でも無いだろう」
それほど二国間に交流は無い。

「前政権はイスラム原理主義に近かった。過激派との距離もそう遠いものでは無かった」

「それは聞いてはいたけど風の噂程度だよ。なにも確証があつて言っていた訳じゃ無い」

「でも彼等は確信を持っていた。アメリカは前政権が崩壊することを願っていました」

理一が思い返すと、確かにハマド政権が樹立した直後、その樹立を祝福していたアメリカ大統領の姿を思い出せる。日本とアメリカは両手を上げて新たな政権を祝福していたと。だと、すると……

「まさか……中国も、かい？」

もう一人、かの国の革命を祝福していた。独裁政権の崩壊を喜ぶとは思えない人物だと驚いた人物。中国国家主席その人。

「DDRの兵器は中国を経由してスグリアへ供給されていました。彼らが得た利益は大きいです。勿論、アメリカや日本からもそれなりのお土産も貰つての話ですけどね」

「だからこそ国連も黙る、か」

「はい」

「しかし……」

中国とアメリカは分かる。彼等は彼等の理屈と利益で動くのだから

ら。だが、

「日本が何故？」

そこに疑問は戻ってしまふ。

確かに革命後、スグリアからの資源輸入の量は多くなったと言える。だが、それは何も前政権では無理だったと言う訳でもない。現政権になったからと言って値段が安くなったわけでは無いし、別段条件に変化が出来た訳では無い。

内戦で疲弊したスグリア経済の救済も含めての輸入量の増大であるし、そこには利益も不利益も存在はしていないのだ。この件に首を突っ込み、日本が得る利益が思いつかない。アメリカの顔色を伺うにはリスクが大き過ぎる。

だが……もしそこに利益が存在していたとすれば？

そして、それは存在した。

「むこう十年……原油、レアメタル、穀物……あらゆる輸入物資の優先確保と安価提供。それが報酬」

「報酬？　ちょっと待ってくれ、優先するのは良いが価格の変動など」

「表面上に変化はありません。だからこそ、そこに差益が生じます」
「……それ」

「その利益は莫大です」

予算から出る金額と支払われる金額に差異が生じる、それはそのまま利益に繋がるという話だ。輸入量を考えればそれは莫大な金額にのぼるだろう。

「だから……政府はクーデターに関与したと言うのか」

「関与？」

理一の言葉になぜか健二は戸惑いを見せる。

「関与どころかしっかり介入していますよ、日本政府は」

「介入って、確かに物資供給の意味でそうとも言えるが」

「いえ、もっと直接的な介入ですよ」

「まさか。別に部隊を投入したとでも言うのかい？」

色々信じられない事を聞かされた。流石にこれ以上は勘弁願いたいと言うのが心情だったが、健二はそんな理一の願いを結果として否定する事になった。

「クーデターの成功。その要因の大きなものは前大統領の暗殺でした」

「ああ。確か空港近くのホテルで襲撃された。そうだ、確かハマド大統領自身が戦闘に加わったと」

自ら前線に立ち、そして勝利を収めた。それがハマド・アッザームという人物だったと記憶する。

「その襲撃のお膳立てをしたのが日本政府です」

「そんなんっ！」

ガタンッ！ と立ち上がってしまう。

「一国の大統領暗殺だぞっ！」

しかも友好国の、である。それはあってはならない謀略であり――現実だった。

「彼があのホテルに行ったのは外務大臣との会見の為ですよ。しかも急遽の予定変更であのホテルに決まったのは四十分前です」

本来、戦時下の状況でそれほど会談に固執する必要は無かった。

だが、その会談にはアメリカ側の参加も知らされていた。反政府勢力の勢いが増している中でアメリカからの支援は体制側にとってはどうしても取り付けないものだった。

そのホテルは空港に近くスグリアでも屈指の高級ホテルであり、警備体制も整っていた。急遽の変更になった時も、それほどの抵抗感もなくそれを受け入れたとしても不思議はないだろう。だが

「そして、反政府組織にそのホテルの場所が伝えられたのは一ヶ月も前の話になります。彼等には周到な計画を立てるに充分な時間があり、そこに前大統領が生き延びる可能性なんて微塵も無い。そん

な場所に、日本政府は彼を引きずり込んだんです」

「それは……もう悪意だ」

「僕にはそれは……どうしても見過ごせませんでした」

「それじゃあ、君が手にしたのは」

それが小磯健二が狙われる全ての理由。

「武器と資金に対する資源の安価優先提供。そして前大統領暗殺への道筋……その証拠となる記録映像です」

日本は言うに及ばず、スグリアにとっても貴重な資源の安価放出である。この取引は双方にとってリスクが少ないわけではない。事が露見すればどちらの政権も吹き飛ぶ可能性を秘めている。

その為に双方は保険を掛けた。

その極秘会談を記録し互いに保有した。そうする事によって相手の裏切りを防ぐという物だ。

「僕がハワイで手に入れたのは、スグリア側に保管されていた記録です。僕にそれを渡した男は……殺されました」

「そして君も、か」

関わる者は消されていく。まるで魔法の様に。

だが健二は生きていた。生き延びていた。だったら

「何故我々に連絡しなかった？ 話してくればこんな事態には」
ならなかったと思う。自分達の力は万能では無いが健二個人で立ち向かうには相手が大き過ぎると言わざるを得ない。

日本、だけではない。場合によってはスグリアやアメリカ、中国だって敵に回るだろう。とても一人で戦える状況ではない。そんな事くらい健二であるならば分かりそうなものだ。だが健二は理一の瞳を静かに見詰め首を振る。

「それは出来ません」

「！ 何故？」

「特機の中に裏切り者がいます」

「っ」

それは武藤に指摘された事だ。彼の教え子である健二もまた、同じ結論を導き出したと言う事だ。

「それを調べる為に特機に侵入しました。そして」

「掴んだのか？」

「去年の旅客機も……僕の乗った便をリークしたのは特機でした」

「一体誰だっ！」

思わず詰め寄る理一の視線を真っ直ぐ受け止め――

「……桑田さんですよ」

――健二は断固とした意思を込めて告げるのだった。

――00..22..19――

特機の発令所に桑田は駆け込み「身元が割れました」と自分の端末に向かう。それだけで事を察する一同は

「襲撃犯のだな？」

「はい」

辻に返事を返して情報をメインの画面に映し出す。そこには数名の男達の写真が並ぶ。

「全員、スグリアの旧軍兵士でした」

「公安のチェックは？」

怪しいと思われる人物には皆マークが付いていたはずだったが「ノーマークでした。リーダー格と思われるのは、彼です」

一枚の写真がピックアップされた。

「彼は？」

聞く柴田に

「ムシヤリ・ハッサム。かつて特殊部隊にも在籍していた男です。現在、テロ組織に関与していると見られ国際手配されていました」

「何だってこんな奴がノーマークに」

辻の顔に悔しさがにじみ出る。これは間違いなく日本側の落ち度でしか無い。危機管理の甘さを痛感してしまう。

「彼らが入国したと思われるのは三ヶ月前です。そして……見てく
ださい」

「ん？」

映し出されたのは一人の人物。

「彼は？」

「アシズ・シヤラビー。スグリアの元將軍でテロ組織の指導者です。ムシヤリはアシズの片腕と呼ばれていました」

「ではこいつも？」

「はい」

画面を変えると、そこには三ヶ月前の空港の映像。

「ムシヤリと一緒に入国しています。でも」

「大統領襲撃犯の中には居なかったか」

「はい。犯人は全員射殺されましたが……中に彼は居ません」

事件は、完全には終わってはいないという事が、全員に理解が
来た。

辻はオフィスへの階段を上がり皆を見渡し

「大統領は難を逃れたが依然としてテロリストは潜伏中だ。引き続
き、事態の收拾に全力を上げてくれ」

はい！ と皆から声が返る。誰が指揮をし環境がどう推移しよう
が、今ある危機に立ち向かうために最善を尽くす。そう出来る者達
が集まる場所、それが此処だった。

皆を満足気に眺めて

「外に居る捜査官には漏れなく情報を共有するように。優先順位を変更、一にアシズ、次いで小磯健二だ。分かったら掛かれ」

その言葉を皮切りに、皆が一斉に動き始める。そして辻もまた、部長のオフィスへと姿を消すのだった。

――00..24..03――

健二がバックから取り出したノートパソコン。そこに示された画面を食い入る様に見つめる理一だったが、その表情は硬さを増していくばかりだった。

そこには健二が特機から抜き出した情報が表示されている。

あの日、健二の飛行機を手配した人物は桑田だ。旧の予定変更で帰国の日程が延びてしまった。その時、健二の相談にのって飛行機を手配してくれたのは特機だった。理一は聞いていなかったが、その頼みを柴田が聞き、桑田が手配していた。そして

「しかし……何故」

桑田の端末からメールが送信され、その履歴を消した。筈のメール。特機のメインコンピューターに極秘に保存される全ての情報の中の一つに

小磯健二は十三時二十五分発 日本航空676便に搭乗予定。

そんなメールが送信されていた。

その翌日、それは海へと墜落する事となる。

「しかしこれだけでは」

確かに不審だ。だがそれだけで裏切者と断定は出来ない。第一、このメールを受け取った者が掴めていない。只の連絡事項としての報告かと思う。いや、その可能性を残したいと願うのだが。

「それだけじゃありませんよ」

「と言うと？」

尋ねる理一の前でキーを押せば画面が変わる。その画面には

「？　これが？」

まさに先程、特機のメイン画面に映し出された画面と同じ画面が表示されていた。

「ハマド大統領を襲った連中です」

「！　これが」

「そして……これが首謀者」

「これは……たしかアシズ・シヤラビー、か？」

「知ってましたか」

「ああ」

スグリアの大統領が来日する。それが決まった時点で理一は通りの情報には目を通した。その中で、最も警戒するとしたらこの人物だろうと思ったのを覚えていた。だが

「アシズの入国は確認されて居ないはずだが」

警戒リストには名前は無かった。

「入国していますよ、とつくに」

「ばっ！　馬鹿な。警戒者が入れば我々にも」

「そのリストにはアシズの名前は有りません。ムシヤリの名前も」

「それは有り得ないっ。アシズがリストから外れるなど」

それではリストの意味がない。まっ先に名前が挙げられて然るべしの人物である。

「除外されたんですよ。一度は警戒者のリストに載った彼等を……」

桑田さんが削除したんです」

「……馬鹿な」

健二の指が導くのは、リストからの削除命令を実行した者のIDだった。それは紛れも無く桑田美也子のそれだった。

理一はしばらく呆然としてしまう。何故彼女が、そう考えて思考を巡らせるが――

「……ちょっと待ってくれ」

——その思考は妙な場所に着地する。

「仮に桑田が健二君を消す側の人間だとして、だ……なんでこうなる？」

「なんでとは？」

あえて、聞き返す。

「一連に関係があるとするなら桑田は体制側の人間と言う事になる」

「はい、そうですね」

「だったら、なんでハマド大統領の暗殺に加担するんだ？ 彼を支援し違法な裏取引をしているのは体制側だろう。むしろ暗殺を止める側の立場の筈だ」

現状、スグリアとの貿易で問題は発生していない。仮に健二の言う利益が生み出されているとするならば、この現状は日本国政府にとっては歓迎するべき現状の筈だ。

だが健二は事も無げに首をふり

「暗殺を望んでいるのは日本じゃありませんよ」

「？ 健二君？」

「発端はアメリカです。いや、アメリカと言うよりNSAと言った方が良いですね」

「N！ アメリカ国家安全保障局」

「はい」

また大きな名前が出てきてしまう。どこまでもこの事件は個人の手には余る代物だ。

「しかし何故だ。アメリカだってハマドの体制は歓迎しているだろう」

「スグリアの経済基盤を支える一つにケシがあります」

「それはそうだが、だからと言って」

「まあ、本来は問題無いんですけど、ね。でもクーデターと新政権樹立はCIAの発案指導で行われました。結果、CIAはあの地域に関する大きな発言権を持つ事になった。NSAとしてはそれは非常に面白くないと言った所ですね」

「だからってこんな」

面白くない。そんな理由で始めて良い話では無い筈だ。だが現実はそのような無い。そんな理由で簡単に事は動く、それがこの世界の現実だった。

「ハマド大統領は優秀過ぎました。もうスグリアは中東に数多ある小国の中の一つでは無く、中東戦略に置ける重要な意味を持つ小国と成ってしまったんです」

「しかし……それは本当の事なのかい？」

話が、大きくなってはいないのだろうか。そうであって欲しいと願いを込める。

「僕はこの一年、真相を突き止める為にシャドウシステムを作り上げました。今日のここに至るまでの過程でOZや日本、スグリアだけじゃない。アメリカにも無論調べは入れましたよ」

「健二君、君は」

自分の知らない所で、小磯健二は世界の暗部に足を踏み入れていることを痛感する。

「NSAのコンピュータに僅かに侵入出来たのは一ヶ月前です。そこで見ましたよ、この計画を……プラン385を呼称されている今回の一連の計画をです」

そうして映し出された画像。

そこにはびっしりと英文が映し出されていたが、その隅々まで理一は目を通す。

大統領暗殺の為のテロリスト誘導とその処分。既に後任には副大統領が上がる事が決められており、日本国政府との協調もそこには明記されていた。かつてのスグリア大統領がそうであった様に、

現大統領のハマドにもまた、生き延びると言う選択肢は用意されてはいなかった。

だが、彼は生き延びた。

NSAのプランに無い。そして日本政府の管理下に無い、居るはずの無い死人の手によって、彼等の計画は頓挫したのだった。

――00..42..40――

ざわざわと特機の発令所がざわめきを増していた。

犯人に繋がる足取りが掴めたわけでも無ければ新たな事件が起こった訳でも無い。だが、それに勝るとも劣らない衝撃が、皆の心に走っていた。

一人、柴田はデスクを離れ、普段は理一のオフィスである部屋へとノックも無しに踏み入る事になる。今そこに座る辻は「ノックくらしいしないかっ」と声を荒らげるが、柴田にはそれに付き合う積もりはない。剣呑な視線を隠すことも無く詰め寄ると

「どういうことですかっ！」

バン！ と辻の前の机に手を叩きつけ視線をぶつける。

「何の話だ」

「これです！ 決まっているでしょう！」

手と一緒に叩きつけられたのはプリントアウトされた一枚の手配書だ。そこには――

「なんで部長が緊急手配されるんですっ！」

――陣内理一に対する緊急手配の旨が記載されていた。

「小磯健二は彼と親しい。その彼が姿を消した、手配は当然だろう」

「私達が捜査の為に音信不通になる事はよくあります、珍しい話じゃない！」

「別に彼がテロリストだと言っているのではない。ただその所在を明確にする必要が有ると言うだけだ」

「何の為にですか」

「それは我々が知る必要はない」

「そんな無茶な」

柴田の視線を真っ向から受け止める辻のまた、この命令に含む思いも無いわけでは無い。だが、今は自分がここの指揮者であり、陣内理一の身柄確保と云う任務が一つ増えた。それだけの事だと言い聞かせる。

「手配を公にする必要はない。我々のみで秘密裏に拘束、連行するのが任務だ」

「しかし」

「これは正式な命令だ。異論は認めない」

強く、睨みつけ「失礼します」と柴田は振り向き歩き出す、が、ふ、と立ち止まり。

「正式な、って事ですが」

「それがどうした」

「この命令はどこから出てるんですか？」

振り向かず問い掛ける柴田だったが、何故か辻には強い視線をぶつけられている様にも感じられた。

「……それは君が知る必要は無い」

「……失礼します」

立ち去った柴田を見送り、辻は小さく息を吐き天井を見詰める。

「何が起こってるんだ……陣内」

呟き、彼の今を思う。一体何故、このタイミングで理一が手配さ

れるのだろうか。それも、彼を追う様に支持を出して来たのは内調のトップだった。内閣情報官が段取りをすつとぼして直々に手配を言い渡す。こんな異例は聞いたことがない。

何かが起こっている。漠然と、辻はそう感じずには居られなかった。



オフィスを飛び出した柴田は「何か言ってた？」と話しかける桑田を通り過ぎ、一人発令所を抜け出した。

更衣室に入ると真っ直ぐに自分のロッカーへと向かい、徐ろにロッカーの中の備え付けの金庫のダイヤルを押す。カチャリと開いた中から私物の携帯を取り出せば、その画面を動かし素早くメールを打ち出したのだった。

――00..48..18――

「ふう」

トイレで用を済ませた侘助はなんの気無しに庭へ出る。そこには亡き母が好きだった向日葵が月明かりを浴びて不思議な色となったの大輪を咲かせていた。

ぼんやりと眺めていたが、ふう、と体を通り過ぎる風に意識を現実へと戻し、部屋に戻ろうと家屋へと振り返り歩を進めるが「ん？」と、最初の一步でそれは止まる。

「？ 灯り？」

家屋の二階、その一室に、うっすらと蒼白い光が明滅しているの

が分かった。

部屋の電灯を灯けている明かりでは無い。おそらくはテレビか、何かのモニターの明かり。そんな光が、二階の一室の窓に浮かび上がっていたのだった。

「なんだ？」

◇ ◇ ◇

その佐助が見上げている部屋の中で、小磯夏希は一心不乱にパソコンのキーを叩いていた。

ただ懸命に、ただ一心に、ただ必要に――その手を一時も休める事無く、OZの中のナツキを縦横に飛ばし、ただ電腦の世界を飛び回っていた。

「……健二………健二………」

その瞳はまるで狂気をはらんでいるかの様な爛々とした光を帯びながら、夏希はそのモニターを明滅させ続けていたのだった。

――00..51..32――

理一が健二のパソコンを見ている前で、健二はバックからPDAを取り出して操作を始めた。

「それは？」

理一が聞けば

「ホテルを襲撃した連中から奪って来ました」

「！ 健二君」

理一の意識が自分に向けられたのは分かるが、今は気に止めない事にする。まずはしなければ成らない事があるのだから、それを優先する。

「襲撃グループにムシャリが居ました。だとしたらアシズは別の場所に居る筈です。アシズが一つのプランで事を進める筈はありません。きっと他にも何か考えている筈です」

「それがそこに？」

「多分。他の連中は分かりませんが、ムシャリなら知ってる筈です。だからきつとこの中に」

「ちよっと待ってくれ。ウチの解析班に聞けば早くに見れるかも知れない」

携帯を取り出す理一だったが、自分を見る健二に笑顔を見せ

「大丈夫だ。念の為、桑田には内密に動くよ」

そう言って携帯を開けば「？ メール？」自分の携帯にメールが入っていた事に気が付いた。どうやら健二との話に夢中でバイブの着信に気が付かなかったようだ。

何気に開いてみれば

「……………やってくれたな」

「理一さん？」

携帯を閉じ、健二に笑みを浮かべる。

「どうやら当たりを引いたらしいな」

「と言うと？」

「陣内理一を緊急手配、だそうだ」

「！」

健二を襲った連中から彼を助けだし逃走した。連中の背後に居る何者かに、理一の存在が伝わったということだった。

「いよいよ持って引き下がれないな、これは」

「だからこそ止めるんです、全部」

「ああ、そうだな」

また、健二はPDAの操作に取り掛かる。今は先ずアシズを追う

のが先決だ。明らかな悪意を持って存在する彼等が大統領暗殺に失敗した以上、そういう行動に出るかは非常に怖いものがあった。なんとしても止めなければならぬ。

操作を続ける健二を見つめながら、理一は健二に声を掛ける。

「ところで健二君」

「はい？」

操作の手を休めずに答える健二に

「例のVXガス、あれは君の仕業かい？」

自分達にとつての事の発端は正にそれだった。イギリスで盗まれた毒ガス兵器。

「はい」

「何故だ」

あっさりと肯定する健二に驚くも、自分の前に居る健二が自分の知る小磯健二である事はもう確信している。その彼が肯定するのなら、そこには相応の理由があると信じていた。

「NSAのプランを知ってから該当するグループを調べていました。そんな時にアルサリの情報を見つけて」

「アルサリ……！ 研究所で拘束されて死んだ」

「はい。彼もアシズの組織の一人でしたから。アシズの計画の一つに毒ガスの強奪計画がありました。だから彼等がガス奪う前に僕がそれを掠め取ったんですよ」

「それで……しかし、そのガスは何処にあるんだい？」

それは目下の最重要案件の一つだ。それほど多くの命を奪う事が出来てしまう。そんな兵器の所在は

「イギリスで一番安全な場所ですよ」

「イギリスで？」

言い切った健二はPDAを操作しながら笑みを浮かべ

「そろそろ見つかる頃だと思いますよ。確か四時位から週一の総チェックですから」

「？ 一体なんの話だい？ 総チェックって」

健二は一瞬だけ視線を理一へと送り

スコットランドヤード

「ロンドン警視庁の押収品保管室の、ですよ」

「……は？」

呆然とする理一を前に、健二はまたPDAに向かう。

「まったく……灯台元暗し、と言う訳かい」

「安全でしょう？ 少なくともテロリストが奪いに向かうにはリスクが高すぎます」

「だろうな」

どこか呆れてしまう。いつも、いつだって、やっぱり健二は自分達の想像の少しだけ上に行く。そんな所も変わっていないものだと感心していると

「……………っし！ 開いた」

「健二君？」

健二はPDAのプロテクトを解除し、中の情報を調べていく。理一も黙って健二の言葉を待つが

「これは……………強奪計画？」

「強奪？ 奴らの次の狙いか」

だとすれば先んじる事が出来るかもしれない。此処に至り、そんな事件の報告は上がってはいないのだから。だが健二の表情は今一つ晴れない。

「でも……場所がない。一体何を……」

「何か手掛かりになる事でもないか？」

「ええ……それなんですけど……………いや、でもそんな場所なんて何処にも」

「健二君？ 何かあったのか？」

健二の挙動に不審なものをみて問いたただせば、やはり健二は不思議そうに理一を見て

「多分、連中の狙い、らしいものはあったんです。あったんですけど……でも」

「でも？ 健二君、取り敢えずその狙いって奴はなんだい」

「はい。多分細菌テロですね。撒布とありますし被害予測で国家レベルだと記載もあります」

「ば！ 馬鹿なっ！ そんな事がもし起きれば」

理一は全身の血の気が引いたように感じられる。国家レベルの細菌テロ。もしそんな悪夢が現実のものとなればと。だが健二はそれでも違和感を捨てきれない。それは不思議でしかない。何故なら

「でもこれって有り得ないんですよね」

「？ 一体どういう」

「だってここにある細菌って天然痘って書いてあるんですよ」

「天！」

「ね？ 有り得ないでしょ？」

天然痘ウイルス。それは非常に強い感染力と殺傷能力を持った悪夢の伝染病だ。そんなウイルスが散布されれば確かに国家レベル、もしくは世界レベルの犠牲者が出るだろう。

だが天然痘ウイルスはもうずっと前に根絶され絶滅したとされるウイルスだ。

確かに研究の為にウイルスを所持する施設も世界には存在するが、それは世界に数箇所。それも並みの軍事施設よりも余程強固なセキュリティが施されている。只のテロリスト集団にどうこう出来る代物では無い。第一に

「強奪散布って言ったって、日本には研究機関もウイルスも存在しません。海外の施設でもレベル4の施設が襲撃されたなんて話は聞かないですし、一体連中は何処を襲う前程で天然痘なんて単語を持

ち出したのか。あるいは天然痘ではなくてそれを隠語とした何か別の物とか……これだけじゃ何も。もっとこれを調べっ？ 理一さん？」

健二の前で、顔色を無くし真っ青になっている理一。こんな理一は見た事が無かった。そんな健二の耳に――

「……………有るんだよ……………」

「はい？ 何がですか？」

――最悪の答えが返ってきたのだった。

「この国に……………天然痘が、さ」

――00..59..59――

00::00::00~01::00::00 (後書き)

作者のダイちゃんです。

いやはや、間が滅茶苦茶空いてしまってすみません。＞＜
もう泣いて謝るしか御座いませんが、ほんとにすみませんでした。
どうにもリアルが忙しくて中々にこちらの活動が進まない現状です。
物語もようやく日付が変わった所。

これからもまあなんとか続けていきますんで（もはやこれは私の一番の趣味ですからw）よろしくお付き合いください。

失礼致しました。

01::00::00<02::00::00(前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

病院で目覚めた健二は理一に事の真相を話す。

事態の深刻さの中に桑田の裏切りをも含み、理一は自分の予想よりも困難な状況の渦中にある事を痛感する。

夏希は何かに取り憑かれたかの様にOZの中をケンジを求めてさまよい続けた。

特機が得た襲撃犯のリストは、事件がまだ続いてる事を示すに過ぎない。

健二だけではなく理一までもが手配され追われる事になった矢先、健二は次のテロへの糸口を見付けるが……

これは、午前一時から午前二時の間に起きた出来事である。

01::00::00〽02::00::00

——01::00::00——

t w u r u r u r u——と鳴るのは自分の机の上に置かれた
三つの電話機のウチ一つ。

「……っ！」

この電話機の番号は極々一部の者しか知らない番号だった。その
限られた者達の中には、今の時点で最も声を聞きたくない人物も含
まれている。正直このタイミングでは電話にも出たくはないのだが、
この電話機は何があっても出なければならぬ電話機でもある。

「んえい！」

ガチャリ、と受話器を取れば「もしもし」と、その重たい口を開
いた。

『夜分にシツレイ致しますよ』

「……君か」

それはやはり——最も声を聞きたくない人物だった。

『何やら賑やかナ様ですね？ どうにも私の耳にハ聞こえる筈のニ
ュースが聞こえず、有る筈の無いニュースが飛び交っていますヨ』

「どんな計画にもトラブルは付き物だ。何事も計画通りとは行かな
いものだよ」

『それは可笑シいですネ。我々は全て計画通りに事ヲ運びましたヨ
?』

「それはそうだが、こちらにも都合と言」

『我々はこのプランからは引かせて貰いマス』

「ミスターウィリーッ！」

立ち上がり声を荒らげるが、受話器の向こうのウィリー・マクレガーには何も響かない。

『もうミッシェンはセカンドプランに移行しています。申し訳ありませんが今後はアナタのお役には立てそうも無いですね』

「待ってくれ。これは……なあミスター。何も計画が頓挫した訳じゃない、ちょっとしたトラブルだよ。よくある事だろう」

『ソレはアナタ達の話で我々とは関係ナイ』

「ミスタ」

『でハ』

「待っ」

プツリ、と一方的に電話を切られた男は

「っ！ ミスターウィリー？ ミス……っクソ！」

荒々しく椅子に座り受話器を叩きつける。ただ苦々しく――

「この……武器商人風情がっ！」

――麻鳥内閣官房長官は苦虫を噛み締めるのだった。

――01..03..06――

慌てて走り出そうとする理一に「待ってくださいっ！」と健二は制止を掛ける。

「一体何の話です！ この国に天然痘なんて有る筈は無いでしょう。根絶宣言は何十年も前の話です、保有株だってアメリカとロシアの施設二箇所だけ」

「レベル4施設で嚴重に管理されている」

バイオセーフティーレベル。天然痘は中でも最も高レベルの

セキュリティ、BSL4に該当している。それは無論、理一も知っている事だ。

「だったら日本には」

「日本にもレベル4施設は在る」

「ちょっと待って下さい」

確かに理一の言葉も分かるが

「確かに設備としては存在していますけど意味は無いでしょう？」

「……………」

「危険なウイルスに対する不安は払拭できなかった。反対が強くて施設は停止されています」

「……………」

「レベル3施設では天然痘は取り扱えない。第一、WHOでも日本の株保有は認められてません。いくら何でも」

「……………」

「……理一、さん？ ………………ちょっと、まさか」

終始無言の理一のその真剣な表情に、健二は一つの結論を見出す。
一瞬で血の気が引いた——自分の出した結論は——

「停止……………してないんですか？」

——最悪の形で——

「……………ああ。実際には……………稼働中だ」

——肯定されてしまった。

「そんな」

「備えは必要だよ。実際問題、天然痘を含めた危険なウイルスがテロ組織や他国が秘密裏に保有している可能性は排除出来ない。だからこそ」

「だからって」

「もちろん極秘だ。特機でだって知ってるのは数名だよ。我々から情報が流れるとは考えにくい」

「でも今狙われてる」

「ああ。これから行っ！ 健二君っ」

健二は自分の腕に刺さる点滴の針を無造作に引き抜きベットから身を起こす。塞いだばかりの傷口が一瞬、健二の動きを鈍らせるが「服を。僕も行きます」
構わず床に足を付ける。

「その傷では無理だ」

「手配中ですよ？ だったら援護は期待できない。それにっ」

「っ、健二君」

健二は立ち上がり

「この医者は名医らしいですしね」とおどけてみせる。

それでも理一の不安を消せはしないのだが、そんな理一の背後からは――

「そのセリフが無ければ殴りつけてでもベットに寝かせるところだったな」

――どこか楽し気な倉光の声が掛けられた。

笑みを漏らしながら病室のドアに手を掛けたまま

「勝手に退院か？ カッターで指先切ったのとは訳が違うんだがな」
しかしその目は笑ってはいない。だが、健二もその目には笑みを
見せない。

「悪い患者ですかね？ 僕」目ではなく、表情だけの笑み。

「どうだかな。俺にとつての良い患者ってのは二通りだ。使っても使っても使いきれねえ程の金持ちのクソツタレか……」

一瞬だけ、倉光の目も楽し気に緩む。

「殺しても死なねェバカタレかだ」

倉光は一つの溜め息を漏らして廊下の闇へと姿を消した。ただ一言――「勝手にしろよ……バカタレが」――と言葉を残して。

そんな倉光の言葉を受け、理一も腹を決める。どうやら健二は本当に

「変わってない、か」

「ん？」

「いや、こっちの話だ」

長い様で短いとはよく言ったものだと言感するのだった。

健二は素早く着替えると自分のバックを持ち

「それで……どっちですか？」と理一に問う。

現状、日本でレベル4施設は二箇所。そのどちらもが稼働中とは考えにくい。そしてその稼働中の方の施設をアシズは狙っているはずだった。

そして理一も同じ結論に達していれば、自然と目的地は決定することになる。そこは――

「国立感染症研究所だ」

「急ぎましょう」

「ああ」

――二人が目指す、次の戦場だった。

「夏希？」

トイレに起きた雪子が夏希の部屋の灯りに気が付き部屋を訪れると、そこにはPCの画面に食い入るようにキーを叩き続ける夏希の姿が有った。

そのどこか鬼気迫る光景に一瞬気後れするも、雪子は思考を奮い起こし夏希の下へと向かう。

「夏希？ もう時間も遅いんだからその辺にして休んだら？ ……」

……夏希？」

「……健二………健二………」

「？ 夏希？ ちょっと、健二君って、ねえ夏希……夏希っ」

雪子の声など全く耳に入る感じも無しにただひたすらにキーを叩き続ける夏希。そんな夏希の意識を無理矢理自分に向けようと肩に手を掛けるが、それは思ったよりも強い力で拒絶される。

「夏希！ いい加減になさいっ、あんたちょっと変よ？ ねえ夏希って！」

「邪魔しないで」

「夏、夏希……ちよっと、あなた」

「……………」

光を失ったかの様な黒い瞳は雪子を眺めた後、再びモニターへと吸い込まれていく。自分の世界は、そこにしか存在しないかの様に。

「っ！ 夏希、もう止めなさい」

「……………いや」

「夏希っ！ あなた、もう」

「いやっ！ 放してっ！」

「夏希っ！」

無理矢理に画面から剥がそうとする雪子に夏希は抗い、その興奮を一層に増していく。

「雪子さん、夏希がどうかしっ！」

激しく響く二人の声に侘助が駆け付けけると

「侘助君、お願い！」

「放してっ！ 邪魔しないでえっ！」

暴れる夏希にしがみついている雪子の姿があった。

「一体どうなってるんですっ！」

「分からないの！ 夏希の様子が変わで」

「放して！ 放し、放せーっ！」

「夏希っ！ 落ち着け！」

「落ち着いて！ ね？ 夏希お願いだからっ」

侘助と雪子に取り押さえられながらも、夏希はただひたすらに愛しい人の残したパソコンに手を伸ばし続けていたのだった。

「放して！ 健二、健、いやーっ！っ！」

――01..13..52――

健二が助手席に乗り込んだのを確認して理一は車を発車させた。

健二が車での間に警察の無線を傍受していたが、どうやらまだ研究所は襲われてはいないらしい。ならば、とアクセルを踏む理一の足にも力が入る。

そんな中

「聞いときたいんだけどな、健二君」

「なんです？」

数え上げたらキリが無い程に聞きたい事はあるのだが、今は重要

な事だけをピックアップする。必要最小限の知識は仕入れておきたい。

「OZ管理棟の闇。あれは君の仕業かい？」

自分達がテロリストの仕業と危惧する、目的不明な黒い雲。

「はい。僕のプログラムです」

「そうか……目的は？」

健二の物であるとの事はそれ程の驚きじゃない。シャドウが彼の物である以上、それはある意味予想通りとも言えた。だが問題は目的だ。如何せんそれが見えない。見えなかった。そして答えは出た。

「アシズと歩調を合わせる組織があります」

「アシズと？ そりゃあテロ組織の中にはそんな連中も少なくないだろうが」

「はい。組織の特定迄は出来ませんでしたけど、でも目的は見付けました」

「それは？」

一人でよくもそこまで、と感心したが――

「ISS落下計画」

「ISSって！ 国際宇宙ステーションかつ！」

――事態は理一の予想を飛び越えた。

「連中はNASAのシステムからISSへの指令コードを奪い取ってステーションを落下させる積もりです」

「そんな事が可能なのか？」

NASAである。およそコンピューターに関して化物みたいな連中がわんさかいる組織。そんなイメージが強いが

「かなり高レベルのアクセス権限者の関与があると思います。実際、

彼等の手にしたコードの一部を見ましたけど……」

「本物だったのか」

「真正正銘」

無理矢理でもこっさりでも無い。合鍵を貰っていると言う話だ。これでは犯人は堂々とアクセスし、当たり前前の様に目的を達成するだろう。

「だから、先回りして外部からのNASAへのアクセスにフィルターを掛けたんです」

「フィルター？」

「権限奪取には必要な手順があります。そのプロセスに対してプロセスを仕掛けました。通常の作業には支障はありませんが、通常と違う方法では何も出来ない。たとえば合衆国大統領本人だとしてもです」

「だが通常通りだとステーションへの権限を独占出来ない、と」

「誰にもステーションは奪わせません。絶対に」

敵も見えず、味方もない状況に置かれた一年間。

それでも尚、健二は常に戦っていた。出来うる限り抗い抵抗してみせた。

「まったく、それでつくば宇宙センターか」

闇から伸びたラインはそこに繋がっていると佐久間は言っていた。「直接NASAは難しいですからね。少しでも薄い場所から入っていくのが基本です」

「君ってやつは」

「？ 理一さん？」

自分の子供と言ってもいい歳の男にここまでやられては、自分としても立つ瀬がない。なわば精々自分も抗って見せようと決意する。「さて、と」

ピ、とナビゲーションのスイッチを入れ「国立感染症研究所」と告げる。

音声ガイドダンスが目的地設定を告げているが

「理一さん、別にナビなんか使わなくても」

それほど分かりにくい場所でも無いと思う健二に、理一は笑みを浮かべて応える。

「ウチの車は特別製^{特機}でね。ナビを作動させるとGPSで現在地が本部にリアルタイムで送られるんだよ」

「へ？」

そんな事をすれば捕まえに来てくれと言っている様なものだが

「どうやら僕達にはテロリストの嫌疑が掛かっているみたいだからね。精々完全武装したお巡りさんが駆け付ける事だろうさ」

「理一さん」

「ふふ……援護は呼べなくても手勢は増やせる」

自分達を追って警官隊がくればそれでいい。自分達の行く先にはテロリストが待っているのだから、相手は変われど目的は同じだろうと言う話だ。

理一はタバコをくわえて火を探すが、目の前に健二が差し出したジッポの炎が揺らめく。

「いつからだい？」

「忘れました」

理一の後に自分のにも火を点け、カチン！ とライターを閉じる。そんな健二から視線を外し、理一は楽しそうに煙を吐いた。

「猫の首に鈴も付けたしね」

「？ 鈴？」

「ふふ、さあて、何が出てくるのやら……っと」

二人を乗せた車は、深夜の東京を走り抜けていくのだった。

ジョージの部屋に部下の一人が勢い良く入ってくれば

「I found Ashizu and organizations act together――」

(アシズと行動を共にする組織が分かりました――)」

数枚の書類を彼の机の上に置きながら、その表情は事態の深刻さを物語っていた。

「The worst――」

(最悪です――)」

ジョージは置かれた書類に目を通し、ばさりとそれらを机に投げすてる。彼にとっても、これは最悪の話でしかなかった。

「Abdul Lagis……――」

(アブドウル・ラジス……――)」

「Yes. It is Abu・Sajin. I then enter Japan with Ashizu――」

(はい。アブ・サジーンですよ。アシズと一緒に日本に入国してます――)」

「The more. Unless it's a combination of the worst imaginable――」

(なるほど。考えうる限りの最悪の組み合わせだな――)」

アブ・サジーンとは旧体制のスグリアだけでなく、中東に広く浸透している組織の一つだ。極めて過激な思想と行動力をしてCIAがひどく警戒しているテロ組織。

書類の中の写真には、その組織の中でも過激な行動を好む幹部であるアブドウル・ラジスの写真があった。それを苦々しく見詰め

「NSA is also stupid――」

「NSAも馬鹿じゃない――」

アブドウル of 危険性は誰もが知る所だ。いくら彼等でも自分達の計画にアブドウルを組み込むとは考えられない。

（踊らされたな、ケビン……）

漸く舞台の概要が見え始めた。そんな時点での新たなキャスティングだった。しかも考えうる限り最悪の犯人役だ。

「I move the troops? Yokosuka is one team that can act――」

（部隊を動かしますか？ 横須賀に行動可能なチームが一つ――）

「The M60 and shoot up the difference not in Fallujah. We can not flashly moves we go in Japan――」

（ファルージャでM60を撃ちまくるのは訳が違う。日本国内で我々が派手に動くわけにはいかんよ――）

「Want to do then?――」

（ではどうします？――）

自分の返答を待つ部下を一瞥しジョージは暫し目を瞑る。自分の予測が甘かったのか事態が予想外の展開をしているのか、それは今のところは判断出来ない。

問題は、もう自分達は評論家を演じている場合では無いと言う事だ。たとえ壇上の誰かを蹴落としてでも舞台に上がらねばならない。その時が来たということはハッキリした。

ジョージは立ち上がり掛けてあった上着を手にとるとその表情は普段の穏やかな影は微塵も無い。

「The team waits in war prepare dness. Ashizu, Abdul, Japanese」

police and the Chinese mafia,
I completely understand the
movement of all organizations
involved in this incident. Team
in Okinawa? —

(チームは臨戦態勢で待機。アシズ、アブドウル、日本警察と中国
マフィア、この事件に関わる全ての組織の動きを完璧に把握する
んだ。沖縄にチームは? —)

「Two teams —

(2チーム —)

「Good. They had to worship the
rising sun Tokyo Barcelo. But
! —

(よろしい。連中には東京の朝日を拝ませろ。ただし! —)

人差し指を突き出して視線を強めると

「Never before has a shot to the
instruction. Ahead of the trigger
that want to have the American
flag. Is that understood?
d? —

(命令があるまで絶対に撃たせるな。そのトリガーの先には星条旗
が有ると思え。分かったか? —)

「I understand —

(了解 —)

「Good —

(結構 —)

言うやジョージは部屋を出ようと歩を進める。が、部下はそんな
彼に

「Where the Commissioner? —

(局長はどこへ? —)

彼の行き先を訪ねた。

上着を羽織ったジョージはドアを開けながらも部下に答え――

「White House――」

（ホワイトハウス――）

――CIA局長ジョージ・ワイズナーはワシントンへと飛び出したのだった。

――01..30..05――

人が走り大声が響き渡る。そんな喧騒が佳主馬の眠りを妨げる。

何事かと寝惚けた頭を奮い起こして騒ぎの方へ向かってみれば、そこには既にほとんどの大人が揃っていた。

佳主馬よりも早くに目が覚めたのだろう。夏帆は既にその場に居合わせていた。

「辻本？」

「っ！ 佳主馬っ」

「なんだよ？ 一体なんの騒ぎで」

自分に駆け寄る夏帆に苦笑を見せるが、彼女の深刻な表情が一気に覚醒を促した。そんな佳主馬の耳には

「放してっ！ 邪魔しないでー！」

「いい加減にしろ！」

「一体どうしたって言うんだっ」

「夏希ちゃん落ち着いて」

叫ぶ夏希とそれを宥め抑えようとする者。まさに修羅場と呼ぶに

相応しい光景に佳主馬も息を飲む。だが何より彼を疎ませるのは騒ぎじゃない。その中心にある――

「……佳主馬……」

「……大丈夫だよ」

――狂気を振りまく夏希の姿だった。

思わず自分のシャツを握る夏帆の身体の震えを肌で感じ、佳主馬は自然と彼女の肩に手を置き自分に抱き寄せていた。

狂気を見せる人間は見る者の心を凍らせる。そんな体験を佳主馬は一年前の沖縄の海で体験した。あの恐怖から、出来うる限り夏帆を引き上げてあげたかった。

夏希を囲む喧騒をただ呆然と眺めるしかない自分達。そんな自分の耳に、パァン！ と大きな音が鳴り聞こえた。

そこには、振り抜いた手もそのままに、夏希の顔を真正面から見詰める万理子の姿があった。

「もう……お止めなさい。夏希」

「……………」

しん、と静まりかえる。不意に訪れた静寂は本来在るべき夜の音。風と虫の穏やかな音で構成される静寂。

皆の息づかいさえ聞こえそうな空気の中、万理子は静かに口を開くのだった。

「今の貴女……そんな貴女を、彼は好きになったの？」

「……………」

「彼が望んだのは……こんな貴女？」

「……………」

静かに、万理子は夏希の手を握れば、その目はもう優しいそれになっていた。ただ、優しく、夏希に思い出させる。

「望まない……彼は絶対に望まない」

「……………」

「どんな事が有ったって、たとえ自分に何が有ったって……貴女の幸せだけを願ってる。そう望んでる」

「……おばさん……」

「そんな人だった。貴女が選んで……母さんが最後に認めたのはそんな人だった」

「……健二」

「そんな男なのよ？ 貴女の旦那。貴女の夫は、そんな男だったのっ！ それだけは忘れちゃ駄目よ？ 夏希」

「……おばさん」

気が付けば、夏希の肩にはそっと手が添えられ、その先には「夏希……」と優しい笑みを浮かべる雪子が居た。

そっと。静かに身を寄せる夏希を、雪子は黙って迎え入れたのだった。

夏希と雪子を囲んで静まる室内にあって「かぁー！ 何だっただんだ」と万助は頭をかきむしる。どうにも自分の知る範囲の外で何かが進行してる様子だ。モヤモヤするなんてもんじゃない。

そんな空気の中で、一人深刻な表情を見せている侘助に、頼彦が気が付く。

「何か……………知ってるのか？ 侘助」

頼彦の言葉で侘助にその場の視線は集中する事になる。そんな中、どこか観念したかの様に溜め息を一つだけ漏らして――

「健二が………生きてるかも知れない」

——佐助はその静寂の夜に更なる静寂を呼び寄せる事になるのだった。

◇ ◇ ◇

バックを開き特機から持ち出した銃にマガジンを挿れる健二。その手馴れた手付きは彼が銃器の取り扱いが昨日今日覚えたものではない事が見て取れた。その目には暗い光が宿っている様に見える。少しだけ考える。過去の健二と今の健二。そのズレを感じた理一は……携帯を取り出して健二に差し出した。

そのズレを、今埋めるために。

「何です？」

「君の生存は知れてるよ、敵にも味方にい、は居るか分からないが……もう透明人間で居る必要は無い」

「？ 理一さん一体」

「今日が何の日か……覚えてるんだろ」

「……………」

七月三十一日。それは健二にとって忘れる事の出来ない重要な日。

陣内栄。その命日だった。無論、健二がそれを

「僕が……忘れる訳無いじゃないですか」

「そうだな」

そう言って携帯を健二に手渡し、前を向きながら彼に告げた。

「皆、長野に集まってる」

「理一さん」

「居るよ……夏希も」

「っ……………」

その手に渡された携帯を見詰める。

CIAが夏希や佐久間を見張っている事はシステムに侵入した時に知っていた。日本の組織とは違う。彼等は死んだと言うニュースを聞いた所でその手を緩める事はしない。たとえ南極の永久凍土の中からだろうとマリアナ海溝の最深部からだろうと、小磯健二の死体をその目で確認するまでは決して判断を間違う事はない。

だからこそ身を隠した。身分を伏せた。

だが、今はもうその必要は無くなった。事態は動き出し、自分は動き出した。

そして健二は、一年間耐えたその行為を――何度も押したクリアではなく、久しぶりのコールのボタンを押したのだった。

◇ ◇ ◇

pirororo――と電話が鳴れば、それは夏希の携帯だった。側に居た理香が、ふ、と表示を見れば、そこには【理一おじさん】と発信者の表示があった。

どうしようかとも思ったが、雪子に抱きしめられようやく落ち着

いた夏希を見て、理香はその携帯を手に取り通話を押した。

「もしもし理一？ ごめん、今ちょっと夏希は、っ！ ……………ち、ちよっと待って！」

夏希の下へ向かった理香はその手に持った携帯を夏希に差し出し

――

「出なさい。夏希、アンタによ」

――そう言って、彼女の目をしっかりと見詰める。

「ちよっと今は」

「出なさい。夏希」

「あんた」

「夏希っ！」

理香の行動を制止しようとした直美の声をなかば無視して、理香は更に携帯を夏希へ突き出している。

「……………」

ゆっくりと、その差し出された自分の携帯を手に取りれば

「……理一、おじさん？」

『……………』

息を飲む。言葉に詰まる。そんな気配が電話の向こうから伝わってくる。

「あの……おじさ」

そうして――――聞こえた。

『……………夏希……………』
「っ！」

時が、止まった。
いや、もしかしたら今、一年前のあの日から止まったままの夏希の時間が、動き出したのかもしれない。



『……………』
電話の向こうからは何も返って来ない。返事も、言葉も、呼ばれる事を夢見た自分の名前も……………だが、健二には伝わる。

確かに、そこに居ると、感じる事が出来た。

「……………夏希……………」
『……………』
「……………夏希……………夏希……………」
『……………』
「……………夏希……………夏希……………夏希……………」
『……………』

言いたい事が沢山あった。
話したい事が沢山あった。
聞きたい事が沢山あった。

声。名前。昨日、今日、明日、過去、未来。

家族友人親戚後輩見たこと聞いたこと知ったこと感じたこと知識
経験夢希望挫折事件喜劇悲劇——確かに有った筈の二人の時間
を、せめてその心に染み込ませたかった。

その想いと願いとは裏腹に——

健二はただ「……夏希……」としか言えない——
夏希はただ『……』詰まる言葉を押し出せない——

健二の視界が僅かに滲みそうになった時、道路標識が視界に飛び
込んでくる。そこには国立感染症研究所まで、残り一キロを切った
事を知らせていた。

「帰るから……必ず帰るから」
『……うん。待ってる』

振り切る様に携帯を耳元から放し通話を切る。

大きく、息を一つだけ吐いて「ありがとう御座いました」と携帯
を理一へと返すと、健二はバックから残りの装備を取り出し始めた。
携帯を受取りながら見る理一の瞳には、健二の目には強い、されど
決して暗くはない光が戻った。そう思えた。

満足気に笑顔を見せる理一が、ふ、とルームミラーを見れば、そ
こには赤い光が見え出した。どうやら健二の耳にもあの賑やかなサ

イレんが聞こえた様だ。苦笑を漏らして理一を覗いていた。

「さて、招待客のお出ました」

「パーティー会場までは距離ありますけど、皆さんせっかちの様です
ね」

「ははは」

この状況下で笑みを見せ合える自分達はどこかおかしいと思っ
てしまう。だが――

「なくに、テンション上げてくには丁度良いさ」

「ですね」

――こんな狂った夜を駆け抜けるには、それくらいで十分。そう思
いながら、理一は更にアクセルを踏み込むのだった。

――01..43..56――

特機の発令所では多くの者達が慌ただしく動き回っていた。中
では桑田からの通信を受けていたのは吉田だった。理一の車のGPS
反応が現れた事で事態は一気に動き出している。

『確認だ、ほんとに部長なんだな？』

「はい。現在移動中。既に本庁のパトカーが取り付きましたけど、
停止命令には応じてません。そちらは？」

『もうすぐ追いつくさ。だがおかしくないか？』

「はい？」

桑田が問い返せば

『GPSで追跡されるのは分かりきってる。逃げきる為の行動には

思えない』

「でも現に止まってません。こちらかの呼び掛けにも無反応で」

『追ってる連中に通告しておけ。多分、部長の目的が何かある。十分に警戒する様に言っとけ』

「分かりました。あの……吉田さん」

『あん？』

「……………気を付けて」

『はは、了解だ』

無線を切り、桑田はそのまま追跡中の警官隊への無線を開く作業に移っていった。そんな桑田の後ろ姿を見詰める人物が一人。

柴田だった。

自分の端末画面に数枚のウィンドウを展開して作業をしているが、その内の一つを中央に上げる。そこには電話番号の一覧が展開されていた。

「……………」

カタカタとキーを操作していけば、その中に数箇所ラインが引かれた。

背後を人が通る気配を感じれば、すかさず画面を切り替える。通り過ぎるまではその画面で仕事をし、気配が消えれば再び画面を戻す。

「……………どうして」

呟き、自分の前の受話器を取れば――

『辻』

「お話が有ります。今一人ですか？」

『？ ああ』

「そっちで、良いですか？」

『構わん』

――辻に内線を入れた柴田は受話器を直ぐに置き、端末を操作してから席を立った。

軽くノックをするが中からの返事を待たずに室内に入ってくる柴田に、辻は若干の驚きを感じるが、そんな辻を無視する様に柴田は辻の目の前に立つ。

「さっき部長からメールが来ました」

「何だって？」

それは聞いてない。皆で追い、さっき場所が判明して猛追跡の真っ最中である。最中に連絡が来ていてそれを秘匿しているとなると、それはもう捜査妨害と言っても良いだろう。

柴田を問い詰めようと席を立った辻に先んじて柴田は自分の携帯を差し出す。そこには理一からのメールが表示されていた。

「部長が……貴方は信頼出来る」と

「防衛大の同期だよ。いいか？」

「はい」

辻は柴田の許可を得て携帯を受け取り画面を確認すれば――

「……桑田？　ここの捜査員か？」

「はい」

――そこには【桑田が情報を漏らしている可能性が有る。彼女を洗え。辻は信頼出来る。協力を】と表示されていた。

「それで？」

どうやら理一は事態の真相に近付きつつ有るのだろうと感じる。そんな彼がこちらに道を示し出した。おそらく今の追跡騒動もその一端を担うのだろうが、このメールはその線とは異なる気がする。そしてそんな辻に柴田は「見てください」と辻の端末を操作し画面を切り替えた。

そこには先程の電話番号の一覧が表示される。

「これは？」

共に画面をのぞき込む辻に

「美也、桑田捜査官の携帯の通話履歴です。過去二十四時間の」

「携帯の？」

「はい……そして、これです」

キーを一つ押せば、先程と同じく線が引かれた物が数本。

「……同じ番号だな」

「ええ。でも」

「問題が？」

辻の問いに答える代わりに、柴田は少し画面を変えれば——そこには【該当者無し】の文字が表示された。

「どういう事だ？」

「分かりません。NTTのデータベースにも、各携帯会社の顧客データにも、この番号の契約者は存在しません、プリペイド携帯ではない」

「だが現に通話してる」

「この二十四時間で九回も」

普通では有り得ない事が、この非常時の折に行われている。それは警戒を促すのに十分過ぎる要素では有る。だがだからと言って

「これだけで内通者とは断定出来ないだろう」

「分かってます。ですから」

「？ 柴田君？」

画面を閉じる柴田を促してみれば、彼女は笑みを浮かべながら——

「少し仕掛けをしました」

——新しい画面を展開するのだった。

国立感染症研究所。流石に深夜とは言え無人である筈の無いこの場所、闇夜の中、慌ただしく動く人影を咎める者は居ない。それを役目に負っている者達は既に物言わぬ骸と化していた。

静かに、速やかに。警備員を無力化したアシズ一味は、固く閉ざされた正面玄関を避け、建物脇の関係者専用の非常口へと集まっていたが

[illegible]

「どうした？」

~~~~~

（それが――」

警備の内の誰か。なのだろう。突然のテロリストの襲撃の中で、研究所施設の各出入口の閉鎖を成した者が居たと言う事だろう。開いている筈のドアが閉ざされていた。

「.....」

「壊せ」

[illegible]

（破損を感知すると全館が封鎖されます――）

[? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?]

「なら早く解錠するんだ――」

「?????!      ????      ??      ????:???:?——  
（分かりましたっ！      どうしました？      ——」

自分の言葉を手で制したアシズを見ると、彼は真剣な眼差しで辺りを見渡していた。

そんな彼の様子に仲間達も警戒を始めた矢先に、アシズは銃を握り直し――

「????????? ?????????? ??????????」  
”????? ??????——

（邪魔が入ったな。来るぞっ——）

アシズの言葉で一斉に銃を構え直した男たちの耳に、パトカーのサイレンと闇を照らす赤い光の明滅が現れた。

◇ ◇ ◇

「ゲートが無人なんて」

「先を越されたかな？」

健二と理一はパトカーの群れを引き連れたまま研究所のゲートを弾き飛ばして侵入したのだが、それに対する警備のお咎めが無い事に自分達がアシズ達に先を越された事を悟る。

彼等の狙いを考えると絶対に手遅れになってはならない。理一は迷う事なく研究所の本施設を目指しながら

「タイミング的に……どう思う？」

健二にかかるく伺ってみる。全ての時系列を有る程度把握しているのは自分よりも健二の方だと理解している。そして健二なら有る程度の正確性を持って予測できると判断しているし、その予測は——

「多分……ギリギリって所だと思っ！ 理一さんっ！」

「っ！ このっ」

——またしても正確だった。

健二の掛け声が合図になったかの様なタイミングで、車のフロントガラスに銃弾が撃ち込まれたのだった。

タイヤを滑らせながら車を停めた理一の横では、既に健二は銃を



構えて車の外に飛び出していた。背後で次々に停まるパトカーに対  
して一斉に銃弾の雨が浴びせられる光景は――

「冗談じゃないなまったくっ！」

――さながら戦場だった。

理一は銃の安全装置を解除し、アシズ達との銃撃戦へと身を躍ら  
せたのだった。

――01..53..15――

「はい、そうです………ええ、行き先は国立感染症研究所で……  
二人一緒です………」

特機の資料室で、周囲に気を配りながら桑田は電話を掛けていた。

「こちらの捜査官も急行しています………SATへは？ ……は  
い。到着までは………分かりました。失礼します」

パタリと携帯を閉じ、桑田はいつもの様に息を整え、資料室を後  
にした。

発令所の自分の席に戻れば周囲の喧騒は一段をその激しさを増し  
ていた。

現場のパトカーからは銃撃を浴びている旨の緊急連絡が入り、吉  
田や吉井達も現場まであと僅かの位置にたどり着いた。事態は一気  
に危険度を増している。

座った桑田に「先輩、これお願いします」と佐橋は書類を置いて  
また駆け出していく。その書類は各所轄への緊急マニュアルである。  
直ぐにデータを送信しようとキーを操作すると――

彼女の端末はその操作を拒絶した。

「あれ？」

もう一度試すが——Error——「そんなっ」と何度も試すが、何度やっても結果は同じだった。

「どうしてっ！」

思わず声を荒らげる桑田に、一瞬、特機の面々の注意が惹かれれば、その中を辻が歩いている。何処かに指で合図を送れば、彼の部下や施設保安要員の数名が彼の下に歩み寄る。

皆がそんな辻達の姿にも手を止めて見入っていると、彼等は真っ直ぐに桑田の下へと。

「っ！ なに？」

ようやく桑田にも辻の動向が視界に入ったが、その時、すでに辻は彼女の目の前まで来ていた。

「桑田美也子」

「なんです？ 一体」

「君を拘束する」

「え？ ちょっと、こんな時に何を」

「抵抗はしない事だ」

目配せをすれば二人の男が桑田を両側から確保しだす。

「ちよっ！ 止めて下さい！ 私が何をしたって言うんですっ！」  
激しく抵抗を見せる桑田に顔を近付け

「特機の情報を外部に漏らした。これは重大な背信行為だ」

「知りませんっ！ 私じゃない」

「言い訳は聞くんよ。だが……君の黒幕の事も聞かせてもらおう」

「誤解ですっ！ 私は、私は裏切者じゃないっ！」

まさかの捕り物劇に呆然とする一同の中を、抵抗を見せながらも桑田は連行されていく。

「なんの証拠が有ってこんな真似を！ 美夕っ！」

「美也子」

連行される桑田の前に柴田が立つ。その目は真っ直ぐに桑田を見つめていた。

「あなたからも言って！ こんなのもって無いわっ。私は裏切ってない！ 証拠なんて何も無いじゃ」

「証拠だったら」

「っ！ 美夕？」

すっ、と歩み寄ると柴田は桑田のジャケットの襟の裏に手を伸ばすと、何か小さい物を指で摘み取った。それを桑田に見せれば

「……盗聴器……美夕あなた」

「残念だわ」

それは、暗に自分が仕掛けたのだと物語っていた。

「どうして……なんでよっ！」

ほぼ同時期に特機に配属になった。そんな二人であれば、今まで苦楽を共にし死線をくぐり抜けてきた、公私共に親友と言って良い関係だった。桑田にとって、それは真っ赤な裏切り行為に思えてならないが、それはそのまま柴田にも当てはまる想いでもある。

「どうして？ ……それは私の台詞よ」

静かに見詰める柴田の前で、桑田は連行されていったのだった。

——01..58..01——（アメリカ・ワシントンDC——11..58..01——）

「Mr. President——」

（大統領——）

レグラン大統領のもとに補佐官マックス・ウィラーが現れる。指で軽く入室を促せば、ウィラーはそのままモニタの方向へと歩み出す。

「The video is streamed to the net two minutes before——」

（二分前にネットに流された映像です——）

「The net? ——」

（ネットに? ——）

数人のスタッフと共にモニターを注視する。そんな大統領の視線の先で画像が切り替われば、そこにはアブドウル・ラジスが自身の所属する組織、アブ・サジーンの旗の前に立っていた。

彼の宣言はOZにより同時翻訳され、それは世界に届けられた——

『我々の意思は暗黒の雲となって世界に示された。我々は世界秩序を蹂躪する大国に警告する。今すぐ、あらゆる他国に対するあらゆる干渉を中止しろ。さもなくば………我々の意思は、お前達を暗黒の雲に呑み込むだろう』

アブドウルは不敵に笑い、その映像は消えたと言う。最後に一言………

『まずは挨拶がわりだ。見ているがいい』

そう、言い残して。

――01..59..59――

02:00:00~03:00:00 (前書き)

前回のSUMMER WARS 24>TWENTY FOUR<

混乱の一夜にあって、健二と夏希は電話越しの邂逅を果たした。

情報漏えいの疑惑が浮かぶ中、柴田は桑田の造反を突き止め辻へと引き渡すことに。

CIAにはアシズと同調するテロ組織が浮上するが、それは事態の悪化を思わせるものだった。

テログループの狙いを捉えた健二と理一は国立感染症研究所へと乗り込むが、そこではアシズ一派との戦闘が始まった。

主席補佐官のマックス・ウィラーはOZで流されたアブドウルの声明をレグラン大統領へと観せるのだったが……

これは、午前二時から午前三時の間に起きた出来事である。

02::00::00\03::00::00

――02::00::00――

「くそつたれがよ！」

「どうします？」

「いいから突っ込めっ」

「がってんっ！」

吉田が研究所に到着した時、そこは既に戦場と化していた。車内に流れる無線からも現場の混乱は容易に伝わる程だ。

手配者の理一の車を追跡してみれば車は研究所のゲートを吹き飛ばして敷地内へ侵入。おまけに研究所周辺から銃撃を受けてしまった。まさに鳩が豆鉄砲を喰らったと言わんばかりの混乱ぶりだが、徐々に援護態勢も整いつつある。

自分達は警察官よりもこの様な事態には慣れていた。無論、平和な日本で頻繁に銃撃戦が有るわけではない。だが、その平和な日本を維持するために、その影で鉛の弾が飛び交っている現実もまた否定は出来なかった。そして特機もまた、その現実の中に身を置く組織である以上、好む好まざるを抜きにその技術は向上してしまう。

吉田達は警官隊の最前列まで一気に車を躍らせた。銃撃を受ける中で車の外に飛び出せば、近くには理一の車がありその影には――  
「よう！ 随分賑やかだなっ、健二！」

「吉田さんっ！」

――久しぶりの邂逅に、この場に不釣り合な笑顔を見せてしまう。

「パーティーには遅れたか？」

「ははは、ようこそナカトミ・プラザにつ！ マクレーンは一緒に

やないんですか？」

「休みだよ！ 休暇とってベガスに行っちゃった」

「それは残念！」

笑みを見せ合えば自然と呼吸が合ってきた。吉田としては、かつて健二と何度も死線を共にしてきたが、まさかこんな荒事で健二が自分と並ぶとも思っていなかっただろうが……

「確認しとく」

「？」

「お前は俺の知ってる小磯健二！ で、良いんだなっ」

「吉田さん」

銃弾から身を隠しながらも吉田はそれだけを確認する。それさえ確認すれば――

「はいっ！」

「OK、だっ！」

――また、共に戦える。二人は同時に撃ち返しながらも笑い合っていた。

そんな二人を笑みを浮かべて眺めた理一だったが、視線の先で動きを見るや

「健二君！」

「？」

「あれをっ」

理一が促した先では研究所のドアがガチャリと閉まった所だった。

「入られました？」

「ああ！」

「くそっ」



研究所の侵入を許した。このままでは不味いと思うのだが如何せん、敵の抵抗は激しく建物にとり憑く事が出来ない。そこへ、キィッ！ と一台の車が強引に飛び出してくれば――

「乗ってくかつ！」

「吉井さん！」

――吉井が車の窓から笑顔を見せていた。

健二と理一がすかさず乗り込めば、吉井はそのまま建物に突進していく。

「おいおい吉井！」

「ちょ！ 吉井さん？」

まったくの無策で突進するとは思わなかった二人は思わず戸惑いの声を上げるが、吉井の顔には剣呑な笑顔が浮かび

「耐シヨックっ！」銃撃を受けながらもお構いなしに突き進む。

「たまらんな」

「本気ですか！」

テロリストの一人がマシンガンを撃ち続けるが、まったく車は止まることなく肉薄し――

「???? ???? ???? ???? ???? ???? !――

（畜生――！――）

「なむさん！」

――車はそのまま壁に激突した。その間にテロリストを巻き込んで。「悪いな、今度から日本語で頼むわ」

非常口と敵一団の間に車を挟み込んだ吉井はそのまま敵の制射に掛かる。その隙に車からは健二と理一がドアにたどり着くが、そこは既にオートロックが掛かっている。

「ちよっと待ってる。今、本部に連絡して協力を」

「こっちは手配者ですよ？ 平気です、任せてください」

言うや健二は一枚のカードを施錠部に差し込み、カードから伸びたコードをバックから取り出したパソコンに繋げる。

「開くのか？」

「この規模の研究施設ならきつと」

自分の取得した影の中に、このドアのアクセス権限者が含まれていればそれで――

「！ 良し」

「え？」

――カチャリ、とドアは解錠出来るのだった。

「すごいな」

「行きます」

驚く理一を促し、二人は研究所へと足を踏み入れそのドアを再び閉ざしたのだった。

――02..10..16――

子供達を寝かせた女性陣が居間へと集まってくる。不意に知らされた健二の生存と彼からの電話に、皆混乱を避けられない様子だ。

「ま、まあ良かったじゃねえか。健二の奴が無事って事だけ分かったんだしよ」

「父さん、そんな簡単な話じゃないでしょう」

「そうよ。一体なにがなにやら」

万助の様に手放して喜んでばかりも居られないのが現実だ。

死亡した。筈の人間が生きているとなれば、それは大騒ぎになるに決まっている。しかも現状

「健二君はまた……なにかに巻き込まれてるみたいだしな」

「巻き込まれてるってんなら良いけど、な」

「ああ」

頼彦達兄弟は、今日日本で起こっている異変に関わっているのではないかと考えてしまう。それも巻き込まれる形ではなく、むしろ中心に近い場所で、と。

ふ、と太助は侘助に視線を送れば

「侘助君、何か知ってそうだったけど」

「……」

太助に振られて沈黙してしまうが、一同の視線も感じる。皆が自分の言葉を待っているのが分かった。

ふう、と溜め息を一つだけ付き

「俺にも何にも……ただ」

「ただ？」

「昨日俺に会いに来たOZの奴が」

「ああ、あのお客さん」

聖美には夜に訪ねてきた磯貝の記憶が浮かんた。

「そう。そいつが夏希に言ったらしい。健二が生きてるって」

「OZが……」

「そう言えば夕方騒いだ時も佳主馬君がOZを使っていた時でしたよね」

「……黒いラブマシーン………シャドウ」

奈々の言葉に、佳主馬は自分の腕に撒かれた包帯をさする。自分の腕を握り掴み、鬼気迫る勢いの夏希を思い出す。

「もしかしたら……」

侘助の呟きは何故か大きく聞こえ

「……もしかしたらOZの闇やシャドウとなんらかの関わりがあるのかもしれないな、あいつ」

「健二さんが？ でもどうして健っ？ ……渡？」

彼が悪事を働くとは思えない。そしてシャドウや闇がまともなものとも思えない。そんな自分の思いを否定するかの様な侘助の言葉に疑問を呈そうとした佳主馬は携帯のバイブが着信を知らせていることに気が付く。【渡】と表示された電話に出てみると

「もしもし？」

『佳主馬か！ 良かった、起きてたな』

「どうしたんだよ、こんな時間」

『いいからOZに入れっ！ テロ組織みたいな奴等が声明を出したぞっ。もしかしたらあのOZの闇、あれは——』

「——まさか」

「佳主馬？ 電話、渡なの？」

携帯を握り締めたまま固まる佳主馬を見詰める夏帆に――

「闇はテロリストの仕業かもしれないって……OZが」

――健二と闇、そこにテロリストまでもが絡んできてしまった事を、皆に告げたのだった。

――02..15..20――

特機内の一室で、桑田は椅子に座らせられ後ろ手に拘束されていた。そんな部屋のドアが開けば辻が剣呑な表情で入ってくる。

「こんな真似は違法です！ 私にも権利がありますっ」

「言いたいことはそれだけか？」

桑田の怒声にも近い叫びにも辻は全く動じない。そのまま触れんばかりに桑田の鼻先に自分の顔を近づける。

「誰に情報を漏らした」

「知りません」

「あの番号は？」リダイヤルした時から、その電話は繋がらなくな  
ってしまった。

「知りません」

「いつから情報を流してたんだったっ！」

「知りませんっ！」

思わず胸ぐらを掴む辻を、桑田は強い視線で迎え撃った。その目  
には諦めの色は浮かんではない。

「電話を描けさせてください」

「電話だって？」

手を放し距離を取った辻は自分の携帯を差し出すが、  
「ここじゃない。第三者の居ない場所で。秘匿回線を」

聞かれる訳にはいかないと示す桑田は己が主張をする。

「私にはその権利があります。それまでは何もお話することは有り  
ません」

「……権利？ ……ははは」

「何が可笑しいんです」

思わず笑ってしまった辻に桑田も戸惑う。

「状況が呑み込めてない様だな桑田君」

「どういう意味です」

桑田の前に置かれた机に両手を付いた辻はその強い視線を真正面  
から叩きつける。

「イギリスでガスが盗まれ世界中で大停電。特機は敵の侵入を許し  
ハマド大統領は襲われた。おまけに現在謎の集団と派手な銃撃戦の  
真っ最中、この日本でだっ！」

「……………」

「君に権利など無い。いいか？ この意味が分かるか？」

「違法ですっ！」

辻の言葉に反射的に返すが、それは何の意味も成さない。

「君には弁護士を呼ぶ権利も黙秘する権利も無い。私はその口から聞きたいのは、誰に、何時、何の情報を流したか、それだけだっ！君には質問に答えてもらおう、どんな手を使ってでも……無理矢理にでもだ」

「そんな無茶苦茶が通ると本気で」

「通るさ。上層部の許可は出ている」

「そんな」

「……………言わないんだな？」

「……………電話を掛けさせて貰うまで、話すことは有りません」

「……………」

「……………」

それは辻の最後の猶予だった。その沈黙を終わらせ「入れ」と言葉を発せば、数人の男が部屋へ機材と共に入室してきた。

手早く機械を設置する者。中には

「ちょ！ 何するんですか！」

桑田の腕や胸元に何かを貼り付けていく。そこから延びるコードは桑田の想像を刺激した。その予想の先、思わず辻に視線を向けると「時間が有れば他の手段も有るんだがな。急場で用意出来るのはこれくらいだ。君も除細動器位は見たことあるだろう」

「……………冗談は止めてください……………ちょ……………辻さんっ！」

「言え。誰に、何時、何を渡した」

「こんな事が許されるわけない」

「君の役目は何だ！ 目的はっ！」

「言えません」

設置を終えたのだろう。桑田の周りから人は消え、部屋には辻と桑田、そして機械の側に一人が残っていた。

辻はそつと桑田に顔を寄せると

「私だってこんな真似はしたくない。だが君が何らかの情報を外に流していた疑いは強い。もし違うなら話してくれ。私も協力する」

「……………」

「陣内と小磯健二、この二人が研究所へ向かったと、君が教えていた相手は誰だ？」

「……………」

「あの電話番号は誰に繋がっていた？」

「……………」

「……桑田君」

その声色は優しかった。辻は確かに桑田の力に成る用意はある。そう、感じる事が出来た。だがそれでも――

「……………話す事はありません……………」

――俯き、桑田は拒絶した。

「そうか……………残念だ」

一步、辻は桑田から距離を置く。それは桑田にある予感を呼び起こし、慌てて顔を上げれば辻の表情からは先程迄の温和さが消えていた。

「嘘っ！ や、止めてくだ」

「やれ」

「っ！

」

辻の言葉を切欠に、男は機械を一つ操作し……

「あぎっ！ あああああああああっ！」

特機の通路奥深くの一室で、尋問は――――拷問へと姿を変えたのだった。

先を歩く理一が足を止めれば、その先で

「レベル4ハドコダ！」

「今は止まっています。此処で稼働しているのはBSL3までですっ」

「ジョウホウハエティテル。シニタクナケレバオシエロ」

ガチャリ、と銃を構える二人の覆面に怯えるのは数人の研究者達だ。おそらく仕事で残っていてこの騒ぎから逃げそびれたのだろう。皆、突然の予期せぬ来訪者に対し一様に怯えを見せている。

理一は無言で健二に合図を送る。部隊の作戦行動などで用いられる汎用的なサインだが、健二はそれに了承を見せその場から移動する。

健二のそんな姿にどこか寂しさを感じてしまう。本来なら、それは一般の若者が理解するサインでは無い。だが彼は理解し行動する、出来る、出来てしまう。

もしかしたら……いや、もしかなくとも、自分が最初に健二を巻き込んだ事への自覚は有る。その事に対し後悔と自責の念が理一から消える事は決して無い。だが、それでもやはり思うのだ――使えるものは使う。それでテロを防げるのなら、誰に憎まれようと恨まれようと、自分は成すべきことを成さなければならぬ、と。

（良い死に方はしないな、俺は）

そう、自嘲しながら、理一は銃をしっかりと握り直すのだった。

——02..21..20——（アメリカ・ワシントンDC——12..21..20——）

「Mr. President——」



（大統領――）

現れたFBI長官、スコット・ワナーを招き入れると

「Some want to show you. Probably related to the statement in the example――」

（お見せしたい物が有ります。おそらく例の声明と関連が――）

「It?――」

（それは?――）

レグラン大統領が促せば、スコットは数枚の資料を差し出した。  
写真付きの資料には八人の男女の名前と写真が載っている。

「This?――」

（これが?――）

「Previously been confirmed dead――」

（先程死亡が確認されました――）

「Dead?――」

（死んだ?――）

八人が死んだ。それは分かる。だが肝心なのは――

「If there is a statement related to the death of bees? Ratio nale?――」

（この八人の死と声明に関連があると? 根拠は?――）

――その一点だ。事故にしろ事件にしろ、テロとの関連は見えてこない。

そんなレグランにスコットが告げたのは、その根拠となりうるものだった。

「We did this by trial witnesses and informants――」

（この八人は裁判の証人や情報提供者でした――）

「What dat――」

（なんだって？——」

「Organizations and drug mafia killings, terrorist organizations also provide information on last year's bombings conducted... Everyone was killed. The announcement followed the example it also—」

（麻薬組織やマフィアの殺し、去年の爆破テロを行なったテロ組織の情報提供者も...皆、殺されました。それも例の声明の後にです——」

レグランの隣では補佐官のマックスも書類に目を通すが、その視線は厳しい。

「They were all protected by a witness protection program. Past evidence on the strict control of information the FBI had been quarantined as we erase all the invisible man——」

（彼等は皆、証人保護プログラムで保護されていました。我々FBIの厳重な情報操作の上で過去の痕跡は全て消して透明人間として隔離していました——」

「But killed——」

（だが殺された——」

「Information is stolen and not only think of us. But no matter how evidence have been examined. To consider the situation...——」

（我々の情報が盗まれたとしか考えられません。ですがどんなに調

べても痕跡は無い。状況から考えるに……」

「With the darkness of the examination would——」

（例の闇を使って、か——」

「Officials say it has analyzed

——  
（分析官はそう言っています——」

アブドゥルは確かに言った。これは挨拶代わりだ、と。確かに、タイミングは一致していると感じる。そんな中

「The country received a greeting apparently just does not seem to President——」

（どうやら挨拶を受けたのは我が国だけでは無いようです、大統領

——」  
「George. It's mean? ——」

（ジョージ。それはどういう事だ? ——」

CIAから到着したジョージは、途中で入った情報をレグランに差し出し

「Britain and China, there is movement in Russia and other intelligence agencies. The combination Tsutsumi a beehive like. Like the country, possibly——」

（イギリスや中国、ロシア等の情報機関に動きがあります。まるで蜂の巣をつついた騒ぎです。おそらくは我が国と同様に——」

「Not to say that I received a greeting——」

（挨拶を受けたと言う訳か——」

「And no mistake——」

（間違いは無いかと——」

ホワイトハウスのオーバルオフィスに、重い沈黙が流れたのだ  
た。

——02..25..58——

銃を構える男の一人が気が付くと、自分達の側に近付く健二の姿  
があった。

「ウゴクナ！」

そう言つて彼に銃口を向けるが

「我只想？、如果我拍一部移？！——

（動くなと言うくらいなら撃てばいいんですよ！——」

「？ ナニヲイッテル」

「????????????????——

（日本語か？——」

「トマレッ！」

「？我一个机会，利用拍？的？？，我？迅速！——

（さっさと撃たないから僕達につけ入る隙を与えるんです！——」

両手を上げて必死に自分達に語り掛けてくるのは分かるが、相手  
の言葉が分からない。日本語は有る程度分かる様に訓練はしてきた  
が、中国語はまったく分からない。

「?????——

（動くな——」

「トマラナケレバウツ！」

「至于在一旁，而我？什？？我吸引了？？注意，我！——

（僕が貴方達の注意を引きつけてる間に相方が側面に回ってる！

——」

「ニホンゴデハナセ！」

切羽詰まった様子の健二に男達もまた不安の中から苛立ちを増す。

「????? ???? ????」

(それ以上近付くな! ——)

「一旦手臂一拍无? 射平民从上面! 然后, 我藏? 的? 部姿?, 我要反? 的? 候, 其余! ——」

(射線上から民間人が居なくなったら一人の腕を撃ち抜く! その後、残りが反撃をしている時に僕が隠し持った銃を頭に突き付けます! ——)

「キサマ!」

「?????!! ——」

(殺してやる! ——)

その瞬間——射線上から研究員の姿が外れた。

「!」パシュ! とサイレンサーの音が聞こえたかと思えば一人が腕を撃ち抜かれ銃を床に落とし崩れた。

「???? ???? ——」

(よくも——)

側面の物陰から撃ってきた理一に対し、ダダダッ! と銃弾を浴びせるが、すでに理一は物陰へと避難を済ませ

「?????!! ——」

(ふざけやがって! ——)

詰め寄ってケリを付けようとして動きを止める。自分のこめかみに銃口が突き付けられているのを肌で感じた。

「……? ——」

(……貴様——)

「???? ???? ???? ???? ???? ——」

(人の話を聞かないからこうなる——)

銃口を突き付け、健二は笑みを浮かべていたのだった。

理一と健二は二人のテロリストを拘束し

「警視庁の陣内です。責任者の方は？」

民間人に特機の説明は手間が掛かる。大抵、現場では警察を名乗ることが多かった。

理一の言葉に「私です。主任をやってます、室田です」と先程テロリストに応答していた男が名乗り出れば、理一は簡潔に事態の説明を始める。

今ここがテロリストに襲われ、外では警官隊とテロリストの銃撃戦が展開されていると。

ざわつきだす研究員達に「落ち着いてください。取り敢えずどこか避難できる場所は有りませんか？」と問い掛ける。すると室田は「緊急用の隔離室が。でも基本的にバイオハザード用の施設です」

「ここに留まるよりは良い。皆さんはそちらに避難を」

「建物から出た方が」この場から一刻も早く逃げたい。そんな思いを口にする者も居るが

「今は危険です。警察がテロリストを無力化するまでは絶対に外に出ては駄目です。良いですね？ さ、早く隔離室に」

理一の言葉を切欠に、皆が走り出した。その中で理一は室田の腕を掴み

「すいませんが貴方には協力をお願いします」

「え？ ちょ、待ってください私は」

自分には荒事なんて不可能だと青ざめる。一刻も早く自分も隔離室へと急ぎたいのだが理一はその腕を放そうとはしない。そこに健二が

「このBSL4に案内して下さい」

そう詰め寄る。

「ば！ だからそれは停止していると」何度もテロリストに答えたと言う途中に理一は「私はレベル4のプランに関わっています」と逃げ道を塞いだ。

「だったら分かるでしょう？ 部外者に教えるわけにはいかない！」一瞬驚くも、確かに警察組織とも連携をとった計画だった。知っ

ている人間は少なからず居ることは把握している。

「テロリストの狙いは天然痘です！」

「ば、馬鹿な。いくらなんでも」

それは無いと思う。

それを悪用すればどんな惨事になるか。いかなテロの為とはいえ、それではあまりに悪魔の所業過ぎるだろうと思った。だが理一と健二は無言で室田を見詰めるだけだ。二人にも室田の考えは分かる。理解出来る。それは確かにまともな判断だ。だが――

「……本当、なんですか……」

「残念ながら」

「なんてことを……」

――理一の肯定は非情な現実を痛感させた。

室田は思考を切り替える。

「こっちです」

「ありがとう」

走り出す室田に続いて理一と健二も駆け出した。

研究所内を駆けながら

「それで？ どうするんです！」と二人に問う。

「外で抑えられれば良いですが現に侵入を許しました。これ以上の侵入を防げれば良いですが、万一に備える事も」

「それって」

「僕としては菌の処分を勧めますね」

「私には権限はありませんよ！」

「悪用されるよりはマシでしょう」

「そうですねっ！ ここですっ」

嚴重なロックの掛かった部屋に着いた。室田は理一に促され自分

のカードを通し暗証番号を入力して第一の扉を開ける。

中に入れば更に扉が見え、そこを開けるには指紋と網膜の照合が必要だった。

「いくらテロリストでもこのロックは開けませんよ」

室田の確信は普段なら頷くに値するものだが、今は状況が違う。

健二の予想が正しければその扉は開けられてしまうだろう。それだけのチカラが働いている。そんな一連の事件であるのだから。

「多分、連中には開けます」

「馬鹿な」

「その根拠があつての行動でっ！　なんだ！」

理一の言葉を遮る様に館内の証明が赤く光り出した。

「こんな事が！」

戸惑っている室田に「なんですこれ？」と健二が聞けば

「緊急封鎖です。誰かが……強引にドアを開けた」

「くそっ！」

「入られたのかっ！」

銃を構えて通路に注意を向ける理一。そんな理一を尻目に健二は

室田に詰め寄る。

「開けてくださいすぐに！」

「しかし」

まだ室田は思考が付いてこない。

「彼等も切迫してますっ。他のレベルも封鎖された以上、余計な手間は踏まずに真っ直ぐこっちを目指します！」

「ま、テロリストが、こっちに」

「奴らが来る前に天然痘を処分するんです！」

「しかし私には」

「奴等に奪われたら全てが終わりですっ。何人死ぬか想像も付かない」

「そんな」

「今頼れるのは室田さんだけなんです！　お願いします、手を貸し



て下さい!」

「……………」

「……室田さんっ!」

両手で腕を掴み激しく自分を揺さぶってくる健二を見詰めながら、その真っ直ぐな瞳から意思を感じ取る。

強く——激しく——

「……時間がない。手伝ってくれ」

「室、分かりました!」

健二の手から開放され、素早く扉のロックを解除する。

健二を共に入室すると再び扉を締め、防護服を取り出して着替えを始めた。ここで着替えた後、もう一枚の扉を潜れば、そこはもう世界で最も危険な場所だった。

「こっちだ」

促されてついに行けば、嚴重な保管庫の中から取り出したシリンドラー。それこそが——

「これが……」

「ああ……天然痘だよ」

——悪夢の病原菌だった。

かつて核爆弾を目の前にした健二をもつてしても、喉がからからになる程の緊張を感じずには居られない。そこへ室内のスピーカーのスイッチが入った音が聞こえた。そこからは

『健二君! 急いでくれ』

「理一さん？」

スピーカーから流れる理一の言葉は更なる緊張を与える。

『お客さんのお出ました』

理一の観るモニターには、館内に侵入した数人の武装テロリストが映し出されていたのだった

――02..35..02――

特機の一室では、悲鳴と怒声が飛び交っていた。

「誰の命令で動いてる！ 情報を流した相手は！」

「言えませんっ！」

「やれ！」

「ゆや！ あああ！」

執拗に、猛烈に、強烈に………激しさを増す辻に対し、それでも尚、桑田は自身の姿勢を崩しはしなかった。

そんな中、一人の部下が辻に書類を渡す。そんな光景をどこか虚ろに眺めている桑田だったが、辻は彼女に詰め寄ると

「見ろ……見るんだっ！」

髪を無造作に掴み顔を上げさせる。

その眼前に部下が持ってきた書類を掲げると

「見付けたよ。君の認証コード使ったデータ送信だ、分かるな？  
見えるな？」

「……………」

もう桑田には辻の言わんとしている事は充分に分かっている。だがそれでも姿勢を変える事は無い。

「アシズ・シヤラビー……こっちはムシャリ・ハッサム。他にも居るぞ」

ばさり、と机の上に書類をばらまく。

「奴等を入国させたのは君だ！ 危険人物のリストから外し、ご丁寧に入国許可証まで発行してる。全て君のコードでだ」

「……………」

「尻尾は掴んだ。もう手加減は無しだ」

「……私に……」

「なんだ？ 喋る気になったか？」

辻は桑田の向かいの椅子に腰を下ろすが

「私に……貴方に話す事など何ありません」

「は？ ……はは、ああ。そうかい……ああ！ OKだ分かったよ」

辻は椅子から立ち上がると

「電圧を上げろ」

「しかし、これ以上は」

「構わん。上げろ」

「……はい」

設定はギリギリだった。

「君が引き込んだテロリストがハマド大統領を襲い、今また研究所を襲ってる」

「……………」

「ホテルでは何人もの従業員やSPが死んだ。今だって警察側の被害は少なくない。手加減無しってのはそういう意味だ」

「……………」

辻の言葉に、ふう！ ふう！ と呼吸を荒らげるも、それでも桑田は無言を貫く。

「言うんだ。お前は何者で、ここで一体何をしたっ！」

「……………」

「桑田美也子！ 貴様の知ってる事を全部吐けっ！」

「……………」

「覚悟は出来てるんだな！　そうなんだなっ！」

「……………」

びっしりと汗を吹き出し、その瞳にはうつすらと涙を浮かべる。だがそれでも、口だけは開こうとはしない桑田を前に、辻はどうとう最後の指示を部下に出す——刹那。

「そこまでだっ」

バン！　とけたたましく開けられたドアから数人の男達が入ってくる。

「！　なんだ！　一体お前達は」

「辻君、そこまでだ」

「！　長官」

男達に声を荒らげる辻を止めたのは、遅れて入ってきた三輪警察庁長官だった。

「長官、一体これは何の真似です！　っておい！」

男達は辻を通り過ぎ、桑田の拘束を淡々を解いていった。

自分の許可なく勝手な行動を取る。しかもアシズ達の入国を手引した桑田を自由にするなど辻には見過ごせる筈も無く、男達を制しようとする身を乗り出そうとしたが、その腕を三輪に掴まれた。

「彼女は放免だ。これ以降、彼女に干渉する必要はない」

「は？　待ってください彼女は」

放免で良い訳がない。彼女が一連の騒動に関与しているのは間違いない。それを放免、しかも今後の干渉を不可では話にならない。納得できないと詰め寄ろうとする辻の耳元に口を寄せた三輪は、彼女の現実を告げた。

「桑田美也子は内閣府の人間だ」

「っ！　馬鹿な」

「連中は官邸から乗り込んで来てる。彼女の身元保証人は……国家公安委員長だよ」

「まさか……」

呆然と立ちすくむ辻の横をすり抜けるように、桑田は数人の男達によって医務室へと運ばれていくのだった。

――02..40..18――

健二と室田は天然痘の廃棄処分に取り掛かっていた。

培養、保管していた菌は滅菌する。室田の作業の間に健二は研究データを保護し移し、今は現場のコンピューターからの削除を始めた。大事なデータを失うわけにはいかない。だが渡す訳にもいかない。今はこうするしか手段は無かった。

「こっちはこれで最後だ。君の方は？」

「もう少しです。これが終われば………っし！ 消えました。これを」

健二が室田に渡したのは一枚のディスク。

「そこに研究データが入ってます」

「そうか、すまん」

「いえ。その研究が重要だって事も確かですから」  
本来なら認めたくは無いのだが、それでも危機に備える事は必要だ。それは現実問題として正しい選択だと思った。同時に。備えなければならぬという悲しい選択でもあると思うが。

ルームを出ると理一が指を立てて静かにと促す。室田がモニターを見れば、そこには近付いてくる数人のテロリストが居た。

ドアの傍で警戒する理一の隣に立ち、健二もまた銃を取り出す。

「外が全滅ってのは無いですよ」

「うちの連中が居るからな。それに入ってきた人数も少ない」

部下の腕は信頼しているし信用に値する。もう時期、外の抵抗を排して内部にまで手を伸ばしてくると思う。だが問題はそれが何時かと言う事だろう。流石にアシズは名の通ったテロリストであり兵士だ。そうそう簡単にいくとも思えない。

「ここで踏ん張りますか？ それとも逃げますか？」

「菌を処分した以上ここは撤収したいところなんだが……どっちにしても厳しい、な」

「はい」

それでも覚悟を決めた、と二人が銃を握り直すと「あの！」と室田が声を掛ける。

健二と理一が振り向けば、彼は緊張した眼差しを向けながら

「私に……付いてきてください」

「室田さん？」

言うや室田は部屋の奥へと向かい、理一と健二も彼の後を首を傾げながら付いていくのだった。

——02..47..16——（アメリカ・ワシントンDC——12..47..16——）

「Mr. President——」

（大統領——）

「I again? ——」

（またか? ——）

「Yes. Two minutes before——」

（はい。二分前に――」

マックスがモニターのスイッチを入れるとレグランを始めとした全員が注視する。そこには再びアブドゥルの姿が。

『我々の言葉を理解出来た者は居るだろう。言っておくが、これは単なるデモンストレーションだ。我々の闇は既にOZ管理塔を手中に収めている。今から三時間後までに我々の要求を呑む声明が各国から出されない時は、世界中の主要各国に核の雨が降る事になるだろう』

そう言い残し、映像は途切れた。

だが完全には無い。ほんの数秒、それは映し出されて消えた。

## 【HOUND WISDAUDA】

それだけが映り、そして消えた。

「What was that now?――」

（今のは何だ?――」

「Not know. Encryption and what not――」

（分かりません。何かの暗号では無いかと――」

「I know it well. The problem is that the encryption of any――」

（それは私にも分かる。問題は何の暗号かという事だ――」  
スタッフがそれぞれの部下に事態の解明に動くように命じている中、国防長官であるニック・ポーナムが駆け込んできた。あまりの勢いに

「Nick, Give me to do elsewhere if people slosh――」

（ニック、人を跳ね飛ばすなら他所でやってくれよ——」

「Sorry President. I……An emerge  
ncy——」

（申し訳ありません大統領。ですが……緊急事態です」

その真剣な声色は室内の全ての者の注意を引きつけた。

「Come on——」

（話してくれ——」

改めて自分の椅子に腰掛け向き直すレグランに対し、一呼吸だけ  
間を置いて——

「Encryption were found earlier

——

（先程の暗号が判明しました——」

「Really? Then? That's what enc  
ryption——」

（ほんとか？ それで？ あれは何の暗号だ——」

——その重い口を開く。

「……The Football——」

（……フットボールです——」

「What dat——」

（なんだって？ ——」

「So football is a command sign  
al. Even if the current code a  
nd will change regularly, but  
there is an invalid code……Com  
and signal was definitely——」

（ですから、フットボールの指令信号です。とは言ってもコードは  
定期的に変更になりますから現在は無効なコードではありますが……  
……間違いなく指令信号でした——」



核のフットボールと呼ばれる携帯端末。

それはブリーフケースに詰まった戦略防衛システムの端末だ。アメリカ合衆国大統領の傍らに常に在り、核兵器に対するスピーディな決断を実現するための物だ。

様々な戦略プランと指令信号。その全てがトップシークレットである。たとえ失効しているコードとは言え、それを手に入れる事など不可能。の筈だった。そして彼等が手にしたと宣言してみせたコードは

「N a n ' s   c o m m a n d   s i g n a l s ?   —」

（なんの指令信号だ？   —」

「F i r s t   S t r i k e —」

（ファーストストライク——」

「B o l l o c k s —」

（なんてことだ——」

それは先制核攻撃を意味するコードに他ならなかった。

——02..51..29——

健二は理一と室田と共に地下通路を走っていた。

「一体なんなんですか？   ここ」と聞いてみれば

「BSL4の計画の際に……緊急避難用の通路ですよ。極一部しか知らない」

「侵入用にも使えそうだからな」

「一応、外からは入れませんよ。一方通行ってやつです」

取り敢えず、今は研究所からの脱出が先決だと三人はひたすら駆ける。そんな中、健二が思うのはこの施設の秘匿性だ。天然痘にしてもこの通路にしても。一般に、どころか、その筋の関係者ですら知らない事が多すぎた。そんな施設の情報を

（どうやってアシズは手に入れた？ 桑田さんが知ってたとも思えない。それに……流石にここまでではないだろうに）

麻鳥官房長官が一連の事件に関与しているのは健二にとって確信と言っている。あの日、ハマドに前大統領の命を与えたのは、当時の外務副大臣だった麻鳥なのだから。

スグリアを覆った陰謀の、その中心に近い場所に彼の立ち位置は在った。

だが、天然痘をばら蒔くなどという桁外れのテロに、それも自国を舞台にしての行動に彼が手を貸すとも思えない。良くも悪くも彼は損得勘定を働かせる事は欠かさない。そしてこの件には損失以外には算出されない。だとすれば……

（どこだ……誰が動いたんだ……）

――02..53..09――

pipipiと電話が鳴れば渡からだった。

「もしもし？」

『わりい、夜中に』

「いいけど……どうした？」

今夜はもう眠れそうにない。流石に健二が生きていたとなつて、しかも何かに巻き込まれているとなれば呑気に眠る雰囲気にもなれない。それは自分だけでなく他の親族にしてもそうらしい。皆、思

いい思いの場所で夜を過ごしていた。

佳主馬が渡を促してみれば

『お前の叔父さん、今って起きてるか？』

「？ ……それって佗助おじさんの事か？」

『ああ、そうだ』

自分の名前が出た事で佗助が佳主馬の方を向く。佳主馬は、携帯をスピーカーに切り替えて佗助に目配せすると

「俺に何か用か？」

佗助は渡に声を掛ける。

『っ！ 夜中にすいません。え、と……少し知恵を貸して欲しくて』

「俺の？ そいつは一体」

『闇の解析です。例の、OZの』

「解析？」

聞けばOZの関係者全員に管理塔にかかる闇の解析命令が出されたという。それも徹底的に、最優先でだ。

『バイトの俺にまで来たよ。しかも寝てるところを叩き起されてな』

渡だけじゃない。日本だけでもない。それは世界中で、誰に対してもなく全てに対して同様に成された。

『いきなり過ぎて訳わかんねえよ。でも……なんでか知らないけど上の連中は滅茶苦茶焦ってる。もう形振りかまってるなんて感じだ』

「一体、なんで急に」

夕方にはもう在ったあの闇に、なんでこのタイミングで大騒ぎするのか。それは疑問ではあるが

『さっきテロリストらしい奴等が声明を出した。多分それに繋がってる。タイミング的に見ても間違いないと思うし……奴等の口振りもそうだった』

「じゃ、あの闇を使って何かした？」

『だとすれば納得いく。この騒ぎもな……でもどうにもなんないん

だよ』

「渡？」

コンピュータ関連において渡がここまで泣き言を言うのは珍しかった。

『視覚的なエフェクトは掛かってるんだ。でもプログラムとしての実が無い。排除しろって言われたって相手が居ない。冗談抜きで…雲を掴むような話だよ』

「それでおじさんに」

『佗助さんなら何か分かるかと思って』

「……だってさ」

佳主馬が視線を移せば佗助は何か考え込んでいた。そして

「おそろく………」

『佗助さん？』

身を乗り出した佗助は携帯に向かい

「全く何も無い訳じゃない。あれのウイルス性は存在した。それだけが見えた………多分、それが条件だ」

『条件？』

「ああ。おそろく、シャドウのウイルスに感染した者には絶対に解析出来ない。携帯端末だろうが国家レベルのスパコンだろうがそれは一緒だ。感染しちまった時点で勝負は付いてる」

『それじゃ、感染してなければ』そこまで言って気付く。

OZの検索システムは自動でアップロードだ。第一段階をクリア出来た者は皆無に等しい。そしてウイルス性のプログラムが闇の中で存在している以上

『闇を見ることはシャドウを見ることと一緒に、ですか』

「だな。解析しようと向かうことはそのまま感染する事にもなる」

『だったら検索システムを入れてない物を使うとか。新しくアカウントを用意するとか』

「同じだよ。解析すると言う事は触れる事だ。中に検索システムの

コードが仕込まれてれば二つの条件を一気に満たす事ができる。少なくとも俺ならそうする」

渡のアイデアを否定しながらも、侘助も闇に対する術を模索する。健二の物、とも思っていたが、今それはテロリストの物としての可能性が強まった。だとするならば、その解析はそのまま健二の無関係を証明する事にも繋がる。

だが、その方策が浮かばない。侘助をもってして思考の迷宮に迷い込む事態に、渡だけでない、陣内家の者達も溜め息を抑えきれない。

「だったら！」

そんな中、佳主馬は独り、笑みを見せ――

「OZなりのやり方で打ち破ろう」

――自室へと駆け戻る。自分の牙を手にする為に。

やがて……………侘助や渡の情報網を経て……………OZのメインサーバーは二つの情報を変更した。

――【Battle mode All Areas】――

そして

——【Character Type All open】——

\* login : \*

「さぁーてえー！」

カズマは一足飛びに闇へと突進し、その不敗を誇る右拳を思い切り闇の雲に叩きつけると——バキャン！ と破壊音を響かせて闇の一部が砕けた。

「始めようかぁ！」

キング・カズマは史上例のない、ウィルスプログラムとの言葉通りの………戦闘を始めたのだった。

——02..59..59——

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6334q/>

---

SUMMER WARS 24<TWENTY FOUR>

2011年12月27日20時47分発行